

---

# 青と赤の白黒テレビ：金銀 +

暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青と赤の白黒テレビ・金銀+

### 【Zコード】

Z5479A

### 【作者名】

暁

### 【あらすじ】

『青と赤の白黒テレビ』の続編です。カイとチカは高校に進学、奇妙な新生活が始まった。カイとチカの加速する恋、金と銀によって更に激動するカイの高校生活。幼かつた二人の恋はどうなるのか?

青くて溺れそうなくらい深い空、春風で波のよひざわめく森、風に吹かれて蝶のように舞い上がる桜の花びら。

今は春、この島も明日でお別れ、夏休みには帰つて来るとは思うけど、やっぱり名残惜しい、身支度をしてるとそとから聞き慣れた声で、聞き慣れた呼び出し方で俺を呼ぶ女の子が一人

「カイ！ 終わった！？」

俺の一番大事な人、チカだ、今この島の同級生はチカだけになった、みんなこの島を出ていった。

自分の支度が終わつてチカの支度をしにチカの家に行つた

「何で俺が手伝わなきゃいけないんだよ

「良いだろ、どうせやること無いんだろうから」

かなり無理矢理な奴だ、多分みんながいなくなつた悲しみを隠したいだけだろうけど、でも流石に最後の一人を見送つた時は寂しかつたな。

「じゃあ、明日、寝坊するなよ

「当たり前だろ、起こしに行つてやるからな」

「言つてろ。おやすみ

「おやすみ」

支度つて言つても長話で終わつた気がする、思い出話だけど、その話をしてる時のチカの目が寂しかつた、いつも一緒にいた奴らは明日からはない、そう思つと誰でも悲しいよな、俺も過去に更けながら明日に備えた。

「カイ！ 起きろ！」

「起きてるよ」「や

いつもと同じようにチカが来た、でもいつもと違う朝、下におひる

とおとおとおかあがいた

「おとおおかあ、じやあね

「頑張つてこいよー俺の息子なんだから最高の高校生活おくつこい！」

「めんべくせいから見送りは行かないから

見送りもいつもの調子だけ、内心結構キツイ、血は繋がつてなく  
ても立派な親子だから、人並みの感情つてものがある

「ほら！チカちゃんが待ってるぞ！」

「そうだった。それじゃ、じやあね

おとおとおかあを背に家を出た、親から離れる辛さを始めて感じながら。

港に着くと調度船が来たところだった、この船が俺達の新しい一步  
を踏み出す文字通り渡し船

「これでこの島とお別れだな

「泣くなよ」

「大丈夫…のはず」

船に乘るといつものチカとは違つて静かだった、100%とは言え  
ないけど泣いてるよう見えた、あの一人もこんな感じだったのか  
な、俺はいつものように寝るつもりだった。

「カイ、起きる」

「起きてるよ」

目を瞑つたまま応える、どうしても今回は眠れなかつた、チカに起  
こされるのが怖いつてのもあるけど、他にもいろいろな感情があつ  
て考えてたら眠れなかつた

「何だよ、起きてるなら言えよ」

「眠れなかつた」

チカも元気になつてゐるし、俺も整理がついたし、新生活の準備が出来た

来た

「おりるぞ」

「ん？ ああ」

何度か来たことのある港だけど、いつもとは違う場所に感じられた、何度か乗つた事ある電車だけど、いつもとは違う所を走つてゐるよつに思えた。

俺とチカは両親からの指名で下宿といつか寮といつか、とりあえず住む家を決められた

「チカ、住所どこ？」

「はい」

えつ！？嘘だろ？やつぱり間違つてない、俺の住所とチカの住所を何回も見比べたけど、全く同じだった、そう俺とチカは同じ所住むらし

「どうした？」

「これ、俺の住所」

チカの住所と俺の住所を渡した、チカもフリーズした、そりやそつだろ、いくらなんでも同棲だぞ、普通しないだろ

「一緒だ…」

「だろ、それに、着いたっぽい

「ホントだ」

二人とも理解と整理が出来ないまま目的地に着いた、そこは極普通の2階建の一軒家だつた、ホントに普通すぎるくらいの

「とりあえず入つてみる？」

「そうだな、カイも鍵あるよな？」

「あるよ」

家の鍵は開いてた、おそるおそる忍び込むよつに入った

「おじやましま～す」

“ ドタドタドタドタ ! ”

「 カイ ! チカ ! 」

とりあえず驚いた、走って来たのは、白く短い髪で俗に言ひイケメン（ジヤンル分けするとジヤーネーズ風）で背が高い男がそこにいた『 ユキ ! ? 』

「 久しぶり、元気にしてたあ ? 」

「 あら、カイ君とチカちゃん、遅かったのね 」

長くて綺麗な黒髪にお姉さん系、ユキと一人でいると誰もが憧れる二人の出来上がりだ

『 マミ姉も ! ? 』

「 これからみんなで『 』に住むんだってえ 」

「 みんなで共同生活だって 」

その後いろいろ説明をしてもらつた、整理するところだ。

親同士が話し合つて合意のうえで俺らの共同生活が決まつたらしい、理由は知らない所に下宿させたりするよりはこの方がマシらしい。

部屋は2階に個々に部屋がある、廊下にはドアがあつて奥がマミ姉とチカ、階段側が俺とユキ、ドアは女の子側からじゃないとロック出来ないようになつてゐる。

生活費は仕送だけ、その他はバイトして稼げだつて、俺の金もあるから何とかなるけど、後は好きにしるとのこと。

こつして俺達の奇妙な新生活が始まつた

## 金との出会い

今日は入学式、高校初日で胸は踊らないけど、チカと一緒にクラスになることを願うだけかな

「おはよう」

「マミ姉か、おはよう」

先にマミ姉が起きて来た、いつもと同じだ、俺がいるときは俺が飯を作るけど、いない時は他を作る、自然とそうなった、朝は俺が作ってマミ姉が支度をするみたいな感じだ

「悪いけどチカとユキ起こしてきてくれない」

「分かった」

いろいろと自然に役割が決まってきて、一日が回ってる。

朝飯を片付けて着替えてる時に気づいた、この学校ブレザーにネクタイだ、嫌いなんだよなこの二つは、無くていいか

「カイ、ブレザーとかネクタイはあ？」

「嫌いだから」

「でえ、そのカーディガン？」

「前に買つたやつ」

「先生達に引っ掛かるなよお」

「大丈夫だろ」

実際中学生の時もブレザーにネクタイだつたけど、一年生の半分しか着ていかなかつた。

通学路には新品の制服をきつちり着た新入生の山が、その中に先輩

っぽい人がいた

「人多いな」

「私達も最初は圧倒されっぱなしだったよ」

「カイは？」

「別に、少し多いけどビックリするほどではないな」  
チカとかにはありえない人数だもんな、まあすぐに慣れるだろ。

校門をくぐった途端にユキが女の子の群れにのまれた

「マミ姉良いの？」

「いつもの事だから」

「スゲエ…」

ユキは苦笑いをしながら前に進もうとしてるけど、群れがそれを許さない

「何であんなに群れるの？マミ姉がいるのもみんな知ってるだろ？」  
「何か生徒達の暗黙の了解らしいよ」

「イケメンに群がるのが？」

「そう、カイ君もその内…、つでもう来たよ」

ユキと同じような群れが俺に向かって来る、バッファローバリの力  
強さだな…、って感心してる場合じゃないよな

「カイ、変な事するなよ！」

「大丈夫、何組だかメールいれといて」

「分かった」

チカは案外落ち着いてた、マミ姉が言つた事もあるし、やつぱり俺の事信じてくれるのかな、って自惚れてみたりする。

それよりもこの集団から脱出する手段を考えないと遅刻する、隣にも同じような群れがあるし。

俺が解放されたのはホームルームが始まつてからだ、完璧遅刻決定、初日からインパクト十分だな。

メールによるとチカは2組らしい、俺のやつも見といて欲しかったな、そういえばさつきから後ろに集団に囲まれてた、俺と同じく可哀想な奴が着いてくる

「一年？」

「お前も？」

「そうだよ」

見てみると身長は俺と変わらないくらいだ、確認出来るだけで右耳に3個、左耳に4個。ピアスをつけてる。

腰にはチェーンをつけて歩く度に音がなるからそこにいるつて分かる、ネックレスも2つくらい着けてる、光り物好き？

一番印象的なのは髪の毛、俺が言うのもなんだけど髪がド派手、綺麗な金髪で玉 宏風の髪型、顔は日本人っぽくない、まあもてそうだな

「四色海、お前は？」

「五百蔵黄金、気になると思つけどこの髪は白毛だから、俺ハーフ

だから」

どうりで、全てのつじつまがあった、にしてもチャラチャラした感じ何だけど爽やかなんだよな、不思議なやつ

「カツコイイ名前だな、ちなみに俺も白毛」

「ふうん、カーディガンは？」

「ブレザーとネクタイが嫌いだから」

「初日くらいちゃんと着て来いよ」

「お前もな」

腰パンに第一ボタンまで開けてる、ネクタイは開いてる所にあわしてる

「お前はやめる、『ガネでいい』

「俺もカイで良いから、『ガネ』

速攻友達が出来た喜びを噛み締めながら、クラスの表がある体育館に行つた

「『ガネは何組？』

「7、ちなみにカイもな」

「おつ、ホントだ。一人で遅刻するのも視線が痛いなあ、って思つてたんだよな」

「アイツもか…」

「アイツ？」

「何でもない」

俺の周りにはいないクールな感じが新鮮みを帶てて良かつた、チカと離れた事に気づいたのはその後だつた。

入学式とかテレビ放送らしく全生徒が教室にいる、みんな静かだつたから息を整えて入るつとしたら、コガネが速攻入つていつた

「おい！コガネ」

「遅れすみません」

そのまま教室に入ろうとしたら、明らかに体育教師の担任らしき教師が制止した

「お前ら、五百歳と四色か？」

『はい』

“ゴツツ”

頭を殴られた、明らかに今殴られた、かなり痛い、隣にいるコガネが完璧にキレた目をしてる

「テメエ！何すんだよ！」

「遅刻するほうが悪いんだろ！」

初日から喧嘩がよ、体力有り余つてるね

「コガネ面倒だからやめとけよ」

「カイはムカつかないのかよ！」

「ムカつくけど…」

教師を睨んだ、冷静さを装つてたけど、一人だつたらキレてたな  
「先生、知ってる？殴る理由は2種類あるんだよ、一つは正当防衛でしようがなく殴る奴。もう一人は相手に口では勝てないと思った馬鹿、知能指数の低い救いようのないクズだ。先生がどつちに転ぶかは」自由に

「…なつ！」

拳を握つて震えてる、やっぱリコイツは後者だな

「コガネ行こ、席空いてるどこですよ？」

「……」

あ～あ、ブラックリスト入り決定だな、俺の高校生活は喧嘩からか

よ、先が思い遣られるな。

五百蔵黄金、コイツのお陰といつかせいといつか、とつあえずコガ  
ネがいれば飽きなそうだな

## 青のライバル

遅刻してきた上に教師と喧嘩までした俺らは、あつという間にクラスの有名人になつた、俺的には好ましくないんだけど周りはおかまいなし

「コガネのせいだぞ

「何が？」

「コガネがあそこで喧嘩腰になるから、完璧に田をつけられたぞ」「カイもかなり挑発してただろ」

二人で一緒にいるから更に田立つ、一緒つていうか席が隣なだけなんだけどね

「おい！五百蔵、四色終わつたら応接室に来い」

「何で？」

「自分の髪見たことないのか？」

「白毛だよ、俺もコガネも」

「とりあえず来い！」

ああ、うるせえな、コガネに至つては終始シカトをしてた、喧嘩されるよりはマシか。

俺らは渋々、応接室に行つた、中に入るとチカもいた、ホントに髪の毛のことで呼ばれたんだ

「チカもいたんだ」

「当たり前だろ、髪の毛の事なんだから」

「それが信じられなかつたから」

「カイ、誰？」

「コガネがチカに近づいて顔を覗きこんだ

「な、何だよ？」

「手を出すなよ、俺の彼女なんだから」

「ふうん」

そういうて離れていった

「コイツは「ガネ、同じクラスの奴」

チカが目を細くして、コガネを見た、この一人あうのかな？

「カイをよろしくな！」

「カイには借りがあるし、こんな口のたつ奴が近くにいれば鬼に金棒だろ」

「何の鬼だよ？」

「……なんだろ」

馬鹿なんだなコイツ、この調子だから喧嘩ばっかしてたんだろうな、朝みたいな感じで

「お前ら、騒ぐな！」

『うるせえな』

ボソボソっとコガネとハモつた、聞こえたらしく睨まれた、俺らも睨み返すように見た

「お前ら本当に自毛なのか？」

「そうだよ、疑うなら一本提供してやろうか？」

「俺はハーフだからしうがないだろ、お前らも知ってるだろ」

「そこのは？」

「潤間です」

ああコイツホントにムカつく、人の話しさ聞かないし、無駄に偉そうだし

「しようがない、でもその服装は何だ？」

「ブレザーとネクタイが嫌いだから

「趣味」

こつちは案外うるさいけど、この馬鹿ならどうにかなるだろ

「でもあれですよね、ここ公立だし、校則で無いですよねカーディガンもOKだし、光り物も大丈夫ですよね」

「高校生らしい服装を、とあるだろ」

「高校生らしいって人によつてそれですね、俺らはこれが普通なんですね、先生はどうか分からぬですけど、先生の觀念を

押し付けられても困りますから

「……」

また拳を握つて震えてる、最初に俺が言つた事が効いたんだろうな、普通だつたら今頃コガネと大喧嘩してるはずだけど

「他に無いなら帰ります」

「……」

俺らはあのアホ教師を残して応接室を出た、その後大きな音が聞こえた、多分アイツが何か蹴つた音だろ

「ハハハ！ カイ最高、マジ気持ちいい」

「俺も、アイツ馬鹿だから簡単に口で負かせるし、最初に俺が言った事もあつて何も出来ないからな

「教師と喧嘩したのつてホントにカイ達だつたんだ」

クラスだけじゃなくて学校中に知れ渡つてらしい、明日からが面倒だな

「誰から聞いたの？」

「アイツ」

チカが指差した先には、スカートを短くしてその下にジャージを履いて、明らかにギャルっぽいけど何故かナチュラルメイクの女の子だった

「誰？」

「友達」

「違うでしょチカ、僕はチカの、オンナ」  
「僕？ オンナ？ もしかしてあつち系の人？」

「これがチカの彼氏？」

「そうだよ」

「よろしくね、鷲鷹翼！」  
ワシタカツバサ

「俺は……」

「知つてるよ、四色海君と五百蔵黄金君でしょ、遅刻して先生と喧嘩した

何だコイツの情報通つぶりは、フルネームまでしつてるし、俺はチカ

「喧嘩した」

力が教えたとしてもコガネは？

「コガネ、知り合い？」

「騒がしい奴に知り合いはいねえ」

第一印象は最悪だな、コガネとは正反対だもんな  
「何でこんな奴と友達に？」

「こんな奴なんてヒドーイ、僕はただ…」

「アタシがメイクしただけ」

ずっとチカ腕にしがみついてクネクネしてる、もしかしてライバル  
出現！？

「何で？」

「だつてツバサのメイク酷いんだもん、化粧品の無駄遣い」  
そういうえばチカはメイク得意だつたんだよな、まあそこで手を出す  
のはチカらしいな

「チカメツチャクチャメイク上手いから感動しちゃつて、運命感じ  
ちゃつた」

すみません俺の彼女なんスけど、軽く嫉妬してみたりする

「カイ、帰ろう、コイツうるさい」

「コイツじゃない、ツバサだ」

うわあ、仲最悪

「ツバサ君をどこかにやつてくれ、じゃないとクズになる」  
クズ？ ああ殴るつて事か、しうがないチカと帰りたかつたけど、  
コガネをコイツから離すか

「チカ悪い、コガネと一緒に帰るからソイツくくつといて」  
「ソイツじゃないツバサだ！」

「ツバサ君をくくつといて」

「分かったよ、行こツバサ」

「べーつだ！」

片目瞑つて舌を出してる、ホントにイタイ奴だな。

コガネと一人で帰つてる時は凄くイライラしてた、完璧ツバサのせ

いだよ、この一人は近付けない方がいいな

「ああ、ムカつく」

「そうカツカするな、もう会わなきや良いだけだろ」

「お前がいるかぎり来る」

「何で？」

もしかしてツバサが俺に惚れて、コガネはそれを瞬時に見抜いたとか？

「お前の彼女が来るだろ」

「あつ、そつか。何とかなるだろ」

「いや、無理だ、あの女は生理的に受け付けない」

うわあ、完全拒否姿勢だよ、何とか一人が喧嘩しないようにがんばんないとな。

ツバサが、また変な奴に会つちゃつたな、でもコガネとは巧くいき

そう、でも「ガネと一緒にいると何か事件が起こりそう

この学校には一部の生徒（俺みたいな）を困らせる最悪の授業がある、その名は‘講座’、響きは普通だけど言い換えると‘部活’の時間だ、この学校は全員が部活に入らなきゃいけないらしい、そのせいで馬鹿みたいな量の部活がある、当たり前だけどフリークライミング部もサーフィン部もない、料理部つてのに惹かれたけど2秒で却下、理由は女に囲まれるとめんどくさいから

「コガネは部活どうするの？」

「サッカー」

サッカーか、運動部ならそれなりに出来るから良いかな

「カイはどう？」

「決めてないんだよな」

「サッカーくらい出来るだろ？カイもサッカー部来いよ」「行くとこないし、とりあえず見学だけでも行ってみるか」そんな話をするとやかましい「一人が…」、コガネの顔が一瞬で変わつたのが分かつた、チカとツバサだ

「カイ、部活どこにするんだ？」

入つて来て第一声がそれかよ、クラスの視線が集まってるのもお構いなしに寄つて来た

「一応サッカー、コガネもいるし」

「僕の情報によるとサッカー部は別名イケメン部で、イケメンが多い事で有名だよ」

「お前に聞いてねえよ」

「お前じやない、ツバサだ」

周りの男子が何やら騒いでる、後ろの男子に理由を聞くと

「潤間さんと鷺鷹さんは、学年でもトップクラスの可愛い子だよ。やっぱりイケメンには可愛い子が集まるんだね」  
らしい、チカつて人気があるんだ、それにツバサがモテるのもビ

ツクリ

「チカ達は？」

「カイ、まだ終わらないのか？」

ツバサの事がホントに嫌いなんだな

「悪い、少し待つてて。で、チカは？」

「バレー部、ツバサも一緒だよ」

「バレー部と言えば別名美少女部、可愛い子が多いので有名な

「お前うるせえよ！人の話に入ってくるな！」

コガネが怒鳴つた、俺の後ろの奴に、明らかにビクビクしてるよ、

何もクラスメイトにやつあたりしなくても

「ごめんな、コガネ機嫌悪いから」

「誰のせいだか」

そういうつてコガネが横目でツバサを見た

「僕のこと？」

「他に誰が？」

「…勝手にイライラしてる」

「はあ？」

あつ、今完璧にキレた、初日に見せたあの目だ、これは流石にマズイな

「ツバサ、もう帰つて、コガネが危ない」

「ええ、でも…」

「早く消えろ」

「何だよ、ベーつだ！」

またそれかよ、チカとツバサを無理矢理返してその場を収めた、コガネも少しは落ち着いたかな

「悪いな、コガネ」

「カイが謝る事じゃない、あのクソがいけないんだよ」

そんな感じで話をすると自然と男子達が集まり始めた、チカ達の事かな

「何？」

「四色と五百歳つて、潤間さんと鷺鷹さんと友達なの？」

「友達も何もチカは俺の彼女だから」

『ええええ！』

何もそこまで驚かなくても、しかも一部の女子の悲鳴にも似た声も混じつてたし

「クソオ、潤間さんはダメか、でも、鷺鷹さんなら」

「あのクソ女のどこが良いんだよ」

名々が名々の答えを出してるけど、一つ可哀想なところが、ツバサはチカに惚てる事をみんなは知らない、まあ知らない方が良いと思うけど。

講座の見学時間、俺とコガネは体操服に着替えてサッカー部の練習を見に行つた。

グランドには見学のカツコイくらいの奴が「ロロロロ、それにマネージャー希望か追っかけかどっちか分かんないけど女の子が多数。にしてもサッカー部の先輩達、あれでもサッカー部かよ、俺より下手くそじやん

「下手な野郎ども」

「コガネもそう思う?」

「当たり前だろ、小学生みたいだ」

「じゃあ一発かましますか?」

「どうしますか?」

俺達二人はミニゲームに参加した、俺はどこでも同じだからコガネとツートップで

「俺とコガネ振り子で行くぞ、他に渡しても高が知れてる」

「OK」

スタートと同時に個人技やらワーンシーやらで進んで行った、一緒にプレーすると更にクソだな

「ゴール! 一年チーム先取」

実況好きらしい先輩の実況がさつきからつるさい

「おおっと、金髪の一年がボールを奪った！空かさずロングパス、  
その先には青髪の一年！そのままボレー！2点目だ！何だこの大型  
新人は！？」

みたいな感じだ、ジン川平ぱりの熱さでの実況ありがとう。  
見学が終わって帰ろうとした時だつた、一人の小さい先輩が寄つて  
来た

「どうも部長の小林、君達サッカー部に入らない？君達ならすぐ  
レギュラーになれるよ」

まああのレベルなら余裕だら、しかも最初から入るつもりだつたし  
「コガネは決まりで良いよな？」

「カイが良いなら」

「じゃあ入ってくれるんだね！みんな一年生が一人入つたよ！」

そうすると話してた部員達が集まつて来た、確かにみんなカッコイ  
イ、爽やか系とかワイルド系等々あらゆるジャンルのイケメン達が  
「よろしくな」

「お前らがいれば百人力だな」

「お前、フォワードのレギュラー落ち決定だな

「……」

その他いろいろな反応を示した、俺はとりあえず挨拶をしてたけど、  
コガネは終始無言だつた。

まだ正式部員じゃないからすぐに俺達は帰つた

「何で黙つてたの？」

「いやあ、あんだけ調子乗つたことして、嫌われたと思つたから、  
あの反応されてビックリした」

「まあ良いんじやない、何か楽しそうな部活だし」

「まあな」

俺達はまだ知らなかつた、サッカー部という所は部活以外が一番キ  
ツイつて事に……

## 青の地獄生活

やつと普通の授業が始まった、でも退屈だ、何の新鮮さもないし簡単な事ばかりやってる、聞いてるフリだけはしてるけど10分すると、ブラックアウトしてる、コガネに至っては休み時間しか起きてない。

3時間目が終わった時に以外な訪問客が

「カイ君、お弁当忘れちゃって」

マミ姉だ、一緒に登校してて分かったけどマミ姉の人気はユキ並だ、だから一瞬で教室が騒がしくなった

「はい、ユキも持つていいから届けといで」

「分かった、じゃあね」

マミ姉が出ていった後、例の如く男子達が集まってきた、今回はコガネも興味があるらしい

「カイ、あの美人誰?」

「五百歳知らないのかよ!/?2年生の蘭さんだぞ、去年のミス光ヶ丘!」

光ヶ丘は俺達の高校名ね、それにマミ姉がそんなに凄いのにもビックリ

「で、何でミスがカイの所に?」

「うーん、お姉ちゃんみたいなもんかな

『何いいい!』

今度は女子の喜びにも似た叫びだ、別に秘密にする気もなかつたし言つ必要性もなかつたし

「でも、ユキの彼女だよ」

「あの、時期生徒会長と呼び声の高い樹々下さんと…?」

「美人はイケメンにか…」

生徒会長?ユキってそこまで頭良くないし人望を集めのタイプじゃないよな、自ら立候補するとは思えないし

「何でユキが？」

「四色知らないのか？この学校で生徒会長をやるって事は、学校一のイケメンって事何だぞ」

「そう、暗黙の了解でそうなつた」

「知つてた」「ガネ？」

無言で首を横に振る、何か無茶苦茶な学校だな、学校全体で美男美女コンテストかよ

「ちなみに四色と五百蔵は有力候補だから」

『やだよ』

そんなかつたるいのやつてられるかよ。

先生が入つて来てみんなが席に着いた、礼と同時に「ガネが爆睡、その十分後、俺も……。

起きた時には礼が終わつてた、有意義な一時間だつたな、弁当の飲み物を買いに行こうとしたら地響きが聞こえて来て、その後教室にバッファローがなだれ込んで来た

「これ、お弁当！」

「私も！」

「四色君は私の食べるの！」

「五百蔵君食べて！」

スゲエパワー、つてか何で俺らがこんなめにあわなきやいけないんだよ、と考えてると噂男（後ろの席の奴）が説明を

「昨日のサッカー部の件で君達は完全に注目の的だよ、運動も出来てイケメンときたら食い付くのが女の子の性だろ」

納得、出来ないよな、しかも一年だけならまだしも、ネクタイの色から判断して2、3年もいるよ、中には可愛い子もいるけど困るんだよな

「そんなに食えないし、第一自分の弁当があるから悪いけど

「俺はいらない」

それで撤収してくれたら楽なんだけどな、全く聞く耳持たずだな、

思い思いに騒いでるよ、その時チカとツバサが入って来た、救世主登場！

「コガネ、あれ見ろ」

「しようがない、今は手段を選んでる余裕はないな」

「コガネも何とか納得してくれたし、後は根性で

「チカ！遅かつたじやん！」

「カイ、どうした？」

「ゴメンね、予約済みだから、いつか機会があつたらね」

「半永久的に無いけどな」

人をかき分けてチカとツバサの所に行つて教室を出た。

チカが状況把握が出来て無いらしい、俺達も出来て無いけど

「カイ、あれは何？」

「僕が説明してあげるよーどうせカイっちはコガネんも分かって無いと思うから」

カイっち？「ガネん？もしかしてあだ名つて奴？だんだんイタイのが浮彫りになつてきたな

「……コガネん」

気に入つたの！？「ガネの趣味が見えてきません

「たまにはマシな事言うな」

「でしょでしょ！「ガネん気に入つてくれた？」

「少しね」

顔を真っ赤にしてる、理解出来ない、何でこんなにセンスのせどころか発する意欲すら見えないあだ名は、3年間これで呼ばれるとなると、辛い

「で、理由を教えるよ」

「あ、そうだそうだ！カイっちとコガネんは昨日サッカー部の先輩達に圧勝したでしょ。サッカー部の追っかけの子達は上手い人の追っかけになる確率が80%くらいなんだよね。だから、丞先が君達に向かつた訳」

噂男より説得力があるな、でもこれからこの地獄生活が始まるのかよ

「疲れるなあ、何か打開策はないの？」

「無いよ！」

即答ありがとう

「チカ、助けてよ」

「アタシに助けてを求めるなよ、アタシだつて辛いんだから」

「チカチカは男子からの告白が止まないんだよ」

「ツバサもだろ」

「チカチカには負けるよ」

この学校が怖くなつてきた、チカも辛いだらうな、俺達も昨日は告白されたし、一日惚れでも少しは考えろよ。

飲み物を買つて教室に帰つた、弁当を持つてチカとツバサが来るらしい

「ガネは弁当？」

「そうだよ」

「無くない？」

「ん、まあ」

チカとツバサが入つて来た、相変わらず男子の目を惹いてるな。コガネが立ち上がつて女子の席群に向かつた、この学校は男子が窓側から中央にかけて出席番号順、女子は廊下側からだ、コガネが向かつた先は廊下側の一番後ろの席の前で止まつた、何してんだろ

「ヒノ弁当」

「はい」

女の子から弁当貰つてる？へつ？「ガネが？嘘だろ、どういう事だよ！？」

## 銀との出会い

「ヒノ、弁当」

「はい」

俺はその一コマを見てビックリを通り越して、脳細胞が退化した、あのコガネが女の子に話かけた、しかも弁当受け取つてるし、彼女？もしかして彼女なの？俺はとりあえず駆け寄つた

「カイ、行くぞ」

「はいストップ」

「コガネを制止した

「何だよ？」

「とりあえず、その弁当との女の子の事から説明してもらおうか」

「幼馴染みだけど」

そういうことね…、つて幼馴染み！？ああ悲しい一人でノリツッコミするほど落ちぶれた俺が、悲しすぎる

「何で同じクラスにいるのに言つてくれないんだよ

「言わなかつたつけ？」

キヨトンとした顔をしてる、不思議そうな顔をしてるけど俺がその顔したいよ。

チカとツバサがすぐ後ろにいるのに今気づいた、二人は普通にコガネの幼馴染みの所に行つた

「何だよヒノリ、カイと同じクラスだつたんだ」

「ヒノノとコガネんは幼馴染み、と」

あ、ツバサが新しい情報をインプットした、つてか何でチカとツバサが知つてゐるの？もしかして俺つてハブ？

「春日氷乃梨」

「え？あ、うん、俺は四色海、つて知つてゐるよな」

俺の目を見ながら無言で頷いた。

ヒノリつて子は、長い黒髪をこめかみの所で顔にかかるないように

留めてる。

キリッとした目つきで何だか凜々しい、可愛いつていうか大人びて、美しいつて表現の方が近い

「で、何で弁当を？」

「幼馴染みに作つてもらつちゃいけない？」

「いやそうじやないけど、何で持参しないのかな、つて」

「ガネは少し間をおいて

「一人暮らししてるから」

「そう、なら納得」

何か前のがインパクトが強すぎてあんまり驚けない、確かにビックリだけど詮索に疲れた

「ヒノノも一緒に食べようよ」

「ヒノリはまだ食べてないだろ」

また無言で頷いた、無口な人だな

「良いのかヒノ？」

また無言で頷いく、頼むからしゃべっててくれよ、何か怖いよ。

5人で屋上で弁当を食べてる途中に一つ物凄い事に気づいた、それはヒノリの目だ

「ヒノリ、それカラコン？」

無言で首を横に振る

「天然！？」

「お母さんのお祖母ちゃんがロシア人」

ヒノリの目は灰色を通り越して、銀色っぽかった、何か綺麗で吸い込まれそうな瞳だった

「ホントだ、ヒノリの瞳綺麗だな」

「ヒノノ可愛い！凄い綺麗、良いな良いな」

ヒノリが顔を真っ赤にしてうつ向いて言つた

「…ありがと」

「良かつたな、ヒノ」

また無言で頷いた、もしかしてこの一人…、まあ良いか、それより  
気になる事がもう一つ

「チカとツバサは何でヒノリの事知ってるの？」

「バレー部仲間」

以外にアクティブなお方なんだな、文芸部とか入ってそうな感じが  
したんだけどな、でもバレー部は美少女部つて尊男が言ってたけど  
ホントだな

「ヒノ、今日も弁当美味しいな」

「…ありがと」

「惱氣るな」

「カイ、弁当美味しい！」

うわあ、チカが下らない対抗心燃やしてると

「当然だろ」

周りがビックリしてる、俺が弁当作っちゃいけないのかよ

「カイ、料理するの？」

「何なら食つてみる？百聞は一食にしかず、つてな」

「一見な…」

よく知ってるじゃん、つてかツバサもつまんで来やがった、チカの  
食べば良いのに

『美味つ…』

ビックリした、そんなに叫ばなくとも良いのに、つてかさりげなく  
ヒノリも食べてるし

「…美味しい」

「ヒノもそう思うだろ」

「カイつちは料理上手、と」

あ、またインプットされた、そして隣で誇らしげなチカ  
「カイの料理は天下逸品だよ」

「つてきりミスが作つてるもんだと思ってた」

ミス…、ああマミ姉の事か、コガネの中ではミスで定着したらしく  
「ミスつて誰？」

「マミ姉の事だよ

「何で、ミス？」

「僕にお任せなさい！」

でた、情報通、ツバサならこの学校の事なら何でも知つてゐるからな、情報の入手元は不明だけど

「蘭さんは去年のミス光ヶ丘、ミス光ヶ丘つてのは、毎年文化祭で開かれるミスコンの事、ミスジャパンとかミスユニバースあたりを想像してもらえばいいよ。ちなみに今年は蘭さんとココにいる3人が有力候補だよ」

スゲエ情報網、詳しそ過ぎるし、今はミス候補に囮まれてるって事か、そこら辺の男子が死にもの狂で入りたい輪なんだ

「誰が呼んだか、光ヶ四天王、って呼ばれてるけどね」

それは笑える、四天王だつて、でも自分の彼女がモテるのって凄く複雑な気分なんだよな

「モテる彼女を持つと苦労するな」

「コガネもな」

コガネとヒノリが顔を真つ赤にしてる、やつぱりこの二人、どっちもガツガツ行くタイプには思えないしな、でもコガネがシャイボーキつてのが意外だな

「ちなみにカイつちとコガネんは、イケメンツートップ、って呼ばれてるよ」

「何だか段々、その情報嘘臭くなつて來たんだけど

「カイつち何を言つか！君がこの学校で一番頭が良いのも知つてゐんだぞ！」

やつぱりツバサの情報網は確かだ、何か全部筒抜けになつてゐたいでいやだけど

「ヒノリは告白何回くらいされた

ふときになつて聞いたやつた、候補ならそれなりにあるだろ

「……5人」

「やつた！僕の勝ち！僕は7人だもんね」

「チカは？」

「アタシも5人かな」

何だコイツら、でもみんな勝算が無いんだよな、でも一人今の会話を聞いて落ち着かない奴が

「ヒノ、OKしたの」

横に振った、当たり前だろ、コガネがいるんだから、コガネもあからさまにホツとするな

「カイとコガネはどうなんだよ？」

「俺はされる前にチカの事を言つから、最後まで行つたのは2人かな」

「俺は……、忘れた、当然全部NOだけど」

コガネらしいな、でも何で彼女がいる俺にコクつた奴が二人もいるんだろ、何かこの学校おかしいよな、みんな必死さが伝わってくる。

春日氷乃梨、不思議だけどコガネにはこれくらいが調度良いかもな、うるさくないから

## 赤との帰り道

部活の輪にも入れて最近は学校が楽しくなってきた、女の子達さえいなければ…、練習中の女の子の量が半端ない、軽くスタジアムと化してゐる、これが普通らしいけど活力はどこから来るんだよ

「最近女の子増えたな」

一年の面倒をみるのが大好きな林さん、この人もカッコイイけどそれが埋もれるのがサッカー部の凄いところ

「何ですか？」

「お前らのせいだぞ」

『俺ら?』

普通に俺らも埋もれてると思つてた、だつてレギュラーなんて各学校の一一番カッコイイ人が集まつた感じだから

「気付けよ、時期生徒会長」

「林さんもじやないんですか？」

「俺は無理だ、樹々下がいるかぎりな

「そういえばユキは何部なんですか？」

講座は2年まで必修だから気になつた、ユキがどんな事やるのか

「アイツはバスケ。四色は樹々下の事知つてるのか?」

「義理の兄弟ですから」

『嘘つ！？』

後ろで水を飲んでるコガネが吹き出した、それよりユキはバスケ部か

「カイ、聞いてないぞ」

「おかしいな…」

「そりゃ、なら蘭も知つてるだろ?」

「まあお姉ちゃんみたいなもんですから」

林さんが顔を真つ赤にして頬をかきながら言った

「実は惚れてたんだよな」

「そりゃなんですか！？」

「ああ、あっけなくフラれたけど」

「でも林さんならすぐ出来ますよね？」

「その気になればな」

そうだ、サッカー部はナルシストが多いんだよな、サッカー下手くそな奴でもサッカー部にいるからな、肩書が欲しくて入ったアホがちらほら。

帰りはバレー部に寄つてから帰つてゐる、チカとヒノリ田淵で、おまけでツバサが付いてくるけど

「チカ終わつた？」

「今ね」

「にしても、上凄いな」

「ん、ああ、まあね」

サッカー部同様エネルギーを持て余した男達が、そのせいで体育館の熱気が異常だ、大型扇風機が置いてあるくらいだ  
「おい！お前誰だよ！」「いくらイケメンでも潤間さんを独り占めにする権利はない！」

「金髪手前もだよ！」

ある意味女の子よりもちが悪い、コガネも軽くキレかけてるし

『サッカー部の…』

「四色と！」

「五百戻」

『文句あるならサッカー部に来い！』

はい、予行演習通りに決まつた、つて漫つてると走つて下りてきた、流石に喧嘩する理由もないし逃げるか

「コガネ行くぞ」

「チカちゃん、ヒノいつもの所でな

「僕も！」

そういえばツバサの存在を忘れてた、そんな事考える暇もなく男達が走つて來た。

遅かつたからあつという間抜けた、いつもの場所こと学校の裏門を少し行つた空き地にチカ達がいた

「お待たせ」

「大丈夫か？」

「余裕！つてかツバサは？」

ツバサだけがいなかつた、いつもチカのくつつき虫なのに

「バイトだつて」

「そなんだ、なら久しぶりに一人で帰る」

チカがコガネとヒノリを見て頷いた、チカも分かってるじゃん

「じゃあね「ガネ」

ヒノリも「ガネ君にちゃんと守つてもらひな」

「おい！カイ、チカ……」

「バイバイ」

案外ヒノリは勘が鋭いし素直だな、それに比べてコガネときたら。

俺とチカは街に来てた、チカと一人で帰りたいつてのも半分だつたし、たまには楽しまないといつ足元をすくわれるか分からなかつた

「カイ、クレープ食べよ」

「良いよ」

クレープ屋の商品にビックリした、半分は普通なんだけどあの半分が、コロッケとかキムチとか納豆とかクレープとは思えない物ばかり、普通のを頼んだけど興味がある

「クレープおいひ～」

「チカ、クリームがついてる」

何か最近いろいろ疲れてたから癒されるな、慌ててクリームを拭き取つて

「取れた？」

まだついてたから親指で拭き取つた、指についたクリームを舐めるとチカが真つ赤になつた

「とれたよ」

「…ありがと」

「久しぶりだから免疫が低下した?」

「無言で頷いた、やっぱりチカは可愛い、あんなクソどもには死んでも渡せないな

「まだそれつけてるんだ」

ブレスレット、俺がチカの誕生日プレゼントであげたやつだ

「当たり前だろ、運動とか風呂とか以外はずつとつけてるよ」

「何か嬉しい」

「何で?」

「高校入つてチカが遠くに行っちゃつた気がしたから、これでも寂しかつたんだから」

チカがモテて、何か嫌だつた、ヤキモチつて言われればそれまでだけど、やっぱり彼女がモテて嬉しい奴はいないだろ

「それはアタシもだよ」

「大丈夫だよ、チカ以外は興味のきの字も無いから」

「アタシも!」

いつもより寄り添つて歩いた、途中同じ学校の生徒に会つたけど無視していった

「カイ、コガネ君とヒノリビツ思つ?」

「二人とも消極的だね、完全に両想いなのに一歩踏み出す勇気がないとみた」

「やっぱり、アタシもそう思うんだよな」

チカが心なしかウキウキしてゐ、他人の恋を楽しんでるよ、まあ少なからず俺もだけど

「ヒノリ可愛いもんね。でもコガネ君は何か不思議な感じ

「悪そななんだけど、怖くない?」

「そう!」

指をパチンと鳴らした

「あんなにピアスもいつぱいつけてるし、髪の色も色だから怖くて

もおかしくないんだけど、何か爽やかで話易いんだよね

「『ガネマジック』だよ」

「だね」

その後公演のベンチに座つて学校の話をした、最後はキスで絞めて、  
久しぶりだったから心臓がうるさかった

最近はいろいろと慣れてきて楽になつた、毎日誰もいない屋上でいつも通りに5人で弁当を食べる予定だった、その日は変な奴に止められた

「おい、 そこの金髪と青髪、 止まれよ」

声の主は一言で言つと不良、 しかも雰囲気からショボくてダサい、 もう弱さが溢れ出ている

「何?」

「ちょっと来いよ

「はあ?」

コガネがキレかけた、 でも「こぞー」を起しそと面倒だな、 チカ達もいるし

「分かつたよ」

「カイ何でだよ?」

「ココじゃ面倒だろ。 チカ、 先行つてて、 スグに行くから」 みんな不安な顔をしてる、 まあ何の問題も無いけど教師に見つかるのが一番面倒なんだよな

「大丈夫?」

「全然大丈夫」

多分かなり面倒な事なんだろうな、 つてか男からの呼出しはじめてだな。

俺らが連れて行かれた場所は体育館の裏だった、 定番過ぎて笑えて来た、 そこに4人の不良が地べタに座つてタバコを吸つてる、 ああもつとめんどくせえ

「ブツ」

コガネが吹いた、 少しは我慢しろよ、 俺だってギリギリの綱渡りしてるんだから

「何がおかしいんだよ！？」

「うわあ、ドスの効かない声で言われても火に油だよ

「だつてなあ、カイ」

「笑うなよ、俺だつて我慢してるんだから」

頭っぽい奴が顔を真っ赤にして、コガネの胸ぐらを掴んできた、コ

ガネはそれを叩いた

「だつてなあ」

「ん、まあ」

『ダサいんだもん』

頭っぽい奴がコガネに殴りかかろうとしたけどあっさり避けた、全員が立ち上がった時だつた

「ちょっと待つて」

何だよコガネ、臨戦体勢だつたのに

「カイ、普通にやつてちゃつまんないから、多く倒した方がみんなにゼリーおじりつてどいつ？」

「のつた！」

確かにただ喧嘩するだけじゃつまんないよな、謝罪の意味も込めて、

「コガネにしたや良いこと思いつくじゃん

「お前ら一人で盛り上がってんじゃねえよ！」

「そうだ！一人とも立てなくしてやるからよー！」

「寝言寝てから言え」

「古ー」

「うるせえよー！」

そんなことしてると殴りかかってきた、一人目は腹に一発で倒れた、案外弱いな、二人目は脇腹を蹴ろうとしたけどその足を捕まえてその場に倒して、顔面に一発

「コガネ、二人終わつたぞ！」

「俺も」

残り一人は呼出しに来た奴だけど、震えて逃げて行つた、なんだよつまんねえの

「おい！待てよ！」

「ゴガネ良いよ、それより『コレ』で引き分け？」

「だな、割り勘で」

帰ろうとして体育館の裏から出た時だつた

「いやあ、お一人えろお強いんやなあ」

そこには関西弁のにやけた男がいた、糸目できれた大きな口、スペ

イラルのかかつた髪の毛、変な奴

「誰？」

「わい？わいは鳥丸虎鐵や」  
カラスマ「コトシ」

「カイ知つてる？」

「知らない」

つてか何でコイツがココにいるんだよ、体育館の裏なんて普通来ないだろ、しかも喧嘩を見てた口ぶりがまた怪しい、だつて喧嘩した後の奴なんて頭に血が昇つて何されるか分からぬもんな、コイツおかしい

「何でお前がココにいるんだよ？」

「何でつて、わいが全部仕掛けたさかい」

その瞬間ゴガネが関西人の胸ぐらを掴んだ、でもまだ笑つてゐ、口イツの余裕はどこから来るんだよ

「何でこんな事した？」

「試しただけや」

ゴガネは殴りかかつたけど、胸ぐらを掴まれたぜ口距離で関西人はよけた

「本題やけど、うちの道場に来てくれへん」

『断る』

何でこんな訳の分からぬ奴の言つことを聞かなきやいけないんだよ、しかも道場？

「ちなみに何の道場？」

「極真空手や、ちなみに師範やらしてもりうてます」

だからか、でもあの距離からのを避けるつて事は、並の師範じゃな

いことは確かだな

「頼ります、今人が少のうて困つてんねん、二人ともカツ「コイイ  
さかいに密寄せのためにお願ひします、バイト代はすみまつせ」

「あんな事しておいて虫がいいだろ」

「じゃあせめてこの写真だけでも」

そうして出したのは俺らの学校での写真だった、部活とか勉強中と  
かその他もろもろ

「それ何だよ！？」

「おたくらの写真や、これを公認つて事で売らしてえや」

「それも無理だな」

「欲張り過ぎやでえ、どつちか一つしか譲れへん」

そうすると「ガネが耳打ちしてきた、確かにこれなら良いな

「おい、なら俺らも条件だす、それをのめ

「何や？」

「購買のゼリー5個、それで写真を公認にしてやるよ」

「ガネの威圧にも顔色一つ変えない、コイツ普通にスゲ

「ちょっと待つててえな！」

走つて購買方面に向かつた、何か変な奴に目をつけられちまつた。

戻つて来た手にはゼリーがあつた、何故か満面の笑だつた

「ほなこれで公認にしてもううで、五百蔵はん四色はん

えつ？俺達名前を名乗つた覚えはないぞ、何でコイツ知つてんだよ

「何で俺らの名前知つてんの？」

「スカウトする相手の名前くらい調べるのは当たり前やろ」

確かに、俺達は足早にその場を去つた、後ろで手を振つてる関西人  
を無視して。

そういえばあの不良達つて何年だろ、それにあの関西人も何年だろ、  
事としだいによつちや面倒なことになりそうだな。

早く屋上に行け、チカ達との弁当の時間がなくなつちやう

屋上に行くと、場の空気が沈んでものが分かつた、完璧に俺らのせいだよ、しょうがないゼリーじゃどうにもならないと思つけど無いよりはましだろ

「お待たせ！」

「カイ！大丈夫か？」

「何が？」

「何がって…」

少し泣きそうなチカがいた、これはヤバい、思つてた以上に深刻な状況かもしれない

「何でも無いって、なあコガネ」

無言で頷いた

「じゃあ何があつたか言えよ」

「チカ達に何かしたらただじゃ おかないと、アイツはもチカ達のファンなんだって」

「ホントか？」

「おう、チカは俺の彼女だ、その言葉そのままそつくり返すよ、つて言つて帰つてきた」

何かかなり苦し紛れの嘘だな、冷静な状態だつたら通用しないよ、つてかいつの間にかツバサがゼリー食つてるし

「チカチカ、カイっちがそう言つてるんだから良いじゃん、それにカイっちと「ガネんが無事だからモウマンタイ」

チカは渋々ゼリーを食べた、ヒノリは無関心だ

「カイっち、さつきから気になつてたんだけど、後ろの誰？」

「後ろ？」

俺達の後ろには、二タニタした糸目がいた、そう関西人だ、つてか何でコイツがココにいるんだよ

「いやあ、べっぴんさんばかりでんなあ」

「何でお前が『』にいるんだよ！？」

「まあ細かい事は気にせんといて」

コイツがココにいる理由が分からねえ、もう用は無いだろ、そうだ  
情報通のツバサなら何か知ってるかも

「ツバサ、コイツの事知ってる？」「

「僕に知らない事は無い！」

頼もしいな、関西人は普通に俺のゼリーを食い始めた、まあこの際  
そんなことはどうでもいい

「鳥丸虎鐵、1・5、鳥丸道場の若き師範にして、金儲けの虫、主  
にこの学校のイケメンとか美少女の写真を隠し撮りして売ってる関  
西人だよ」

「隠し撮り言うても、怪しい事はしてないで」それをしてたら警察  
につき出してるところだよ、それでも肖像権の問題で警察につきだ  
せるかもな

「で、何でお前がここにいるんだよ？」

「そうそう、カイはんとコガネはんを調べとつたら、潤間はんと春  
日はんが浮かんで来たんや」

「何か俺らが友達になつてんだよ？」

「細かいことは気にせんといてえな」

細かくねえよ、それにコイツ調べてやがったのかよ、にしてもホン  
トに二タ一タしてるな

「おー一人は人気あるさかいに、写真を公認にしとおで、そやさかい  
つけてたら会えると思うたらまたにビンゴや、それに棚ボタや、も  
う一人の人もべっぴんさんや」

ホントにコイツの頭には金儲けの事しかないらしい、でも俺がそれ  
を許すとでも思ったのかよ、調べたんだから付き合つてるまで達し  
てるだろ

「チカのは許さねえぞ」

「なら春日はんは？」

「俺が許すわけないだろ」

困り顔をしてる、当然の結果だけどな、次に関西人が目を向けたのはツバサだった、悪いけどツバサなら良いな

「おたくはどうや?」

「おたくじゃない、僕は鷺鷹翼だ!」

「鷺鷹はん、公認にしてくれへん?」

ツバサが不適な笑を浮かべた、何か考へてるな

「売り上げの4割を頂戴!」

「4割かいな!? 2割にならへん?」

ツバサが関西人に耳打ちをした、何か変な事考へてるな、関西人の顔がパツと明るくなつた

「のつたあ!」

「じゃあ今度の日曜ね」

「良い仕事しまっせ」

二人の間でどんな契約が交されたんだろ、しかも今度の日曜に会つ?

「おい関西人、ツバサに変な事するなよ」

「コテツでええよ」

「何かきにくわないけど。ツバサ、コテツに変な事されたら…、コガネどうする?」

「とりあえず喧嘩は良くない」

俺らが生きて帰れないような気がする、とりあえず何もしないことを祈るだけだな

「カイつちもコガネんもありがと、でも僕にも考えがあるから大丈夫だよ」

今はツバサとコテツを信じるしかないな。

関西人、鳥丸虎鐵、変な奴に目をつけられたな、今度からは周りに氣を付けよ、いつ撮られてるか分からぬもんな

週明けの月曜日、最近はバッファローの群れも治まつてきて楽に登校ができる、つてか今日は一際少なかつた、理由は廊下の一郭の人溜りだ、明らかに通行不能になるくらいの量の人だ、女の子が3の男子が7くらいだ、一つの幟のぼりには

『四色・五百蔵公認写真』

つて書いてある、もう一つ幟は

『鷲鷹コスプレ公認写真』

「コスプレ？鷲鷹、鷲鷹……、ツバサのコスプレ写真！？あの時の耳打ちつてそれか、驚いてるとツバサが後ろから来た

「チカチカ、カイっちおはよー！」

「おはようつて、あれ何？」

幟を見て笑顔で鞄から写真を取り出した

「コレコレ、撮つてもらつたんだ」

そこにはコスプレをしてポーズを決めたツバサがいた、メイド、ナース、家庭教師、その他アニメに至るまで様々なコスプレが…、ツバサ、俺にはツバサの方向性が読めないよ

「僕、一回してみたかったんだよね」

「コスプレを？」

「うん！コスプレしてると違う自分になれたような気がして、気持良いんだよね。チカチカもやる」

「アタシはいいよ」

頼むからチカだけはやめてくれ、ツバサはそっちの道に進みそうな気がして怖い、つてかこの服はどこから仕入れたんだよ

「この服はツバサの？」

「分かんない、知り合いに作つてもらつたらしいよ」

コテツも何か怪しいな、この騒ぎの張本人が来た、いつの間にか人がいなくなつてた、寄つて来たコテツは只でさえ大きい口の角をあ

げながら

「ホンマに良く売れたわ、ボロ儲けやで、完売や完売」

「僕の取り分は！？」

「4000円でんな」

「キヤー、『コテツツー大好き！』

「ほな付き合いつ？」

「やだ」

即答、コテツのあだ名は『コテツツー』か、それより儲けの方だよ、ツバサの取り分が4割で4000円だから……、一万円！？[写真だけ]で一万円？ツバサのコスプレで一万円かよ、眞面目にバイトしてての高校生がバカバカしく思えるよ

「カイはんとコガネはんのも売れたでえ、5000円ぐらやな」

「頂戴よ」

「契約が違いまっせ。なあチカはんやつぱりあきまへん？チカはん達のがあれば2万はゆうに超えるんやけど」

「やだよ、アタシはツバサとは違つから」

コテツは最近昼休みの屋上に来るようになつて、自然というか無理矢理というか、とりあえず俺達の輪に入つて来た、ツバサに惚れたらしく毎日のように

「好きやで」

とか言つてゐるけど、ツバサは即答で断つてゐる、コテツは軽すぎるとらな

「みんなん授業始まりまっせ」

「ホントだ、チカ、ツバサじやあね」

「さいなら」

『バイバイ』

6組から8組までは階が違うから『ココ』でお別れだ。

今日はホームルームがある、その内容は金曜日のキャンプの事だ、キャンプがあること自体にビックリしてゐる、今始めて聞かされた、

ちなみにキャンプの目的は親睦を深めるためらしい、それにいろいろイベントもあるとの事、めんどくさ

「コガネ知つてた?」

「知らねえ」

「お前らが寝てる時に話した!」

担任が横から入つて来た、最近俺達と担任の関係が悪化の一途を辿つて、別に良いんだけどいちいちうるさいのがムカつく。班は最低4人らしく3人までは決まつたけど残り一人が決まらない、3人は俺とコガネとヒノリだ

「ヒノリ、誰かいる?」

「いっぱいね、さつきから女の子達が来てるじゃない」

「ヒノ、それはなしだ」

確かに、さつきから女の子がひつきりなしに来る、当然一緒に班になろうというのだ、それに男子も多い事にビックリした、ヒノリ目当てだ

「一人いる」

「誰? さつきの集団以外ね」

無言で頷いて歩いて行つた、教室にいる時にいつも話してゐる、ヒノリの隣の席の人だ

「この人なら良い?」

「え、と悪い、名前何だつけ?」

「矢野です!」

顔はカワイイんだけど髪の毛がボサボサで、見える限りでは綺麗不足なんだけど長いスカート、所々直せば絶対に可愛くなりそうな子だ

「よひしく」

「よ、よろしくお願ひします!」

「堅いなあ、ラフに行こうよ、な?」

「…はい」

「あと敬語禁止、男に免疫が無いのかどうなのか分からぬけど、クラスメイトだろ、楽しく行こうよ」

「名前を知らなかつたけどな」

「コガネは知つてたのかよ」

「何回か話したから、な？」

そういうつて矢野の顔を覗きこんだ、多分ヒノリ経由で何度もかつて感じだろ

「なら決定で良いな？」

「良いよ」

「俺も。矢野は？」

「よ、喜んで」

紙に書いて担任に提出した、キャンプか、楽しそうだけどさつきからチカが気になつてしまつがない、ツバサがいるから大丈夫だと思つけどあの二人は人気かるからな

「チカちゃんの事がきになるのか？」

「当たり前だろ」

「ツバサ君がいるから大丈夫だろ、それにカイの女に手を出す馬鹿はいないだろ」

「そうだな」

部活が終わつていつものようにバレー部に行つた（コテツ付き）、中に入ると一人の罵声が聞こえた

「おい！お前慣れ慣れしく潤間さん達に近寄るんじゃねえよ！」

「おい、やめとけ、四色と五百歳をしらないのかよ？」

「誰だそれ？」

「あの青髪と金髪だよ、あの一人で3年の不良の先輩4人をボコボコにしたらしくぞ、それに隣の糸田は空手部の新人で入部初日で先輩全員に勝つた怪物だ」

何かさんざんの言われようだな、しかもボコボコつて一発ずつしか殴つてないのに、それにあればコテツだよ、空手部つてのは知つてたけどそんな事してたとは

「怪物なんて酷い話やなあ」

「いやいや、怪物なんてまだまだ甘いだろ」「人間兵器だな」

「わいは只の高校生やで、コガネはん」

とにかく、噂が一人歩きしてくれたお陰で逃げずにすんだな、最近は喧嘩の噂が効いたのか男子からのやじが無くなつた、その代わり練習中のギャラリーは増えたけど

「やっぱりあんた達喧嘩してたんだ」

「いや、チカそれは…」

「僕の情報によると相手は3年の不良で、先生達も手を焼くほど解决问题児で、自称喧嘩には負けた事ないらしいよ。更に付け足しつくとそれを仕組んだのは他でもない「コテツツーだつて」

チカとヒノリの目が変わつた、軽く子供がショック死するくらいの殺氣を放ちながら

「コテツ良くもカイを…」

「コガネを…」

「堪忍してえな！」

鬼が二人、関西人に襲いかかつた、上の男子が引くくらいのドスの効いた声で

「きやー、チカチカ！ヒノノ！頑張れー、つてか僕も虜めるう！」意味も分からずツバサも参戦した、人間兵器が袋叩きにあつてる、女の子つて強いんだな

「ヒノ…」

「強い女に惚れた自分を恨め」

「ほ、惚れてねえ！」

顔を真っ赤にして、誘導尋問には引っ掛けからなかつたか、素直になれよ「コガネ」。

その後ボロ雑巾になつてコガネが帰つて来たのは言つまでもない

## 青とキャンプ（後書き）

いつも曉です！突然ですが番外編を書きたいと思つてます、前作から今作まで、それから今後も更新につれカイ以外の目線から書きたいと思つてます。そこでみなさんから「ここでアイツはどう思つてるの？」とか「コイツ目線で書いて欲しい」とか「何でそうなつた」等々、とにかく書いて欲しいことを募集してます。本人でも書き忘れたストーリーが多々あります、だからとりあえずメッセージ下さい、何でも書きますから

## 赤とキャンプ

今日は待ちに待つではないけどキャンプだ、ってかダルい、ビーの高校でもあるけど親睦を深めるキャンプなんていらないよ、疲れるだけだし

「カイ、元気ないな」

「かつたるいだけだよ」

「そんなことあらへんやろ、高校生にとつてキャンプひじゅうもんは恋のターニングポイントやで」

何でコテツがココにいるんだよ、クラス別に並んでるのに極自然に混ざってるこがすうじい、それに恋? コガネへの当て付けかよ

「だつて、コガネ」

「何で俺なんだよ?」

「ヒノリと一人きりにしてやるから安心しろ」

「だから何で俺?」

「コガネはん、素直にならへんと掴める恋も逃げて行きまつせ」  
コガネは顔を赤くして黙りこんだ、コテツほど積極的になれとは言わないけど、人並みに自コアピールを出来るくらいになつてほしいよな

「大丈夫やで、わいとカイはんが助けてやるさかいに」

「コガネ、やっぱりこのキャンプが勝負だな」

「俺の事は俺がどうにかする、ほつとけ」

「言つたな、事後報告はちゃんとしろよ」

「秘密は無しやで」

コガネの一歩を無理矢理歩ました俺らは各自の班に戻つて点呼を受けた、バスに乗つて速攻意識が飛んだ。

気づいた頃には着いてた、周りは山の中と思われる、みんな降りる準備をしてるけど隣で俺以上に爆睡してるコガネがいた

「起きる、『ガネ起きる』

頬を叩いても無反応、しようがない怖いけどいちかばちか使ってみるか、周りに聞こえないように

「ヒノリを抱くぞ」

“ ドフツ ! ”

殴られた、しかもみぞおちに完璧に入った、無言で悶絶してると『ガネが起き上がって来た

「どうしたカイ？」

「…殴られた」

「誰にだ」

キレてるけど本当の事言つたらどうなるんだろ、つてか吐き氣と戦つてやつと勝てた

「『ガネに』

「俺? 何で?」

「言えないよ、また殴られる」

『ガネが追求してきたけど今度は顔面にきそつだからやめといた、今度から起こす時はヒノリは禁句だな。』

降りると森の気持ちよかつた、潮風には慣れてたけど森の空気は新鮮でいい、この中でぼーっとしてるだけで一日過ぎせるな

「これから何するの?」

「カイ知らないの?」

「知つてると思つた?」

「…、『メン過大評価しそぎた』

何か引っ掛かるけど、『ガネと一緒に何も聞いてないない、つてか聞く気ゼロだけど

「宿まで歩きだつて」

「ヒノ、それ本当か?」

無言で頷く

「最悪だよ、『ガネ、帰らない?』」

「交通手段は?」

「……徒步」

「ヒノ、宿行くぞ」

やだあ、「ガネとヒノリが先に歩いて行つた

「行こう」

「矢野か？」

「一番の班は夕食豪華らしいよ」

「コガネ！ヒノリ！気合い入れて行くぞ、矢野も！」

一気にテンションが上がつた、夕食のタメなら逆立でも何でもするよ、でも不味かつたら暴れるけどな。

割りと歩いたな、アバウトな地図を貰つたけどパツと見10Km近くあるぞ、この学校は生徒を行き倒れさせたいのかよ

「痛つ」

ヒノリが足首を捻つたらしく倒れた、人間のそれとは思えない速さでコガネが寄つて行つた

「ヒノ大丈夫か？」

「痛い」

コガネが患部を触つたり動かしたりして確かめてる

「大した事無いけど歩くのはキツイな」

「みんな『メンなさい』

「コガネどうするんだよ」

コガネは考えた末に、背中をヒノリに向けた

「乗れ」

「でも…」

「足手まといになりたく無かつたら乗れ、そのままが一番迷惑だ」

「ありがとう」

渋々コガネの背中にヒノリが乗つた、一人とも顔を真つ赤にしてる、幼馴染みなんだからそれくらい大丈夫だろ。

着いた頃には日が沈んでた、部屋は当然女の子と別だ、部屋にはま

だ誰もいなかつた、この中では一番だつたらしい、「ガネはヒノリの怪我の手当のタメに先生の部屋に行つてゐ、一人で真つ暗な森を眺めてると誰かが入つて來た

「カイはん、コガネはんいてまつか？」

「コテツも案外早く着いたんだ、にしても勝手に人の部屋に入つて來るなよ、しかも他のクラスの

「聞いたで、ヒノリはん怪我したんやで？」

「一日で治るくらいの捻挫だよ」

「コガネはんはどうやつた？」

「テツが求めてる答えは不適な笑で理解できた

「ずっとおぶつてた」

「ホンマかいな！？災い転じて福と成すとはこのことやな」

二人で今日のキャンプの事とかコガネの事、いろいろ話をしてた、この部屋は「ガネとあと3人くるはずなんだけど誰も来ない、そんな事をも考えてると勢い良く扉が開いた

「カイ！ヒノリは大丈夫か！？」

チカとツバサが入つて來た、つてか男子と女子の部屋つてかなり離れてたし、行き来禁止だつたはずなんだけど

「何で二人がココに來てんだよ！？」

「いや、ヒノリが部屋にいなかつたから」

「ヒノリは大丈夫？」

二人とも友達を気にするのは良いけど、男子の部屋に來るなよ、俺も説教くらわなきやいけないんだから

「明日には治るつて」

「良かつた」

「コガネんは？」

「弱つたヒノリはんをたらしこんでるみたいやで」

「誰が誰をたらしこんだつて？」

「コガネがそこに立つてた

「いやあ、それは、あれや！なあカイはん」

「俺にふるな」

「それにチカちゃんとツバサ君も何でこいつに？」

「ヒノリが気になつて」

「そうだよコガネん、みんなヒノノが心配なんだから」

「それはありがたいけど、女子がココにいるのがバレたら皆で説教されなきやいけないんだぞ」

二人が絞んだ、コガネは部屋の中に入つて来て座つた、この部屋5人入ると狭いな、そんな事を考えてると一番面倒で恐れてた事が起きた、担任が入つて来た

「お前ら何してる！」

頭に響くでかい声、部屋にいた奴らが出てきて俺らの部屋の周りに集まつて来た

「女子を連れ込むなと散々言つただろ！」

「悪かつた、だから怒鳴るな」

「黙れ！お前ら全員来い！」

ああ、ダルい、頭がガンガンする。

俺達は連れてかれるがままロビーらしき所に並べられた、案外他人の目が痛い

「何でお前らは問題を起こすんだ！？」

「問題にすかれてるからじゃない」

「同感」

担任が殴ろうと思つて拳を振り上げた時

「クズか」

その一言で拳は止まる、入学以来この言葉を使えば殴られる事はない、俺とコガネはこれに味を占めて自由にしてるけどその内殴られるんだろうな、それが分からぬほど馬鹿じやないからな

「すみませんでした」

セリフっぽく言ってその場を去つた、飯の時間も近いし早くこの視線から逃げたかった

「チカ、ツバサ来るとときはメールしろ、外に出てやるから」

「分かつた」

部屋に帰ると同じ部屋の奴がいた、みんな説教されたのを知つてゐらしく、質問攻め

「潤間さん達と何してたんだよ？」

「何も」

「五百蔵は春日さんをたらしこんだんだって？」

「自分が言つた事がどんだけ馬鹿な事が身を持つて実感するか？」  
キレた、「ガネをからかった奴は震えながら謝つてる、馬鹿な奴だな、コガネに冗談は通じないこれ今日の教訓、例え寝ている時でも部屋に実行委員の人人が来て

「ご飯だから集まつて下さい」

そうかもうそんな時間か、確かに一番の班はそこで発表されるんだよな、しかも豪華な料理ときた。

食堂は異常に広かつた、まあ一学年がまるまる入るくらいだから毎る無かれ、班で座るんだけどヒノリと矢野が来てない

「ヒノリ来れないの？」

「来るつて言つてた」

噂をすればヒノリと矢野が来た、歩き方を見る限りもう大丈夫らしい  
「ヒノリ、大丈夫なの？」

無言で頷く、良かつた大事にならなくて、心なしか「ガネのテンションも上がつてきたし後は発表だけだ、実行委員長が前に出てきた  
「宿に到着した順番を発表します」

食堂が最高潮に盛り上がる者と、明らかに自分達は無いとシラケてる者、俺達は前者だ

「第三位、5組の鳥丸班」

「テツ達の班か、やるじやんコテツ

「第一位、1組の土屋班」

まだ、まだ俺達に希望がある

「第一位……」さあ来い！コガネだって頑張ったしヒノリの怪我を無駄にするな

「7組の春日班」

春日班：俺達の班だ！

「コガネ、一番だつて！豪華な料理だぞ」

「俺のお陰だな」

盛り上がつてゐる俺らを次の「一言がどん底まで落とす

「一位の春日班には「デザートにゼリーが付きます」

『はあ！？』

俺の聞き間違いじやなきや、豪華何てみじんも感じさせない庶民の食べ物なんですけど

「豪華な料理じやないの！？」

「いえ、ちゃんとしおりにも書いてありますよ」

俺とコガネは矢野を見た、矢野は蛇に睨まれたカエルみたいになつた

「矢野、嘘ついたな！」

「『めんなさい…』『めんなさい…』『めんなさい…』私の聞き間違いです！」

「カイ、矢野を攻めても始まらない、無いよりあつた方が良いだろ」確かに、まあ良いか、そこまで期待もしてなかつたけどゼリーはイタイな、攻めても豪華料理に変わるわけじやないし、あるもので我慢するか。

飯を食つて、その後風呂に入つて自由時間だ、やることもないし「コガネはいつの間にかいないし、とか考えてたらメールが来た、差出人はチカだ

“暇”

この一言のみが送られて來た、確かに分かるけど文章で送つて欲しいと思うのは俺だけじやないよ

“玄関に来て、俺も行くから”

そう送つて部屋を出た、背中に罵声を浴びながら。

玄関に着いたのは俺の方が先だった、その後すぐにチカも来た、つてかキャンプつて凄いな、いつの間にか付き合つてる奴がちらほら。俺らは外に出て階段に腰かけて話した、暗いけど森の音とか川の音が聞こえて俺にとっては居心地が良い

「ココ何も無いから自由時間つまんない、みんな誰が好きとかしか話さないんだもん」

女の子ってやつぱりそんなもんか、男も同じようなもんだけどな「ツバサがいるだろ？」

「コテツとどつかに行つた」

もしかしてツバサとコテツつて付き合つてたりするのかな、だつたら何か楽しいよな

「俺を呼んだのはそれだけじゃないだろ？」

「何で？」

「男達の呼び出しが多いから俺といればそれが無いと思つたんだろ？」

チカが何で分かつたの、つて感じの顔をしてる、少なくとも俺もチカと同じ状況だつたし、廊下での会話で「クル」「クらぬ」って聞こえたし

「何で分かつたかって？俺もそつだから、コガネは知つてか知らずかいつの間にかいなかつたし」

「何で皆アタシ達が付き合つてるの知つてるのに」

「僅かな期待か、抑えられない衝動、どちらかだろうな」

チカは不安な顔をしてる、何が不安なのか分からぬけど久しづりにあの顔を見た

「カイは大丈夫だよな？」

「何が？」

「なびかないの？」

「チカから違う奴に？」

無言で頷く、変な事言つう奴だな、俺がチカ以外に興味を持つなんて

死んだ人を生き返らせるくらい有り得ないな

「チカはどうなんだ？」

「アタシはカイだけだよ！」

「俺もだよ、俺がチカを思う気持ちはチカが俺を思う気持ちと同じ、  
揺るぎないもの、かな」

「やっぱりカイは最高！」

そう言ってチカが抱きついて来た、高校に入つてから一人の時間が  
少なかつたから今という時間が永遠になることを望んでる俺がいた、  
その後俺から離れたチカが目を瞑つた、俺もそれに応えてキスをし  
た。

暗闇の中に溶け込んだ俺は暫くの永遠とチカを感じた

## 銀とかき氷

森の爽やかな風、朝の全てに力を与えるような日差し、川の流れる涼しい音、でもこれだけの条件が揃つても一人の馬鹿のせいで最悪な目覚めになつた

「朝だ！お前ら起きろ！」

担任だ、周りのどんな自然をも無にする「コイツのモーニングコールほど気分の悪いものはない

「7時30分から飯だ！昨日の食堂に来い！」

でも担任のうるさい声で地に墮ちた気分を薙払つてくれるのもこの自然だ

「あんな起こされたたのに気分良いな

「自然が気持ち良い、それだけで十分だな」

「意外だな」

俺はいつも寝る時とか家にいる時はカチューシャをしてる、今もそうだ、今日はめんどくさいからこのままでいい。

食堂に行くと今回はヒノリと矢野が先に座つてた、一人とも眠そうな目をしてる

「おはよ」

「カイ君、カチューシャ？」

「ああ、髪が邪魔だから」

「なら切れよ」

笑つてながした、何となくこの長い髪が気に入つてるからな、矢野は相変わらずボサボサだし、ホントにもつたいないんだよな。

実行委員長が前に出てまた何か話し始めた、みんな眠いのに無駄にシャキッとしてた

「朝食の後はオリエンテーションがあります、なので8時30分に

正面玄関に集合です」

オリエンテーションか、何があるんだろ

「コガネ、オリエンテーションなにやるか知ってる?」

「知らねえ」

「ヒノリと矢野は?」

「近くにフリークライミングができる所があるからそこでフリークライミングやって、かきこおりの早食いやつて、宝探しやって総合得点で宿題の有無を決めるらしいよ。フリークライミングと早食いは代表一人だつて」

「ホントかよ、矢野?」

前回があるからな、でもそれが本当なら一つは確実に断トツトッ普だな

「本当、私が保証する」

「ならフリークライミングは俺がやる」

みんなが目を丸くしてる、俺が積極的だから? それともフリークライミングなんて選んだから?

「出来るのかよ」

「<sup>えいひ</sup>期待

「じゃあ早食いはヒノだな」

無言で頷いた、ってかコガネがやれば良いじゃん、人に任せないで何でヒノリなの?」

「ヒノは冷たいものに鈍感だから、小さい頃からアイスとかかきごおりとかの早食いで勝つた事ないから」

意外な一面、これなら宿題免除も夢じゃないな、俺達って地味に最強グループだつたりして、宝探しは力いれなくとも大丈夫だろ、それにフリークライミングか、久しぶりにやるな、鈍つては無いと思うけど全盛期にくらべたら大した事無いだろうな、まあ負ける気はしないけど

「学年単位でやるの?」  
「クラスだつて」

只今の時間は8時35分、場所は泊まった部屋、そう遅刻だ、コガネの馬鹿がピアスを一つ無くしたらしい、しかもそれがヒノリから貰つた物らしい

「コガネ、心当たり無いのかよ?」

「あつたら苦労しねえ」

確かに、でもこのままだと説教直行使の高速運転だよ、学年全員に見られながら説教つてのは流石にイタイぞ、つて……

「コガネストップ!」

コガネがピタツと止まつた

「何だよ?」

「……ほれ」

「おお……」

コガネの別のピアスに引っ掛けつてた、これは「くら足」をがしても見つかるわけないな

「見つかつたなら早く行くぞ!」

着いたころには案の定全員が整列して担任が完璧にキレてた、一年全員の視線を全て集めるというオプション付きの説教が開始されたのは言つまでもない

「お前らはホントに集団行動が出来ないな!いつもいつも自分勝手な行動ばかりだ……」

2分経過

「だからだな……」

「先生皆が待つてるんですよね?なら早く俺らの説教を終らせないと時間無くなりますよ」

「お前ら……」

「俺らが悪いのは分かつてます、でも更に俺らのせいで皆を待たせるのは不本意ですし、今回は皆の前で謝りますんで次回また説教お願いします」

そう言つて無理矢理向き直して「コガネとアイコンタクトをとつて  
『すみませんでした！！』

そう叫んで班に戻つた、担任を丸つきりシカトして、にしても殴られなかつたのが不思議なくらいだよ、俺もコガネも殴られる気満々だつたのに。

戻ると心配そうなヒノリがいた

「ゴメン、ヒノリ」

「何で遅れたの？」

「ヒノに貰つたピアスが見付からなかつた」

「他のピアスに引っ掛けつてたけどな」

二人で大笑いしてると担任が怒鳴つてきた、少しトーンを下げる話

しを続行した

「ならまた買つたのに」

「ダメだ、始めてヒノに買つて貰つたものだから」

コガネつて思い出とか大事にするタイプなんだ、色々ピアスのパターンを変えてたけどこれだけいつも同じ位置にあつたのはその理由か。

最初のオリエンテーションはフリークライミングだ、案外近くに、しかも公共としてあつた事にビックリした、教えてくれれば抜け出して行つたのに、壁は一般的なものと同じ高さだ、皆が口々に高いだの怖いだの言つてるけど見慣れてて実感が湧かない

「カイ大丈夫か？」

「大丈夫だよ、なんなら「ガネやる？」

「いや俺は高所恐怖症だから」

かなり意外だな、怖いもの何て無いと思つたのに

「ならヒノリ、今度皆で遊園地でも行くか」

ヒノリがクスクス笑つて、あんまり笑わないつてか始めて笑うと  
ころを見たかも

「俺は行かねえ」

「冗談だよ、冗談」

「ゴガネは中学校の時私とジェットコースターに乗つて泣いちゃつたもんね」

「おい！ヒノ」

皆で大爆笑してるとまたあの「つるさい」声が響いて来た

「春日班！出でこい！」

うるせえ声だな、いちいち騒がなくとも聞こえるつうの、しきうがないから小走りで前に出た、聞いた話しによるタイムアタック制で暫定トップは1分37秒らしい、素人にしゃまあまあの記録だな、でも玄人の力の前ではノミ同然の記録だな

「始めるぞ！スタート！」

始まると同時に俺を除いて全員壁に飛び付いた、俺はとりあえず見学、足や手を滑らせる者、下をみて怖じ氣付く者、やつぱりだめだな

「どうした？怖じ氣付いたか？」

担任が嫌味つたらしく行つて来た、しようがないから登つてやるけど、ビックリしそぎてハゲるなよ

「行つきます！」

登つてみると簡単だな、一年近く人工の壁を登つて無かつたから楽に感じる、天然のはテクニックがいるから島にいた時に自然とレベルアップしたんだな、つてかもう終りか、ジムにいた時は片手でぶら下がつて正面の窓から外を見てたけど、今は大自然を堪能してる、最高に気持良いな

「か、春日班、36秒！！」

そんなもんか、下にいすぎたな、実際は20秒マイナスつてところだな、しかも皆の視線はさつきと違つて気持良い、良い意味で目立つてる。

降りると大騒ぎだった、つてかまだ登つてる奴いるし

「怪物だ」

「四色はイケメンだしスポーツ万能だし、勝てる気がしねえ」

「キヤー！四色君カッコイイ！」

怪物は酷いだろ、せめて超人止まりにしてくれよ、班に戻ると「ガネの間抜け面があつた

「カイ、何で？」

何となく文章がおかしいけど、普通フリークライミングやってる奴なんていないし、認知度も低いからしょうがないか

「経験者だから」

「ルール違反だろ」

「そんなルールないから」

班に戻つても視線が刺さる、この髪のせいでいつも目立つてたけど今回は違うな。

次はこの場で早食いだ、これもタイムアタック制で2つを食べ終つたタイムで測定、1つだと簡単だから2つらしい、拷問だなこれは

「ヒノリ大丈夫か？」

自信あり気に頷く、コガネからの推薦だし大丈夫かな、それにあんな自信満々のヒノリの顔を見ればな

「春日班、出てこい」

「ヒノリ頑張れ！」

「ヒノリ、見せ付けてやれ」

「頑張つて春日さん」

みんなからの声援を受けながら出ていった、各班何か根性ありそうな男子ばっかりだ、しかもかき氷は大盛りだ

「あの、イチゴシロップありますか？」

ヒノリ、その余裕は何処から来るんだよ、それにヒノリの人気を実感させる男の声援

「春日さん頑張れ！」

「おい！ 一つにしてやれよ！」

そうだそうだ、もつと言つてやれ、これでハンデがつけばもうけもんだよ

「では始めます。スタート」

難なくスルーして始まつた、皆ガツガツ食つて頭を抱えてるけど、

ヒノリは挿き込むまではいかないけどかなり食つのが速い、10秒足らずで一つ食べ終つた

「速」

「しかも楽しんでるんだよな、ヒノは」

「スゲエ、男子が一つ食べ終る前に完食したよ

「あのお、もう一つ貰えませんか?」

大食い女王かよ、しかも三つ目は楽しんでゆっくり食べてるよ

「何あれ?」

「冷たいもの大好きだから」

何か周りの男子が惨めだな、戻つて来てもいつになく上機嫌だつた、  
そういうえば頭が痛くなつた雰囲気がないな

「頭痛くないの?」

「全然、それにかき氷美味しかつた、もう一つ貰つとけば良かつた」  
大食いチャンピオンここにあらわる、あれだけのかき氷なら一つで  
十分だけどそれを三つも食べてるからな。

ヒノリは田の色も、冷たい物への耐久性も氷のお姫様並か

2種目が終わって俺らの班当然一位、でも次の種目で大どんでん返しがあるらしい、宝探しと称したものは山の中に宝箱といつか得点があつてそれを探すものらしい、だから一つの班が異常にとれば一位になる事は可能だ、だから断トツ一位だからって悔る無かれ

「これが地図だって」

「うわ、俺勘弁」

「私も」

「地理の授業みたいだな」

矢野がじっくり見てる、こんな解るのかよ、俺にはどうあえず適当にあたるしか方法は見つからないけどな

「矢野、解る？」

「は、は、は、はい！何とか解った」

「まあビリにならない程度にがんばろ」

矢野のナビで始まった、つてか矢野のナビ通りにやつてると見つかる見つかる、木の上とか土の中、石の下にまであるよ

「矢野スゲエよ！つてかガネ役に立つてないだ」

「つるせえ！司令塔なんだよ俺は」

まあ「ガネの言い訳はおい」といて、もしかしたらこの種目でも一番がとれる勢いで宝（得点）を見つけていった

「あそこに一つ」

そこは細い木の枝の先だった、流石にあそこには登りたくないな、折れそうで怖い

「俺の出番だな」

今まで役立たずの「ガネがやつと動きだした、でもこんな所ビツやつて取るつもりなんだろ

「どするんだよ？」

「ううだよー」

力任せに木を蹴り飛ばした、木は大きく揺れて枝に引っ掛けたてた得点が落ちて来た、何だよコガネの馬鹿力っぷりは、しかも勝ち誇つた満足気な顔をしてるし、でも……

「一点」

「えつ？ヒノよく見たのかよ？十点の間違いだろ」

コガネに得点の書かれた紙を差し出す、俺も覗いたけど、どうみても一点にしか見えなかつた、コガネお疲れさん

「あ」

明らかに落胆してる、その時だつた、俺の携帯が鳴りだした、こんな山奥でよく繋がつたな、電話の主はチカだつた

「もしもし、何？」

“力…ツ…サ…が…、コテ…が走つて…、来て！”

「何？聞こえな…」

“プーパー”

切れた、でもチカが泣いてるのはハツキリ確認出来た、電波が確りしてなかつたし泣いててよく分からなかつたけど、ツバサとコテツに何かあつた事は何となく推測がつく、泣いてた事からただ事じゃないことは確かだ

「カイどうした？」

「分からぬけどチカが泣いてた」

「チカちゃんが！？何で？」

「コテツとツバサに何かあつたらしい。コガネ、とりあえず戻るぞ、ヒノリと矢野は後から来い」

そういうつて俺とコガネは走つて宿に向かつた、ヒノリと矢野も走つて来たけどあつという間に見えなくなつた。

玄関に向かうと何人かの先生と泣き崩れてるチカがいた、先生の数とチカの泣き方を見て緊張感が増した

「チカ！何があつた！？」

「力、カイ！」

思いつきり飛び付いて来た、公衆の面前でこれはちょっと…、そんなこと考へてる暇は無いよな、心苦しいけどチカを離して話しごとを聞いた、皆が見てるし

「チカ、とりあえず説明お願ひ」

チカをなだめて、呼吸を落ち着かせて話せる状態にした  
「ツバサが落ちて、それを見たコテツが走つて山に入つて行つちやつた」

最悪だよ、一人で山に飛込むなんて、つてかやつぱりコテツは本氣でツバサの事が好きらしいな、そんな事よりこの状況は尋常じゃないくらいヤバい状況だな、後からヒノリと矢野が息をきらして玄関に入つて来た、それを見てチカに泣いてるところを見られないように上着を被せた

「ヒノリ、チカを頼んだ。コガネ、行くぞ」

「おい！四色、五百蔵、勝手な行動は許さないぞ！」

このタイミングで担任かよ、コイツをぶん殴つて出でていきたいところだけど、そんな暇は無いか

「じゃあ誰が行くんだよ！？」

「それは…。でもお前らが行くのは危険だ！」

「少なくとも、ここにいる奴らを行かせるよりは安全だと思つけどな」

フリークライミングで山とかは慣れてるし、体力とかも自信がある、そこら辺の教師よりはマシだと自負してる

「分かったか？行くぞコガネ」

周りの制止をふりきつて走つて山の中に入つた、一つ盲点だったのが何処で落ちたか聞き忘れた、俺は最高の馬鹿だな。

とりあえず下に降りながらツバサとコテツを探した、おかしい所とか枝が折れてるような所を重点的に探ししながら、途中で会つた生徒に話を聞いたけどこれといつて有力情報はない

「カイ、ヤバいぞ、日が暮れてきた」

「ホントだ、…………、しょうがないけど一旦戻るぞ、夜の山は危なすぎる」

渋々、帰る事にした、今回はゆっくり慎重に下を見ながら、でも山を出る頃には辺りは真っ暗になつて見付かってもどうにも出来ない状態だった、後はコテツとツバサが先に着いてる事を祈るだけだな。

俺の期待を見事に裏切ってくれた、ツバサどころかコテツすら戻つて来れない、これは本気でヤバい、万が一が…………ってそんなこと考える事も出来ない、今出来るのは祈るだけだ

「コテツとツバサ、帰つて来るかな？」

「チカが祈つてねばな」

「ふざけないで」

「悪い、正直俺もしんどい、信じてるけど……、でもやつぱり」

沈んでもると一人の男子が走つて来た

「おい！誰か来たらしいぞ！」

えつ？もしかしたら、いや絶対だ、コテツとツバサに決まつて、コテツなら絶対にやつてくれるに決まつてる。

案の定コテツだった、背中にはグツタリしたツバサをおぶりながら、足には怪我をしたのかズボンが真っ赤に染まって、ツバサも傷だらけだし真っ黒だ

「コテツ！大丈夫か？」

「大丈夫に見えまつか？わいより先に……、ツバサ、は、んを……」

その場に倒れた、「ガネはコテツを、俺はツバサを担いで部屋に向かつた。

部屋に一人を寝かした、一人とも傷だらけだった、ツバサの方は左腕と左足の擦り傷程度だったけど問題はコテツだ、右足の膝の下から10cmくらいに渡つて枝で切つたような切傷があつた、それに足首は腫れあがつてた、この状態で人一人をおぶつて来たんだから

尋常じやない精神力だな

「う、んん」先にコテツが起きた、起き上がるうどしたけど体が痛むらしく断念した

「無理するな」

「皆はんお揃いかいな。それよりツバサはんは?」

「大丈夫だよ、コテツの怪我に比べたらな」

コテツは笑つてるけど普通なら歩けないくらいの傷だよ、コテツの事見直しちゃつたな

「んー」

ツバサがやつと起きてきた、ツバサの方は起き上がるらしい、擦り傷で済んだんだからラッキーだつたよな

「生きてる、僕生きてる」

「コテツに感謝しな」

ツバサはコテツを見るとボロボロと泣きだして抱きついた、新しい恋つてか

「コテツ!」

「痛! 痛いでんがな、死ぬ死ぬ!」

本気でコテツがもがいてる、それでここまで歩けたのはどこの誰だか、でも好きな人のタメなら何でも出来る、コテツはそれを証明してくれた

「はつ! ゴメン。僕つい嬉しくて」

「まあ気にせんといで」

「ガネとヒノリは呆れてる、チカは顔を真っ赤にして顔をそらしてるけどもつと大胆だつたぞ

「カイつち笑うな!」

俺は大爆笑、一人のお似合いつぱりがツボだつた、でも一件落着だな

「みんな迷惑かけてゴメンね」

ツバサが頭を下げて謝つた、謝る相手を間違えてるけどな

「俺らじやなくてコテツに感謝しろよ」

「ツバサ君を命がけで助けたんだぞ」

「カイには負けるけどな」

「最高のダーリンね」

チカ、さりげなくのろけないでくれよ、ヒノリは案外楽しい事言つてくれるじゃん、後はコガネだけだぞ、気付けよ

「わいらどうやつて帰るんや?」

「どうやつて、つてバスで

「もつ出でるんとちやう?」

時間を見る夜の10時を回つてた、確かにバスはとつくに出てる時間だ、俺らのタメに待つてる訳は無いし、もしかして放置!?

「お前ら、起きたなら行くぞ」

担任が扉を開けて入つて来た、いまいち理解が出来ない、担任がココにいることやいたなら呼ばなかつた事が

「行くつて?」

「帰るんだよ!」

「バスは?」

「俺が送つて行く、もう他の生徒は全員帰つたぞ、お前らをずっと待つてたんだ」

今この担任に物凄く感謝してる自分がいた、でも理解出来ない何で俺らだけ残してくれたんだろ、普通なら無理矢理でも帰されそうな氣もするけど

「何で俺らを残したんだ?つて顔をしたるな」

「はい」つてか今素で敬語を使った、皆も氣づいて驚いてるし、自分が一番ビックリしてるけど

「どうせまた色々理由を付けて残るつもりだつたんだろ、だから俺が他の先生に頼みこんだい」

『ありがとうございます!』

反射的に立ち上がり頭を下げてた、コガネも俺と同じ行動をとつてた、教師に感謝したのは始めてかもしれない

「但し!お前ら帰つたら掃除だからな!そここの女子もだ」

やつぱりか、無条件でこんなことしてくれるとは思つて無かつたか

けど、まあ良いかそれくらいなら。

帰りは小さいバスみたいなワンボックスだった、あいりみたいな車だ、チカと俺は寄り添つていつの間にか寝てた、他は言うまでもないだろ

キャンプの騒動からの休み明けでツバサもコテツもちゃんと登校してきた、コテツは松葉杖をつきながらだけいつも以上に元気だつた、その理由はあの後からコテツとツバサは付き合つ事になつたらしい、当然と言つちゃ当然だな、この噂は俺の耳に届くくらいだからかなりの大事らしい

「コテツとツバサ君の、大変な事になつてるな」

「ああ、コガネも遅れをとるなよ」

「な、何が？」笑つてながしたけどこの一人が一番下積みが長いからな、ある意味一番の問題児だ、チカとツバサもヒノリにかけあつてるらしいけど回答は同じようなものらしい、危機感が足りないんだよな、でもヒノリもコガネ以外と付き合う気が無いからコガネも余裕ぶつこいてるんだろうな、でも仕掛けたらそいつがボボコにされるだらうな、厄介な案件ですなあ。

昼休みはいつも通り6人で屋上にて弁当を食つてる、違うところはコテツとツバサが前より親密な事だ、イチャイチャとまではいかないけど見ててこつちが恥ずかしくなるくらいだ

「コテツ、これ僕が作つたんだぞ」

「じつつう美味しいで」

「ホントに！？」

「ホンマや」

こんな感じで普通のカップルだ、まああんなことされたら誰でも惚れるよな、ツバサも良い彼氏を持ったな

「何や皆はん、箸止まつとるで？」

「あ、ゴメン、コテツとツバサに呆れてて」

一同頷く、俺とチカもここまでしてこなかつたけど、この二人は限度を知らなそうだな、周りにストッパーがないとその内ひかれ

て友達がいなくなるぞ

「ええやないか、付きおうとするんやから」「ひり」

「まあそうだけど」

「オープン過ぎないか?」

「「ガネはんまでそないな事を、ツバサも何か言つてやりい」

「多分みんな僕達にひがんでるんだよ」

『お前ら向こう行つてやれ!』

スゲエ、あまりの事にテレパシーばかりの荒業をやつちまつた、つて  
かヒノリもこの言葉が出てきた事にビックリだよ、まあ誰でも言  
たくなるよ、死語で言つと『バカツブル』ってな、何か最高で最悪  
のペアだな

「チカチカまで、大丈夫だよチカチカ、捨てたりしないから」

「いや捨てて」

「酷い！チカチカ、あの熱い夜は遊びだつたの！？枕元で咳いてく  
れたあの言葉も全部偽りの愛だつたの！？」

ヨダレ垂らしながら言われても妄想としか受け取れないんですけど、  
それに前に教師で同じような事を言つた奴がいたな  
「わい相手まちごうてもうつた気がしてきた」

「いやピッタリだよ」

「それよりカイ！助けて！」

ツバサに襲われてるチカがいた、ツバサがついに妄想の世界から飛  
び出してきた、しかも顔が痴漢の顔だよ、彼氏が出来て拍車がかか  
つた？

「もう終りや」

見かねたコテツがツバサをUFOキャッチャーみたいに軽々と持ち  
上げた、案外怪力なんだな、しかも松葉杖なのに器用な事だ、そし  
て周りからは称賛と賛美の声が  
「コテツ、やきもちやいてる？」

「アホか」

「大丈夫だよ、本番は夜だから」

「なんでやねん！皆はん誤解せんといてな、まだ大人の階段に足すら掛けないで」

分かるよ、ってかコテツがやつとまともな思考を取り戻してくれた、ツバサが暴走してれば必然的にコテツがストップーに回るんだ。コガネの恋はいつ実んだろ、手を伸ばせば掴める所にあるのに取らうとしない、俺にはそれが理解出来ないんだよな。

部活が終わってチカ達は先に帰つたらしく男3人で帰つてた、心なしかコテツが沈んでたけど、そりやそつだよな一緒に帰ろうと思つたら帰つてるんだもん

「コテツ、気にするな」

「そやかてあんまりでんがな、始めてでこれやで」

「そんなこともあるさ、それより今日家に来ない？」

コガネが自分の家に誘うなんて始めてだな、一人暮らしだからいつでも押し掛ける事は出来るけど、チカと帰つてたから機会が無かつたんだよな

「じゃあコガネんち食材ある？」

「無い」

速答ありがとう、まああることを期待してないけどな、なら俺の出番だな、久しぶりに家以外で飯を作るな

「今日は俺が飯作るよ」

「ホンマかいな！？カイはん料理出来るん？」

「そうかコテツはカイの飯食つた事無いんだよな、半端無い美味さだぞ」

「楽しみやなあ」

そうかコテツは知らないんだよな、俺の飯を食べば怪我の一つや二つ治るさ、何てこたあ無い、一人で突つ込むのつて切ないな

「食いたいのある？」

「ラーメン」

「殴るよ」

「わいはパスタやな」

「どんなのがお好みで？」

「俺はカルボナーラ」

「わいもそれで」

本日の夕飯はカルボナーラで。

食材も全部買つてコガネ宅に着いた、普通つていうか割とオシャレなマンションだ、色々気になる事があるけど後でで良いか、でもこのマンション、高校生がバイトして住めるよつた所じゃないしコガネにバイトする余裕も無さそうだし。

部屋の中は綺麗に整理されてた1DK、銀色を基調とした家具がオシャレを際立たせてる、月収30万貰つてます、って言つても疑わないくらいの部屋だつた

「じゃあ作るから待つてて」

「手伝おうか？」

「大丈夫」

料理はライフワークだし特技だから一人の世界に入ることがしばしば、だからいつの間にか一時間経つてたとかは日常茶飯事、カルボナーラなら俺流で20分くらいで出来る、男3人の部活後だから量が普通じやない、軽く5人分くらいあるな、そんなこんなで完成、名付けて『カイ流カルボナーラSP』

「出来たよ」

「待つてました！」

「美味そじやん」

「美味そじやないから、美味いんだよ」

「わいは食にはうるさいで」

「食つてからと言え」

名々食べ始めた、『テツは大きな口を開けて大きな一口で食べた、そしてフリーズ、それを見てコガネが一口

『うまつ！』

「何やこれ！？めちゃめちゃ 美味いやんけ」「美味すぎる」

「当然、どうだコテツ？」

「今までの人生の中で一番や」

やつぱりいつ聞いてもこの一言は興奮するな、料理人にでもなつちやおうかな

「何でこない料理が上手いん？」

「それは…」

俺は色々経緯を話した、別に隠す気は無いし聞かれたら答えるつもりだつたし、でも何かテンション下がつたな

「別に気にしなくても良いよ」

「そやけど」

「……似てる」

「ガネがボ~っとしながら言つた、過去の事かな？」

「俺も親に捨てられたも同然なんだよな」

「どういうこと？」

「俺の親父は代議士なんだよね。中二からこんな服装なんだよな、当然趣味だからな、そこら辺の不良とかと一緒にするな。でも親父は気に入らないらしくて中二からは家を追い出されて一人暮らし、最初はコンビニ弁当だつたけどヒノリとかが作りに来てくれたし、簡単な料理なら覚えた。今は親には関わらない契約で仕送をしてもらつて生活してる」

辛いんだな、中三つていつたらまだガキだしヒノリも毎日来れる訳じゃない、俺何かはまだ楽な方なのかな、で、中盤辺りから泣き始めたコテツ、飯を食いながら泣いてるよ

「辛い思いしたんやなあ」

「いや、俺的には俺の人生より今のコテツの方が同情を誘つよ」  
大いに同意、まあ「ガネは自分を確り持つてたからこれまでやつてこれたんだろうな、一人暮らしなんて簡単に出来るもんじゃないも

んな

「それでヒノリに惚れたと」

「ゴホツ、ゲホツ、ゴホツ」

カルボナーラを喉に詰まらしたらしく、色白な顔を真っ赤にしてる、照れか苦しみか分からぬけど、でも恐らくは図星だろ

「そやなあ、弱い時に優しくされると誰でもなびくさこ」

「ち、違うから」

「じゃあその前から?」

コガネの顔がどんどん赤くなつてく、本題にこいつのはダメらしいな、でもコガネをイジつて楽しんでる俺らも俺らだけだ

『さあ、どうち?』

「ゴテツ」

「わいの勝ちや!カルボナーラちょっと貰うで」

「おい!」

負けたあ、つてかそれがメインじゃないんだよな、本題に移らないとこのまま流れる可能性大だよ

「それで、初恋?」

顔が溶け出すくらいの赤さで頷いた、世のコガネファンにこの顔を見せたら大変な事になるだろうな、多分ファン3割増とみた  
「ヒノリはんの母性本能言づやつちやな」

「よく手を出さなかつたな」

「当たり前だ!つてか出せるよつな……」

「勇気はないと、でも一緒にいて欲しいくらいは言えるだろ」

男には敵無しだけど、ヒノリとなると小動物みたいに小さくなるな、いつもみたいに堂々としてないスクールをも見当たらない  
「ちょっと……」

「無理やないやん、それに誰かに盗られてまうかもしけれへんのやで

?」

「怖いんだ」

やつとコガネが本心を語始めたよ、ただのチキンなら色々矛盾が生

じるし話すのもままならないだろ、でも半分頼りにしてるって事は他の何かがある

「今の関係でも心地いいんだ、だから自分の気持ちが通じなかつた時が怖い、壊れるくらいなら今まで良い、そう思つちまつんだよ」

「そつかあ、それなら無理に背中を押すのはプラスにはならないな」

「そやかで一步やぞ、あと一步で答えが出るといひまで来とるのこ、何で手を伸ばせへんのや?」

「コテツにやつと手に入れた安息が分かるのかよ?」

コガネの目が変わつた、今までの逃げるような目、じやなくて悔しさや憤りの目だ

「親には見捨てられて、世間には白い目で見られて、やつと手に入れた安息を壊したくない、その思いがコテツには分かるか?」

コテツも俺も言葉が出なかつた、多分コガネはハーフとかピアスとか服装で色々言われてきたんだと思つ、でもヒノリだけが認めてくれた、だから好きだけどその事を言つたら唯一無二まで失つかもしれない、そんな辛い思いと戦つてたんだろうな

「分かつた、わいもその恋応援するで、わいらは親友兼先輩や、何でも聞きい

「先輩?」

「恋のや」

「俺らが何でも相談にのつてやる、だから親友も頼れ、な?」

笑つて全員の拳を合わした、いつ実か分からぬ恋を応援する、苦悩を別けあう覚悟と、友情を分かち合つ覚悟、一つの思いを胸に秘めて

コガネの家を出てからは意外にコガネの家から近いところことが判明したコテツ宅にコテツを送つてから帰つた。

玄関に入ると靴からみてツバサとヒノリがいる事が分かつた、つてか何時までいるつもりなんだろ、もう9時を回つてゐぞ、それにキヤイキヤイ騒ぐ声が、入り辛いけどじょうがない

「ただいま！」

そういうとすぐにチカの返事が帰つて來た

「お帰り」

リビングか、つてか会話が完璧に無くなつた、何でだろ。リビングに行くとフリーズしたツバサとヒノリがいた、そんで理解が出来ない俺とチカがいた

「何でカイ君が？」

「ここつてチカチカの家だよね？」

「うん」

もしかして、俺の説明不足つていうか、想定の範囲外というか、とりあえず今考へてる事は十中八九当たつてゐるだろうな

「カイつちは何で？」

「俺んちもココだから」

『ええええ！』

やつぱり、説明をしてなかつたらしい、俺もチカも言つたと思つてたからこつちもビックリしてゐるし

「もしかして、チカチカとカイつちは同棲してゐるのー？」

「近からずとも遠からずかな、正確には俺とチカとコキとマミ姉でくらしてゐ、かな」

ヒノリの鋭い目が真ん丸になつてゐ、尋常な生活ぢやないのは分かるけどそれっぽい事を言つたような気がするんだよな

「チカチカ！ 何もされてないー！」

「されてないよ」

「それにする暇も無いから」

「不純」

「だから何もしてないって！」

ツバサとヒノリの間で色々な妄想が飛び交つてゐるらしいけど、ユキとマミ姉がいたらそんな事出来ないし、する気は……、無いって事で

「じゃあヒノノ二人の時間を邪魔しちゃ悪いね」

「うん、嘗みの邪魔はいくら友達でも出来ないからね」

「じゃあ、また明日！」

逃げるようにツバサとヒノリが帰つて行つた、何か物凄い勘違いしてる気がするんだよな

「する？」

「しねえしユキとマミ姉が帰つて来るぞー！」

「冗談だよ

目がそれっぽかつたから「冗談っぽく聞こえないし、しかもチカにそんなこと言われてドキドキしてるし。

部屋で着替えて雑誌を読んだり音楽を聴いたりして暇を潰してた時だった、いつものように窓を叩く奴が一人、犯人は分かつてゐ、チカだ、部屋が隣だからたまに屋根をつたつて来る事がよくある。窓を開けて俺も外に出た

「今日は星綺麗だな」

「ホントだ。つてか今日コテツが悲しんでたよ」

「何で？」

チカは本気で分かつて無いらしい、無知つて罪だね

「ツバサを連れてっちゃつたじゃん」

「ああ！盲点だ」

「まあ良いけどね、男同士の話つてのも楽しかつたから」

チカは笑つて空を見た、この屋根にいるときが俺は好きだ、夜風が気持ち良いし街の灯りが綺麗だから今見てるもの全部手に入れた錯覚

に陥る、その錯覚が気持良い

「コガネはヒノリの事好きなんでしょう？」

「そうだよ、ヒノリもだろ？ヒノリは告白する気は無いの？」

「今一つ勇気が出ないんだって、好きだけど言つたら幸せが逃げそうで怖いんだって」

「コガネも全く同じだよ、無理に俺らが引っ付けても本意じゃないだろうな」

俺らが無理矢理機会を作つたりコクらせる事は簡単だけどそれは望まないだろうな、二人はスロー・ペースな恋がお好みと

「ヒノリは待つてのに」

「でもコガネが一人暮らしなのは知つてゐるだろ、その時に助けてくれたのがヒノリなんだって、だから現状を壊したくないらしいよ」

「ならヒノリの好き好きアピールしかないな」

「好き好きアピール？」

「そんな気を見せればコガネも決心がつくんじゃない」

そうだよな、不安ならその不安要素を取り除く何かがあればどうにかなる、コガネの場合はヒノリの確かに気持ちが、ヒノリはそんなに表に出すタイプじゃないから難しいんだよな

「明日ヒノリに相談してみるよ」

「頼んだ、俺もコガネをどうにかしてみるから」

そういうて部屋に戻るうとした時に後ろ手を掴まれた、まだ何があるのかな、それとも俺がいないと寝れないとか？多分後者の可能性は少ないだろうけど

「何？」

「おやすみのキスは？」

あまりの事にむせかえつた、チカから始めて聞く言葉だったから、それにおやすみのキスなんて一回もしたことが無いし、同居マジックか？

「何、恒例っぽく言つてるの？」

「出来ないの」

チカから顔を背けて、チカが手を掴む力を強くしたのを確認したら、振り返つて素早くキスをした、俺つて策士だな、顔を離すとチカは顔を真っ赤にしてうつ向いてる、これが本来のチカだよ

「おやすみ」

「……おやすみ」

チカを屋根に残して部屋に戻つた、すぐにチカが部屋に戻つたのを確認して、明日に備えた。

翌日、昼休みいつものように弁当を食べるとツバサがあの話を蒸し返してきた

「コテツ、コガネん、カイっちとチカチカが同棲してるの知つてた？」

「俺は知つてたよ」

「ホンマかいな！？わいは知らんかったで、隠すなんてきたないで」「別に隠した訳じやないし、知つてると思つたんだよ」

そつか、コガネには言つてたから皆に言つた気になつてたのか、でもコガネは何でヒノリとこの話をしなかつたんだろ、他人を話の種にするのは嫌いなのかな

「ヒノは知らなかつたの？」

無言で頷く

「知つてると思つてた」

コテツが静かに寄つて来て周りに聞こえないように耳打ちをしてきた、何となく予想つくけど

「やつたんか？」

ビンゴ、高校生だから気になるのは分かるけど、それを出来る状態にする親はいないだろ

「ツバサも同じ事聞いてきた」

「で、どうなんや？」

「残念ながら、期待通りの応えは出来ないようだ」

「何や、おもろいのない」

やつぱり同居つていうとみんなそつちの方に考えるのかな、でもユキとマミ姉がいるから出来ないもんな、お互いがお互いを監視させるのが目的だろうな

「おやすみのキスくらいはしてるだろ?」

コガネの問いにチカが弁当を詰まらした、無言で応えてくれてアリがとう、コガネでも分かつたらしい

「流石カイ」

「一回だけだよ」

「僕にはキスしてくれないのに、カイつちにはおやすみのチューまで」

落ち込むところか? だんだんツバサが本気か冗談かが分からなくなつてきた、それに彼氏がいる前で言わないだろ

「チカちゃんも氣を付ける、カイは危ないぞ」

「危なくねえよ」

「大丈夫、そこまで弱い女じやないから」

「チカも普通に返すな」

その後、男子だけになつて

「終わつたら報告しろ」

だつてよ、青春ボーアイズが、報告するわけないだろ、こつちにも黙秘權があるんだよ

## 赤にストーカー

夏休みを間近に控えて期末テストが終わった今日この頃、部活も始まつて色々活気づいてきた。

最近はヒノリと「ガネを一人にする計画」というか俺達が一人きりになりたいっていうか、とりあえず3組になることが多い。

今日の部活帰りもいつものようにチカと一人で帰つてた、何か最近心なしかチカの元気がない

「チカ、どうした?」

「何が?」

「最近元気無いじゃん、ため息ばかりだし」

チカはしまつたつて感じの顔をした、何か不満でもあるのかな

「実は……」

「実は?」

「やっぱダメ! カイには言えない」

「何でだよ? 僕に言えないような事でもしたのかよ?」

チカが無言で首を横に振つた、最近大人っぽくていうか成長してきたから見なかつたけど、チカが不安そうな顔をしてる、こんな顔を見るのは久しぶりだ、高校に入つてからは見なかつた自分で何かを溜め込んだ顔だ

「……ストーカーがいるみたい」

「はあ?」

「ここ一週間、ストーカーにつけられてるような気がするんだよ」

「何で?」

チカは息を整えて決心したのか話だした

「最近下駄箱に変な手紙が入つてたり、夜に窓に石を投げられたり、一人でいるときとかは誰かの気配を感じるんだよね」

「今は?」

「無い、でも一人でコンビニとか行くと視線を感じる」

「手紙はある？」

チカは鞄の中から一枚の紙を出した、今は冷静を装つてゐるけど、実はかなりムカつてゐる、そんなふざけたような奴は全身全靈をかけて殴りたい気分だ、んで手紙の内容は

『チカちゃんへ

僕の大好きなチカちゃん、いつもいつも見てるよ』

気付いたら紙をクシャクシャにしてた、絶対に殴る、何だこの気持悪くてウザイ手紙は、でも一番辛いのはチカだろうな

『明日から一人になるな、このクズは俺が焙りだす』

『ありがとう』

多分俺がいればコイツは寄つて来ないだろ、それを逆手にとるしか方法は無い、でもチカを危険にさらす事になる、一晩考えるか。

翌日、いつもものように一緒に登校した、下駄箱に着いて靴を履き替える時にチカの顔色が変わつた、多分また手紙があつたんだろ、考えるだけでイライラする

『また手紙か？』

『それだけじゃない……』

そういうて手渡した物は、手紙が一枚、それに写真が一枚、チカが学校にいるときの写真だ、やつぱりこの学校の誰かか、手紙の内容は

『チカちゃんへ

僕が見てるのを分かつてくれた？

君は僕の物、誰にも渡さないよ』

殺意が湧いた、日本に法律が無かつたら殴り殺してるかもしね、法律があつてもいざとなつたら理性が飛ぶかも、それくらい許せなかつた。

チカには今日、一人で帰つてもらう事にした、ストーカーがついて来ればこいつのもの、馬鹿みたいにチカを一人で帰すけど俺が後を

つける、チカには辛いだろうけど細い路地に入つてもらえれば自然とストーカーが出てくるだろう、そこが勝負だ  
「チカ、少しでもヤバくなつたら俺を呼べ、近くにいるからすぐに行く」

「分かつた」

「視線を感じたらメールを打つふりをしろ、確認できたら俺がメールを送る、そしたら人がいない路地に入れ」

「カイ、大丈夫だよな？」

「俺を信じろ」

チカを抱き寄せて、耳元で話しかけた、俺が今からやるうとしてることは、チカが一方的に危険な事だからだ  
「ゴメンな、チカにばっかり辛い思いをさせて」

「大丈夫だよ」

チカが離れて歩いて行つた、何とか確認出来る位置から怪しまれないうようにチカをつけた、こんな事をしてるのはもどかしいけどじようがない。

10分くらい歩いてチカがメールを打つふりをしたのが確認出来た、俺からはストーカーを確認できなかつたけどメールを送つた

“ゴメンなチカ、確認した”

送信、辛かつたけど今後の事を考えたら我慢するしかない、チカが暗い路地に入つて行つた、その後すぐにつちの高校の制服を来た奴がチカの後をつけて行つた。

俺は走つてチカが入つた路地に行つた、そこには呼び止められた怯えたチカがいた、男は気味が悪い笑を浮かべてた、俺は肩を掴んで後ろの方に投げ倒した

「カイ！」

「何する…」

俺が誰だか分かつたらしい、逃げると思ってたけど立ち上がりつてポケットからバタフライナイフを取り出した、最高のクズだな

「君さえいなくなればチカちゃんは僕の物」

「大丈夫、俺がいなくなる事はまずない、それより自分の心配した方が良いんじゃない？このゲス野郎が！」

ストーカーがナイフを振り回しながら来た、つてか突かれるより危ねえ、チ力を後ろに遠ざけて避けながら殴るチャンスをうががつてた

「ハハハ！大した事無いねえ、死んじやうよ？」

コイツの笑い方も、喋り方も、全てが俺の逆鱗に触れる、今すぐにでも殴りたいけどナイフを避けながらじや

「死ねよ！君は僕にとつて邪魔な存在な……！」

つまづいてよろけたのを見逃さなかつた、ナイフを持つてる右手を

思いつきり殴つた、胸ぐらを掴んで寄せた

「さあて、とりあえず謝つてもらおうか」

「やだね、君なん……」

全体重をかけて殴り飛ばした、白眼をむいて口から泡ふいてる、強

く殴り過ぎたかな、でもこれくらいしないと俺の気が收まらない

「カイ、頬が切れてる」

「えつ？」

触つてみると確かに血がついてた、切られてたんだ、気付いた途端に痛み出した、耐えられるけどうつとうしいな

「チカ、帰ろう。コイツはもう良いだろ？」

「うん、でも一つ……」

チカはストーカー野郎をひっくり返して、背中に落書きをした、いつ起き上がるか分からぬ奴だったけど、俺も面白いから楽しんでた  
『僕はストーカーです』

しかも油性ペンの白、これは消えないぞ、顔にも書いてるし、明日から学校に来れないじゃんこれじや、まあ良いんだけど  
「すつきりした！早く帰つて手当してよ」

「OK」

ストーカー野郎を踏んで帰つた、当分学校には来れないだろうな、あつそりだ、これだけじやまだ甘いよな

「チカ、悪い少し待つてて」

「何で？」

「良いから」

走つて倒れてるストーカーの所に行つた、落書きだけじゃダメだよな、ズボンとパンツを脱がしてチカと俺に繋がるもの全てをドブに流した、下品な俺、どうやって帰るのかな。

戻るとチカが不安そうな顔をしてた

「何してたの？」

「ズボンとパンツ脱がしてきた」

顔を真つ赤にした、聞かなきゃ良かつたのに、まあアイツも不幸だつたな、俺にケンカを売つたのがそもそも間違いだつたんだよ

「どうやって帰るんだろ？」

「バッグは残したから」

笑いながら帰つた、頬を切つてるから周りに見られてたかもしれない、でも完全に一人の世界に入つてたからな。

家に帰つて傷の大きさにビックリした、一生残るなこれは、チカを守つた勲章として自分で妥協した

一学期も終わって夏休みって喜びたいんだけど、運動部は大会があるから夏休みも無いに等しい、まあ負ければ良いんだけど。コテツは怪我が治りきらないらしいから今回は出ないらしい。チカ達は大会だけど弱いから地区大会突破も危ういくらい、だから夏休みはそれなりにあるらしい。

問題は俺らだ、適当なところで負けないと夏休みが無くなる、部員達もズバ抜けてヤル気のある奴はいないかなりのグダクダ部だ、だから都大会には行かないらしい

「コガネはどう思つ?」

「大会の事? 楽で良いじゃん」

「まあみんなそんなもんか」

ちなみに真面目な奴の言い訳は、女の子が沢山来て他の学校に迷惑になるかららしい、それも一理あるな、この学校の女の子のエネルギーは他校に迷惑をかける。

学校帰り、いつものようにチカと一緒に帰つてた、夏休みの計画をたてながら

「チカも明日から大会だろ?」

「うん、初戦から優勝候補、だから夏休みは楽できるんだ」

部活に全てをかける奴には可哀想だな、でも諦めがついて良いよな、俺達もそんなだつたら良いのに

「カイ達は?」

「本気を出せば県大会入賞出来るけど、サッカー部つて彼女持ちが多いし、ヤル気無いから2回戦敗退で決定した」

「どんなどよ、まあサッカー部は一番ヤル気無いもんね」

そう、練習もひたすらゲーム、しかも流して、みんなテクニックは

あるけどヤル氣を出さないから弱い、俺にとっては最高の部活なん  
だけど

「なら夏休み家でバイトしない？」

「良いよ」

「今日はツバサとヒノリも誘つといったから」

「ホントに？ 楽しくなりそうだな。しかもそのメンツなら「ガネと  
コテツも来るだろうな、一応誘つとくよ」

「浴衣持参でね」

夏祭りか、浴衣買わないと、流石にユキのお下がりは無しだな、  
チカと買いに行くか。

サッカー部地区大会第一回戦、3-0で負けてる、ロスタイル残り  
2分、敗退決定のこの流れのなかで普通の青春蹴球児なら落ち込む  
ところだが、うちは違う、みんな満面の笑でグダクダな試合を展開し  
てる。

終了すると優勝したんじゃないから盛り上がりかた、3年の  
人は引退なのに異様にテンションが高い

「よつしゃー！ 終わった！ みんなで打ち上げに行こう！ 焼き肉だ焼  
き肉」

撤収速度も尋常じゃない、みんな走つて行つたけど俺とコガネは近  
くの体育館に行つた、チカ達とそこで待ち合わせをしてるからだ。

体育館の客席には「コテツがいた、怪我で大会を辞退したとは思えな  
い勢いで応援してる、周りにいる観客がドン引きするくらい

「カイはんにコガネはんやないか、もうそろそろ終わるで」

バレー部の試合は遅めにあるからなんとか最終セツトは見れた、ス  
コアボードを見るとわりと接戦だった（負けてるけど）

「皆はん大活躍やで、得点は相手のミス以外は全部3人が入れたん  
やで」

「へえ、やるじゅん

「そちらはなんどうやつた?」

『惨敗!』

▽サインで誇らしげにハモるとコテツが腹を抱えてころげながら笑つてゐる、コテツの周りを気にしない行動の数々には脱帽だよ

「なら夏休みは遊べる言つことやな?」

「そのことだけども、チカの家の民宿でバイトしない?」

「楽しそうじゅん、俺行く」

「わいもわいも!」

「で、夏祭りがあるから浴衣なり甚平なり持参ね。お祭りは格好からでしょ」

コガネが何かを思い立つたかのように口を開いた、つてか試合そつちのけだな

「ヒノんちで浴衣作つて貰えるかもよ

「ホントに?」

「ああ、何回か作つて貰つた事あるから、ヒノんち着物屋で割と安くしてもらつた」

「ほな決定やな、これからみんなで行くで」そんな事を話してゐ間に試合が終わつたらしい、負けたけど異様にテンションの高い3人、つてかみんな試合やつた後なのに元気だよな。

解散して客席で待つてゐる俺達の所に來た、ツバサは走つてコテツに飛び付いた、コガネはタオルをヒノリに手渡した、俺はスポーツドリンクをチカに渡した

「ありがとう」

「あ、間接キス」

「ブツ!」

女の子らしさぬ勢いで吹き出した、ケラケラ笑つてると強烈なボディが入つてTKO

「最低」

「……冗談だよ」

「ほな行こか」

コテツが行こうとしたけどチカ達には理解出来てないらしい、そりやそりだよ、俺らの中で話した事なんだから。

コガネが説明してやつと理解したらしい、流石にテレパシーがついてないから分からないよコテツ

「そうなのヒノノ！？」

ヒノリが無言で頷く

「じゃあヒノリの家に行こう。」

ヒノリの家は表は着物屋、裏は家、全体的に純和風で落ち着きがある、庭は日本庭園だなこれは。

俺達は裏から入って、居間に通された、家の中には高そうな壺やら掛軸やらいろいろあつた

「ちょっと待つて、見習い呼んでくるから」

見習い？別に文句は言わないけどあえて言つことか、言わなきゃ良いことだろ

「コガネ、見習いって？」

「多分兄貴の事だろ、男はどんどん継いでるらしいから」

そういう事か、でも見習いだろ、言つちや悪いけど作れるのかな、見習いだろ

「カイ、見習いだからって甘くみるな、この家は店主以外は全員見習い扱い、兄貴は他に行けば店主レベルだつて言つてたぞ」  
「なんだ、安く作ってくれるらしいから文句は言えないし、着れれば良いんだよ。

暫く待つてるとヒノリと着物を着た男の人来た、ボサボサで眠そな顔をしててなんだか頼りないな

「ヒノリ、この人達？」

無言で頷く、ヒノリのお兄さんはメジャーを持ってきて、順番に計り始めた、あつという間に終わつた、ビックリするくらいに早く、紙に全部書いて営業っぽく進めた

「じゃあ甚平タイプが良い人、手あげて」

口テツと口ガネが手をあげた、俺は浴衣派なもので、おもむろにバサが立ち上がってお兄さんに耳打ちした

「出来ます?」

「楽しそうだね、喜んでやらしてもらつよ」

何んて言つたのかは何回聞いても教えてくれなかつた、その後生地を選んで終わつた、妹の友達だから一週間くらいで作ってくれるらしい、完全オーダーメイドだから楽しみ倍増つてか。

チカはどんな物にしたんだろ、みんなお楽しみになつてるからな

今は船の中、どうもこの船つていう乗り物には何回乗つても慣れないと、酔わないように寝たいんだけど周りがそれを許さない、目を瞑るとチカが起こしてくるし、コテツとツバサは他の客の迷惑を考えず、騒いでる、コガネは爆睡、流石職人芸つて感じだよ、ヒノリは本を読んでるけど酔わないのかな

「あとどれくらいで着きはる?」

「20分くらいじゃない」

「ほなツバサ、デッキに行こや」

「行く行く!」

ガキ二人の暴走を誰か止めてくれ、こっちが疲れる、チカが落ち着いて見えるのはコイツらお陰か

「カイ、アタシ達も行こう、いつも寝てばっかりだから起きてる時くらいは楽しもつよ!」

前言撤回、やっぱり疲れるな、席を立つて前の席にいるヒノリとコガネの横をつづてにやけた、爆睡してるコガネがヒノリの肩を借りて寝てた、ヒノリは本を読んでると思ったらヒノリも寝てるし。

デッキに上がると潮風が気持ち良かつた、人もそんなにいないし、今度はココで寝よ

「気持良い!」

「まだ島は見えないな」

「みんないるかな?」

「サエ以外はいるだろ」

チカが不思議そうな顔をしてた、チカの知能を過大評価しすぎてたな、説明が必要だな

「ミッキーはコノミちゃん、ユメちゃんはゲン、ダイチはフウちゃんに会いに戻つてるだろ」

「そういえばダイチはどうなったの？」

「そういえば、自分達の事でいっぱいぱいで全く気にして無かつた、それも聞かないとな、ダイチがいなくともフウちゃんがいるだろうし

「着いたら聞くか」

「そうだな」

島も見えてきたし戻るか、里帰りつて事になるんだよな、みんな変わつて無いと思うけど楽しみだな。

上陸すると「テツとツバサは一田散に走りだした、ホントに子供だな、コガネはヒノリに起こされながらだからフラフラだ、にしても久しぶりでも変わつて無いな、当たり前の事だけど

「やっぱり気持良いな」

「そうだな、東京の空気は汚いし、潮風が懐かしい」

島の自然は何も変わつて無かつた、変わつていくのは人だけか、じやあ俺とチカは自然だな

「じゃあ俺は一旦帰るから、荷物置いたらすぐに行くよ」

「分かった」

俺はみんなとは違う方向に歩いて行つた、みんなは民宿に泊まるからチカと一緒に、俺は自分の家に。

変わらない自然を楽しみながら歩いてると懐かしい二人が、この二人も4ヶ月じゃ変わる事もなく相変わらず子供だ

「よつ、ユメちゃん、ゲン」

「カイ、おかえり」

気のせいか事実か分からぬけど、ユメちゃんが大人っぽくなつたような気がする、東京パワーか？

「チカは？」

「いるよ、でも今は高校の友達付き」

「何時までいるの？」

「高校の友達は一週間ちょっと、俺らは夏休みが終わるまでいるから安心しろ」

「何を?」

「さあね。じゃあ俺待たせてるから、また今度な」  
小さく手を振るコメちゃんと、全身を使って手を振るゲンを背中に家に向かつた。

家も相変わらずだつた、先にユキが帰つてるハズだけビボードが無いつて事は今は海か。

おとおとおかあも相変わらず、変わらないものがあるつて幸せなかもしぬない、俺は荷物を置いて家を出た。

チカの家の外にはみんながいた、これから島案内を要求されたから渋々案内することになつてている。

みんなが使う海を案内して、お祭りをやる神社、その他もろもろを案内して自由行動、迷わない程度に案内したから大丈夫だろ。

俺とチカはとりあえず中学校に行つた、何をするでもなくとりあえず暇つぶし

「そういえばさつきコメちゃんに会つたよ」

「どうだつた? やつぱり子供のまま?」

「うん、でもビことなく大人っぽかつた、ゲンは相変わらずだつたけどな」

笑いながら歩いてるとまた見慣れた顔が、中学校にふさわしい人物だ、この人の事でどれだけ俺らが悩ませた事か

「カイ君! チカちゃん!」

「フウちゃん、久しぶり」

前よりパワーアップしたフウちゃんだ、見る度に先生らしさが失われていく気がしてならない、ダイチの事を聞きたいけどフウちゃんに聞くの微妙だからやめとこ

「フウちゃん、ダイチとはどうなつた?」

聞きやがつたよ、折角俺が遠慮したのに、人の気持ちをつゆしらず、

平氣でしかも何の躊躇いもなく、それにフウちゃんが顔を真っ赤にしてるのを見ると、もしかして……

「やっぱり歳が離れ過ぎてるよね？」

「付き合ってるのー？」

「……一応ね」

心中でダイチを警めてる俺がいた、つてかニヤリが止まらない、ヤベホ、何で他人の事なのにこんなに嬉しいんだろう

「もしかしてこれから会うの？」

「うん」

「こんな事聞くのも変かもしねんだけど、何でOKしたの？」

「男の人あんなに熱心になられた事が無かつたから、何だか嬉しくて嬉しくて」

フウちゃんもまだ乙女か、夢つて叶うもんなんだな、フウちゃんは走り去つていった、俺とチカは笑いつぱなしだった

「良かつたな、ダイチ」

「カイは愛に年齢は関係ないと思つ？」

「大なり小なりあるんじやない、価値観の違いとかジエネレーションギャップとか。これを言つたら元もこも無いけど、好きなら良いんじやないの」

「そうだね」

人の心は不思議なもの、簡単に搖らぐし簡単に移り変わる、でも搖るぎないものもあつても良いんじやないの、俺はそう思った。

変わらない自然、変わらない街、でも確かに変わっていく人の心、でも変わらないのも人の心、俺とチカはどうちだろ

2日間、いつもこの時期は民宿の客入りがピークになる、だから俺らはお手伝いだ、今回はコキとマミ姉は参加しない、ってか島に来いない、二人は行つたり来たりしてるのである。

今回は厨房に俺とヒノリで他は接客だ、今回はサーファー客が多くて前に比べれば百倍楽だ、ヒノリは初めてだからこいつぱいだけど

「大丈夫ヒノリ？」

無言で頷く、俺にはギリギリにしか見えないんだけど。

忙しくてあつという間に終わつた、夢中だつたからか忙しかつたかは分からぬけど、終わつたらドッと疲れた、俺らは一足早く終わつたから外で休んでた、夏とはいえ外は涼しくて潮風が気持ち良い

「ヒノリ、飲む？」

「ありがとう」

買つて来たジュースをヒノリに渡して隣に座つた、厨房は異常に熱いから汗を思つたよりかいてるし、体力の消耗が激しいんですけど、ヒノリは女の子なのに良く頑張つたと思う

「きつかった？」

「うん、思ったよりも熱かつたし、鍋も重いし、忙しいし、あと…」

「ゴメン、何時まで続く？」

「かなり」

あまりの愚痴の多さに途中で止めてしまつた、自分でふつときながら後悔してゐる、まあ去年の俺も同じような事を言つてたと思うけど

「ヒノリは『ガネの事好きなんだろ？』

「ブツ…」

ジュースを吹き出した、奇襲作戦だつたけどここまで良い反応をしてくれるとほ、しかもみるみるうちに顔が真つ赤になつていつたし、

無言で肯定してゐるようなもんじやん

「好きなんだ」

「でも、コガネはどうづか」

肯定はしないけど否定もしない、ほとんど肯定だけどね、にしてもホントに「コガネと同じような反応してくれるな

「コガネはあんななりだけビシャイなのは分かつてゐるだろ、だから自分から動かないと何も変わらないぞ」

「でも、どうやれば?」

「思つがままに、口に出さない程度に好きつて事を伝える、そうすれば何か変わるんぢやない」

ヒノリは考えこんぢやつた、俺は東京とは違つ、押し潰されそうな星空を見上げてた。

ボ～つとしてると後ろからチカとコガネが来た、接客も一通り終わつたらしくクタクタな感じで帰つてきた、疲れてるのはコガネだけだけどな、チカは慣れてるらしくピンピンしてる

「お疲れ」

「カイ、キツ過ぎだぞこれ」

「ヒノリよりはまだる、女の子なのに物凄い頑張つてたぞ、それにチカがピンピンしてるから情けなく見えるだけだし」

「つるせえ、チカちゃんは鉄人なんだよ」

チカは少し止まつたあとコガネを蹴つた、チカのコンピューターは処理速度が遅いな、ヒノリはこのじたばたコントについていくエネルギーは残つてないらしい

「そりいえばコテツとツバサは?」

「走つてどつか行つた」

エネルギー有り余つてゐるな、コガネですりこじまでなるのにまだそんな余裕があるなんて、愛というか馬鹿というか、とりあえず出どころの分からぬエネルギーだな、でもまあ俺もこの状況を生かさない手は無い

「チカ、俺らも走つて行かない?」

「行く！」

実際歩いてるだけでも辛いけど馬鹿を演じるタメに走つてその場を離れた、「ガネとヒノリのタメに俺らがどれだけ疲れた事か、勝手にやつてるだけだけど。

夕日の入り江に行つた、夜にココに来ることが無かつたから新鮮で気持良い、静かだけど波の音が周りに反響してステレオに聞こえる、空を見上げれば満月だしそのまま海に視線を下ろすと月光の道が出来て、更に天の川、泣きそなぐらい最高の場所だな

「……ヤベエ」

「綺麗……」

唚然、それ以外のなにものでもない、これを一人占めしてるとなると何だか申し訳ないな、でも誰にも教えないけど

「天の川か、初めて見たな」

「織り姫と彦星はいるかな？」

この状況でその馬鹿つぶりを晒すか、まずは7月7日について勉強してからだな

「7月7日にしか会えないからいないだろ」

「えつ！ そうなの！？」

頼むからマジで驚かないでくれよ、チカを過大評価しすぎたな、でもこれ以上馬鹿に出来ないな、俺も詳しくは知らないんだよな「可哀想だな、一年に一度なんて、アタシなら途中で死んでるよ」

「確かに」

「でも何で会わないんだろう、親の言いつけなら無視すれば良いし、天の川があるなら渡れば良い、もしかして天の川つて激流なのかな？」

夢の無い話を、どうせ神様が何かが出てくるんじゃないの、こういふ話つて神様は悪役だな、信じるだけバカバカしくなつてくるよ「じゃあ俺は橋を架けてチカに会いに行くよ、それでもダメなら川を塞き止める、神様が邪魔するなら俺が神になる、余は何があつて

もチ力を離さないと

「神様に好かれた女か、カツコイイ」

何か違うけどまあ良いか、でも彦星には成りたくないな、だからチ力を織り姫にはさせない、一人よがりになつても……、一人よがりには成らないように頑張ろ。

次の日も同じように終わった、3日後には夏祭りを控えてる、チ力の家の前に座つて空を見てた、みんな疲れてるなりにテンションが高い、約二名は疲れすら感じさせない

「終わった！やつと終わった、皆はんもつと喜ばな

「無理だよ、普通の人間は疲れるところだろ」

「アカンなあ、わいらは高校生やで、高校生言つたらエネルギー有り余る年頃やないか、これくらいでへばつてたら卒業する前に死ぬで」

コテツはどんだけハードな遊びをするつもりなんだろ、少なくとも俺はついていく自信も気合いも勇氣もない、只ひたすらに放置するのみ

「「ガネはんからも何か言うてやりいな」

「頼むから休ませろ、ツバサ君も止めてくれ」

「男の子が情けないなあ」

ダメだ、誰かこの馬鹿二人の暴走を止めてくれ、つてか俺らの側から退けてほしい、余計に疲れる

「しゃあないな、ツバサ、大人しくするか」

「ええ、僕まだ遊び足りないよ」

ツバサにとつてさつきの接客は遊びか。

空を眺めてるとチ力がお盆の上にのせたスイカとかなり大きな袋を持つて来た、俺は見かねてスイカを受け取りに行つた

「言えば手伝つたのに」

「疲れてたから」

「大丈夫だつて」

スイカを持つて行くと最初にコテツとツバサが飛び付いて来た、その後無言でヒノリが一つスイカをとつてコガネに渡した

「ありがとう」

「この亭主関白が」

小さい頃からこうだったのかな、だとしたら笑える、チカの持つてきた袋は多分花火だろう

「それ花火?」

「そうだよ、みんなでやろう」

「ホンマかいな!? 花火なんて久しぶりやな」

ハイエナの如くコテツとツバサが群がつて来た、中身は打ち上げ花火が8割の手持ち花火があとの2割だ、でも尋常じやない量だから6人でも十分過ぎるくらいだ

「コテツ、ツバサ、海行くぞ、ココじゃ狭いだろ」

「ほな行きまつか!」

「コテツ、そつちじやない、こつち」

逆に走り出そうとしたコテツを制止して順路に戻した、いつか迷子になるな、ツバサ共々。

海につくとやつぱり一番最初にコテツとツバサが花火を出し始めた、一つ出す度に感動の言葉を漏らした、疲れないのかな

「火、火は何処や?」

「僕達の愛で火が着くかもよ?」

「そやな……!」

コガネが見かねて二人の頭をグーで殴った、コテツはともかくツバサは女だぞ、まあ俺も我慢の限界が来てたけど

「カイ、チャツカマン貸して」

「はい」

コガネは付属のロウソクに火をつけて砂に差し込んだ、近くにあつた噴射型の花火に火をつけて遠くに置いた、暫くして緑やら赤やら

青やら、色んな色の火花が出てきた、真っ暗な砂浜が一瞬で明るくなつた

「綺麗やな」

「ほんとだあ」

いつの間にかシリアスマードに入ったコテツとツバサがいた、落ち着いて良いや。

恒例といつちや恒例の3ペア、コガネとヒノリは静かな手持ち花火と閃光花火中心に、俺とチカはチカが持ってきた様々な花火をしてる、コテツとツバサは噴射型の花火だけを選んで花火の周りをアフリカの原住民がしそうな踊りをしてる、怖い

「花火つて儂いよな、あつという間に消えて無くなる、可哀想な人生」

「でも記憶に残る、儂くても記憶に残ればいいんじやない、星だって今見てる星は死んだかもしれないんだよ、でも記憶には残る」  
「そつか、世の中には形に残るものと記憶に残るもの二つがあるんだな、形を大事にする人と記憶を大事する人、どちらも大事だけどどっちに頼り過ぎても良くない、人間つて難しいな。

俺はチカを思い出にはしない、絶対に形のままで残したい

やつぱり島に帰つて来たらやらなきゃいけない事があるでしょ、フリーカーライミング？それも有るけどーーの次三の次だね、夕日の入り江？それはついで、やつぱりサーフィンでしょ、夏だし一年近くやつてなかつたし海に入りたいし、とりあえず支度するか、飯も作らないと腹が減つたし、早起きしていろいろ支度してた時だった、久しぶりに聞くこれに免疫が衰えていた

「カイ！海に行くぞ！」

情けないけどビックリして飛び跳ねてる俺がいた、久しづりだからこれが来るのをすっかり忘れてた、にしてもやつぱりチカもサーフインやりたかったんだ、通じあつてるな俺ら……、ちなみに気のせいつてのが分からぬほど馬鹿じやないから、俺はパンを2枚、ジヤムとバターを塗つて出た、炭水化物に糖分と脂肪、美味くて簡単で朝の心強い味方だな

「ほはひょ（おはよ）」

「行くぞ！」

チカがボードを持つて走つて行つた、俺もボードを持つて走つて後を追つた、パンを口に頬張りながら。

海は良い波がきてて水温も高め、天気も良好、久しづりだけど勘は二つってないはず、それにチカと一人きりでサーフィンって、どんだけ体育会系カッフルなんだよ、しかもすでにチカが準備体操してるし、あの事件いらいちゃんと準備体操をするようになつた、俺も軽くストレッチしてから入つた、やつぱり海は最高に気持ち良いし学校の事とか面倒な事全部洗い流してくれる、70%の力は偉大だな

「気持ちいい！！」

「きやー何いきない？」

「いや、心の雄叫びがつい声にでちやつた」

「ふうん。それより早くサーフィンやろ、この波は今しか来ないんだから」

チカは沖に出ていった、自分で話をふつておきながら難無く強制終了かよ、考へてもめんどくさいから海にでるか、いつものポイントまでつくと波待ちをしたにはしたけどあつという間に良い波が来たから速攻波乗り、この波乗りの感覚は最高の薬物だな、中毒症状に近い感覚になる、東京でもサーフィンが出来たら良いんだけとするためには千葉か湘南まで行かないといけないんだよな、電車代つて高校生には痛すぎる出費なんだよ。

2、3時間くらいかな、ずっと海に入つてたから流石に疲れがきた、とりあえず浜に戻つて休んでた、部活の倍以上楽しいし運動になる、やつぱりサーフィン部を作るべきとこつ下らない論争を心中で繰り広げる

「カイ、サーフィン部作ろ」

俺は大爆笑、ヤベエ腹イテ、呼吸が出来ねえ、死ぬ……、アブねえ、ホントに笑い死にするところだつた、考へてる事が同じ事にも笑えたし口に出した事にも笑えた

「呼吸困難になるまで笑うなよ、何だか恥ずかしくなるだろ」

チカが顔を真つ赤にしてる、俺はチカの後頭部を掴んでこつちに向けて顔を近付けた

「俺も同じ事考へてたから」

チカが含み笑いをした、チカから顔を話して後ろに手をついた

「確かに笑える」

「でもそんなメチャクチャな部活作れる訳ないのは分かってるんだよな、第一海も無いしな」

若干落胆してる、もしかして軽くマジだつたのかな、チカなら否定しきれない

「サーフィン部とか最高の部を何で作らないんだろ?」

「海が近くにないし人口が少ないじゃん、それにそんな発想自体浮かばないだ……！」

「おー一人はんこんな所にいたんかいな！」

林の中からコテツ達が出てきた、つてか「ココ」で軽く秘密の場所なのによく見つけたな

「何しに来たの？」

「冷たいやないか、折角こんな所まで来たんやぞ

「一人だけで海なんて……、サーフィン？」

全員の目線がボードにいく、何でいるか聞いたのに流された、しかも今日は自由って言つたのに律義に全員とは

「とりあえず何で来たの？ 応えたら応えるよ

「チカはんのおかあはんに聞いたら海にいる言われたから、海をしらみつぶしに探してたというわけや

「ふうん、俺らは見ての通りサーフィン」

しかも水着姿の4人、もしかして遊びに来たとか、残念な奴ら、俺らを追つてきたから遊べないじゃん

「ちなみにココ、サーフィン以外出来ないよ、ドン深だから、3mくらい行つたら足が着かない何てもんじやないよ

「ホンマかいな、残念やな

「遊びたいなら道路に出て坂を登つた所に階段があるよ、そこを降りれば遊ぶには最高の海があるよ

「ほな、遊ぶ前にサーフィン鑑賞といきましょか」

「そうだな、カイのダメつぶりを拝ませて貰わない事には遊ぶに遊べないな

「泣いて謝るのが目に浮かぶ、チカ、いつちよかますか！？」

チカと海に出て波待ちをした、ちょっと本気を出そうと最高の波を待つてるとほんの一分ほどで波が来た、今出来る最高のテクニックを使った、これでもユキよりはキレが良いんだぞ、ユキはスピードが尋常じゃないんだけど、波に乗りたり波に逆らったりいろいろ試した、先に俺が浜についた、その後チカがすぐに波乗りを始めた、

チカは体の柔軟性を使つてゐるから流れるように進んでく、やつぱりチカは凄いなあ、チカが帰つて来ると思つてたより周りは静かだつた  
「ハンパねえ」「ホンマかいな」「どうした?」「スゲーよー!」「コガネとコテツが前のめりになつて叫んだ、そこまで興奮することではないと思つうんですけど、でも柄にもなく頑張つたから驚いて貰わないと困るな

「プロ?」

「んなわけないじゃん、趣味だよ、ただの趣味」「チカチカやつぱり凄い、やつぱり僕の女だよ」蛇のようにチカにツバサが絡まつた、恒例だけビコテツ引き離す、ツバサに暴走しててもらえればうるせた半減なんだけどな「ゴンメなチカはん」

「いりコテツ!僕とチカチカの愛を邪魔するな、夜寝てやらないぞ!」

「寝ない!それにツバサの一方的な愛やないか。わいでもだんだんツバサの言つとる事がホンマかウソか分からんなつてきた」「コテツ、変態彼女を持つと苦労するな、つてか普通つて良いことなんだな

「チカ、これからどうする?」

「もう十分サーфинやつたしもうそろそろ引き上げよつと思つてたんだよね」「じゃあコガネとかについていつて遊ぶか

「うん」俺達は近くのこれもまた秘密の海に案内した、波も無いしココでボートに乗つてボ~つとするのが大好きなんだよな。

真つ白な砂浜、水深20センチで天然の水族館、腰の辺りまでつか

れば30センチくらいの魚は普通にいる、しかも水深5、6mでも底まで見える透度、ココなら遊べるだろ

「綺麗やな、ツバサ泳ぐで！」

「凄い凄い！綺麗綺麗！泳ぐ泳ぐ！」

壊れたロボットみたいな反応だな、俺とチカとコガネとヒノリはビーチバレー、何だか分かんないけどココにはネットがあるんだよね、錆びてるけど使いものにはなる、それに紐でコートまで出来てるから手間いらず

「行くぞお」

コガネのアンダーサーブで始まった、フワリとコートに入るだけのサーブが上がった、チカがレシーブして俺がトスを上げる、最後にチカのアタック

「ヒノ、俺に任せ、ゴフツ！」

伝家の宝刀顔面レシーブ、俺は大爆笑だけどヒノリはあたふた、チカは申し訳無さそうな顔をしてる

「コガネ、のびてる暇は無いぞ、ホレ」

俺のアンダーサーブで始まった、ヒノリのレシーブでコガネがトス、ヒノリのアタック

「ガフツ！」

伝家の宝刀顔面レシーブ再来、今度は俺の番かよ、今度はコガネが大爆笑、ってか俺らは大変な事を忘れてた

「コガネ、集合！」

コガネを呼んで隅の方で肩を組んでコガネに報告と意見聴取、これは重大にして最大の盲点だ

「コガネ、俺ら何か物凄く物凄い事忘れてないか？」

「……ああ！」

「恐らくこのゲームが終わる頃には俺らボロ雑巾より悲惨な状況になるかもよ、ツバサがいないだけマシだけど」

「そうだな、だつてアイツら……」

『バレー部三峰将じやん！』

説明が必要だな、俺らがサッカー部の《イケメンツートップ》と呼ばれてるようすにチカ・ヒノリ・ツバサは《三峰将》と呼ばれてる、どれだけ強いかはさつきの分かつてもらえたと思う

「勝つ術は無いのか?」

「待て、あえて俺ら一人で挑むぞ」

「馬鹿だろ」

「コガネ、俺らの土俵に持つてけば良いんだよ、俺の知識によるとバレーは手だけじゃない……」

座談終了、チームを変えて俺とコガネチームとヒノリとチカチーム、男の下らない意地でこのチーム編成になった

「カイ、馬鹿?」

「うるせえ! 男には戦わなきやいけない時が何度がある、今がその時だな」

「コガネ、ゴメンね」

「ヒノ、手加減無しだからな」

むこうのサーブで始まった、チカの力を込めたジャンプサーブ、速いけどこれくらいなら

「コガネ!」

「余裕!」

コガネは足でレシーブ、足ならサッカーの専売特許だしバレーのルールではフェアだ、俺はジャンプしてトス……、するふりしてツー アタック、見事にボールと砂浜の再開、一点先取

「よっしゃ、ナイスコガネ」

「カイも最高だつた」

「無茶苦茶だろ、確かに足は有りだけどあえて足でレシーブするなんておかしいだろ」

「俺らはサッカー部だぞ、これくらいなら朝飯前だよ」

「ノーバンノーバンの要領だからな」

いくら速くても女子のアタックなら見える、見えれば蹴り上げるの

は容易だ、盛り上がりがつてると海から上がる馬鹿一人、コイツらの襲  
来により俺らは更にキツくなる

「何やわいらも混せてや」

「チカチカするこよ、僕もやる、コテンパンにしてやる」

「コテツがこっちに来たせいで自然にツバサがチカチームに行つた、  
二人ならどうにかなつたけど三人はキツイだろ」

「コテツ、お前のせいで勝算が減つた」

「なんでやねん、向こうは……、悪い、相手を性別のみで見とつた」

「コテツも理解したらしい、今からダダをこねるのは性に合わない、  
これで勝つのが真の侍つてもんだる、侍じゃないけどね」

「しょうがない、やるしかねえな」

「コガネ、サッカー部式アンダーサーブを見してやれ」

「おう！」

コガネは普通のアンダーサーブをした、ヒノリがレシーブをしてツ  
バサがトス、チカがジャンプしてたからチカに注意したけどチカは  
スルー、ボールが向かつた先にはヒノリがいた、ヒノリの奇襲アタ  
ックを何とかスライディングでコガネがレシーブ、俺の所に上がつ  
てきたボールをトス……、しないでスルー

「……何てね」

落ちてきたところを足でトス、自分でも驚くような奇跡的トスをコ  
テツが力任せにアタック、でも尋常じゃないスピードが出て再びボ  
ールと砂浜の劇的再開

『よつしゃ！』

「わいらバーーでもやつていけるんとちやう？」

「三峰将敗れたり、つてか」

「やつぱり俺のレシーブのお陰だろ」

ホントに奇跡が起きた、コガネの喧嘩仕込みの反射神経を使つたレ  
シーブに俺の悪知恵仕込みの奇襲トス、それにコテツの空手仕込み  
の馬鹿力のアタック、どれもが即席の滅茶苦茶な技ばかり、もしか  
して俺らって本物の天才？

終わつてみるとやっぱり負け、接戦だつたけど玄人と素人の差、勝てると思つた俺らが馬鹿だつたつて事に気付いた

「勝てねえつて」

「無理やで」

「負けた」

大の字で倒れる情けない男三人、問題はミスだ、力的には負けて無かつたと自負する、でもミスが多くすぎた

「僕ビツクリしちやつた、みんな凄く上手いんだもん、コテツのアタックなんて普通の男バレ並だよ」

「アタシもだよ、何回カイに騙された事が、運動神経が良いのを利

用してあんな手やこんな手を」

「コガネのレシーブも凄かつたよ、しかも9割が足でレシーブだし、後の1割は癖で胸でとつて蹴りあげるというサッカーテクニックを使つて失点、まあ楽しかつたから良いか。

俺らこんな体育会系デートで良いのか？普通高校生で「」まで本気でビーチバレーをする3ペアもないだろ

夏祭り当日、夏休み最高のビッグイベントになるであろうこの日がやつてきた、夏祭り＝浴衣、つてことでヒノリのお兄ちゃんに作つて貰つた浴衣を着てから再度集合になつた、コガネとコテツはうちにて着替えてる、ジンベイなのすぐにつける。

コガネのは灰色の生地で両肩と左足の半分が網になつてゐる。コテツは、紺色の生地に所々に小判がプリントされているもの、コテツらしいつて言つちやコテツらしいな。

俺のは青に水色を少し混ぜた波つぽい感じの生地だ、なんか海つぽくて俗に言つて目惚れ、それに雰囲気を出すためにベカムがやつてたサムライヘアーにしてみた

「どう? ほくない?」

「見事に出来てるな、それでサッカーやればかなりウケるぞ」

「カイはんやから様になるんやな、そこらへんの野郎がやつてもただのキモ男やで」

誉められてるのけなされてるのかよくわからないけど良いか、それに自分で微妙に気に入つてるし、暫くは日常でもこれでいくか。

チカの家の前に行くと既に三人とも揃つてた、にしても三人とも違う感じの雰囲気だな。

チカの浴衣はピンクの生地に向日葵のプリントがされてる、しかも例の如く前髪を下ろして、この時のチカは大人しく見えるんだよな。

ヒノリは黒に猫が所々プリントされてる、しかも若干胸をはだけて色っぽい、コガネは顔を真つ赤にしてうつ向いてる、そしたらいきなりコテツが俺とコガネの間で肩を組んできた

「ヒノリはん胸でこうない?」

「確かに、コガネ、サイズいくつか知つてる?」

「し、知らねえよ！それに知つても教えないから」

ヒノリの胸は平均女子高生のものとは育ちが遙かに違つた、今まで  
気付かなかつたのが不思議なくらいだ、軽く見積もつても口は堅い  
な。

そして最後に問題のツバサだ、一言で言つとコスプレに近い浴衣になつてゐる、黄色い生地に花柄でミニスカートばかりの短い裾、浴衣の概念を脱した。

「カイ、ツバサ君のあれは……」

「コスプレだな」

「ええやないか可愛い。ツバサめっちゃ可愛いで！」

「コテツがツバサのもとに走つて行つた、ヒノリはいつの間にかコガネの腕を抱いてた、でも何故かコガネはコツチを見て口パクで訴えてきた

「む……ね……が？」

胸が当たつてゐて言いたいのか、残念ながら俺にコガネを助ける手段は無いよ、コガネを見捨てていつもよりおとなしいチカの手をとつた

「やつぱり可愛いな」

「ありがとう。カイ、その頭何？」

「サムライヘアー、雰囲氣でてるでしょ」

「カツコイイよ？」

疑問文になつたのはさておき俺らは神社に向かつた、約二名を抜いてはいつもとは違う雰囲氣だった、その二名とは当然コテツとツバサだ、相変わらずの馬鹿ハシャギつぶりは健在どころか過熱する一

方。

神社は人で賑わっていた、大きい神社にも関わらずところせましと人がいる、コテツとツバサは軽快なスタートダッシュで入ごみに消えて行つた、俺とチカはコガネ達を置いてお祭りに参戦した。

去年と変わらない出店の数、去年と変わらないような人の量、お祭

りつて何か特別な雰囲気で好きだ、とりあえず去年屈伏させた金魚すくいに行つた、おじさんは険しい顔をして俺を見る。

「やらせないぞ」

「何でよ？俺は客だぞ」

俺が第一声を発する前に拒否された、まあ当然だけせめて何か言わせろよ、先を越されるのがこれほどムカつくとは

「頼むからやらないでくれ！」

頭の上で手を合わせてる、そこまでして俺に金魚すくいをさせたくないか、多分こんな状況に陥つたのは俺くらいだろう

「でもタダで帰るわけにはねえ……」

「クソ、これ持つてけ」

おじさんが出したのは焼きそばタダ券一枚だつた、恐らく出店して人に配られる物だろ、金魚をもらつより割が良いし焼きそば食いつかつたからありがたく受け取つてその場を去つた。

焼きそばを貰つて食べながら歩いた、去年はあんまり周りを見てなかつたけど案外いろんな出店があるんだな

「焼きそば美味しいな」

「うん。カイつてそこら辺の店には文句言つけど屋台は美味しいの一点点張りだよね、何で？」

「雰囲気かな、料理は雰囲気で味が変わる物だから、いつもこつのは全部美味く感じるものなんだよ」

チカは呆れた感じで焼きそばを食べ続けた。

俺は焼き鳥とお好み焼きを買つて神社の裏に行つた、去年チカが教えてくれたオススメポイントだ、一年じゃ変わるハズもなく記憶のまま残つてた

「カイつきから食べ過ぎじゃない？」

「ほうは（そうか）？」

「うん、ジャガバターにモチポテ、たこ焼きに……、お好み焼きも別に食べてただろ」

「まあね」

「食べ過ぎでしょ、しかもいつも一人分頼んでほとんどカイが食べてる、何でそんなに食べるの?」

「雰囲気かな」

チカは呆れて焼き鳥を頬張つた、でもお祭りは食べ歩きのタメにあるものだろ、高いとか言って何も食わない奴はタダの散歩野郎だ

「この後花火だね」

「そつか、当然見に行くだろ?」

チカが無言で頷く

「「ガネ達も誘つてしんみり……、出来そうないけど、とりあえずユキとマミ姉には悪いけどあの場所に行くか」

「うん!」

波の音を聞きながらのお好み焼きは最高に美味しい、そして隣にはチカ、何かこの世の天国みたいで怖い、幸せ過ぎて不幸になりそう。

食べ終つてまだ時間があつたからそこら辺を見て回つてる時だつた、新鮮で懐かしい一人組がいた、この一人を見ると奇跡を感じなくなつてくるよ

「カイにチカ!久しぶり!」

「ダイチにフウちゃんか。ダイチ、おめでとう!」

「やめられ、照れるだろ」

顔を真つ赤にしながら頭をかいてる、フウちゃんはずっとダイチと腕を組んで寄り添つてる、少しダイチも大人っぽくなつてた

「いつまでいるの?」

「夏休みいっぱいはいるよ、ダイチは?」

「俺も」

久しぶりにみんな集めてみるかな、運が良ければみんな集まるだろ

「そういえばカイ、聞いてよ、物凄い奴らがいたぞ」

この胸騒ぎはなんだ?違つ事は分かつてゐる、でももしかしたらありえないとも言い切れない、そこが怖い

「まずは、なんだかうるさい一人でさ、一人は関西弁でもう一人はミニースカートみたいな派手な浴衣着てんだ」

うわあ、予感的中、完璧にコテツとツバサだよ、あれは目立つよ、黙つてもツバサのせいで目立つよ

「もう一組はハーフっぽい不良と巨乳セクシーな女の子、不良のほうは真っ赤なんだよな、不良のクセにシャイなんだぞ、笑えるよな」  
それはコガネとヒノリだ、あの一人も目立つよな、コガネが金髪なうえにあのピアスの量だから不良に思われてもしょうがないよな、実際不良っぽいけどな

「チカ、どう考へてもアイツらに行き着くんだけど」

「アタシもだよ、否定の余地がないくらい」

「何? どうしたの?」

「俺らの高校の親友」

「ええ!」

オーバーなリアクションで驚くダイチ、そりやそうだよな、あんだけ濃い奴らとつるんでればそりやびっくりするよ、否が応でも目立つもんな

「どう思つ? フウちゃん?」

「私からしたら貴方達も十分厄介だつたよ」

否定出来ないのが悔しい、確かにすき放題やつてたけどフウちゃんも十分教師の域を脱した事をやつてただろ

「じゃあ俺ら行くから」

「頑張れよ!」

「な、何がだよ!?」

顔を真っ赤にして俺達とは反対の方に歩いて行つた、他人から見たら普通の一人だけど俺らから見たらあれほど笑えるものはないんだよな。

待ち合わせしてた鳥居の所に行くとコガネとヒノリがいた、ヒノリはまだコガネの腕を抱いてるけどずっとあれだったのかな

「早いじゃん」

「カイとチカちゃんが遅い」

「そうかジャストだよ、しかもまだコテツとツバサが来てないし」「あの一人が遅いのは予想通りだな、騒いでるから探すのは簡単だけどあれと一緒に見られたくない、そんな事を考えてたら一人が帰ってきた、これは予想外でびっくりした

「一人にしては早いじゃん」

「当たり前やないか、これから花火やろ？遅れたら後が怖いで」

「いや、2分14秒の遅刻だ」

「細かつ！関西じゃ時間は目安やで」

「ココは首都東京だ」

そういうえば「ガネは遅刻だけはしないんだよな、時間には人一倍うるさいし、コガネと待ち合わせしたら五分前行動なんだよな、こんなに時間をうるさく言われたのは小学生以来だよ

「じゃあとつておきの場所に案内するよ」

みんなを連れてユキとマミ姉に教えてもらつた場所に行つた。

森の中にそこだけが開けてて波の音がどこからともなく聞こえてくるこの島独特の場所だ、俺はこの島のこいつ自然が大好きだ、一人で感慨に浸つてると大きな爆音とともに夜空に大きな花が咲いた

「始まつたで！」

「ずいぶん近いな」

「すぐそここの海で打ち上げてるからな」

「ココから見ると空一面に花火が広がつて圧倒される、花火がこんなに大きいなんてみんな知らないだろうな

「大きいな」

「しかも綺麗で手をのばせば掴めそう」

「掴んだら火傷するよ」

チカのせいいで地に落とされた、夢の無いことを平氣で言つよな、それが天然だから可愛いんだよな、これってのろけ？

大きな花火は精一杯美しくなつて、儂く消えた、小さい花火も大きい花火も思い出でしかないのか

## 白、消える

コガネ達が帰つて今は俺とチカだけだ、前に戻つただけなんだけど毎日が静かな感じがする、どこかがいつもと違うけど、どこかがいつもと同じ毎日、今日もサーフィンをするためにボードを取りに行つた、風景は変わらないけど一つの変化が、ユキのボードだけ倒れてた、風が強かつたりするとたまにあることだけど俺は何故か鳥肌が立つた。

この事はあんまり気にもとめないで一日を過ごしてた、サーフィンも終わつて夕日を見ようと思つたけど時間がかなりあつた、それに今日はマミ姉とユキが帰つてくる事もあつたから一回家にボードを置きに行つた。

ボードを置いて着替えようと部屋に向かう途中の居間、おとおとおかあが顔色を変えてテレビを見ていた、気になつたからテレビを見てみた、番組はニュースだった

“……東京湾沖25Kmの所でフェリーと漁船が衝突し、衝撃により1名が海に投げ出され行方不明……”

俺は思考が停止した代わりに恐怖が襲つて来た、テレビに「写つていたフェリーはこの島に向かうものだつた、しかもそれにユキとマミ姉が乗つているハズだ、本数が少ないので十中八九乗つているだろう、そして一人が行方不明、行方不明という文字が頭の中でユキとマミ姉を連れて行こうとしてる

「おとお、おかあ、これユキとマミ姉じゃないよな？悪いけど別の人だよな？」

「分からねえ、だけど儂らに出来るのは悔しいけど祈るだけだ、海の神様が海を愛してる一人を連れて行かない、それを信じるだけだ神様か、そんなものに頼つた事は無かつたけど、悔しいけど今は神様に祈るしか出来ない。

俺は部屋に入つて着替えてチカと夕日を見に行く気になれなくて断ろうとした時だつた、階段を走り上がる音が聞こえて俺の部屋の前で止まるドアが勢いよく開いた、立つてたのは髪の毛を留めるのを忘れたチカだつた、息があがつて顔色が悪かつた、俺も人の事言えないと思うけど

「カイ、ニュース聞いたか?」

「ああ」

「怪我人がいなかつたらしいから別の船で帰つて来るつて…多分あと一時間くらいで着くんだつて、行くだろ?」

「行くよ、一人とも帰つて来ると思うけど」

空元氣で笑つてみせた、今俺がチカに出来る精一杯の慰めだ、当然二人とも帰つて来るつて信じてるけど怖い、吐き気がするくらいにギリギリの状態だ、チカは堪えきれなくなつたのか一気に泣き出した、今まで泣いてないのが不思議なくらいだつけど、やっぱりチカもきつかつたんだ

「カイ、あ、アタシ怖いよ、……だつて、だつて……!」

俺は気付いたらチカを抱き締めてた、いつもより強く、今の俺の弱々しい鼓動が聞こえるくらいに

「俺も怖い、でも信じるしかないだろ、絶対に一人揃つて帰つて来るから」

暫くの間チカは泣き続けた、俺はただそれを見てる事しかできなかつた。

俺らは港にいた、周囲には俺らと同じような人が大勢いた、おとおとおかあとマミ姉の両親は家で報告を待つて、大きい船が見えてきて元気な人は甲板から手を降つてている、でもユキとマミ姉の姿は見えなかつた。

着岸して駆け出して来る人、泣きながら出てくる人、疲れきつて出てくる人、でもその中にユキとマミ姉はいなかつた、最後に船の人々に支えられて出てきたのはマミ姉だつた

「マミ姉！」

「……カイ君、チカちゃん……、ゴメンね……」

そのまま黙ってしまった、マミ姉の状態、そしてこの状況を見て田頭が熱くなってきた、田の前が歪んで見えづら

「マミ姉、ユキは？」

マミ姉は自分でやつと立つている状態だったけどその場に崩れた、俺はその時始めてマミ姉が泣いてるのを見た、そして俺の肩で声を上げて泣き出した、見かねてマミ姉を支えてた人が話かけてきた

「樹々下さんの知り合いですか？」

「家族です、ユキは何処にいるんですか？ 怪我でもして病院行つたんですか？」

「残念ながら海にいます、行方不明の状況です、海上保安庁が全力をあげて捜していますが……」

「おい、俺らに気を使わずに言えよ、ユキが生きて帰つてくる確率はいくつだ？ ハッキリと明確にな

「限りなくゼロに近いです」

自分で聞いておきながら後悔してる、マミ姉だけが降りて来た時に薄々気が付いていたけど、実際に聞くと絶望感に押し潰されそうだ、チカは俺の背中に顔を押しあてて泣いていた。

ユキが行方不明になつて一日が経つた、ほとんど寝れなかつた、おかげは一晩中泣き続けてた、おとおはユキのボードを手入れしてた、二人とも生氣が無かつたのは確かだ。  
俺もきつかったけど涙も出なかつた、慰めにはならないだろうけどマミ姉の家に行つた、一番ユキに依存してたのはマミ姉だったし田の前でユキが落ちたのだから、聞いた話だとマミ姉が落ちそうになつたのをかばつてユキが落ちたらしい、だからマミ姉のショックは俺が感じてるものとは比にならないだろう

「マミ姉はいますか？」

「マリ姉は海に行つてゐるわよ

マリ姉のお母さんは疲れきついていた、多分マリ姉の事でだろ。

俺は考えられる海に行つた、いつもサーフィンをしてる海だ、真っ白な砂浜にマリ姉が膝を抱いて座つていた、そしておもむろに立ち上がつて海に向かつて歩き出した、俺は走つて追つたけど砂浜のせいで走りにくい、マリ姉を捕まえたのは深くなる一歩手前だつた、ジタバタするマリ姉を抱き抱えて浜に戻した、その時に違和感を感じた、その違和感は最悪のものだつた

「マリ姉！ユキは帰つてくる、その時にマリ姉がいなかつたらユキは悲しむだろ、マリ姉が信じなくて誰が信じるんだよ

「おー、マリ姉……？」

「おー、マリ姉……？」

「……」

マリ姉が失つたのはユキだけじゃなかつた、言葉も失つて、口を動かすだけで声は出ない、マリ姉は喉を押さえて悲しい顔をした、いくつ声を出そうと頑張つても出すのは空氣だけだつた

「マジかよ、あつえねえ

「……」

マリ姉は泣く氣力すら無いらしい、髪く笑つて切なく虚ろな目をした、神様つてのはどれだけ最低な存在なんだよ、ユキだけじゃなくてマリ姉の声まで奪つていくなんて。

一週間後、ユキの捜索は打ち切られた、事実上ユキは死んだ事になつた、この世から、ユキ、といつて存在は消えた、悲しいつて感情はとつて無くなつた、今は苦しい、義理の弟といつて慰めを受けるけど、どれもがトゲとなつて突き刺さる、この島に来る前よりも親に捨てられた時よりも生きる価値觀を失つてた、今俺がココにいるのはチカがいるからだ、チカがいなかつたらマリ姉と同じ行動をと

つてただろう、マミ姉はあれから海には行くけど黙つて沖を見つめるだけ。

人一人死んでも世界は変わらないと人は言うけど、みんながみんな世界を持つてる、だから俺の周りには世界が音をたてて崩れていった人達で溢れてる、俺もその内の一人だ。

ユキ、戻つて来てくれよ、もう一回俺達の前で笑つてくれよ、もう一回マミ姉の心からの笑顔を見させてくれよ、もう一回一緒にサーフィンやうひつよ、頼むよユキ。

樹々下雪、享年16歳、若き天才サーファーは愛した海に殺された

ユキが消えてからかなりの時間が過ぎていった、おとおは抜け殻状態で毎日を虚ろに過して、おかあは満面の笑を浮かべた遺影に話しかけてる、俺とチカは海にいるマミ姉の側で海を見る、マミ姉はあれ以来海をずっと無表情で見てる、何も喋れないから波の音だけを一日中聞いて終わる事もある、最初の頃は話すと一応笑つたけど今は無表情のままだ。

今日はこの島にいる最後の日ということでサーフィンをやることにした、楽しむためじやなくてユキの弔いだ、ユキがサーフィンする時に使つてたものを俺が使つてサーフィンをする、この道具達もご主人様を無くして存在価値を無くしたからな、俺が離れる前に使つてやらないと、それに四十九日の前にユキとサーフィンがしたかった。

「マミ姉、最高のサーフィンしてくるからちゃんと見ててよ」

俺はチカとマミ姉を置いてユキとサーフィンに出た、海は多少荒れてるけどこれくらいなら大した事はない、むしろ波が力を持つてから乗りやすい場合もある、暫く波待ちをしてると良さそうな波が来た

「ユキ、行くよ」

俺はパドリングで波を捉えると同時に立ち上がった、その瞬間波じゃない何かに押された、多分ユキだったんだよな、俺はそう信じたかつた、しかもいつもよりサーフィンが出来たし、ユキは海で生きてるよな。

浜に戻るとマミ姉が微笑んでた、その笑顔はユキが死んでからの表面の笑顔じゃなくて心の笑顔だと思つ、そして何故か睡然としたチカがいた

「どうした?」

「今のサーフィン、ユキの癖とか、ユキ特有の上半身の使い方がそ

つくりつていつかユキそのものだった、ユキのサーフィン見てるみたいだつた」  
あの時の不思議な感じはそれだつたのか、サーフィンやつてる時、いつもとは違う感じがした、非科学的だけど俺は何だか気持ち良かつた。

その日の日暮れ時、俺とチカは入り江にいた、この島に来ていろいろありすぎてこれなかつたけど、最後くらいは見ないとな、ちょうど道が出来てきて入り江が朱に染まる

「ユキはこの海で死んじゃつたんだよね？」

「ああ」

「綺麗なのに……」

チカは悲しい顔をしながら笑つた、綺麗な海なんだけど今は悲しくなる、大好きな海なんだけど今は恨めしくなつてくる、ユキが愛した海だけど何でユキを嫌つた

「カイ、泣いてる？」

「ゴメン、情けねえよな、彼女の前で泣いちゃつて……！」

氣付くと今までに味わつた事がない圧迫感が顔にあたつた、それがチカの胸に抱かれてるつて気づいたのは暫くしてからだ、始めての安心感に強く泣いてた、離れてチカを見るとチカも涙を流してた、チカの顔が徐々に近付いてきてチカがキスをしてきた、そのまま次は俺が強く抱き締めた、顔を離すとチカが思いつきり笑つて涙を拭つた

「ユキに見られちゃつたな！」「あつ、そういえばそうだな、まあ俺らも見ちゃつたから帳消しな」

何となくふつされた、雪は海に還つたんだ、雪は海カイの中で生き続けるんだよな、俺はそう信じる事でユキの死を乗り越えた。

今日でこの島ともお別れだ、あつといつ間だつた氣もするけど濃かつた、フェリーに乗り込むと港からマミ姉が手を振つてた、マミ姉は学校を辞めてこの島で過ごすらしい、東京暮らしも寂しくなるな

「今度は俺らが戻つてくるからー待つてよ、コキとマミ姉の分まで歐歌してくるから！」

船が出て甲板で潮風を感じながらチカと話した、人がそんなにいなから周りを気にする必要がない

「やっぱり外はきもちいい！」

「夏の暑い日でも潮風だけは涼しさを運んでくれるからな」

今日はいつもより暑いのに甲板は最高に気持良かつた、冷房なんか比べ物にならないくらいに涼しい、でも俺らが通つてるこの海にユキが眠つてるんだよな、まあいつまでもグダグダ引きずつってでもユキが帰つて来る訳じやないし、コキのタメに前に進まないとな

「何ニタニタしてんだよ？」

「別に普通だよ」

「そつは見えないけどな」

俺は空を眺めてたらいつの間にか瞼が重くなつてきた、そして意識が飛んだ。

“ドスンー”

「～～～～！」

頭の上に何か重い物が落ちた、つてか首の骨が折れると思った、目を開けて見てみると俺のカバンだ、そんで目の前で笑つてるのはチカ、新手の田覓ましか

「おはよー」

「……おはよー」

「ほり早く降りるや、もうアタシ達だけだよ

「嘘ー？マジでー！」

俺は荷物を持って走つた、そして船の端の方に行つて気づいた、まだ海の上だ、港は見えるけど停まつてない、完璧チカに騙された

「チカ、降りたらシャレになんないんだけど」

「へへへ、アタシの経験上カイを着いてから起こしたら遅いって事が分かつてね、先手を打つた訳ですよ」

右手の人指し指を立てて自慢気に解説してるチカに「コピönをしてその場に座つた、なんだか必要以上にエネルギーを使った気分だよ

「イッタ～！何するんだよ！？」

「お返し、人間焦ると必要以上にエネルギーを使うんだよ、そのエネルギー消費量を痛みに加算するとそうなる訳だ」

ムスツとしたチカをいじつてると今度は本当に港に着いた、港にはコガネ達がいた、俺とチカは人がある程度降りてから降りた

「お出迎えありがとう」

「カイ、何だ、その～、『懐傷様』」

俺とチカは顔を向き合つて無言で審議会をひらいた、そして出た答えはユキの事だ、やっぱりみんな知つてるんだ、でも俺も多分チカも大丈夫だな

「もう大丈夫だよ」

「ホンマかいな？家族やろ？」

「ユキはシンミリしたの嫌いだから、島の人とかみんなブルーだから俺らだけでも明るくしてないとユキが可哀想だろ」

「なら良いけど。ミスは？」

コガネのミスつていうのはマミ姉の事だ、コガネは本人の前でもミスつて読んでる、マミ姉は嫌がつてないから良いんだけど

「マミ姉は学校辞めたよ」

みんな驚いてた、俺はマミ姉の事を全部話した、どうせツバサがいれば遅かれ早かれバレると思うし、流石のコテツとツバサでも黙りこんじやつた

「別に気にしなくても良いよ、ショックによるものだからいつかは喋れるようになるらしいから」

「カイはなんでそんなに平氣でいられるんだ？」

「チカのお陰かな？」

チカの頭に手を置いて笑つた、あの時チカの前で泣いてなかつたら正直きつかつたかな、それに周りがあれだけ落ち込んでたら俺の落ち込む分まで取られたような気がしたし

「こんな所で話してたら邪魔だろ、うちに行つて昼飯食べよ、荷物も置きたいし」

「そやな、行きましょか！」

「コテツありがとう、みんなに同情されるのは嫌じやないけど重い空気が嫌いなんだよな、コテツが明るくしてくれれば少しは変わるだろ。

家に着くとポストにはいろいろな郵便物がはいつてた、ユキへの手紙が多い

「カイはん、まだココに住むん？」

「そうだけど、なんで？」

「いやあ、樹々下はんも蘭はんもおらへんやろ、ちゅう事はチカはんと二人だけやで」

『ああ！』

俺とチカはフリーズした、ユキの事でいっぱいいっぱいで親達すら気づいてなかつた、今までユキとマミ姉がいたからどうにかなつたけど、流石に一人だけはヤバすぎる

「……ヤバいな

「チカチカ大丈夫？男は野獸だよ！危ないよ、なんなら僕の家で……」

ツバサ、ヨダレを垂らしながら言わされたらツバサの方が危ない人に見えるよ、でも確かにヤバい、いくら彼女と言えども高校生にして既に同棲とは

「カイは俺んとこ来いよ、一人暮らしだからどうにかなるだろ」

「じゃあチカチカは僕の家に決定！」

「大丈夫なの？ガネは一人暮らしだからカイがいても邪魔じやな

「大丈夫だよ、僕ん家は母子家庭だしあ母ちゃんは男の家を転々と  
してるからほとんどいないもん」

「大丈夫だよ、僕ん家は母子家庭だしあ母ちゃんは男の家を転々と  
してるからほとんどいないもん」

「サラツと重い家庭内事情を言うツバサが凄すぎる、普通他人に遠慮  
して言わないものだろ、それをあんなに笑いながら

「とりあえず今日はこの家で過ごすよ、明日引越し」

「ならチカちゃんが危ないから俺泊まるよ」

「チカチカ、野獣が一人もいたら危ないから僕がついてるよ！」

「ツバサがあるんならわいも泊まるで」

「して一同ヒノリを見る、ヒノリは呆れた感じでため息をついた  
「しようがない、私も泊まる」

結局全員泊まる事になつた、全員でのお泊まり会つて始めてだな、  
なんだか怖い、無事に終わるハズがないよこのメンツで、もしかし  
たら流血とか……、そんな事は無いと思つけど、この家で過ごす最  
期の一夜か。

ユキ、バイバイ

## 銀の大きさ

男子と女子が一つ屋根の下にて一泊、これで何も起こらないのが俺らの凄いところ、みんな相手がいるし飢えてないから必然と言つちや必然だな、寝る時は流石に別々だけどね、俺とコガネとコテツは俺の部屋でお話、チカとツバサとヒノリはチカの部屋にて、チカと俺の部屋は隣同士だけ壁が無いと錯覚するくらいのやうな感じ、女子特有の噂の会で盛り上がってる、情報源は当然ツバサだ

「隣は元気でんなあ」

「女の子が三人集まればそうなるだろ」

“ 飯田君つてヒノノの事好きらしいよ”

飯田とは俺が言うのもなんだけど、俺らの陰に埋もれたイケメンだ、多分他の高校に行つてればハーレムだつただろうに、そしてそれを聞いたコガネの顔色が変わった

「あのクソナルシストが……」

「落ち着け、別にヒノリは逃げないから大丈夫だよ。不安ならユキの部屋貸すからこれから大人のエスカレーターを駆け上がる?」

「それは名案やな!ええんとちやう?」

「…………いやそれは良くない」

顔が熱湯に突つ込んだ温度計の如く真っ赤になつた、俺とコテツは大爆笑だけどコガネは想像が先走り過ぎて失神寸前

「そういえば、ヒノリはんのパジャマ見た?」

「あれは犯罪だな、イーリンも裸足で逃げ出す色気だつた」

「あんなデカイもんほつといたら持つてかかるで、高校生にしちゃ発育良すぎやからな」

コガネは妄想の世界に行つたまま帰つて来ない、でも隣の部屋の会話で現実に戻された

“ ヒノノつて胸大きいよね”

“ 男の視線がを集めてるからな”

“わ～い！揉んじゃえ！”

“あつ、ちょっと、やあ！”

「ゴガネが死線をさまよつてゐ、つてか向こうに行きたいな、少なくとも俺も雄だし、コテツは雄を通り越して狼と化した

“ツバサだけずる～い！アタシも、アタシもー。”

“や、やめて、おお、大きくなつちゃう……”

「あ、ヤベ……」

「ゴガネはん？」

「倒れだな」

あまりの刺激の強さでゴガネが鼻血を出して氣を失つた、俺らはゴガネの血を拭いて鼻にティッシュを詰めて下にゴガネを運ぼうとした時だつた

“ねえ、ヒノノつて何カツプ？”

“ああ、それアタシも知りたい”

『隣に同じく』

聞こえないだらうけどコテツと意思疎通出来た、ゴガネにもこの会話を聞かしてやりたいって……、起きた

「丁度いいや、黙つて耳済ませ」

「はつ？」

意識が曖昧なゴガネの口を押さえて聞耳を立てた、悪い事をしてるのは分かつてゐ、でも男子高生だもん、なんの言い訳にもなつてないけど

“……え、F”

“F！？ス「～イ～ん～、顔を埋めると最高に気持良い”

“辞めてツバサ！それにチカとツバサはいくつなの？”

“アタシはCだよ、カイは小さいのは嫌いかな？”

“いや、全然十分です……、んな事はどうでもいいよ

“良いな二人とも、僕なんてAだよ。ねえヒノノ、どうすれば大きくなる”

“揉む。チカ、ツバサが大きくしたいつて”

“じゃあ揉んじゃえ！”

“きやつ、やめ、辞めて、あ、ダメダメ！”

『あつ』

再びコガネ失神、俺達は男の性を抑えられなくなるまえにリビングに行くことにした、口にいたらコガネが出血多量で病院送りになりそうだし。

コガネをソファーに寝かして俺とコテツはさつきの事で会話に花を咲かした、今回のお泊まり会は大きな収穫があつたな、ってかコガネの免疫の無さにもビックリだし、コガネのファーストキスはいつになる事か

「ツバサは小さいな、子供サイズってか？」

「マニアには大ウケやで」

今かなり墓穴を掘つたよな、ってか普通女の子同士でもあんな話しないよな、今はキャイキャイ騒ぐ声だけしか聞こえないけど、かなりドタバタしてる

「ヒノリはんFやつて」

「イエロ キヤブ並だな、うちの高校に水泳の授業が無くて良かつたな」「そやな、コガネはんが救急車で運ばれるか、コガネはん以外の血がプールになるかのどっちかやな」

「誰が救急車で運ばれるつて？」

ノソノソと起き上がりつて来たコガネが只でさえ白い顔を青くして、血足りてんのかな？

「いやあ、今から向こうに参戦しようと思つとつたところなんや」

「ふざけ……、って血が足りねえ」

「大人しくしてろ、かなり鼻血出してたからな、ってかコガネならヒノリの胸くらいなら揉めるだろ」

キレイになつたけど頭に昇る血が足りなくてフラフラしながら椅子に座つた、コガネは頭を押さえながら睨んでる

「そうカツ力するな、体に良くないぞ。それよりさあ、ヒノリはい

つから人より発育良くなつたの？」

「……中一」

「なんやちやんとチェック済みやないか」

「しうがねえだろ、毎日一緒にいたんだから、嫌でも田にはいるチカとツバサとはモテるジャンルが違うよな、確實に胸で選んでる奴もいるよな、ってか大半がそつだつたりして、でもコガネの事だからヒノリが目立つのは嫌だつたろうな、半殺しになつた奴もいたりして

「あれは、バレー部、やのうて、バレーボール、やで、運動してる時は邪魔やろうな」

「肩こるつて」

「なんだよちやんと聞いてるじやん、自分で気にならないようなそぶり見せやがつて」

「俺も男だ」

つてかこんなトークばっかりで悲しくなつてきた、もつと爽やかトーグがしたい、でも気になる、俺の中の男が邪魔をする

「ツバサ君はマニア向けだろ？」

「あれはあれで良いんや、ムードメイカーつちゅうやつや」

「コテツはもうツバサとキスはしたの」

「してへんで」

笑いながら答える、コテツにしちゃ意外だつた、コガネとは正反対で自分の気持に素直すぎるからな、悪く言つと自己チュー

「カイはんとチカはんのキスはいつ？」

「去年の8月の中盤くらいかな」

「付き合つたのもそんくらいだよな？」

「付き合つ前だからね」

『ハア～！？』

大声で叫んで口を大きく開く二人、そんなに驚く……事だな、今考えると俺つて大胆だな、改めて自分にビックリしてる

「それは流石に早すぎやろ」

「いやあ、なんていうか、馬鹿だつた？」

「ゴガネは信じられないといった表情だ、今もだけどあんときはマセてたんだよ、きっと

「どうやれば出来るの？」

「ノリと空氣、かな？」

「俺にもその勇氣と積極性を分けてくれよ」

「とりあえずゴガネは自分のキモチに素直になれよ、怖くても一步踏み出す勇氣が必要だね、後はその場の空氣を追い風に……、押し倒せ……！」

「あつ、ゴメン、途中から聞いて無かつた」

「あつ、そ」

せつかくの俺の熱弁を難なくスルーするとは、ゴガネには負けたよ、問題は誰もが予想してなかつたシャイつぱりだな、ゴガネの事だから俺が気にしても何も前に進まないんだよな

「じゃあゴガネはん、今から突入しますか」

「ゴテツが樹々下さんの部屋使つてこい」

「激しく同意」

「あかんでえ、そんな事したら大人になつてまうわ」

『別に良いだろ』

ゴテツは何を気にしてるんだよ、俺らには到底理解できない、つてかゴテツは大人にならないつもり？

「わいは大人にはならへん」

「意味が分からねえ、ピーターパンかよ？」

「大人になつてもうたらこうやつて騒いどるのが煩わしくなるやろ、そんならわいは大人になりとうない」

「別にヤツ……！」

「今まで言わなくてええで」

ゴテツが口を押さえてきた、まあゴテツが言つのも分からなくないけど、それにそれとこれとは別物だろ

「大丈夫、ツバサ君と一緒にいれば半永久的に大人にはなれない、

むしろ日々退化？

「退化はしてへん！」

これは確實に退化してゐるな、三人で大騒ぎしてると物凄い勢いでツバサが入つて來た、その次に笑顔のチカと呆れたヒノリが入つて来た、「コテツとツバサは抱き合つて、頼むからプチ感動の再開をしないでくれ、コガネはアタフタして明らかに怪しい、チカはいつの間にか俺の隣に座つてた

「みんなどうしたの？」

「カイツチとかがエツチな話をしてると思つて」

「男三人集まれば少なからずそんな話は出るだろ、別に常にしている訳じゃないから」

「ホントかカイ？」

「ホントだよ、なあコガネ？」

「お、おう」

コガネのせいで台無しだ、ふつた俺もミスだけどコガネのそれは無しだろ、まあ聞いてたような口ぶりじやなかつたから大丈夫だろ「つてかもう遅いから寝るぞ、みんなには明日の引越し手伝つて貢うんだし」

「じゃあカイ、一緒に寝よ」

「みんながいなかつたらな」

サラッと流したけど、実際かなり焦つてた、最近そういうことをよく言うしマジっぽいのが更に焦る

「しようがない、チカチカ！僕と寝よう」

「ツバサと寝たらなにされるか分からんだけど」

「大丈夫、ヒノノの枕付きだから」

「人の胸を何だと思つてるの？」

「ああ、またコガネが失神しそうだよ、コテツも感じとつたらしく、

アイコンタクトによる座談会の結果

「悪い、コガネが気分悪いらしいから先に寝るから」

「ホンマにすみまへんな」

ヒノリが本気でしんぱいしてゐる、失血だから顔色が悪いからなんとか……、ならなかつた、今回ばかりは最高の誤算だつた、嬉しい誤算だな

「じゃあ私が看病するよ、大丈夫コガネ?」

「いや、大丈夫」

「でも顔色悪いよ、ほらソファーで横になろう」

「分かつたよ、大人しくしてゐるから……………！」

コガネが寝たところでヒノリが膝枕をした、コガネが脱出ししようと/or>してゐるけどヒノリが無理矢理その場に押し付ける、ヒノリが俺の方を向いて笑つたから俺ら親指を立てて合図を送つた

「じゃあコガネ、お大事に」

「あ、おい！ちょっと待て…………！」

“バタン！”

無理矢理その場にヒノリとコガネを残して部屋を出た、俺らは別々に寝るのは言つまでもない、コガネとヒノリはほつといても何も無いから安心だけど、俺らは無理です

## 青とお好み焼き

俺とコガネで俺の引越し、後はチカの引越しを手伝わせた、女の子だけで引越しは出来ないからコテツを付けた、俺のは一人で足りるしそんなに荷物が無いから多いと逆に邪魔だ、引越しは3時くらいに終わって遅い昼飯を食べるためによりあえずツバサ宅に向かった。

マンションの10階、ファミリー向けの比較的古いマンションだ、その角部屋がツバサの家だ、チャイムを鳴らすと物凄い勢いでコテツが出てきた、俺とコガネに抱きつこうとしてきたけど避けた、勢い余つて柵に顔からダイブしたけど無視して家に入った、まだ荷物はごちゃごちゃしてるけどある程度は片付いてる

「昼<sup>ひ</sup>どうするの？」

入つてそのまま居間にいるチカ達に話しかけた、後ろからのそのそと歩いてきたコテツが俺とコガネの肩に腕をまわしてきた  
「わいが作るで」

『コテツが？』

「なんやお二人はん、わいじや不安でつか？」

俺とコガネは向き合つて暫く沈黙が続いた、そしてコテツの方を向いて頷いた

「酷いなあ、わいの家は道場だけやないで、お好み焼きが本業や、そやさかいわいが作るお好み焼きは絶品やで。どや？・食いたくなつたやろ？」

「しようがない、俺は行くけどみんなはどうする？」

「俺も」

「食べる物無いからアタシも」

「コテツが作るお好み焼きなら僕いくらでも食べれるよー」

そこでヒノリが無言で頷く、満場一致でコテツのお好み焼きに決まつた。

「コテツめ、俺に料理自慢をするとは、曙のＫ　一参戦ばかりに無謀だな、思いつきり後悔しとけつてな。」

### 『お好み焼き・鳥丸』

お店の雰囲気は若干レトロな感じで懐かしさがある、店内は少しソースの匂いが漂ってきて空腹を後押しする、カウンターに座ると厨房にコテツが立つ、大きな業務用の冷蔵庫から食材を取り出して混ぜていく

「わいが作るのは当然大阪風やで、シンプルで美味しい、やっぱりお好み焼きは大阪やろ」

話ながらでも手際が良い、慣れた手付きで人数分を仕込んだ、今気づいたけど店には俺らしかいない、外に準備中とか書いてあつたような無かつたような、俺がボくつと考えてるとすでに焼かれていた、コテツはツバサと話してお好み焼きには目も触れてない

「コテツ、大丈夫か？」

「大丈夫やで、鉄板の細かい温度も焼け時間も全部把握済みや」  
多分毎日親の手伝いをしてたんだろ、確実にお駄賃付きで、金目当てで手伝つてたらいつの間にか焼けるようになつてたんだろうな、ああ、でもホントにヤベエ、こんなもんを目の前で見せられたら腹減りで死にそう

「カイ、少し我慢しろよ、後少しだよ」

「あら、バレちゃつた？朝飯から何も食つて無いからヤバいんだよね、チカは大丈夫なの？」

「アタシは大丈……」

“グウ～”

チカの腹が鳴つた、お腹を押さえて顔を真つ赤にしながらつつ向いてる、俺はそつと頭に手を置いて顔を覗きこんだ

「大丈夫じゃないな、隠さなくてもいいのに」

「……はい」

周りの奴らは自分達の事で夢中らしく俺らの会話には全く見向きもしなかつた、まあ俺らも同じだけね。

コテツはお好み焼きを次々にひっくり返していく、かなりのスピードだし正確、焼けた面は良い焦げ色がついていた、そこからすぐに出来てコテツがソース・鰹節・青のり・マヨネーズをこれも慣れた手付きで付ける

「出来たで、みんな食つてや」

『 いだきます』

割箸を割つてお好み焼きを一口サイズでとつて食つ

「うま、コテツめちゃめちゃ美味いよこれ！」

「そやろ、わいの唯一の得意料理やからな、まだまだ作つてるから食つてや！」

俺は一枚は軽々完食した、すぐに一枚目にも手をつけた、他人の飯でこれだけ感動したのは久々だな、チカも腹が減つてたらしく一枚目に取り掛かつてた

「美味しい」

「カイの料理の方が美味しいよ

「やめれ、照れるだろ」

「いくら美味しくても流石に物には限度つてものがあるな、そろそろお腹いっぱいになつてきた」

チカの箸が止まつた、三分の一くらい残してゐ、まあ女の子にしたらよく食べただろ、残すのはコテツに悪いから食べるか

「貰うよ?」

「悪い、ありがと」

二口くらいで食べる、俺のも同じくらい残つてるけど、割とギリギリなんだよな、でもここで残しちゃ料理人として許せないな、同じく一口で完食する

「スゴイ！全部食べちゃつた、頑張つた頑張つた」

チカが俺の頭を撫でながら笑つた、なんだか怒るに怒れないな、しかもチカのこの笑顔を見たらどれくらいでもお好み焼き食べれそう

だな、実際は無理だけど。

みんなで話してると奥からガタイの良いおじさんが出てきた、恐らくコテツのお父さんだろう、俺らを見てそのまま視線をコテツに移した、そのままコテツに飛び蹴りをした、だけビコテツは軽々と防いだ、流石空手部の若きエースといったところだ

「何やねん！？人がせっかく楽しく話してたのに！」

「貴様また稽古サボつてこないな所で遊んで、眞面目に稽古しろや！」

恐らく今日、コテツは稽古をサボつて俺らの手伝いをしてたのだろう、でもいきなり飛び蹴りなんてやることが違うな、それを止めるコテツも恐ろしい、この家にいたら命がいくつあっても足りないな「しょうがないやろ、友達の引越し手伝わなあかんかつたんや！それに稽古いうても只のリンチやないか、あれのどこが稽古や！？」

「うつるさ～い！」

今度は回し蹴りだ、コテツはしゃがんで避けた後に腹を殴った、でも腹筋に力をいれて防がれた、うわあ、かなり血生臭い家族だな、コテツも強くなるよ

「スゲエ家族だな」

「……」

チカは口を開けて唾然とした表情で一人を見てた、つてか俺もみんなも同じような状態だ

「まあ今回は友達のタメならしゃあない、でも次逃げたら百人抜きするまで稽古やからな！」

「分かった、次やからな、次だけやからな」

コテツのお父さんは腕を組んで奥に入つていった、その後静寂が訪れた、目の前でジャッキー エンも裸足で逃げ出すような親子喧嘩を繰り広げた後だ、無理も無いだろ

「悪いな、うちの馬鹿親父が乱入してもうて」

「誰が馬鹿親父や！？」

「つるさいねん！少し黙れ！」

最高に仲が悪いな、しかも関西弁で喧嘩されると迫力がありすぎて怖い

「コテツの親父さん怖いな」

「ただつるさいだけやで、いつも頭に響くよつた声で叫ばれたらたまらんわ」

殴られるのに抵抗は感じてないんだ、確かに声はデカイけど殴られる方が問題有りだろ、あえてそこはつっこまないけど

その日はそれで解散だ、俺とコガネは夕食の買い出しでスーパーにいた、つてか俺とコガネが街を歩いてても目立つのにスーパーにいると目立つなんてものじやない、おばさんのヒソヒソ話がムカつく、まあこんな所でババア相手に喧嘩しても待ってるの警察と退学だけだ

「カイ、早く帰ろうぜ、居心地が悪い」

「分かってる、でもコガネんちつて何も無いから量が多くなるんだよ」

その後、調味料やら野菜やらを大量に買っこむことにした、コガネの家は生活観の欠片も無いからな。

会計の時だった、俺の携帯が電子音を大きな音で鳴らし始めた、メロディからチカからのメールだな

『かいたすけて、つばさにおそわれる』

スゲエリアル、平仮名だし短いから否定しきれない、コガネはメールを覗いて吹き出した、俺は一応チカに電話した

「プルル……、もしもし！？」

「大丈夫か？」

“助け……！カイっち、なんでも無いから、バイバイ！……プツ”

確実に犯罪の匂いがする、まあツバサの事だから少しいうじるだけだろ、気になるけど押し掛けのほどではないな、俺は気にせずに携帯をしました

夏休み明けの学校はみんなの変化に驚かされる時もある、真っ黒に焼ける奴、髪の毛を染めてる奴、急に付き合い始めてる奴、そして一番驚いたのは下駄箱でだ、手紙がはいつてるのは慣れたけど何故か量が多い、コガネも微妙に量が増えてるし、最初の方は一定じゃなかつたけど6月を過ぎたあたりから多少の大小はあるけど固定されてきた、それがココに来ていきなり増えた、考えた結果ユキの影響が一番適当だ、ユキがいなくなつてユキのが俺やコガネにないたんだろう、最初はムカついたけど段々馬鹿らしくなってきた

「ユキの遺産か」

「かなり迷惑なんだけど」

「俺に言うな、俺だつて迷惑してるんだよ、にしてもこれだけの量つてことはユキの人気はスゲェな」

手紙の量が倍近くになつて、ユキを本気で好きな奴もいるだろうからかなりの量のファンがいたつて事だよな、ユキも辛かつたんだな。

下駄箱で手紙の処理をしてるとコテツとチカとツバサが来た、チカとツバサの下駄箱も大変な事になつてた、これはマミ姉の置き土産か、二人の影響力は多大だな、今後が辛い

「おはよう、チカ」

「なあ、これなんだよ？アタシこんなに多く無かつたよな？」

「俺らもだよ。多分ユキとマミ姉の影響だろ」

チカにバッグの中の手紙を見せる、呆れた感じで見てる、ツバサはその場で読んでは捨て読んでは捨ての繰り返し、他人がせつかく書いた手紙を平氣でその場に捨てる根性、流石ツバサつて感じだな。

教室には既にヒノリがいた、いつものように本を読んでる、俺はそのまま席に座つた、夏休み前に席替えて一番廊下側後ろから一番

目、コガネの前でヒノリの隣だ、コガネを一番後ろの端にすると常に爆睡してる

- おやすみ -

「まだ朝のホームルームすら始まってないぞ、たまには授業受けろよ」

- ケウスス

既に寝てた。一いつは学校に何しに来てるんだよ。ヒノリは寝てる  
コガネを子供を見るような目で見ていた

一  
可愛い

「どこが？こんな不良被れの歩いてたら関わりたくないタイプトツ  
ブ3に入りそうな奴、そののぞーが可愛いの？」

「寝顔？子供っぽさ？」

分からなくもない、いつも無愛想な顔とは違つて力の抜けた顔だからな、女の子が見たら大騒ぎしそうだよ、みんな恐くて近寄らうともしないけどね。

今日は始業式のみで帰宅、部活も無いから6人で遊ぶ事にした、とりあえず腹が減つたからファミレスで早めの昼を食べる事にした。中には俺ら見たいな学生が大勢いた、沢山のグループの中のうるさい不良グループの一人がこっちに寄つて来た、ワックスでガチガチに立たせた髪の毛に何も無い眉毛、そいつがコガネの前で止まつた、コガネが何かしたのかな、コガネの事だから何してもそんなに不思議じやないけどな

「よお、久しぶり！」

不良Aはコガネの両肩に手を置いて笑顔で挨拶した、コガネは頭に疑問符が浮かんでる、コイツ完璧に忘れてるな

「あれ? 忘れちゃつた? 俺だよ俺、伸也」  
「ああ、ぶん殴つて鼻の骨を折つた奴か

話ながら座つてコガネの頭の中からやつと伸也が出てきたらしい、

伸也つて奴も可哀想だな、コガネの記憶だと鼻の骨を折つたことしか無いんだから

「で、何？」

興味が無いいらしくいつもより無愛想に話す、しかも顔すら見てない、よそ見をしながら

「何だよ冷たいな、一緒に喧嘩した戦友に向かつてそれは無いだろ、話がしたかつただけだよ」

「それだけ？」

「それだけじゃないよ…………」

そういうて俺を見てくる、何だか分からぬけどかなり険しい顔だ、初対面でそこまで変な顔しなくてもいいのに

「何でお前とこの青髪が一緒にいるんだよ？もしかしてこれから喧嘩とか？」

「は？」

「え！？もしかしてコガネ忘れたの？この青髪お前と喧嘩しただろ」「えええええ！？」

俺やコガネだけじゃなくてチカ達も驚いてた、伸也がコガネに嘘をつくとは思えないし青髪なんて俺くらいしかいないだろつし

「忘れたの？渋谷の裏路地で俺らが貯まつてゐる時にこの青髪が来たじやん」

「…………カイ、覚えてる？」

「ちよつと待つて、…………あ、思い出した」

あれは俺が中学一年の頃、だつた、友達に無理矢理連れて来られて渋谷にいた、でもその時の俺にとって渋谷は最高に居場所の悪い所だつた、だから来て一時間ほどでイライラして一人で帰つた、人が見たく無かつたから人がいない路地を選んで歩いてた、細くて街灯が一つしかない裏路地に入った時だつた、灯の下に不良がたまつてた、俺は何も気にしないで真ん中を突つ切つて行つた、狭かつたからか誰かに当たつたけど気にせずに進んだ、でもそれでスルーしないのが不良という生き物

「テメエ人の事蹴つといて何も無しかよ！？」

「…………」

「何か言えよ！！」

「…………何か」

青筋をたてて俺の胸ぐらを掴んできた、ホントに馬鹿な奴ら、俺は思わず吹き出した

「テンメエ！！」

顔を真っ赤にして俺を突き飛ばして殴ろうとした、大振りだつたら軽く体を屈めて腹を殴る、体を埋めてその場に倒れた、座つてた奴らが立ち上がり走つて来た、一人目は顔面に蹴りをいれたら吹つ飛ぶ、二人目は顔面を思いつきり殴り飛ばした、三人目は俺の後ろに回つて脇の下から腕を回してきて四人目が殴ろうとする、俺は腕を背中の方に回してそのまま三人目を投げるついでに四人目に投げた、倒れた二人の腹に蹴りを入れる、最後に一人で壁に持たれて雑誌を読んでる金髪、これがコガネだ

「終わつ…………？ 終わつたみたいだな」

「俺帰るから」

「逃がすと思ってる？」 「少しね、コイツらの事どうでも良いんだろ？ 仲間を大事にしてます、つて感じでもないし」

コガネは鼻で笑つた、その場に雑誌を投げ捨てて構えた、俺は嫌々に構えるとコガネにいつの間にか殴られてた

「本気本気」

「かつたる」

立ち上がりで殴ろうとしたコガネの手を弾いて顔面を殴る、コガネは怯んだけど俺の脇腹に蹴る……。

それからかなり殴りあつた、俺もコガネもボロボロで立つてるのがやつとの状態、俺はその場から離れてタクシーを捕まえて帰った、流石にこの顔で電車に乗る勇気は持ちあわせて無かつた、俺は始めて喧嘩に勝てなかつた、自慢にはならないけど俺は喧嘩は全部勝つてた、外見で喧嘩を売られる事が多かつたからいつの間にか術を身に付けてた

「ああ、そんな事もあつたな、あの後一週間も学校にいけなかつたんだよな」

「俺も、顔を見せたく無かつた」

「あの時のコガネはボロボロなのに笑つてたよ、怪我の手当してると時も笑つてた、理由を聞いても答えてくれなかつたけど」  
ヒノリが呆れた顔で言つた、あの頃は多分俺もコガネも喧嘩したかつたんだろうな、でも喧嘩して笑つてるとか変態だよな

「コガネ、良いのかよ? コイツを放つておいて」

「放つておくもなにもカイは親友だから、それよりお前邪魔だよ、どつかいけよ」

伸也の顔がひきつった、次の瞬間伸也はコガネの胸ぐらを掴んで立ち上がつた、青筋をたてて明らかにキレてる、コガネと俺とコテツはシラケた顔をしてるけど女の子三人はあたふたしてる、周りの人

も思いつきり見てるし

「テメエ！表出ろよ！いつまでも偉そうにしゃがって」

伸也の仲間と思われる奴らもいつの間にかたかってた、人数は8人、流石に俺とコガネでもキツそうだな

「コテツもやるだろ？」

「なんでやねん、わいがやつたら逆に相手が不利やで  
確かに、まあ良いだろ、なあコガネ？」

「なるべく穩便すませたいからな」

そういうつて俺達三人は店の隣の公園に行つた、店の裏は後で店に入れてもうえなくなる可能性が高まるからだ、伸也達はいつの間にかバットやら鉄パイプやらを持つてゐる、「コイツらドラ もんかよ

「コテツ、これでどれくらい？」

「6：4やな」

「7：3だろ」

「二人とも残念賞だな、世の中にはこいつ言葉もあるんだよ、猫に小判’、豚に真珠’、馬の耳に念佛’、のれんに腕押し’、まあ言いたいのは意味が無いと」

『同感』

俺らの座談会にシビレをきらしたのか一人が走つて來た、コテツが上段回し蹴りで吹つ飛ばす

「あのクソ親父に言わんといてな、ホンマに殺されてしまう」

「当たり前だろ、流石にコテツを殺すことは出来ないよ」

「テメエはいつまで無視してるんだよ！？」

今度は全員で來た、コテツがいるから大した事はないけど、疲れるんだよな。

終わつて店内に入ると店長らしき人が出てきて制止された、俺達三人はどうにか謝つて中に入れてもうたけど周りからの視線が刺さる、俺らは席に着くとチカ達が不安そうな顔をしてる

「ただいま」

「大丈夫か、カイ？」

「大丈夫大丈夫、話し合いで穩便に終わったよ、アイツらも馬鹿じやなかつたらしいよ」

真つ赤な嘘です、白眼剥いて泡ふいてる奴もいたな、これは秘密だけね

## 青の最悪な一日

今日は朝から不幸続きだった、携帯は見付からないしワイシャツのボタンはとれてるし財布を落とすし（財布は後ろにいた奴が拾ってくれたけど）、それらのせいで遅刻、今もそつだ、10分休みでコガネとジュースを買いに行つてるとマツチヨな高校生とは思えないような男に呼び停められた、体育館裏につれてかれたから俺を気に入らない奴らの一人だと思った、コガネも着いて来てるから安心だけど

「四色か？」

「そうだけど、何？授業があるから早く帰してくれない

「……す、好きだ！！」

太い声でそれだけ言つて走つて逃げた、コガネは後ろで大爆笑してるけど俺は吐き気がするほどだった、マツチヨはあつち系の人だつたらしい、呆れて動けない俺をまくしたてるようにチャイムがなるし、これでこの授業は遅刻決定だ

「ああ、もう最悪、俺サボるから」

「なら俺も寝る」

俺らは屋上でサボる事にした。

コガネは屋上について仰向けになつて3秒でイビキをしながら爆睡、俺は屋上の柵を乗り越えて足を投げ出しながら下を行き交う車を見る、鬱の時つて飛び下りたくなるのかな？俺は今日に限つて鬱だ、柵を持たれにして買つてきたペットボトルの炭酸飲料を一口飲む、そして一息ついた時に扉が勢いよく開いて担任が出てくる、物凄い音が鳴つたのに起きないのがコガネの凄いところ

「四色！こっちに来い」

「やつぱり最悪だ」

俺は乗り越えて内側に降りる、何故か担任は怒つてゐるようには見え

ない、ってか最近怒られたためしがない

「危ないから内側にいる」

そういうと帰ろうとする、あまりに教師らしからぬ行動に何故か俺は担任を止めてた

「それで終り？ 最近キレイじやん」

「どうせお前に怒鳴つたところで簡単に言い返されて終りだ、それに問題を起こさなきゃそれで良い、一人とも飛び抜けて馬鹿つて訳でも無いからな」

「ありがとう」

ビックリして間抜けな声が出てきた、担任は扉を閉めて消えた、ってか呆れられたのか俺ら？ 嫌じやないけど良くも無いな、心おきなく騒げるのは確かだけど、最近は担任もいきなり怒鳴つてくる事は無くなつた、何かしでかしても理由を聞いてからキレイなるなりする、丸くなつたのかな？

そのまま昼休みに突入して俺らは一旦教室に弁当を取りに行つてから屋上に行つた、最近は男三人と女三人が交互に飲み物を買いに行つてゐる、俺はこの最悪の一日を何とか乗り切るタメにゼリーを買に行く事にした

「ゼリー買つてくる」

「電話すればいいじやん」

「迷惑だから自分で行くよ」

「あつそ、いってらっしゃい」

俺は屋上を出てそのまま階段で一階まで降りて反対側の校舎にある購買に行つた、人が退いた後だつたから戦争をせずに済んだ、奇跡的に一つだけ残つてたサイダー味のゼリーを買つて帰ろうとした時だつた、体育館の方に不良に腕を引っ張られてるツバサを見つけた、明らかに尋常じやない二人に俺はその場にゼリーを置いて走つて行つた

「辞めてよ！嫌だ！」

「ツバサ、どうした？」

「カイっち！」

「ゲツ、お前！」

不良は走つて逃げようとしたけど襟元を掴んでそのまま仰向けに倒して馬乗りになつた。ツバサは泣きながら乱れた服を直してゐる

「ツバサ、何があつた？」

「チカチカとヒノノが怖い先輩に連れてかれちやつた」

俺は不良に目をやつたままツバサに質問した、とことんまで今日は最悪な日らしい、これはマジでシャレになんないな

「おい、チカとヒノリは何処だ？言わなかつたら殺すぞ」

「た、体育館倉庫だよ。言つたから離してくれよ、何もしないから」

「誰が教えたら放すつて言つた？おやすみ」

顔面を殴ると後頭部が地面に当たり気絶した、白眼をむいて口から泡を吹きながら、俺は立ち上がってツバサの前まで行く

「コガネとコテツを呼んで来い、火急的速やかに、分かつたか

「でもカイっちは？」

「いいから行く！」

俺はツバサを180度回転させて背中を押した、ツバサは渋々走つて屋上に行つた、正直ツバサの前で怒りを抑えるのはきつかったな、体育館倉庫だつけか？かなりヤバいな。

俺は体育館倉庫まで來た、中からはチカの悲鳴が聞こえた、完全に頭に血が昇つて頭が回らない、でも体が勝手に動いて扉を勢いよく開けてた、中には6人の柄の悪い不良が笑つてた、一人はチカのブラウスのボタンを外そと手をかけてた、ヒノリは多少乱れてるけど何もされてないらしい

「こんにちは」

『カイ！』

「またテメエか、まあ良い、一人で來るとは馬鹿な奴だな」

『ハハハハ！』

チカに触れてる奴が言つと周りは大笑いして、コイツが頭らしい、チカと目が合つて俺は殺意が芽生えた、コイツらチカを泣かせやがつた

「いやあ、『ガネとかがいたらお前らが可哀想だから、病院送りで済めばラッキーかな？だから今のうちに逃げれば、これが最終勧告ね』

「お前頭おかしいだろ！？この状況を見ろよ、なあ、お前ら、ブフア！」

リーダーが言い終わる前に顔面を蹴りとばす、チカから離すためだからあんまり力を入れてない、不良グループとチカとヒノリの間に俺が入る、相手を挑発する余裕はあつても一人を逃がす算段までは頭が回らない

「大丈夫か？ 服直せ」

「カイ、ありがとう！ダメかと思った」

「おい！お前ら、感動の再開しててる場合じやないだろ、ピンチには変わりないぞ」

確かに、これだけの相手をチカとヒノリを守りながら喧嘩するのにはさすがにキツイな、コガネ達を信じるか

「つるせえな』『ちやー』『ちやーと！怖くて手も出せねえのかよチキンども！」

「調子乗りやがつて！」

一人が走つて近くあつたほうで殴ろうとしたけど顔面ストレートで殴つた、鼻血だしながら倒れる、周りは完全にキレたらしく一斉に殴りかかるて来た、一人目はボディーに一発いれて終りだつたけど二人目に脇腹を蹴られた、でもあんまり痛くないや、そのまま肩の辺りを蹴り飛ばすと頭から床に突つ込んで気絶した、その後の隙が大きすぎで後ろから掴まれる、一人が俺の腹を殴る

「グッ！」

俺を押さえてる奴は力が強くて俺じゃ投げれない、もしかして絶体

絶命つてやつ？

「さつきはよくも蹴つてくれたな！」

鼻血を出したリーダーが俺の顔を殴る、受け身をとれないと痛いな、口の中が切れたし

「ブツ！」

血の混ざった唾をリーダーの顔にかけるとリーダーは顔を赤くして

後ろを向いた、何か他の奴と揉めてる

「さすがにそれはヤバいだろ、死んじまうぞ」

「つるせえ！殺すんだよ！」

物騒な会話を振り返るとリーダーの手には金属バットが握られてた、マジかよ、後ろではチカとヒノリが泣く声が聞こえるし、頼むから早く来てくれよ

「死ねよ…」

リーダーは俺の頭を金属バットで殴つて来た、それと同時に俺は解放されたらしい、多分床に倒れたんだと思う、意識が飛びそうだ、コガネとコテツが入つて来たのは理解出来た、目の前が自分の血で真つ赤になつて音は何も聞こえない、今俺に残つてるのは視覚だけだ、痛みも感じない、ヤバい、意識が……

## 赤の幸せ

今、アタシの前で大好きな人、一番大切な人がバットで頭を叩かれ  
て呑み込まれそうな真っ青な髪の毛を真っ赤に染めてる、大好きな  
人は人形のように倒れた、それと同時にコテツとコガネが入って来た  
「カイ？ ねえ、カイ、起きてよ！」

全く動かない、アタシを襲おうとした人はバットを床に投げ捨てて  
カイの傍に立つた、怖い、カイが動かない、アタシの声が届かない、  
アタシを襲おうとした人はカイを見下ろしてそのままお腹を思いつ  
きり蹴つた

「カイ！」

「カイはん！」

「カイ！」

カイは人形の用に転がるだけ、アタシは気付いたらカイに覆い被さ  
つてた

「辞めて！ もうカイに触らないで！」

「何だよ？ お前も死にたいのか？」

この人怖い、アタシは怖いしカイの事が不安で動けなかつた

「…………もう辞めろや」

「んだようるせえな！ お前ら！ そいつらやつちやつて良いよ」

「お前が来いや！ それとも一人じゃ喧嘩の一つもできひんのか？ 怖

いんならバットつこうてもええで」

コテツの目が開いてる、いつもは開いてるか開いてないか分からな  
いくらい細いのに、怒りの矛先がアタシじゃないって分かつてても  
怖い、コガネはうつ向いたまま動かない

「さんざん馬鹿にしやがつて！ ぶつ殺すぞ！」

リーダーはアタシ達から離れてバットを持つてコテツとコガネを威  
嚇した、でも二人共に微動だにしない

「他の奴らは逃げてもええで、今は見逃してやるさかいに」

「それはこっちのセリフだ！お前が逃げた方が良いだろ？」

「しゃあないな、…………いてこましたるか？」

コテツの低くてドスの効いた声、怖いなんてものじやない、でもアタシはさつきからカイが気になつてしまふが、息はしてるけど弱い、アタシの制服はカイの血で真つ赤、それも気にならないくらいに不安だつた

「コガネはん、コテツら死にそつになつたら止めてな、わいもう理性飛んでもうたわ」

そういうて近くにいた不良の人に回し蹴りをした、バキッつて鈍い音をたててそのまま飛んでつちやつた、コテツに蹴られた人は腕を押さえながらもがいてる、よく見ると肩から下が変な感じに曲がつてる、折れちやつたのかな、コテツはその人に馬乗りになつた

「悪いのう、まだ意識あるん？寝てれば痛く無いやろ」

コテツが殴ると泡をふいて気絶しちやつた、他の人がコテツの後ろから蹴るうつとした、でもコガネの膝が顔にめり込む、二人は周りにいた人達をボコボコにしていく、最後に残つたのはバットを持つたリーダーだけ、リーダーはバットを振り上げてコテツに殴りかかつた、コテツは片手でバットを止めて殴つた、リーダーは頭から倒れた

「まだまだ温いで、これくらいで済むと思うたら大間違いや

「頼む、待つてくれ！もう何もしないから！」

コテツは馬乗りになつて拳の雨を降らせた、リーダーは動かなくなつてるけど止まらない、見かねてコガネがコテツをリーダーから遠ざけた、コテツはやつと収まつてアタシ達の方に來た

「チカはん、大丈夫でつか？」

「アタシは大丈夫だけどカイが、血が、血が、いっぱい出てきて」「ちょっと待つててや」

そういうてコテツはカイの頭に自分のワイシャツを巻いて傷口を塞いだ、コガネは放心状態のヒノリを抱き抱えて倉庫を出た、それと同時にカイの先生が入つて來た

「大丈夫かお前…………、四色！潤間、四色を救急車に運ぶ、お前

が付き添つてやれ。鳥丸と五百歳は残れよ

「やっぱりそうなるん? しゃあないな、チカはん、カイはんを頼んだで」

アタシとカイは病院に向かつた、その後、先輩達も搬送された。

あれから3日がたつた、カイは動かない、危ない状態らしい、アタシはすっと側にいるけど不安で押し潰されそう、ジョニー達はアタシに全部任してくれた、でも今はアタシ一人だけ、カイの顔に触れても生きる感じがしない、アタシのせいで付いた頬の傷痕が何でもないように見える頭の包帯、もう辛いよ

「カイ、起きてよ、死んじゃダメだからな」

アタシはどれくらい泣いたか覚えてない、常に泣いてたのかも、泣き疲れては寝て、起きてもカイは動かなくてまた泣いて、それを繰り返してた、いつかはカイは起きるつて信じてるけど弱い心臓の音を聞くと心が折れそうになる

「こんなクシャクシャの顔じゃまた寝たくなっちゃうよな、顔あらつて来るから待つて」

そういうて立ち上がるうとした時だつた、握るなんて強さじゃない、触れる程度の強さでアタシの腕をカイが掴んだ、ビックリしてカイの顔を見るに少しだけど目が開いてる

「カイ!? 分かる? アタシだよ?」

「ち……か……?」

アタシの心に光が差し込んだ、カイの意識が戻つたんだ、今度は不安の涙じゃなくて嬉し涙が溢れ出てきた

「カイ、お、おかげり」

「……チカ、悪いけど、痛い、どいて」

アタシはカイの胸の辺りで泣いてた、確か肋骨が折れてるんだつた、でもそんなのどうでもいい、カイがアタシの前でまた喋つてくれた、それだけで満足

「ゴメンな、心配かけて」

カイの大きな手がアタシの頭を非力に撫でる、いつもみたいな力強さは無いけどそれだけでアタシは嬉しかつた、待ち望んだカイの温もりがそこにあつた

「あれ？みんなは？」

「ジョニー達はアタシがいるから任せてくれた、コテツとコガネは停学中、ツバサとヒノリは一人が停学明けるまで学校には行かないで一緒にいるらしいよ」

カイは僅かに笑つた、まだ本調子じやないらしくたまに苦痛に顔を歪める、アタシはその一つ一つにカイが生きてる事を実感出来て舞い上がつた、ゴメンねカイ

「不良は？」

「停学のハズだつたけどみんな自主退学した」

「怪我は？」

「一人は肩の骨折、三人は鼻の骨の骨折、後はただの打撲。それとリーダーが顔が少しあかしくなつちゃつたらしよ、コテツが殴り過ぎて」

「それヤバくないか？コテツ慰謝料もんだろ？」

カイが本気でコテツの事を気にしてた、みんなカイのせいで停学なのにね

「川上先生のお陰でそれは免れたらしいよ」

「川上？」

「カイとコガネの担任でしょ」

初めて知つたらしい、そいえばいつも担任つて言ってたから知らないんだ、今回はその先生のお陰で丸く収まつたのに

「最初は不良側の親が騒ぎ出したんだけど、川上先生がカイの方が

重傷でその分の慰謝料はいらないからコテツを見逃してくれるように頼んだらしょ、全部ジョニーの了承を得てね」

「アイツが……」

カイは窓の外を見て更けてた、アタシはカイの横顔に幸せを感じた、そしてその横顔が愛しくなつてきて気付いたら両頬に手を当ててカイにキスをしてた

“ガラガラ！”

「うわっ！お二人はん、ココは病室やぞ」

「キヤー！チカチカ大胆、僕には冷たいのに」

「見舞いに来れば、…………もう少し寝てろ」

「…………不純」

最悪のタイミングでみんなが来ちゃつた、思いつきりキスしてるところ見られちゃつたし、顔が熱い、カイの顔も真っ赤だし何か頭押さえてる

「傷口が開く、最悪のタイミングだし」

「ゴメンね！カイ、大丈夫？」

「元気そうで何よりや、お見舞いに来てやつたで」

コテツは大きなビニール袋を高々に上げた、ツバサとヒノリはアタシの隣に椅子置いて座つた、コガネは端の方で腕を組んで寄りかかつて、コテツは勢い良くベッドに飛び乗つて足元の柵に座つた、当然靴は脱いでね

「コテツとかは停学中だろ？バレたらまた長引くぞ」

「それが大丈夫なんや、先生直々に外出の許可が出たんやで…」

「あの担任のお陰で停学で済んだんだしな」

コテツとコガネが笑顔でカイに言う、なんかみんな元気そうだし安心したな、ヒノリもなんとも無いし

「ホンマはわいら退学やつたんやで、大半を病院送りにしてもうた

からな、せやけど川上先生が頼んで停学に軽減してくれたんや」

「今回はあの担任に頭が上がらないな、カイも早く良くなれよ、チカちゃんを泣かした罰はとくと受けてもらうからな」

「みんなカイのタメにありがとう」

みんなの笑顔がアタシに元気をくれた、カイも笑ってるし、でも何かカイの顔がさつきから晴れない、何かあるのかな？

「でもゴメン、腰から先の感覚が無いんだ、さつきから動かない」みんなの顔が曇る、アタシは泣きそうだよ、生きてるだけで満足つて言つたけど、やつぱり歩けないなんて酷いよ

「なあ～んてな！手も足も全部動くよ、ほら、みんなを驚かしたかつただけだよ」

カイは手足をバタバタさせた、嬉しいけど、何かムカつく、コテツとコガネは雰囲気が倉庫に入つて来た時みたいになつた、当たり前だよ、この状況でその「冗談は良くない」

「カイはん、それは頂けまへんで」

「なんならもう一本くらい骨折つてやろつか

「いやだから冗談だつて、な？」

「……………酷いよ、カイの馬鹿」

何でだろ、何で泣いちゃうんだろ、悲しくない、嬉しいハズなのに、多分本当に信じじゃつたからなのかな、一緒に遊べない事を想像しちやつたからかな

「ちょっとチカ、泣くなよ、頼むから、悪かつたつて」

いつの間にかカイの胸に抱かれてた、今の心臓はさつきの弱々しいのとは違つて凄く速い、アタシと同じスピードで心臓が動いてる、でもみんなの前なんだけど

「キスの次はハグかいな」

「僕のチカチカがあ」

「ひでえな」

「……………やつぱり不純」

「うるせえな！見せ物じやねえぞ、……………ツ！」

カイの鼓動が速まつた途端に頭を抱えて横になつた、興奮しすぎたんだろ、これから一人ぼっちの三日間の穴埋めしてもらわないとな、まだまだ生きてるんだからいっぴに幸せにしてもらおう。

カイ<sup>が</sup>生<sup>き</sup>て<sup>れ</sup>ばアタシ<sup>は</sup>そ<sup>れ</sup>だけ<sup>で</sup>満<sup>足</sup>だから

入院生活は面倒な事とかを気にしなくて良いと思つてた、でも最悪だ、自由は無いし飯は不味いし楽しみは誰かが来ないと無いし、後三日で退院だけどいしますぐにでも逃げたい、しかも学校の女の子が来て邪魔するだけ邪魔して帰るし、お見舞いに来てくれるのは嬉しいけど周りの患者のタメにも静かにしてほしい、頼みの看護師さん達もやつぱり女だ、高校生にまで狙いを定め始めた

「四色くん、お姉さんが色々教えてあげようか?」

「いや結構です、つていうか拒否します」

ベッドで寝てる俺の枕元に腰掛けて俺の頬に手を置いてきた、普通の高校生なら喜ぶだろうけど俺にとつてはいい迷惑だし

「なんならお姉さんが大人にしてあげようか?」

「や、やめて下さい! お願いだからほつといて」

看護師さんは俺の上に乗ってきた、つてか俺は患者でこの人は看護師だよな? キレイなら何しても良いのかよ? 看護師さんは段々近付いて来て俺は身動きができなくなつた、その時カーテンが開いた

「チカ! 良いところに来た、助けてくれよ」

「何してるの? カイ」

「あらお嬢ちゃん、何つて、ナニよ」

この看護師さんは本当に雇われてるのか? 自称看護師と疑うくらいだぞ、看護師さんが俺の上から降りる時にあえて大胆に降りた、因みに黒でした

「お嬢ちゃん、早くしないと私みたいなのに持つてかれちゃうわよ、こんなに可愛いんだから」

「へ、変な事言わないで下さい」

看護師さんは色気を振り撒いて出ていった、その場に重い空気を残すだけ残して、若干頭が痛むし、興奮した自分に凹む、チカはなんか怒つてるつてか怒るよなそれは

「これで何回田?」

「看護師には3回、一般の人とか患者には2回かな」

「残念、看護師はもう一回あるよ、カイが寝てる時に襲われそうになつてた」

早く学校に逃げたい、チカにも申し訳無いしキズが治らないだろう  
れじや

「カツコイイ旦那を持つと大変ですね」

「自分で言うことか?それにさつきも看護師さんのパンツ見てたで  
しょ?」

「いや、あれは男の性つていうか、避けでは通れないってか」

チカが怒つてるよ、当たり前だよな、いくら怪我人と言えども無防  
備にも程があるからな、あと三日は気を引き締めていこ

「あんなおばさんのパンツに興奮したのかよ?」

「さすがに黒じゃ引くよ、…………チカは何色?」

チカならこれで黙るでしょ、もつこの話は終わりにしたいんだよな、  
俺の汚点を思つたりついてるから嫌なんだよ

「白だよ」

「へつ?」

「何だよ自分で聞いといて、何らなら今から確かめるか?」

ヤベホ、傷口が痛む、ってかポーカーフェイスでそれ言われたら俺  
じゃなくても興奮するつて、それともマジとか?ココは個室だし……

「そんな事出来ないくせに」

「アタシも高校生だぞ、…………これくらい

そういうてチカがさつきの看護師さんと同じ事をしてきた、つてか  
病院なんですけど、まあチカへの償いか、俺も満更でもないし

「カイ、傷口痛む?」

「かなりね、開かない程度にな」

「うん」

チカとキスをしようとした時だった、廊下の方でうるさい集団が、

つてか大きい声に関西弁、もしかして……

『コテツ達だ！』

チカは急いで降りて俺は布団を、チカは服を直して何事も無かつたかのようにする、コテツ達が大きな音をたてて入つて來た

「カイはん元氣でつか！？」

「頼む、頭に響くから静かにしてくれ」

「何やお二人はん、顔真つ赤やで」

「また看護師さんが来てさ、それでじやない」

顔真つ赤か、さつきから傷口が痛んでしようがない、確實に看護師じゃなくてチカのせいだな、そういうえば今日はコテツとツバサだけか

「コガネとかは？」

「二人でデートやつて」

「コガネもあと少しだな」

「そやな」

俺らが話してゐる横でチカとツバサはイチャイチャしてゐる、一方的だ

けどね、いや一方的つてことを信じたい

「ねえチカチカ、飲み物買いに行かない？」

「うん良いけど、カイは何が良い？」

「適当に任せるとよ」

「行こうチカチカ！」

ツバサがチカの手を引いて走つて出でていつた、その瞬間コテツがいきなり真剣な顔になつてツバサが座つてた椅子に座つた、ため息を吐いて俺を見た

「まだ退院できひんのか？」

「あと三日だよ、知つてるだろ」

「どうしてもか？」

「脱走しかないな」

コテツのいつになく真剣な顔が更に険しくなつた、俺はその時に始めて目の開いたコテツを見た

「チカはんが可哀想やで」

「チカが？」

「カイはんがいなくなつてから他の男子が檻から放たれたようにチカはんに寄つてくるんや、わいらがいるときはどうにか出来るんやけど、一人の時はかなり強引らしいで、不良の件があるお陰で手は出さないけど、弁当の時間も最近はおらへん」

そこまでは予想してなかつた、寂しい思いさせてたんだな、情けないな俺、他の男子にもつてかれないつて自惚れはある、でも笑顔は守れないのか

「……………退院か」

「無理なのは分かつとるで、でも知つて欲しかつただけや、チカはんは強いから大丈夫やと思うけど、念のためちゅうやつや」「いや、退院するよ、外にいて、支度するから」

コテツを外に出して着替えた、そんな事聞いて俺が大人しくしてゐわけないだろ、ナースコールを押して看護師が来るのを待つた。案外早く来たと思ったら不安そうな顔をしたチカだった、チカは慌てて俺に寄つてきた

「カイ！何してんだよ？」

「退院準備」

「無理だよ！まだ傷が治つてないだろ？」

「傷なんて家にいても治る、それにこんな所にいるよりは早く治るし」

荷物を持って出ようとした時だった、例の看護師さんが残念そうな顔しつ入つて來た、半分あんたのせいで退院するんだけどね

「あらあ、退院しちやうの？まだ三日もあるのに」

「別に良いだろ、俺は客だ、それくらいの自由はあるだろ」

そういうつて出ようとした時、やつぱり今後のためにあの看護師さんは注意しとかないとな、俺らに背中を向けてる看護師さんの後ろから耳打ちした

「若い子をおとしたかつたら黒じやなくて白の方が良いよ、黒はガツツキすぎだね、白なら自然さが伝わるから」

「あら、忠告ありがとう、今度から気を付けるわ」

俺はチカの手を引いて病院を出た、医者に止められたけど強攻突破で、怪我人に強く出来ないのが医者の弱味ってか。

コテツとツバサと別れて家路に向かつてた、久しぶりの外は気持良いな、もう日が暮れてるしこの時期だと冷えるな、もう少し厚着してくれば良かつた

「チカ、寄つて行きたい所があるんだけど、良い?」

「良いけど、どこ?」

「お楽しみ」

俺はチカに教えないで歩き続けた、道のりで何となく気付いてると思つけどね、問題はそこまで連れてく事じゃない、それからなんによな

「カイ、これつて?」

「そう、前の家」

一学期まで住んでた家だ、今は空き家だけど所有権はまだこっちにある、一応鍵はいつも持つてるし、夏休みの終わりに来たのが最後だから一ヶ月くらいか、まだ使えるな

「何しにココに?」

「まあ良いから入つて」

無理矢理家に入れた、俺とチカの部屋は殺風景だけど他は変わらない、時間が止まってるみたいだ、俺らはユキの部屋でくつろいだ、チカはベッドに座つて、俺は丸いテーブルを挟んで反対側だ、先に謝つとく、ゴメンなユキ

「で、何だよ?」

「何色かなあつて思つて

「えつ?」

チカは一瞬で顔を真っ赤にしてうつ向いた、さつきとは全く別人だな  
「あんなチカ見たら抑えろつていう方が無理だよ  
「だから、し、白だつて」

「ダメ?」

「ダメじゃないけど.....」

俺はチカの前に立つてそのままベッドに寝かした、チカは思つたよ  
り素直に寝てくれた、俺が覆い被さるような状態で上からキスをした

「ヤバかつたら言つて、俺も分からないからさ」

無言で頷く、チカの制服のボタンを外した、ああ、俺は何をしてる  
んだる、チカを傷付けたらどうしよう

「.....ん!」

「大丈夫?」

「.....あつ、.....大丈夫だよ」

俺はチカを傷付けないよう触れた、ホントは怖かつた、自分に従つたのは良いけどそれをチカが望まなかつた時が。

チカの肌は小麦色で綺麗だつた、多分日焼けだけじゃないと思う、  
こんなに綺麗な肌をしてるんだから、柔らかくて同じ人間とは思え  
ないくらいだつた、全部がいつものチカと違つた、うるんだ瞳も、  
柔らかい唇も、何も着けてない体も。

俺はついにみなまで来ていた、でも最後の決心がつかない、ホント  
にコレで良いのか?ホントに後悔しないのか?

「カイ、きて大丈夫だよ」

「ヤバかつたら言えよ、無理だけはするな

「大丈夫」

「ゴメンな

「.....つ!」

俺が心配してチカの顔を見るとチカは笑つてた、俺は決心がついた、  
傷付けないようやれば良いんだ

「行くよ.....」

「カイ、好きだよ」

「.....分かつてるよ

俺はチカを抱き締めた、いつもより強く、チカの温もりがいつもよ  
り強く感じられた、怪我の痛みが感じなくなるくらいに。

「大丈夫だつた？」

「うん。……むしろアタシ幸せ、……こんなに幸せなの始めてだつた、これも一つの愛のカタチだよね？」

「そうかもな」

俺はチカに軽くキスをして天井を見上げた、でもいきなり天井がチカの顔でいっぱいになつてチカの唇が俺の唇と重なつた、そしてチカの舌が俺の唇を割つて入つて來た、俺もそれに応える、最後にチカが強く俺を抱き締めてきた、脇腹の辺りから手を回して、……

……脇腹？

「イツテエ！！」

「キヤア！大丈夫！？」

今になつて思い出した、肋骨折れてたんだ、邪魔だからギブスは外してあるし、チカは慌てて離れたけど俺は引き寄せた

「大丈夫なのか？」

「俺から抱き締める分にはね」

「…………何かズルイ」

俺は暫くの間チカを感じてた、明日からは俺がチカの全部を守るから今だけはわがまま聞いてくれ。

チカ、今日つて記念日だよな

## 青の退院祝い

昨日は夜遅く帰った、夜遅くって言つても既に日付が変わつてからだつたけどね。

帰るとコガネはしかめつづらをしてた、疑問か迷惑かは分からぬけど。

そして今日、退院初日の学校、まだ頭には包帯が巻いてある、それが目立つのか何のか分からぬけどいつも以上に視線が刺さる、頑張つて考えた結果、やっぱりケンカの件が大きく響いてるんだろ、あのケンカで怪我したのは俺と相手だけだからな。

下駄箱には手紙が突つ込まれてた、海外旅行から帰つて来た時のポストの方がまだ可愛いくらいに、とりあえずビニール袋に突つ込んで教室に行つた

「おはよう、ヒノリ」

「カイ？ 大丈夫？」

あんまり心配して無さそつな顔でヒノリが聞いてきた

「一応ね、昨日無理矢理退院したんだけど」

「ハシャギ過ぎないでね」

それだけ言つてまた本を読みだした、案外マイペースなんだなヒノリつて、それ以上にマイペースなコガネは既に爆睡してた、しかも最近はタオルを枕にする事を覚えたらしい、もう少しで枕持参するんじゃねえの？

俺に群がる友達と話してると川上先生が教室に入つて来た、一応うるさくても恩師になつちまつたからな、呼び名は担任からクラスアップだ

「四色、退院はまだのハズだろ？ 何でココにいるんだ？」

「つまんないから抜け出して来た。それと、一応感謝してるから」それを言つとクラスの視線が集まり驚きの声が飛び交う、俺とコガネと川上先生の口喧嘩は名物になつてたらしくからな、俺の感謝発

言にビックリするのも分かるような気がする、つてかみんなに見られる照れる、照ると頭に血が昇る、頭に血が昇ると……

「…………ツ！」

俺は頭を抱えながら机に伏した、感情の起伏で頭が痛くなつてたらめんどくさいな、笑うと肋骨が痛むし、俺つて案外重傷だつたりする？

10分休み、いつも友達と教室で話してるけど俺が早めに退院した理由はそれじゃない、今はチカとツバサの教室の前にいる、男の群れに圧倒された、これをかきわけて入るには肋骨が危ないと判断して隣の教室のベランダから行く事にした、うちの学校は同じ階は全部ベランダで繋がってるから便利なもんだ、隣の教室に入ると女子が騒ぎ始めた、シカトしてそのままチカの教室に入った、チカの周りに群がる男どもを邪魔だから吹つ飛ばしてチカを引きずり出した

「テメエ何するんだよ！？」

「ああ？自分の彼女を助けて何が悪い」

「カイ！？」

チカはビックリしてる

「四色いつの間に？」

「別にお前に話す義務は無いだろ、それよりか早く散れよ、俺がいないうからつて調子のつてんじゃねえよ」

軽く声を低くして言った、群れはあつという間に解散して教室は静かに……、はならなかつた、ツバサが騒いだしどこから噂を聞き付けたか女子が集まつて来た

「キヤー！カイつち王子様みたい、カッコイイ！」

「頼む、少し静かにしてくれない、ツバサの高い声は頭に響く

「それより何でカイが？」

「それは俺が王子様だから？」

廊下にいた女子がこの言葉に悲鳴にも似た声を出し始めた、これも頭に響くな、でも黙らせせる程の声量を出す気力がない

「潤間さんが羨ましい」

「私もあんな風に四色君に抱き締められたいな」

「私は名前呼んでくれるだけで満足よ」

「そういうえば、俺チ力を引っ張り出した時に抱いてたんだ、それは女子も騒ぐわな、女子達の声がうるさいせいでいつもうるさいチャイムが微妙にしか聞こえなかつた

「今鳴つたよな？」

「うん」

「じゃあ帰るから。それと、次の十分休みも来るからな」

「アタシなら大丈夫だよ、それにカイは怪我もあるから安静にしてろよ」

「チカのタメじゃないから、俺がやりたいからやる、チカにそれを止める権利は無いね」

俺はチカを放して今度はちゃんとドアから出ようとした、でも女子がいることをすっかり忘れてた

「ゴメンね、チョット退いてくれない？」

「あっ！はい、すみません」

「それとみんなも早く戻らないと授業に遅刻するよ」

またキャーキャー言いだした、俺なんか変な事言つたか？俺は左耳を左手小指で塞ぎながら自分の教室に帰つた。

部活はさすがに休んでチカの部活の見学に行つた、相変わらず男達が大騒ぎして若干後悔もある、でもチカの部活してるところをまともに見るのは始めてなんだよな、チカもツバサもヒノリも俺には気付いてないらしく声を張り上げて練習してた、何か男子と変わらない気合いだな

「なんや、カイはんもおつたんかいな？」

声の主は探さなくても分かるけどコテツだ、コテツは道着を着たま

まペットボトル片手にやつて来た、多分この様子からすると休憩中だろ、コテツもこの姿だと引き締まつて見えるな

「部活出来ないし帰るに帰れないから見学、コテツは休憩中?」

「そやで、道場と体育館近いさかいに毎日来とるんや。調度ええ、休憩に入るで。ツバサ!」

コテツが叫び出した、みんなこっちを見てるけどおかまいなしにコテツとツバサは騒いでる、チカは俺がいることに気付いたらしく俺に手を振ってきた、俺も軽く振り返した。

練習が終わつて全員が集まつた、俺の退院祝いということで遊ぶ事になつた、遊ぶつて言つても焼き肉屋で大騒ぎするだけだけど、高校生には出費がキツイから食べ放題だけね。

俺らはとりあえず席について乾杯、当然ジューースでだけどね

「ではみんなん! カイはんの退院を祝つて……」

『乾杯!…』

店内に響き渡るくらいの大声で言つたあとみんなで周りに頭を下げた、コテツはいつの間にかいなくなつて戻つて来た時には両手に皿を持つてた、しかも普通焼き肉は肉が綺麗に並べられて出てけるけど、これは山盛りだ

「こつちがカルビで、こつちがハラミや、この店潰す勢いで食つて!」

俺は白米が欲しい気分だつたけどこの肉を食べきるタメに我慢した、みんな思い思いに焼いて食べて、よく動くツバサとコテツは通路側、俺とコガネは壁側、その隣にチカとヒノリといつ具合だ

「そういえばカイ、何で昨日遅かつたんだよ?」

コガネの不意打ちに俺とチカは口に肉をくわえたままフリーズした、本当の事を言つたらヤバい、でも今のテンパつた俺の頭で考へるには最適な言い訳が出てこない

「夜遅くつて、わいらと別れたのは日が沈む前やつたよな?」

「そうなのか？昨日つていうか今日の午前2時に帰つて來たぞ」「チカチカもだよ！ビックリしたけど僕眠かつた寝ちゃつて聞けなかつたんだよね、今思い出した」

ヤバい、ココでぶつちやける勇氣は持ち合わせてない、いつかバレるけど今はその時じやない

「不純な予感」

「ヒノリ、違うから」

「じゃあ説明してもらいましょか？」

「チカチカ、僕を裏切つたの？」

「言い逃れは良くねえな」

「カイ……」

チカが目で訴えてくる、逃げ場はが無い、この場で白状すべきか、それとも押し切るべきか

「チカが泣いてなだめてたら時間がかかっちゃつて」

「それで深夜まで？」

「目が真っ赤なチカを帰す訳にはいかないだろ、それにたまには一人の時間を楽しませろよ、コガネとヒノリも楽しんだんだから」

「そうやでお二人はん！昨日はどうやつたんや？ちゃんと報告してもらわなあかんで」

馬鹿が一人いて助かつたな、コテツとツバサの注目がコガネとヒノリにいったよ、何とか危機回避。

トイレでの事だつた、俺が入つた後からコガネが入つて來た、何をするでも無く洗面台に寄りかかつてゐる

「この揉み心地はどうだつた？」

「案外良かつ……、つてヤバ」

「残念でした。カイもついに卒業か」

「頼む！誰にも言わないでおいて！」

頭の上で手を合わせて必死にたのんだ、完璧誘導尋問に引っかかつた、コガネにしては考えたのか俺が迂闊だつたのかは分からぬけ

ど、バレた事は確かだ

「言いふらすタメに聞いたんじゃないから」

「ホントに？」

「当たり前だろ、脅しの種には使わしてもらうけど」

「卑怯者」

「別に使えなくしても良いんだけど、そこは俺の良心なんだけどなあ？」

クソオ、コガネに秘密を握られた、いつかはバレるけどココまで早くバレるとは、我ながら馬鹿だと思つよ

「どうぞ脅しに使って下さい」

「ハハッ！行くぞカイ」

でも知られたのがツバサとかコテツじゃなくて良かった、ヒノリに知られても何となく怖いな、案外コガネがベストだつたりして、でも知られた時点でベストじゃねえな、ベターだ

## 青への疑惑（前書き）

今回もチカラ日線で話を進めていきます

カイは最近やつと怪我が完治した、部活も出でるし元氣も戻つて来てるそんな今日この頃、外は寒くなつてきてもうそろそろ秋も終りそう、今頃島の山とか綺麗な紅葉なんだろうな、東京は木が少ないのでわざわざ見に行かないとダメなんだよね、でもわざわざ葉っぱを見に行くのも馬鹿馬鹿しいよな。

昼休み、アタシとカイはデザートを買いに購買にいた、残り物には福がある、生徒が退いた後に残つた物でもたまには美味しい物があるんだよね、今日もそんな収穫があつた

「これ美味しい！」

「…………抹茶プリン？なんかオヤジっぽい」

「うるさい、アタシの勘は外れないからね。おばちゃん、これ頂戴！」

アタシは抹茶プリンを、カイはソーダーゼリーを買って屋上に向かつてた、一階の廊下を歩いてる時だつた、遠くの方からスカート振り乱しながら走つて来る女人、あんなに走つたらパンツ見えちゃうけど良いのかな？そんな事を考えてるとアタシは気付いた、あの人力車に向かつて走つて来てる、そしてそのまま飛び付いた

「カイ…………！」

「うわっ！何だよ！？」

女人はカイの首に腕を回して上目使いでカイを見る、つてか顔近いよ、カイは女人をぼーっと見てる

「…………はあ！？何でお前がココにいるんだよ！？」

「何でつて、ほら」

女人は自分の制服をカイに見せた、当然の事ながらうちの学校だ、それにしてもあの女人綺麗だな、綺麗な髪の毛には今流行りのウエーブがはいつてるし、顔はパーツ単位で綺麗、アタシなんて足下にも及ばないくらいだよ、それにさつきからカイの首に腕を回して

るからパンツが丸見えだし、ってかカイはアタシの彼氏なんだけど、カイも少しは嫌がつてよ

「お前ココの生徒だつたのかよ?」

「そうよ。カイも大人っぽくなつたわね、それに髪も伸びたわね」

最後は若干飽きれ気味に言つた

「伸ばしてんのだよ」

「カイ、この人誰?」

アタシは思わず横から口を挟んでた、別にアタシがカイの彼女なんだから遠慮すること無いよな、むしろ突き飛ばすくらいの事はしても良いと思う、でも、カイが嫌がつて無いのを見るとアタシの方が邪魔してるように思えてくる、カイは女人の人に簡単に気を許すような性格じやないのは知つてる、しかもアタシ以外の人が意図的に触れようとする怒るし、そんなカイが何で?

「コイツは.....」

「ええと、カイの彼女の潤間さんだつけ?」

「はい」

「カイがお世話になつてます」

「別にお世話なんてしてません」

アタシと話してゐる時も女人の人はカイから離れない、アタシは思わず目線を反らしながら話してた、カイは離すどころか倒れないように支えてる、カイに裏切られた気分だつた

「カイと貴方はどういう関係なんですか?」

「少なくとも今の潤間さんとカイよりは深い関係だつたわよ」

もしかして元カノ?でも元カノだつたら振りほどいても良いのに

「毎朝手を繋いで登校してたし、枕元で好きつて囁いてくれた事も何度もあつわね、少なくとも潤間さんはカイの事は深く知つてるわよ」

アタシはめまいがした、カイはアタシに嘘をついてたんだ、それにこの人の自信、もしかしてカイはまだこの人の事好きなのかな?それはそうだよね、あれだけ愛し合つたんだから、簡単に別れるなん

て無理だよね

「…………… カイ」

「チカ、誤解だつて」

「じゃあ何？この人の言つた事が嘘だつたつていうの！？」

「それは……………」

「否定出来ないんだろ！？最低！」

アタシは泣きながら走つてた、カイは追つてこない、カイは何も否定しなかつた、やつぱりあの人の言つてる事は全部本当だつたんだ、あれだけ綺麗な人に勝てる訳ないだろ、カイの馬鹿。

アタシはその日そのまま早退した、ツバサの家に戻つて涙が枯れるまで、声が出なくなるまで泣き続けた、カイからの電話がうるさいから携帯の電源は切つてある。

次の日も学校に行く気にはなれなくて休んだ、皆勤賞狙つてたのに、今日はツバサも休んでくれた、アタシは断つたんだけどツバサは一度言い出したら聞かない性格だから

「で、何があつたの？僕で良ければ相談にのるよ」

「カイの元カノが来て、しかもカイは抱きつかれても嫌がらないんだ、それどころか転ばないように支えてたんだよ」

「カイつち最低！」

ツバサが怒つて、アタシは怒る気力も残つてないよ、カイは浮気なんてしないつて信じてたのに、浮気じゃなくてもあんなの見せられたら信じられないよ

「でもチカチカがファーストキスの相手なんでしょう？」

「それが嘘かもしれないの」

「嘘！？」

ツバサは机を強く叩いて身を乗り出してきた、アタシは思わずのけぞつてそのままツバサを押し返した、ツバサを落ち着かせて自分の心も落ち着かせる

「女人人が言うには、…………… 何回も枕元で好きつて囁いて

たらしい

「それつてもしかして？」

「カイは女人の人を抱いたんだよ」

ツバサは顔を真っ赤にしてフリーズした、アタシもこんな話をしてるせいか顔が熱い。

カイとアタシが初めてキスをした時、あれだけあつさりといきなり出来たのはそのせいかな？ だとしたらアタシは遊ばれてたの

「でも僕にはカイっちがそういう事するようには思えないんだけど」

「アタシもだよ、でもカイはアタシが逃げても追つて来なかつたんだよ、アタシの事が大事なら追つてくるでしょ？ 女の人の方が大事だつたんだよ」

アタシは自分で言つて泣けてきた、アタシがまた泣き始めるとツバサはタオルでアタシの涙を拭いてくれた、アタシはツバサの手を掴みながら泣いてた。

泣き終わつた頃には脳を回つてた、でも何も食べる気がしない、多分今食べても喉を通らないと思う

「大丈夫チカチカ？ なんだかグッタリしてるけど」

「肉体的には大丈夫だと思う、でも精神的にキツイ。ツバサ、これつて失恋だよね？」

ツバサは目を反らしたまま何も言つてくれない、カイの本当の気持ちを聞く事も出来る、でもそれを聞いたら今以上に立ち直れなくなりそうで怖い、学校で会つたらどうしよう、顔も見れないな

「チカチカ、大丈夫だよ、カイっちを信じよう」

「無理だよ、今のアタシにカイは信じられない」

「チカチカ……」

“ ピンポーン ”

家のチャイムが鳴つた、ツバサは玄関の方に歩いて行く、アタシは少し後ろを歩いて部屋に入ろうとした、でも来訪者を見てアタシはその場に崩れ落ちる

「………… カイっち

「ツバサ、チカは…………！チカ！話があるんだ」

玄関にはカイがいた、アタシはその場に崩れ落ちて耳を塞いで目を閉じた、今はカイの顔を見たくない、声も聞きたくない

「辞めて！帰つて！今は何も話す事は無い！」

「チカ聞いてくれ！ホントにあれは誤解なんだって！」

「嫌だ！何も聞きたくないの！お願いだから、…………帰つて」

アタシは力なく腕を床に落とした、自分でも分かる、今のアタシは抜け殻みたい

「チカ、ちゃんと話がしたいんだ、明日、学校に来てくれ」

それだけ言ってカイは帰つて行った、ツバサはアタシの肩にそっと手を置いて優しい声で話しかけてくれた

「カイっち、泣いてたよ。明日はちゃんと話を聞いてあげな、これは僕からのお願い」

アタシは頷く事しかできなかつた、今日一日はカイとの全てを絶つた、電話の電源も切りっぱなし、アタシは心の整理がつかないまま次の日を待つた

## 赤の誤解

ああ最悪だ、完璧にアイツのせいにチカに誤解されたよ、アイツは何も悪くない、俺がハツキリ言えなかつたのが悪いんだけどタイミングが悪すぎる、チカは早退しちやつて理由は聞いてもられなかつた。

言い訳しに来たわけじゃないけど今はツバサの家の前にいる、チカは確実にココにいるはずだ、二人とも学校休んだし、俺は今日いてもたつてもいられずに早退してココにいる、インター ホンを押そうとしてる手は震えてる、チカを傷付けた自分が何より許せなかつた、震える手で無理矢理押した

“ピンポーン”

ハア、押しちゃつた、この先どうなるか分からない、最悪な結果が待つてるかもしれないけど違うかもしれない、案外早くドアが開くとそこにはツバサがいた

「……………カイっち」

「ツバサ、チカは……………！？チカ、話があるんだ！あれば誤解なんだよ」

ツバサの後ろで両耳を手の平で押されて目を瞑つてるチカがいた、力なくその場に座りこんでる、顔色も悪い、俺のせいだよな、全部俺が

「辞めて！帰つて！今はカイの顔も見たくない、話たくない！」

チカの言葉で目の前が歪んだ、頬を熱いものがつたつて下に落ちた、俺は絶望感にさいなまる

「チカ……、明日学校に来てくれ、話したい事があるんだ」

俺はそれだけ言って帰る事にした、涙がとめどなく流れてきて胸が苦しい、チカという存在が目の前から消えていく、チカは本気で俺を拒絶してた、電話の電源も切つてるし、チカまで失つちゃうのかな俺。

家に帰るとそのままコガネから借りてる部屋に入つて泣いた、唯一無一の存在に拒絶された悲しみ、たつた一人にすら信じてもらえない悲しみ、音をたてて崩れ落ちる幸せを繋ぎ止めておけない悲しみ、チカがいない生活なら無くてもいい、チカがいない世界なら俺は生きたくない、チカ、俺を一人にしないでくれよ

“ガチヤン！”

コガネが帰つて来た、今日は部活があるはずなのに早いな、しかも一人じゃない、もう一人誰かいる、こんな姿コガネにも見られたくないのに、その二人は躊躇なく俺の部屋に入つて来た

「カイ、ゴメンね」

そこにはこの事件の根源がいた、俺が見たこともない暗い顔で俺の事を見てる、コガネは近くにあつた椅子に座つた、あの女はテーブルを挟んで反対側に座つた

「カイ、悪い、どうしてもつて言つから連れて來た」

「カイ、私のせいよね？ゴメンね、私も潤間さんに説明するから」「全部俺が悪いんだよ、説明出来なかつたのも、誤解を産んだのも全部俺のせいだ」

「カイはいつもそう！全部自分でしょいこんで、誰も頼ろうとしない！私そんなカイは嫌い」

確かにそうだな、でもこれは俺の問題だ、少なからず他人が原因だつたとしても俺の力不足

「おいカイ、カイとこの人はどういう関係なんだよ？」

「コガネは背持たれに持たれて腕を組みながら言つた、つてかコガネは訳の分からぬ奴を家に入れたのかよ、その他大勢の女子だつたらどうするんだよ

「コイツか？コイツは俺の姉貴」

「はあ！？」

「カイの一つ上の蒼海アオミ、よろしくね」

アオミはコガネに笑いかけた、アオミは小さい頃から自己紹介だけ

はどんな時でも笑顔なんだよな、そのせいで何回か誤解をうんだけど  
「この人はカイのお姉ちゃん！？」でもカイは親に捨てられたんだよ  
な？ならアオミさんは？」

「アオミは高校に上がる時に家出してそれ以来音信不通。そういうえ  
ばいぐら持つていつたんだよ？」

「3000万」

『3000万！？』

俺もビックリした、アオミは家に『これで勘弁してやる』とそれだ  
け残して家出した、親父は通帳を見て笑つてたんだよな

「あのクソジジイにはこれくらい端金でしょ、私はこれでの家と  
は縁を切つたのよ」

「大胆なお姉ちゃんだな」

「困つてたよ」

会うと抱きつくるのもクセだ、中学校でも会う度に抱きついてきたか  
ら慣れただけど、その慣れのせいで誤解されたんだよな

「ならチカちゃんに説明すれば済むだろ？」

「チカは俺と話たく無いって」

再び空気が重くなつた、少しでも話してくれれば誤解は解けるのに  
それすら出来ない、今の俺は最高に無力だ

「やつぱり私のせいだよね？」

「それだけじゃない、ビックリしてチカの事を忘れてた俺も悪かつ  
た、でもあの言い回しは最悪だけだ」

「だつて私のカイなんだもん」

でたよブラコン、アオミは極度の弟好きなんだよな、夜這いしかけ  
られたこともあつたつけ

「カイ、アオミさんに手出してないよな？」

「そんな趣味は無いから、アオミは無理矢理色々な事仕掛けて来た  
けど」

「だつてカイが弟じゃなかつたら全部を捧げたいぐらじよ、そちら  
辺にいる男よりカツコイイし強いし優しい、だからちょっと潤間さ

んに嫉妬したのもあるんだ」

アオミは半端な事はしないからな、一番ヤバかつたのは裸で風呂に入られた時だつたかな、いつの間にか添い寝してるのは日常茶飯事だし、今考えるとかなりヤバい姉貴だな

「とりあえず明日だ、明日チカと話さえすれば何とかなる」

「そうだな、チカちゃんも分かってくれるだろ」

「じゃあ私は帰るわよ、カイ、明日は私も事情を説明する、だから一人でしょいこまないで、私達姉弟なんだから」

アオミは帰つて行つた、少なからずアオミが帰つて来てくれたお陰で楽になつたな、急に現れて台風起こして行つたけど、目があるのも台風だからな、目を抜けたら逆サイドの台風が待つて、弱まつてる事だけしか祈れないな、雨をしのぐ事ばっかり考えてたら鰐ごっこだ、雨を降らせないように俺はなる。

今日はチカが学校に来てるつて噂を聞いた、俺は授業に身が入らないから屋上でサボつて、コガネも今回は俺を一人にしてくれた、今は誰とも会いたくない、自分の気持ちに整理がつかないし万が一の事を考えたら怖い、でも今の方がもつと怖い。

昼休み、俺は4時間目が終る前にチカの教室の前に立つてた、終わつて先生が教室の前のドアから出てくるのと同時に俺は後ろのドアから入つた、周りは気にしてないでチカの前に立つてチカの腕を掴んだ

「チカ、話がある」

チカは何も言わずに俺の腕をふりほどいて俺の後ろをついてきた、途中でアオミも連れて人気の無い学校の花壇の所で止まつた、沈黙は暫く続いて俺は口を開いた

「チカ、とりあえず誤解をうんだ事を謝る、ゴメン」

「誤解つてこの人はカイの何なの？元カノとか？」

やつぱりそつち方面の誤解か、元カノに抱きつかせる程未練がまし

い男じゃないよ

「コイツ、……アオミは俺の姉貴だよ」

「潤間さん、ゴメンね誤解するような事行っちゃって」

チカは俺とアオミの顔を見て険しい顔をした、チカはさつきの疲れた顔から怒りの表情に変わった

「アタシがそんな嘘信じるとでも思つたの？もつとマシな嘘付いてよ…」

そりや嘘っぽいよな、ココにいる人が僕の生き別れのお姉ちゃんです、なんて信じろって方が無理だよ、でもそれを信じてもうタメにアオミを呼んだんだけど

「アオミ、身分証明書出して」

アオミは生徒手帳の中から学校で配布されるカード型の身分証明書をだした、髪は黒いけどこれならいける

「はい」

「…………四色蒼海？」

「そう、それでも信じられないなら、ほれ」

俺はアオミの前髪を上げた、アオミは四色の遺伝から嫌つてたからいつも黒染めしてたんだよな、だから姉弟つて見られない事もしばしば、でも普通の奴らが茶髪にして時間がたつとプリンになる、あれと同じような事が起こるんだよ

「生え際が、青い」

「こんな事が出来るのは俺か、俺と同じ様な遺伝子の奴だけ、これで信じてもらえたか？」

チカの顔が悲しみに変わつて行つた、今日はチカを疲れさせちゃつたな、まだ体力が回復してないハズだ（俺のせいで）、無理させたくないんだよな

「じゃあ枕元で囁いたのは？」

「ガキの戯言、それか無理矢理言わされたか」

「じゃあ抱きついて来たのは」

「アオミは極度の弟ijo veだから、一種のクセだよ

「ゴメンね潤間さん、貴方とカイは恋人同士、私とカイは姉弟、だから私は貴方のお姉ちゃんって事」

「おい、アオミー！」

アオミの奴いきなり変な事言いやがって、顔が熱い、茹でられたタコつてこんな感じなのかな？チカも顔が真っ赤だし、でも笑ってる、チカが笑ってくれた

「あら一人とも、可愛い」

「からかうな」

「…………カイ！」

今度はチカが抱きついてきた、俺は倒れないように抱き寄せた、隣でアオミはクスクス笑ってるし、別にアオミの前ならこれくらいは良いだろ

「お姉さん、カイを頂きます！」

「お姉さんつて、…………それに頂きますって表現的に良くないだろ」

「たまには私にも味見させてね、潤間さん」

「アオミー！」

「良いですよ、それとチカつて呼んでください」

そういうえばチカが敬語使つてるよ、一つ上なら躊躇なくタメグチでいくチカが敬語使つてる、新鮮だな、俺がそんな事を考えてると左にチカ、右にアオミがいた、一人の脣がいつの間にか俺の頬に当たつてる

「チカはともかく何でアオミまで！？」

「良いじゃないほつぺにチューくらい、それともお姉ちゃんにチューされて興奮しちゃつた？」

「しねえよ！」

「じゃあアタシのキスで興奮した？」

誰かこの二人から俺を助けだしてくれ、チカの誤解が解けたのは良いんだけどこれは困る、しかもチカがアオミの事お姉さんだつて、なんか現実味がありすぎて怖い、チカとは仲直り出来たし、アオミ

は帰つて來たし、  
一件落着つてか。

俺はチカとアオミと帰つてゐる、チカはともかくアオミは無理矢理着いてきた、部活にいきなり来て俺をラチろうとしたけどチカだけは道連れに出来た、左手はチカと手を繋いでる、右腕にはアオミがしがみついてる、そんでもって視線が痛い、確實にチヤラ男に見られてるし、陰口言われて腕を振り上げようとしても腕が動かない。チカを家まで送つて行つてアオミを送ろうと思つた、でも俺アオミが何処に住んでるのか知らないし

「ねえ、何処に住んでるの？」

「すぐそこのマンション」

「アオミ一人で？」

「そうだよ、バイトしながらあのクソジジイの金切り崩して生活してる」

俺は誰かの世話になつて、新しい家族を見つけて、そんな事しててる間にアオミは一人で苦労してたんだな

「彼氏とかはいるの？」

「いないわよ、カイが弟だとそこら辺の男はダメ男にしか見えないの。唯一惚れた男は彼女いるし、今はいないし」

俺はなんとなくその人物が絞れた、つてかこれつて運命？家族同士が結婚とか笑えるし

「アオミが惚れたのつてユキ？」

「何で分かつたの！？」

やつぱりそうか、俺とアオミは人の好みだけは似てるからな、親嫌いもその一種、アオミも友達を作ろうとしなかつたし、彼氏がいたつてのも聞いた事がない

「該当人物がそれくらいしか見当たらぬから」

「いや、他人に興味を持たないカイが何でユキくんの事を知つてゐるの？」

それから、全く説明してなかつたな、今の俺の状況とその後を。

俺はアオミが家を出ていった後の事を全部話した、当然ユキが俺の家族だつて事も、俺が親から捨てられた事も、アオミは最初は怒つてたけど今は笑顔だ

「カイもアイツらから解放されたんだ、よかつたね。それに、ユキくんがカイのお兄ちゃんだったなんて、私は離れた家族に恋してたんだ」

「今はいなけれどな」

「そうね。あ、ここが私の家よ」

かなりの高層マンションだ、自動ドアを入ると即オートロックがある、アオミは手慣れた手付きでカードを溝に滑らした、電子音をたてるどアオミが俺の手を掴んだ

「カイ、行こ」

「俺はココで……」

「少し話がしたいし家に上がつてよ。ね、良いわよね?」「

「しようがねえな」

俺はそのままマンションのオートロックをくぐつた、一階はロビーみたいになつていて、しかもかなり真新しい、本当にココに住んでるのかよ、高校生が住むような所じやないよな

「スゲエマンションだな」

「これは私の貯金も合わして買つたんだ」

「買つたって、どうやって?」

「お母さんだけは私の居場所知つてるので、お母さんに色々と手続きして貰つたんだ」

そういう事か、お袋は親父といれればそれで良いつて感じの人だからな、邪魔者が消えるなら何でもするのか。

俺とアオミは話ながらエレベーターに乗り込んだ、アオミが押したボタンには1-4と書いてあつた、かなり上に住んでるんだな

「やつぱりクソだな」

「そのクソを利用してやつたのよ、クソジジイは知らないしあ母さんにはカードキーは渡してないから」口には来れないの」

「にしてもアオミの話を聞けば聞くほど俺らの親はクソ親だな」

「これは自惚れかもしれないけど、アオミには俺しかいなかつたんじやないのか？俺も正直アオミがいなくなつた時はショックだつし、今まで以上に荒れたな」

エレベーターが目的の階につくとアオミは俺の手を引っ張つて右に行つた、まるでホテルみたいな廊下を更に左に曲がつた、少し歩くとアオミは停まりさつき使つたカードキーを出して溝に滑らした

「どうぞ、私の家に」

「お邪魔します」

中に入るとその大きさにビックリした、とりあえず女子高生が一人で住めるような家じやない、部屋は左右に二つとリビングダイニングが一つ

「……………スゲエ」

「ちなみに私以外に入つたのはカイが初めてよ」「良いのか？」

「当たり前でしょ、上がつて上がつて！」

俺はアオミに手を引かれるまま家に入つた、リビングには大きな白いソファーがあつたからそこに俺は座つた、家具とかもキッチリ揃つてとても一人で住んでるとは思えない整いつぱり。

アオミは紅茶を出して来た、そのままアオミは俺の隣に座つて紅茶を一口飲む

「なあ、料理は俺に作らしてくれよ」

「そういえばカイは料理得意だつたもんね、私はあんまり家には帰らなかつたし親もいなかつたし。良いよ、お願ひ」

俺はキッチンに行つて冷蔵庫の中身を見た、食材はそれなりに揃つてゐる、ゴミ箱にコンビニ弁当とかは無い、冷凍食品はないし調味料もある程度はあるつて事はまともな食事はとつてゐるんだな、少しは安心したな

「まともな食事はとつてゐるんだな」

「当たり前でしょ、料理くらいは出来るわよ、カイには負けるけど今日は調度豚肉もある事だし、うが焼きで良いか、これならパパッと作れるし野菜を付ければましな物になるだろ。

アオミはテレビを見ながら紅茶を飲んでる、久しぶりの姉の背中が何となく淋しく見えるのは気のせいかな？ たまにはココにも来てやるか。

俺達食事を食べ終つて、片付けも済ましてテレビを見てる

「カイの料理おいしかつたわよ」

「そう、ありがとう」

アオミはテレビを見てからずっと寄り添つてくる、昔からベタベタすることはあつたけどなんか多すぎる気がする

「カイ、私カイがあの学校にいるつて知つた時嬉しかつた」

「俺はビックリしたよ」

「私ね、親友はいたよ、でも友達は少なかつた、カイなら分かると思うけどあの馴れ合いみたいのが嫌いなの」

なんとなく分かる、俺も俺の中での友達は少ない、周りは友達だと思つても俺にとつてはただの知り合いに過ぎない、これでも進歩した方だけだね

「悩みを話せる親友は一人いたの、だけど一人は学校辞めちゃつたんだ、カイなら察してると思うけど私の親友の一人はマミ」「

マミ」「つてマミ姉の事か、つてことは親友の彼氏に惚れてたのかよ、それとも親友の彼氏だから諦めたのかな

「でも一人とも親友に過ぎない、悩みも奥深くまでは話せないしそこまで押し付けたく無かつた、だから溜め込んでた部分も少しあつたの、そんな時にカイの顔が一番に浮かんだんだよ、カイがいたら少しは悩みも話せただろうな、つて」

やっぱリアオミは辛い思いをしたんだな、俺がもう少し早くアオミ

を見付けてれば楽にしてやれたのに、アオミがいなくなつて自分は不幸だと思つてた俺がムカつく

「カイなら何でも話せる、一人で暮らしてゐる時に初めてカイの大きさに気付いたの、何回もカイに電話しようとか会いに行こうとか思つてた、だけどカイに嫌われてたらどうしようとか思つちゃつたんだよね、私一人で逃げて、カイを置き去りにしたまんまで、最低なお姉ちゃんなんだよね」

アオミは泣いてた、いつも気丈に振る舞つて弱味を全く見せないあのアオミが、今は俺の肩で声を上げて泣いてる、そんだけ辛かつたんだ、アオミは自由になるために自分の心を捧げた、だから今度は俺がアオミの自由を守りたい、これはせめてもの弟に出来る孝行かな「俺はアオミの事を嫌いになんてならないよ、アオミはあの時の俺が唯一信頼出来た人だ、アオミには幸せになつて欲しいんだ」「でもカイが幸せじゃなきゃダメだよ」

「俺は今、最高に幸せだよ、最高の彼女はいるし、最高の親友達がいるし、何より最高の姉貴がいる、だから今度はアオミが幸せになる番だろ」「大人になつたね」「マセてるだけだよ」

アオミは真つ赤な目だけど、最高の笑顔で笑つた、俺には分かる、それが頑張つてる笑顔じゃなくて心の笑顔だつてことが。

俺とアオミは空白の一年半を埋めるように話した、樂しかつた事、辛かつた事、悲しかつた事、嬉しかつた事、話しても尽きないくらいに話題が出てきた

「ヤベエ、少し話しそぎたな、俺もう帰るよ」「もう帰るの？泊まつてけば？」  
「明日も学校あるし」

俺は立ち上がろうとした、でもアオミに腕を掴まれて立ち上がれず

にそのままソファーに逆戻

「ねえ カイ、一つ私は隠してた事があるの」

「何? 彼氏いましたとか?」

「違う、私、カイが捨てられたこと知つてたの、夏休みが終わつた頃にお母さんから電話があつたの、カイを捨てたってね、その時お母さん泣いてたよ」

「言いたいのはそれだけか?」

俺はアオミがまだ言いたそうな顔してるのが分かつた、別にそんなのはどうでもいいし

「この家つて他に二部屋あるでしょ、あれは私の分とカイの分なの、高校に入る前にカイを口口に呼ばうと思つてたんだけどカイとは音信不通になっちゃつて。言いたいのは、一緒に暮らそう」

俺は嬉しかつた、やつと血の繋がつた家族とまともな暮らしが出来る、それにコガネの家にいつまでもいる訳にはいかないし、答えが出来るのにそんなに時間はかからなかつた

「アオミが良いんなら良いよ」

「ホントに! ? カイ、一緒に住んでくれるの! ?

「住んであげるよ」

「やつたー! 」

アオミは勢いよく抱きついて来た、俺はそのまま押し倒される形になつた、でもアオミの満面の笑を見るとどうしても責める気にはならない

「じゃあとりあえず今日は帰るから、明日荷物とか持つてくねよ  
「分かった」

俺は帰り道アオミから手渡された物をながめながら歩いてた、アオミは帰り際にスペアキーをくれた、これで俺はあの家に自由に出入り出来る、やつと氣を遣わいで暮らせるよ

俺は弁当を食つてる時にとっても重大な事を言つ事を忘れてる事に気付いた、「コガネとチカ以外には大した二コースじゃないけど重大発表しますか

「あのさ、俺引つ越すから」

コテツとツバサは恐らく聞こえてない、ヒノリは全くもつて興味がない状況だ、コガネとチカはフリーズした  
「俺、アオミと一緒に住む事にした、コガネの家にずっと」「るのは迷惑だしアオミの願いだし」

「ふうん」

コガネは案外さつぱりしてた、そりやそつだよな、別に人が入るより出た方がいいもんな

「落ち着いたらチカに場所教えるよ」

「うん」

「俺らには教えてくれないのかよ?」

「コガネに教えるとアオミに手を出すかもしれないじゃん」

俺は冗談っぽくヒノリを見ながら言つた、ヒノリは冷静を装つてるけど額には青筋がたつて、オーラが怖い

「ヒノ、カイのお姉ちゃんは綺麗だけど別に好きとは別だから」

「…………綺麗なんだ」

墓穴を掘つた、更にコガネの居場所が無くなつて、俺は笑いながらそれを見てるけどヒノリに睨まれて笑えなくなつた

「カイ、コガネを頼んだよ」

「大丈夫だつてヒノリ、アオミは…………」

「プラコンだろ、それにカイはシスコンと」

コガネに言葉を遮られた、しかも俺がシスコンつてなんだよ、唯一信じられる血縁者を大事にして何が悪い

「カイ、シスコンなの?」

「チカが一番だから大丈夫だよ、それにシスコンになる程一緒にいなかつたし」

「だからなつたんだろ？あんなに綺麗な人いなからな」

「…………そんなんに綺麗なんだ」

「ゴガネが更に墓穴を掘つた、なんか最近ゴガネの権力がだんだん低くなつてきたな、それともヒノリが強気になつてきたとか？」

放課後、部活にいかないで引越しすることにした、最近部活行つてないな、そろそろ体も鈍つてきたし行きたいけど忙しくて。荷物はそんなにゴガネの家に持つて来てないからすぐに片付いた、全部持つて行つて貰つてゴガネの家の鍵を閉めて鍵はポストに入れおいた、外にはアオミが立つている

「なんだ、来てたなら手伝えよ」

「今来たところだから、それよりもう終わつたの？」

「終わつたよ、忙しいのは嫌だから夜くらいに届けてもらつ事にした」

「なら今暇だよね」

言うと同時に俺の腕を掴んできた、最近俺とアオミが一緒にいるから知らない奴らが付き合つてるつて噂をしてるらしい（ツバサ情報）、俺はどうでも良いんだけどチカにまたオスが群がつてるらしい、俺がホントに浮氣をしてると思つてる馬鹿共だな

「デートしようよ

「デートつて？」

「うーん、渋谷…」

「ダメじゃないけど、アオミつて俺と同じで渋谷とか嫌いだったよな？」

「前はね、最近は色んな思い出があるから好きだよ」

歩いてる最中も常に俺の腕を掴んでる、とりあえず駅に向かつて歩

いてるから同じ学校の生徒に会つ、大半が驚いてるけど」れを否定するのは見苦しいよな

「みんな私達の事付き合つてると思ってるよ、どうするカイ?」

「どうするつて、俺にはチカだけだし、誰がなんと言おうがアオミは姉貴、チカは彼女、それは不变の真理だよ」

「本当の事だけど何だかチカちゃんに嫉妬しちゃうな」  
アオミは苦笑いを浮かべながら言つた、それに嫉妬つて、頼むから誰かアオミとノイローゼになるくらいの恋をしてくれ、じゃないと本気で襲われる

「カイ、今襲われるつて思つたでしょ?」

「えつ、な、何で分かつたの?」

「カイの事なら何でも分かるわよ」

ヨダレを垂らしながら言わないでくれよ、アオミが言つのが一番リアルなんだから、俺はホントにアオミと同居して良いのか?

渋谷の改札を出るとすぐ人に群れが目に入った、高校生つて生き物はなんでこんなに集まりたがるんだよ、俺も一応高校生だけどその心が理解出来ない

「クレープが食べたい」

「食べたいって言われても片手で数えられるくらいしか来た事ないから、マミ姉と何回も来たんだろ」

「しようがないわね、来て」

アオミは俺の腕を引っ張つて人ごみに切り込んで行く、これがチカだつたらとか思つちやつたりする

「チカちゃんじゃなくて『メンね』

「べ、別に」

これは俺の事を知つてるつてよりも心を読んでるだろ、怖い女だな

「『』が美味しいんだよ、カイは何頼む?」

「アオミに任せる」

アオミは何か分からぬけど適当に頼んで俺に手渡した、アオミには悪いけどこれくらいなら俺でも作れるし

「カイ、次はどこに行く?」

「アオミに全部任せる、俺全然この街の事分からぬから」「じゃあカラオケに行こう」

ちょっとまで、今俺にとつての永遠のライバルの親戚の名前を口にしたよな?これだけは頂けない

「アオミ、俺の成績表見たことないのか?」

「無いよ、どうせオール5でしょ?」

「残念、音楽以外は5だよ、音楽は2、1をとつた事もあつたな」アオミの顔が青くなつた、俺は音痴なんてもんじゃない、自分で分かるくらい酷い、ぶつちやけ歌わない方が歌つてるつて言われたくらいだ、自分で言つのはなんだけど完璧な人間なんていないよ「じゃあプリクラ撮る?みんなにカイの事自慢したい」

「弟としてだよな?」

「そこ伏せちゃダメ?」

「ダメっていうか無理、事実を伏せるな」

この姉貴は釘を刺さないと何をしてかすか分からぬ、つてか四色が同じだから馬鹿じやないとひとつからぬだろ、まあ念には念をだ「じゃあココで良いわよね?」

「良いよ」

つてか渋谷つてプリクラ多いな、札幌のローソン並だよ(札幌ではローソンが1ブロックに一つのペースである)。

プリクラ専用の店に入ると男人口が少ない、それのみんな俺を見るな、確かに変な髪型だし髪の色だけど……、そつちじやないような氣もしてきた

「何でみんな見るんだよ?」

「それはカイがカツコイイからじやない?それにそんな真つ青な髪の毛にサムライヘアーしてたら誰でも目立つわよ、私は勝ち組気分

だけどね

「勝ち組も何もアオミは俺の、姉貴、だる」

‘姉貴’の文字を強調したら全員の目が変わった、これはシスコンを見る軽蔑の目じやない、獲物を狙うハイエナの目だ。

でも俺も馬鹿じやない、左手で顔を搔くふりして薬指を目立たせれば……、女達は舌打ちと共に散つた

「あれ？みんなカイに興味無くなつたみたいね」

「コレ。今時付き合つてもココにリングはするもんだからね、ハイエナ用の無言警告つてとこかな」

左手を見せると呆れた感じで機会の中に入つて行つた、俺も後を追つてカーテンをぐぐる。

アオミの家に着いた時には荷物の到着時間の10分前だつた、思わず長居しそぎたな、今日はアオミが料理を作つてくれるらしい。

俺はテレビを見ると荷物が届いた、荷物つて言つても段ボール3箱に布団だけなんだけね。

俺は自分の部屋にそれを放置してキッチンに向かつた、アオミの飯を食うのは初めてだから心配なんだよな、大丈夫だと思うけど何かいてもたつてもいられない

「大丈夫か……、つて、はあ」

「見ないでよお」

俺は見た瞬間呆れてため息がでた、今日の料理はハンバーグなんだけど形に問題有り、俺だけじやないと思うけどハンバーグは橢円型だと思う、でもアオミが作つてるハンバーグはハートだ、これはグラコンを卒業したな

「まあ美味ければ文句は言わないよ、不味くても形が普通なら文句は言わないつもりだつたけど、後者は前言撤回だな」

「大丈夫よ、私の愛が入つてるから、不味いなんて事は無いわよ」

新婚夫婦でも言わないようなセリフだよ、一週間もすれば飽きるだろ、つてか飽きる、頼むから飽きてくれ、じゃないとチカに会わせる顔がない。

アオミの料理がどんどん食卓に並べられてく、ハンバーグの形以外は良いな、味はともかくバランスは最高だよ

「いただきます」

俺はアオミの視線が気になるけどハンバーグを一口口に入れただけ

「美味いじゃん、少し見直したよ」

「ホントにー? カイに言つてもらえると嬉しい。やつぱり私の愛が入つてるから?」

「いや、それはない」

即答、他人の料理で美味いって感じるのはヒノリくらいだったけど、アオミも中々だな

「アオミは食べないの?」

ボクつと俺の顔を見てるアオミが心配になつた、全く食事に手をつけないで見学してる

「カイの食べてる顔見てるだけでお腹いっぱい」

「なら貰つちやうよ」

「それはダメ! やつぱり腹ペコ」

アオミは食べ始めた、つてか今気付いたけどハンバーグのサイズがデカイ、俺のがデカイ理由は分からなくも無いけどアオミのもデカイ、それにご飯は山盛り、女子高生の食事じゃないよ

「アオミつて太らない?」

「何で?」

「いやそんなに食つて、飯の量なんて俺より多いだろ?」

「お代わりするからまだまだ食べるわよ」

呆れた、食い意地と弟好きだけは天下逸品と。

俺は疲れたから先に風呂に入らして貰つて、アオミから先に入る事を勧めたけど断固拒否された。

俺はゆっくりつかつてると脱衣所にアオミが、行動が明らかにおかしい、体を屈めたり、もしかしてあの馬鹿姉貴

「アオミ！もしかして一緒に入ろうとか思つてないよな？」

“バレちゃつた？”

ドア越しに聞こえた、つてか本当に入ろうとしてたのかよ

「風呂くらい一人で入れ」

“はい”

なんか物分かりが良いな、アオミはそのまま脱衣所を出て行つた。俺は早めに風呂から上がってソファーに座つてアオミの所に行こうとした、でもおかしい、もしかしてコイツ服着てないのかよ

「あ、アオミ？」

「カイ！」

やつぱり、俺は急いで顔を背けて頭から被つてたタオルをアオミに投げた

「早く風呂に入れ、風ひくだろ」

「あら氣にしてくれたの？それとも恥ずかしいの？」

「良いから早く」

アオミはそのまま風呂に行つた、俺は暫くテレビを見てから寝よう。

アオミが風呂からあがつて来る前に俺は自分の部屋に行つて布団を広げた、横になつて目を閉じよつとした時、アオミが入つて來た

「頼むから一人で寝て…………」

アオミはバスタオル一枚でそこに立つてた、俺は慌てて部屋の隅まで逃げた、本氣でこの家はヤバい

「カイ、一緒に寝よう」

「無理無理！ 服着ろ！」

「ねえ、寝ようよ」

「マジ無理だから！」

「お願ひ」

「分かつた！ 服着たらな、一緒に寝るだけだぞ！」

「やつたー！」

アオミは走つて逃げて行つた、あれだけあの姿で迫られたら拒否出来ないよ、つてかホントに恐ろしい姉貴だな。

アオミはパジャマに着替えて俺の部屋に入つて來た、チカだつたら大歓迎なんだけど、アオミは姉貴だぞ、さすがにヤバいだろ

「アオミ、誰にも言つなよ。チカにも、友達にも、知らない人にも誰にもだ、それが約束出来ないんならこの話は無しだ」「は～い」

アオミはそのまま俺に飛び付いて來た、俺は押し倒されるような感じで布団に倒れる、そのまま隣に置いたけど、怖くて眠れない

「何も手を出すなよ」

「は～い」

俺はアオミに背を向けて布団に入つた、アオミは抱きついて來た、退けようとしたけど寝息をたててゐるのを聽いてできなくなつた、寝るの早いな、俺は静かに向き直るとアオミ顔が俺の胸の辺りにある、寝顔は可愛いな。

俺はいつの間にか眠つてた、嫌だけど安心出来る不思議な存在だな

今は男三人で暑苦しく買い物してます、それもこれも、今日は12月18日、超ビッグイベントを一週間後に控えて気付いた俺達。去年と被るのは極力避けたい、それにチカの場合誕生もあるんだよな、だから迷つてんだよ、ネックレスと何かが良いんだけど、その何かが思い浮かばない

「コガネ、何か無いの？」

「俺に聞くな、ヒノの趣味は分かってもチカちゃんの趣味は分からぬもんで」

「確かに。コテツは…………、バスだな」

「何でやねん！」

「だつてツバサと趣味が同じとは思えないから」

『確かに』

ああ悩む、こんなにチカにあげる物で悩むなんて思わなかつた、何か無いのかよ…………、あ、そうだ、そういえばチカ髪留めが壊れたとか言つて安いやつ買ってたな、一いつ回はこれに決まりだな。

俺達は一通り買つて飯を食いにファミレスに入った、商品が運ばれて来て食べながら男の会話といつが、女の子がいる前では話せない話というか、ちなみにあつち系の話じゃないから、まあそんな話をしてた

「ねえ、コガネはんはヒノリはんと付き合つてるん？」

「分からぬけど、告白はビッちもしてない」

「いつも俺らに見えないように手を繋いでるくせに？」

「ブツ！」

食つてたパスタを多少吐き出した、俺とコテツは笑いながらパスタ

を片付ける、コガネは物凄い勢いで水を飲む

「ハアハア、知つてたの？」

「それはなあ……」

「気付くな言う方が無理やで」

「で、最初はどっちから握つたんだよ？」

コガネは母親の血が濃くでた真っ白な肌を真っ赤にして、頬を人指し指で搔いてる、耳まで全部真っ赤

「ひ、ヒノから」

「ヒノリからねえ」

「コガネはんも腰抜やな、ここはコガネはんからいかなあかんやろ」「いや、いきなりだつたし」

「ならキスくらいはコガネからしてやれよ」

コガネが茹で蛸みたいに真っ赤になつた、元が真っ白だから赤さが目立つ。

ヒノリもかなり積極的だな、喋らない分行動で示す男みたいなタイプとか、それともコガネに呆れて

「でもどうやれば？」

「俺はノリといふか、勢いといふか」

「コテツは？」

「それがさんざん言つときながらわいもまだやねん、ツバサもあんなさかい、タイミングが無くてな」

コテツがまだ何て以外だな、まあ二人でいるどすつと騒いでるからタイミングが無いのか、ホントに以外

「その前にコガネは自分の気持ちを伝える、十中八九ヒノリはコガネの事が好きだよ」

「どうやつて？」

コガネのその言葉を聞くと、コテツはコガネの隣に行つて肩を組んだ、コテツはコガネの顔を自分に向けた

「ヒノリ、めっちゃ好きやで。……みたいな感じや！」

周りの人々がみんな見てるよ、ホモに見えてるんだろうな、俺はそれ

を客観的に見て楽しんでる、それにコガネは気付いてコテツをの腕をどけた、「ガネはコテツに周りを見るように合図を送る

「ちょっとやりすぎたみたいやな」

コテツはそのまま自分の席に戻った、コガネは恥ずかしいのかまた顔を真っ赤にしてる

「ガネは奥手過ぎるんだよ、たまには自分の欲に溺れてみれば「それが出来れば苦労しないって」

「ガネはヒノリが他の男に持つてかれるとか思つた事は無いの？ ちんたらしてたら足下すべられるぞ」

「幼稚園入る前から一緒にいるど、相手の一拳一動で分かつちゃうんだよね、相手が何を思つてるのかが、だから男が来ても全く興味がないのも分かる、だからヒノが誰かを好きになるなんて思つた事も無かつた、当然俺にも」

そつか、コガネにとつてヒノリは誰よりも自分を知つてゐる人間だもな、コガネはヒノリの事なら誰よりも知つてゐる、だから分かつちゃうんだな、でも自分に對しての気持ちは氣付かなかつたと

「ココからは俺の推測に過ぎないけど、ヒノリはコガネの事をずつと好きだつたんだと思う、でも「ガネはヒノリの、好き」つて部分だけは客観的に見る機会が無かつた、だから「嫌い」とか「ウザイ」には気付いたけど、好き、だけは常に他人に向けられ無かつたんだよ、コガネはそれが男に興味が無いのと勘違いしたんじゃないかな？ヒノリのコガネに対する接し方が変わつた時つてあつた

コガネは顎に手を当てて考へてる、俺の予想だとあるハズだ、ガキの好きと恋愛感情つてのは全く別物だから、気付いた時は絶対に何かが変わるハズ

「多分だけど、中二の頃かな、買い弁だつた俺にヒノリが弁当を持ってきたんだ、それからずっと俺に弁当を持ってくるようになった」「多分それだ、つてかそれなら気付けよ」

「ヒノリはんつて良い女やな」

「今まで何回か家に来て作つてもらつた事はあつたから、なんか

そこまで違和感は感じなかつた

静かに進む恋か、良く言えばクールな恋、悪く言えば奥手な恋、ヒノリもコガネと一緒に相手の事を知りすぎてたんだろうな、勇気を出したのはヒノリの方だけだ

「コガネにはもつたないくらい良い女だな」

「そ、そうかな？」

「何でコガネはんが照れるんや」

「チカの方が100倍良い女だけどね」

『はあ～』

うわあ、物凄い呆れた顔でため息つかれた、自分の彼女の自慢して何が悪い、自慢出来ない彼女だったら別れてるつて。

俺らはフアミレスを出て街を歩いてる、早く帰つても良いんだけど、それじゃつまらないから今に至る。

途中で見つけたデカイゲーセンに入った、4階建てで一回はプリクラが占めてる、俺らはとりあえずパンチングマシーンの前に行つた「ビリは一番にジユース奢りやで」

『却下』

「なんでやねん！」

俺とコガネは顔を見合つた、当たり前の事だろ、ゴルゴ 3に射撃で勝負を挑んでるようなもんだよ

「なんでわざわざ相手の土俵に入つて、賭けをしなきやいけないんだよ」

「…………確かにそうやな、とりあえずやろか」

「ちょっと待つた、俺とカイからやる、コテツからやつたら俺らがショボくみえる」

コガネはコテツを押し退けて金を入れた、グローブを左手に着ける、そういうえばコガネは左利きなんだよな。

サンドバッグみたいな柱が起き上がりつて来て、画面にスタートの文字が出た、「ガネは軽く助走を付けて二重円の真ん中を殴る、ズドン」という音と共に画面に文字が浮かび上がった

『143・3kg』

「中々やるじゃん、『ガネ』

「ケンカ慣れかな」

俺はコガネの次にスタンバイした、柱が起き上がり、俺は思いつきり殴つた

『144・0kg』

「俺の勝ち」

「別に勝負してないし」

「次はわいやな」

コテツはグローブを着けずに構えた、肩幅に足を開いて体をを少し沈める、息を吐いて柱を見た

「ハツ！」

かけ声と共に殴る、俺達のズドンとは違つて、ドスンという重い音が響いた

『163・8kg』

『.....』

俺らは口が空いたまま黙つてしまつた、絶対コイツにはケンカ卖れない、つてか絶対に殺される

「まあまあやな。あれ、どないしたんお二人はん？」

「凄すぎ」

「ガネは全く声が出ないらしい、ギャラリーも集まつて來たし、俺らだけの記録でも凄いと思うよ、でもコテツのせいできれが薄れた

「コテツ、コガネ、早く出よ、見られるのは居心地が悪い」

「ホントだ、出るか」

「なんやお二人はん、わいはもつちよい立たちたいんやけどな」

そんなコテツを置いてギャラリーの中から出た、コテツは暫くしてからギャラリーに愛想振り撒きながら出てきた。

俺らは一つ上の格ゲーのコーナーに行つた、これは「ガネからのお願い、なんか「ガネはゲームしないタイプだと思ったのに、以外だな

「ちょっと見てろよ、ココのレコード全部塗り変えてやるから」

「格闘系のゲームにレコードなんて無いだろ」

「…………まあ、良いから見てろ」

「馬鹿や、馬鹿やで」

「コテツがクスクス笑つてゐるのを睨みながらゲームを始めた、反対側に人がいて対戦するらしい、素人だから何が凄いのかよく分からないけど、「ガネが異常なくらいに強い事は分かる、あつという間に相手が何も出来ないまま終わつた

「どう? 強くね」

「確かに強いけど、自慢出来る特技じゃないよな」

「そうやな、ゲーム得意言われても引くで」

「つるせえな」

その後も「ガネはゲームをやりつけた、俺とコテツはついていけど近くのベンチで休戦、ジュース買って「ガネの方を見てる、「ガネの周りにはかなりのギャラリーがいる、今回は男だけじゃなくて何故か女の子も

「「ガネはん戻つてこれるん?」

「知らないけど、俺らもハイエナに狙われてるぞ」

「コテツに顎で知らせた、少し遠くに女の子がいる、さつきコテツが愛想振り撒いた時に連れた奴らか、コテツはそれに気付いて手を振つた

「ねえ、今私に手を振つたよね?」

「良かつたね、私は隣の人の方がタイプだけど」

「もう一人はいなくない? 私的にはあの金髪の人人が良いのに」  
「最悪だよ、コテツのせいで3人釣れた、みんな可愛いんだろうけど、全く興味がない、コテツもチラチラ見て遊んでるだけ、最悪な男だな

「女の子で遊ぶな、後でめんどくさい」

「わいは女の子とは見てないで、ただのギャラリー や」

最低、社交的もここまでくると犯罪だよな、しかも彼女持ちだし、ツバサ以外は男も女も関係ないんだろうな、コテツにとつては「多分真ん中の子は後で来るぞ」

「何で？」

「コテツが遊んでるから」

「しゃあないやん、あつちが見とるんやもん、シカトしたら可哀想やん」

多分これが本心だ、人が良すぎるのも良くないな、頭が悪いからそこまで回らないのか？

コガネがギャラリーの輪から出でるとオマケも付いてきた、ギャラリーにいた女の子だ、なんでここにいるのかは分からないけど、一気に群がつて来た

「コテツ、帰るか」

「そやな」

俺らはあえてコガネを置いて出ようとしたけど、コガネはなんとか追いついた。

ゲーセンを出るまでずっと後ろをつらうられる、多分さつきの女の子三人衆だらうな

「コテツ、やつぱり着いてきたぞ」

「あつちやー、やつてもうたな」

俺らが出ると檻から放たれたように俺らのところに走つて来た

「あのあ……」

「なんや?」

「ほり、早く言いなよ」

「やうだよ、帰つちやうよ」

他の一人が催促してる、コガネは全く理解出来てない、コテツは頭を搔きながらしかめつらをしてる、コテツに話しかけて来た女の

子は顔が真っ赤だ

「これから暇ですか？」

「全然、彼女を待たせてるから、すみまへんな」

「そうですか、すみません」

そのまま三人衆は去つて行つた、コテツにしては案外あつさりして  
るな、しかも嘘ついてるし

「やつてもうたな、今度からは考えなあかんな」

「だから言つただろうに」

「あのお、さつきから話が掴めないんだけど」

蚊帳の外だつたコガネが静かに入つて來た、俺とコテツはコガネが  
ゲームしてゐる時の事を話した、コガネはため息をついて歩き出す

「馬鹿だろ」

「まさかこうなるとは思つて無かつたんや、ただ見てるから返した  
だけやで」

「それがいけないんだよ、悪いとは言わないけど、ツバサ君が可哀  
想だろ」

「…………そやな、今後は注意しちきます」

俺らはそのまま家に帰つた、今日はチカのだけじゃなくてアオミの  
も買つてゐる、だからなるべくアオミには会わずに部屋に行きたいん  
だよな、いつも帰ると新婚夫婦ぱりの勢いで抱きついてくるし。  
そんな俺の心を知つてか知らずか、今日、アオミの帰りは遅かつた

気付いたらあつといつ間に来てた今日、集まつて騒ぐだけだけど、今日集まるつていうそれだけが、大事なんだと思う。今日はクリスマス、こういう行事となると、飯を作らされるのは俺とヒノリ、その他は買ひ出し、何気に俺とヒノリの一人つてのが多かつたりする。

何度も二人で作つた事があるから息は合ひ、去年のダイチより100倍楽だな

「去年まではコガネつてクリスマスどうしてたの？」

「クラスの人を集めて騒いでた」

「ヒノリは？」

「私は違う子達と。でも絶対にクリスマスかイブ、どっちかに会いに来てくれる、プレゼントだけ渡しに」

ヒノリは微笑みながら話してくれた、多分友達と騒ぐよりもコガネにクリスマスという日に会えるだけで嬉しいんだろうな、コガネはあんな性格だから一緒に過ごすのは照れて出来ないだろうし。

ヒノリは多分色々な事を思い出してたんだと思う、いきなり含み笑いしてクスクス笑い始めた

「どうしたの？」

「いや、去年の事なんだけど。コガネ、去年はクリスマスの夜になつても来なかつたんだ、私が諦めた時だつた、いつもみたいに電話がかかるつて来て外に出たら、コガネ壁に持たれながら座つてた、コガネの顔を覗き込んだらすつごくお酒臭くて、歩けないくらいに酔つてた」

多分酔つてもヒノリに会うのだけは本能が後押ししたんだろうな、オールして酒飲んで酔つ払つて、フラフラになつてもヒノリだけは、か

「しかもそれだけじゃなくて風も引いてた、半袖でうちまで来たん

だもん。私はコガネに肩を貸しながら「コガネを家まで送つた、その時のクリスマスは「ガネの看病で終わっちゃつたんだ。泊まり込んで看病してコガネが次ぎに気づいたのは、26日の10時だつた、コガネは慌てて時計を見て私に時間を聞いて、そしたら泣きそうになつて私に謝つて來たの、『ゴメン、ヒノのクリスマスを台無しにして』だつて、その時くれたのがこれ」

ヒノリは自分のこめかみにあるヘアピンを指した、コガネもうらやましい奴だな、夜通しで看病してくれる幼馴染みなんていないぞ「じゃあコガネとのクリスマスつて始めて？」

「そうだよ、だからこれでも今は興奮してる」

ヒノリは顔を真つ赤にして、チカがいなかつたらヒノリに惚れてるよ

「ヒノリは良い女だな」

俺はフライパンを振りながらヒノリを見て笑つた、ヒノリは鋭い銀色の眼をいっぱいに開いてフリーズ、何か去年同じ事言つて同じような反応した奴がいたな

「大丈夫だよ、親友として言つただけだから、それ以上でも以下でもない。第一、チカの方が良い女だから」

「呆れた、カイつて何でそんなにチカが好きなの？」

「怒らせたら悪いけど、ヒノリは一目惚れつてしたこと無いだろ。俺もチカに会うまでは無かつた、前にも話したと思うけど、一回精神的に腐つてた時期があつた、その時に出会つたチカは女神に見えたんだ、泣いてるチカの背中を見ただけで死にそくなくらいドキドキした、話しただけで思考回路がぶつ飛んだ、想つただけで心臓が止まるくらい苦しかつた。もう好きとか愛してるとかそんなものじゃない、言つちゃ悪いけどコガネやヒノリ、コテツやツバサ、たとえアオミでもチカを俺から引き離そとしたら、迷わず殺す、チカは俺にとつての太陽なんだ、真つ暗な海の底に沈んでた俺を照らしてくれた太陽」

ヒノリが途中から呆れてるのは分かつた、でも聞かれたから応えた

だけだし、自分でも馬鹿みたいにチカに依存してるのは分かってるけどね

「でもそれってチカを束縛してる事にならない?」

「別にチカが別れたいって言つたら別れるよ、チカがそれを心から願つてるならな」

ヒノリは俺の方を見て首を傾げた、分からぬのも無理も無いとは思うけど、それが俺の考えだ

「でもそれって、少し矛盾しない?」

「チカが拒否したらそれを受け入れる、それも相手を想うつて事だろ、束縛するのはただの自己満足だよ」

ヒノリは黙つたまま窓から外を見た、外は満面の星空、雪は降りそうにないけど星は栄える、寒い時は光が綺麗に見えるからな、チカも同じ空見てるんだろうな

「買い出し遅い」

「不安?」

「チカも女の子だし、二人きりだし」

「俺らもじやん、でも何もない、アイツらも何も無いだろ。それに俺もコガネも、手を出したら後が怖いから」

ヒノリはクスクス笑つて、男つてのはそういうもんなんだよ、別に俺はヒノリに手を出すつもりはないし、コガネが手を出すとも思えない、だから心配するだけ疲れるだろ

「じゃあもしコガネがチカに手を出したらどうするの?」

「ヒノリに手を出す」

ヒノリは顔を真つ赤にして、下を向いちゃつた、俺はヒノリの頭を掴んで、そのままこつちに捻つた

「嘘、コガネには動けなくなるまで手を出すけどね」

「カイが一番モテる理由が分かった」

別に俺には分からぬんだけど、しかも不思議な事言い出すね、これは自惚れじゃないけど、どうせ皆面食いだろ

「勘違いさせてる、私がコガネを好きじゃなかつたら、チカがいて

も好きになつてゐる。心当たりあるでしょ？」

「…………あります」

「コテツに説教出来ないな、普通に接するだけで好きになられたら困るし、でもあのサエでもああだからな、注意しよ

「そんな事言つたらコガネもヤバいだろ」

「何で？」

「コガネの場合話すだけで顔が真つ赤になるじゃん、唯一最初からまともに話せたのはツバサだけ、あれはケンカだけど、顔真つ赤にするのが可愛いらしいよ」

ヒノリは天井を見ながらコガネの事を考へてゐっぽい、顔を真つ赤にして頬に手を当てる

「確かに」

「男はヒノリが無口だからボソッと何か言つだけでヤバいんだって、みんな何してもダメなんだよな」

二人で頷く、何で人は追えないものばかり追おうとするんだろう、コガネは田の前にあるものすら掴もうとしないのに、不思議だよな

## 赤と金の準備（前書き）

今回は「ガネ目線です。」ガネ目線は案外難しかったけど、頑張りました、見てやって下さい。

## 赤と金の準備

真っ赤な短い髪の毛の前髪だけを上げて、体は浅黒い、少し子供っぽい顔立ちだけど、そこら辺の女の子よりは可愛い、それが今俺と買い出しに来てるチカちゃん。

相手がチカちゃんつてのはまだマシだけど、ツバサ君じやないだけ良いんだけど、やっぱリヒノ以外の女の子つて慣れないんだよな、コテツとツバサ君はやる事があるから、つて俺らに押し付けてきやがつたし、それにチカちゃんつて男っぽいところあるだろ、更にやりづらいんだよな、勝てないんだよな

「コガネ、何ボ～つとしてんの？」

「別に」

今は飲み物を買つてる、女の子に持たせる訳にはいかないから持つてるけど、チカちゃんの背中つて案外大きく見えちゃつたりする「なあ、こんなにジユースぱっかりいらなくなない？」

「じゃあ何？お茶とか？」

「酒」

「お酒！？」

チカちゃんが大声で叫んだから思わず口を塞いでた、つてかチカちゃんに触れちゃつた、カイはこれくらいじゃ怒らないと思うけど、俺が恥ずかしい

「だ、だから、やっぱリ酒は必要だろ」

「アタシ飲んだ事無いし、カイも飲んだ事無いと思つよ」

「あれば飲むから」

俺はジユースを半分近く返して酒を適当に買い物籠に入れた、チカちゃんは若干不安そうな顔をしてるけど、大丈夫大丈夫、それに梅酒とかならそんなに酔わないし。

ある程度飲み物を買つた後は、いろいろパーティーグッズ、コテツとツバサ君が変装物は買つなどと言つてたな、何かいない理由が推

測がつくんだけど。

チカちゃんは自分が思うがままに走つて行く、それに着いてくだけで体力使つて、男っぽいんだけどガキっぽい、変な奴

「コガネ遅い！早く来いよ」

「ちょっと待つて、俺荷物持つてるんだから」

「男なんだから大丈夫だろ」

「男にも体力の限界があるから」

「あつそ」

流された、かなり普通に流された、カイ、俺にチカちゃんを操るのは無理だ。

その後も俺は振り回され続けた、女の子つて怖い、つてかチカちゃんだけが怖い、やっぱり女の子は苦手だな、うるさい男も嫌いだけど。

俺達は時間が余つたし疲れたから、喫茶店に入つて休む事にした、基本的に疲れたのは俺だけなんだけどな、カイは凄い、俺はアクティブな女の子についていけないよ

「…………疲れた」

「だらしない、これくらいで疲れたなんて」

「チカちゃんが俺を使いすぎなの」

「うるさい」

パチンと「ポン」された、つてか痛い、女の子の力じゃないって、額を押さえながら顔を上げた

「…………痛い」

「お疲れ様、ありがとな」

チカちゃんが笑つてゐる、可愛い、ヒノを好きじゃなかつたらヤバい、カイはこれに惚れたんだろうな

「どうした、顔真つ赤だぞ？」

「…………別に」

「何だよ、気になるだろ」

ナイスタイミングで飲み物が来てこの話題は強制終了、そんな女子に面と向かって、可愛いなんて言えないって、カイなら言いそつだけど。

一口俺がアイスティーを飲むとチカちゃんは目を丸くして見てる、あんまり見るもんだから顔を背ける

「何？」

「ガムシロップは？」

「いらない」

「大人だね」

「そうか？チカちゃんがガキ過ぎるんじゃない？」

“ゴツツ”

今度はグーで殴られた、痛い、女の子に殴られたのは初めてだし、ヒノなら流してくれるのに、頭使わないと帰るまでにボコボコにされる

「ガキじゃない」「ガネが爺なんだよ」

今度はフグみたいに膨れてる、これはモテるのも必然だな、ヒノ、俺に理性をくれてありがとう

「今アタシに惚れかけただろ？」

「自分で言う事かそれ？」

「つるさい。で、どうなんだよ？」

「否定はしない、チカちゃんにはカイがいるだろ、それに俺は……」

「……」

「ヒノリの事が大好き、でしょ？」

俺は無言で頷いた、もうみんな知ってるんだろうけど、改めて言わると恥ずかしい

「今日ヒノリにコクつちゃえよ

「いきなり変な事言い出すんじゃねえよ」

「だつて好きなんだろ？しかももう付き合つてるよつなもんでしょう」

ホントにズバズバ物を言つ人だな、俺なら引け目を感じて言えないんだけど、チカちゃんつてそこら辺がサバサバしてるよな

「何か恥ずかしいじゃん」

「不良のクセに恥ずかしいとか言って、笑える」

「俺は不良じゃない、ピアスもチェーンもファッショń、髪の毛は白毛」

「冗談だよ、冗談」

腹を抱えながら笑われた、机に顔を埋めて机をバンバン叩いてる、つてか流石にこれは他人に迷惑がかかるな。

俺は叩いてるを受け止めて、反対の手でチカちゃんの頭を掴んで起こす、目には涙を浮かべてる、何がそんなに楽しいんだよ

「静かにしろ、迷惑だろ」

「ホントだ、少し笑いすぎたな」

「それに涙」

俺はチカちゃんにティッシュを渡した、チカちゃんはまだ若干笑いながら涙を拭いてる、チカちゃんの笑顔つて純粋に眩しい、惚れる惚れないは別として何か輝いてる

「コガネって優しいんだな」

「何が?」

「ティッシュありがと」

「別に普通じゃねえの。それと、人の事で大爆笑するな、……

……何か恥ずかしいだろ」

顔が熱い、そんな俺の顔をチカちゃんは覗き込んで来た、ビックリして背を持たれに寄りかかると、勢い余つてそのまま引っくり返つた、俺は慌てて直して普通に座る

「大丈夫か?」

「何とか」

「でもコガネって可愛いな、すぐに顔を真っ赤にして」

「うるせえな」

「最初の頃なんてアタシと話しただけで赤らめてたもんな」  
また古い記憶を、女の子なんてヒノくらいしか免疫が無かつたから  
な、今でも三人以外はまともに喋れないけど

「外見だけ見ると怖いんだけど中身は可愛いんだよね、そのギャップがモテる理由とアタシはみた」

「そうなの?」

「そう、だつて「ガネホントに可愛いんだもん、なんかいじめなくなるんだよな」

「チカちゃんつて?」

その言葉に顔を真っ赤にしてうつ向いちやつた、そんだけで?つて感じだよな、カイと「晩過」したのに

「チカちゃんはカイのどんなところが好きなの?」

「何だよ!きなり」

「何となく」

「カイって物凄い大きいんだよね、なんか包容力があるつていうか、包み込んでくれる感じ、隣にいるだけで安心出来る。カイはアタシの事を太陽つて言ってくれた、アタシが太陽ならカイは海、太陽を映し出してくれる海、太陽は一人で輝いてても虚しいだけだろ、でも海に反射すると物凄く綺麗に映るんだ、だから海があれば太陽は綺麗に輝けるの」

何かチカちゃんとカイつて会うべくして会つた、運命そのものみいたいだな、チカちゃんが太陽でいられるのは、海であるカイがいるから、か

「それに太陽と海つて夏つてイメージがあるでしょ?」

「まあそうだな」

「アタシの名前は千の夏つて書くだろ、太陽だけの夏なんて誰も望まない、海があつて初めて千の夏を楽しめるんだよ。無理矢理のこじつけだけどね」

「何かチカちゃんつて良い女だな、ヒノより先に出会つてたら惚れてたかも」

「今は?」

「ヒノ以外は親友止まりだね、チカちゃんもツバサ君も親友だと思つて、分かるだろ?」

チカちゃんは微笑みながら頷いた、今の俺はヒノ以外に興味はない、  
多分みんなそうだと思う、好きなんだからしょうがないだろ。

いつかはこの気持ち、面と向かって言える時が来るはず

## 赤が呑まれる

「ガネとチカは帰つて來たし、料理も出来たんだけど約二名が帰つて來ない、あの馬鹿二人組、ガネ談によると一人で消えたらしい、ホントにどこで何やつてるんだよ、電話の電源きつてるし。…………もしかして、大人の階段登つてるとか？それなら邪魔しちゃいけないな、一人の時間を作りたいなら言つてくれれば良いのに。

“ガチャ”

大きな音と共に誰かが入つて來た、走つてこつちに來る一人は言うまでもなく「テツとツバサだ、でもおかしい、服装がおかしい、つてか変な人、だつてコテツはトナカイ、ツバサはサンタクロースの格好だぞ、しかもツバサのサンタクロースは袖が無いベストタイプにミニスカート、これはマニア向けだな

「メリークリスマスやで」

「これ似合う？僕的にはかなり可愛いと思うんだけど」  
みんな果然、ガネなんて既に見てすらない、ヒノリは最初から見てないし、チカは……、目が輝いてる

「ツバサ可愛い！！」

「キヤー！チカチカ分かつてくれる！？」

二人で大ハシャギ、つてかこんなのタメに遅刻したのかよ、なんか呆れた。

俺は騒いでる三人を無理矢理座らして、俺も座つた、始めたらまたうるさくなるんだろ、どうせ

「じゃあ始めましょか！」

『メリークリスマス！』

約一名を抜いてジュースで乾杯した、ガネは酒、コテツも一気にジュースを飲んで酒に手をつけた、ツバサとチカは皿に取り分けずにそのまま食べ物をつまんでる、ヒノリは無言で皿に食べ物を取り

分けてる。

「カイもいる?」

「その前にコガネにあげろよ、酒入る前に食つてもらえ」

俺は自分で取つた、つてかコテツは酒が入つたら危ないんじゃないの、只でさえあのテンションなんだから、落ちてくれれば幸いなんだけどな

「カイとチカちゃんも飲めよ

「酔わない程度にな。チカはどうする?」

「……味見だけ」

チカは始めてつぽいから梅酒で、別に酒なんていらないんだけど、一杯くらい飲んでおけば後で言い訳できるし

「カイ、何か楽しいんだけど…」

「何が?」

「分かんない!でも楽しい

チカが酔つた、つてか早すぎだろ!?もう酔つたの?まだ一杯しか飲んでないじゃん、チカはセーブさせないとヤバいな

「コガネ!もう一杯頂戴!」

「OK!チカちゃんノリ良いね

「まあね」

チカは缶を開けて飲もうとしたけど、取りあえず制止した、チカは俺の手を退けて無理矢理飲んだ、しかも一口で半分ほど

「ヒノリ、コガネを酔わせないようにお願いね

「私が酔つちゃつたかも」

ヒノリはシャツのボタンを外して扇ぎ始めた、つてかそれは大学のサークルで先輩落とす時に使うテクだろ、俺に使ってどうする、それにヒノリまで酔つたの!?

「冗談よ、私酔わない体质だから、馬鹿みたいに飲まなきや酔わない

「そりゃ良かつた。ツバサは?」

「僕は飲めないから安心して」

「三人なら大丈夫か」

チカは酒に飲まれてるし、コテツは酔つてないか分かんないし、コガネはいつもよりテンション高いし、まあ楽しくて良いんだけど

「カイ～、何かこの部屋暑くない？」

「定番ありがとう、でも暑くないし脱ぐなよ」

「じゃあカイがアタシの体温奪つて！」

チカがいきなり抱きついてきた、ホントに熱いな、酒臭いし、でも何かトロンとしたチカがめちゃめちゃ色っぽく見える、二人なら襲つてたかも

「カイ、キスしたい」

「はあ！？」

「キスがしたい！キスして」

「みんなの前で出来る訳ないじゃん、帰る時に好きなだけしてやるから」

「グヘヘ、約束だぞ」

「ああ、だから酒を抑えろ」

敬礼してまた酒を飲んだ、なんかもうパーティじゃないよな、コガネは酔つても平常心を保つて、コテツはツバサの膝枕で爆睡してる、一番たちが悪いのはチカか

「カイ飲んでるう？」

「飲めないよ」

「にやんで？」

「チカが酔つてるから」

「酔つてないよ、アタシは普通」

酔つてるよ、心の中でつつこんどいた、俺以外の前で酒を飲まないで欲しいな、確実に家に連れてかれる。

ツバサはコテツを膝で寝かしつけてるからおとなしい、子供を見るような目でコテツの髪を撫でてる。

ヒノリは逆に酔つたふりして「ガネにくつついてる、ガネが飲もうとすれば酒を取り上げて自分向かして、プロだな、でもガネも寝そうだな、壁でウトウトしてる

「カイ、もう我慢できない」

「はい…………！？」

チカの方を向くとチカの唇が俺の唇に当たった、俺はビックリして目を見開いてると、そのまま崩れるように眠った

「チカチカやる」

「そうやるんだ」

ツバサとヒノリに見られた、始めて他人に見られたかも、「ガネは壁に背を預けて寝てる

「ガネ、寝てて良かつたね」

「そうだな」

「僕もチカチカにキスしていい？」

「コテツにな」

ツバサがフグみみたいに膨れた、チカは俺の肩で寝てる、もうお開きかな

「終わりだな」

「みんな寝ちゃつた」

「ツバサ、コテツ起こして帰りな。俺も片付けたら帰るから」

「いいよ、私が片付けるから」

「良いのか？」

「カイっち、ヒノノと「ガネん」一人きりにしてあげな、これからは大人の時間だよ」

「そうだな」

俺はチカをおぶつた、ツバサはコテツの耳元で何か囁くとすぐに起きた、魔法の呪文でも唱えたのか？

「ツバサ、真っ直ぐ帰るの？」

「いや、コテツ送つてから帰るよ」

「ツバサはどうするんだよ？」

「一人で」

さすがに夜道で女の子を一人で帰すのは良くないよな、コテツの家からツバサの家まで送つて行くか、片道10分くらいだもんな

「ツバサ、コテツの家にいろよ、迎えに行くから

「別に良いよ、一人で帰れるから」

「最近不信者が多いんだろ?」

「…………」

「コテツも使いもんにならないし。少し遅くなるけど待つてろよ」

「分かつたよ」

コテツは起きた瞬間寝た、これで帰れるのかよ、ヒノリは一人で黙々と片付けてるし。

俺はチカをおぶつてコガネの家を出た、ツバサはフラフラになりながらコテツを支えてる。

二人つきりが勝負でしょ

多色の夜（前書き）

今回は色々視点が変わります。  
なるべく読み易いように作ったつもりです。どうぞ見てやって下さい。

とつあえずチカをおぶつてコガネの家を出た、顔が肩の位置にあるから酒の臭いが漂つてくる、寝顔は可愛いんだけど酔つ払いだしな、ここまでチカが酒に弱いとは思わなかつたし、寒いから風邪ひかなきやいいんだけど。

プレゼントも渡せなかつたし明日の朝に会いに来なきやな、ホントにチカに酒はタブーだし

「…………う、うんん~」

チカが起きた、背中にいるからどんな事してるか分からないけど、伸びてるような気がする

「あれ? なにこれ?」

「チカが寝てる間に終わつたよ」

「そう、何か気持悪い、…………吐きそつ」

「はつ! ?」

「「ゴメン! 降ろして! 」

チカは勢いよく俺の背中から降りて、道の端で吐いた、そりやしうがないよな、始めて飲んだのにあんだけハイペースで飲んだら。

「チカ、水飲めよ」

「ありがとう」

こんなこともあらうかとコガネん家から水を貰つて来た、チカは水を飲んで落ち着いたらしく、フラフラだけど歩き始めた、俺はチカを支えながら歩く。

顔色も悪いし、何だか気分も悪そうだし、大丈夫かな?

「おぶろうか?」

「いいよ。それより「ゴメンな、せつかくのクリスマスなのに」

「別に良いよ、変な事は…………」

今キスした事言つたら泣きつ面に蜂だよな、明日で良いか、明日なら思いつきりいじれるし。

「どうした？」

「どうもしないよ」

「酔つてほとんど記憶が無いんだよ、恥ずかしい事とかしていないよな？」

「大丈夫、『ガネもコテツも寝ちゃつたから』

「そつか……」

「いつになくテンション低いな、まあ早く寝かして、明日はあんまり会えないけど会つてやるか。

明日はアオミが夜空けとかないと犯すとか言つてるからな、本気でやりそっだから怖いんだよ。

皆も帰つたし、部屋も片付けたし、コガネをベッドに寝かせようかな、私は今日は泊まるつて言つてるから大丈夫、別に不純な理由じゃないわよ、コガネがこうなるのが分かつてたから。私は壁に寄りかかつて寝てるコガネを起こそうとした、でも寝顔が可愛いから起こすに起こせない。

「…………ん、…………ヒノ…………好き…………」

「えつ？」

「…………」

寝言か、でも今コガネの口から好きつて言われた、寝言でも心臓がうるさくなる、血が体の中を物凄い勢いで回つて、顔が熱い。

私はコガネに毛布をかけて飲み物を取りに台所に行つた、何を飲もうかな、コガネの冷蔵庫の中は飲み物ばっかりだからね、大体私が

買ってきて、その場で作ってるから食材はたまらないんだよね。

私があさりながら冷蔵庫を見ると背中に何かが乗つかった、重くて暖かい、ビックリして動けない、私を包むように毛布にくるまる、でも毛布の下には人間の腕がある、背中にあるのも人、もしかして？

「ゴガネ？」

「「ゴメンな。始めて一緒に過ごせるクリスマスだったのに」「どうしたの？」「きなり」

「ヒノ、好きだよ」

嘘？今、好き、って言ったよね？寝言でもない、夢でもない、ゴガネはお酒強いから酔つてもない、心からの、好き、だよね？顔が熱い、心臓が爆発しそうなくらいのせい、息が詰まるくらい苦しい。

何だか目の前が歪んで来た、視界が悪い、私泣いてるの？でも何で、悲しくないのに、むしろ嬉しくて倒れそうなくらいなのに、違う、これは嬉しくて泣いてるんだ、何だか暖かい。

「「ゴメン！悪い事した！？」

ゴガネは慌てて離れようとしたけど腕を掴んで引き寄せた、ゴガネが逃げないように手を掴んで、ゴガネの温もりが逃げないように毛布で包んで。

台所は冷蔵庫も開いてるし、暖房が届かないから凄く寒いハズなのに、私達は暖かい。

「待つてたよ、ありがとう」

「良かつた。あとコレ、プレゼント」

そういうとゴガネは毛布の中で私の首に何かをかけた、冷たい金属の物だ、ネックレス？

ゴガネは私に見えるように持ち上げた、その時に胸に触れたのは秘密。

それは左右非対象のハート、でも可愛い、歪んでるけどハートには変わりない。

「どう?」

「可愛い。じゃあコレは私から」

私は少し反つて耳の位置まで顔を寄せる、コガネに抱かれてるから顔が近い、息使いまで分かる。

コガネの耳のトーピンを外してピアスを付けた、ひっかけるやつでクロスがぶら下がつてゐる、見えるように鏡を渡した。

「コガネ一個無くしたつて聞いてたから」

「しかもコレつて?」

「コガネが雑誌で見てた物、コガネの事は誰よりも見てるんだから。私の瞳には好きな人しか見えてない」

「…………俺も」

そういうてコガネはより強く抱き締めてきた、私の心臓の音が聞こえそうなくらい。

コガネ、大好きだよ。

僕はコガネを送つてゐる、足取りは確りしてゐるちゃんと喋れてるからそこまで酔つてないと思う、お酒の臭いもあんまりしない、多分今日一人だけ部活終わりだから疲れたでしょ、トナカイ(コテツ)が酔つてたらサンタクロース(僕)はどうじょもしないからね。でも何かコテツが元気がない、何でだろ?!

「コテツ、どうしたの?」

「ホンマに、ゴメン!」

コテツは頭の上で手を合わした、僕はよく分からなかつたから首を

傾げた。

「わい疲れてて、眠つてしまた。せつかのクリスマスやの何だそんな事気にしてたんだ、別に僕はそんな事気にしてないの。」  
僕は手を繋いでたけど腕を抱き寄せた、コテツに体ごと近づく。

「クリスマスは明日だよ、今日イヴ、明日も会えるじやん！」

「許してくれるんか？」

「許すも何も僕は気にしてないよ！それにコテツが疲れてたもん」

「ツバサあ！」

コテツは僕を抱き上げてクルクル回る、何かドラマ見たいで嬉しい。これを皮切りにいつものコテツに戻った、やっぱりコテツは元気じやなきや、僕もつまんないもん。

「ツバサ、左手出してや」

「何で？」

「ええやないか、ホレ！」

コテツは僕と手を繋いでる手とは逆の手を取つた、僕はそれを見るとコテツはポケットから何かを取り出して僕の指にはめる、もしかして！？

リングだ！コテツも自分の左薬指に指輪を付けて顔の位置まで上げた、僕のと同じ。

「ペアリングやー！」

僕は口が空いたまま喋れなくなつちやつた、嬉しくて、ビックリして。

「どないしたん？ 嫌か？」

僕は思いつきり首を横に振つた。

「嬉しい！しかもこのリング可愛い」

「ホンマか？」

「ホンマ！超可愛い」

コテツは跳びはねながら喜んでる、僕もつられて同じように跳びはねちゃつた。

コテツが後ろ向いてる間に持つてきた紙袋からコテツへのプレゼント

トを取り出す、いっぱいになりながらコテツの首に巻いた。

「わつ！？何や……、マフラー？」

「手編みつて嫌？」

「手編みやの！？」

「うん、編み物は得意だから。大丈夫？」

「最高やで！ごつこう嬉しいで」

コテツはそのまま抱きついてきた、僕もコテツの首に手を回す、そのまま軽々と持ち上げられた。

下ろされると頭の後ろに手が当たられた、コテツの顔が少しづつ近付いてくる、そしてそつとコテツの唇が僕の唇に触れた。

チカをツバサの家まで送った、とりあえず暫くはチカのそばにいようと思う、気分が悪いから俺もチカを一人にするのは不安だ、ツバサは少し遅くとも大丈夫だよな。  
とりあえずチカをソファーに座らして水を飲ました、酒臭さも無くなつてたけど念のため。

チカ一気に水を飲み干すと俺の前にコップを差し出してきた、俺は渋々もういっぱいを注いで渡す、それも一気に飲み干した。

「よく飲むね」

「だつてさつきから体が暑くて暑くて」

そういうてチカは服を脱ぎ始めた、最後の一枚までは俺が拒んだけ  
ど、かなり薄着だ、大丈夫なのかな？

「カイ暑い」

「俺にどうしようと？」

「キスして」

「何でそこに行き着くのかが分からんだけど？」

「良いからキスしろ！」

まだ完全に酒が抜けてないのかな、いつものチカだったらこんな事  
言わないのに。

俺はやけくそ気味にキスをした、でもやっぱり今日のチカはおかし  
かつた、いきなり俺の唇を割つてチカの舌が入つて来た、そんなキ  
スは今までした事が無かつたから目を見開いたまま動けない、チカ  
はどんどん俺の口の中で暴れる。

やつと離れたと思ったら、目は溶けたようにトロロンとしてる、完璧  
にまだ酔ってる。

「カイ、アタシもう無理、……………しょ」

「馬鹿！」「ココはツバサの家だろ」

「関係ない」

チカは俺を倒して馬乗りになつた、行為そのものはありがたいんだ  
けど、ココは他人の家だし、それにツバサを迎えて行かなきゃ。

「ツバサが帰つて来るぞ」

嘘だけど。

「ツバサとコテツも同じような事してるよ」

「キスもしたことない奴らがするわけないだろ！」

「カイも男でしょ！往生際が悪い」

そういうとチカは最後の一枚も脱いだ、上半身は下着一枚のみ、つ  
てか俺はホントにツバサの家でやつちやうのか？

「チカチカ？」

俺はチカ以外の声が聞こえて上半身を起き上がらせた、そこにはサンタクロースもといツバサがいる、完全に状況が把握出来てないらしい。

「ツバサ！ 良いところに来た、チカを止めてくれよ！」

「どういうこと？」

「ツバサ、アタシとカイの邪魔するの？」

ツバサもチカが酔つてゐ事に気付いたらしい。

「カイっち、これはどうすれば？」

「俺にその気は全く無いから」

「アタシはあるの」

チカはそのまま俺をソファーに叩き付けた、そして抱きついてベルトに手をかけた時、ツバサがチカを俺から引き離した。

「チカチカ終り」

「ツバサ、羨ましいの？」

「少しね」

「ならこれからは女同士の時間ね！」

二人は肩を組んで部屋に入つて行つた、俺は服の乱れを直して、ツバサの家をする。

明日のチカは後悔の塊だろうな、でも、今度一人きりになつたら酒を飲ませよう。

今日は25日、一日中チカといたいんだけど、アオミのをバックレたら後が怖すぎる、チカには悪いけど今日は昼だけで。

ツバサの家のインター ホンを押すとすぐに走る足音が聞こえた、もの凄い勢いで扉が開いてツバサが現れる、一歩退いてなかつたら今頃顔がまつ平になつてたよ。

「なんだカイつちか」

「コテツじゃなくて悪いな。チカいる?」

「それが昨日の今日だから、部屋に籠つちやつて」

「一日酔い? それともそれ以外?」

「それ以外」

そりや そうだよな、記憶があれば凹むよな、でもいつまでも凹まれてたら困る、今は一分一秒でも大事なんだから。

「入つていい?」

「良いけどまだ昼だよ」

「大丈夫、それが目的なら昨日あのまま一緒に帰つてるから」

「そつかあ、なら良いよ」

つてかツバサは何を考えてるんだよ、まだ昼だよつて、俺はそんな事ばつかり考えてるようになれるのかな?

俺はチカの部屋のドアを開けた、別にノックとかめんじくさい着替中も無いだろ。

チカは布団を抱きながら噛んでる、泣いてたのか目が真つ赤でうるんでる。

「カイ~~~~~」

「何泣いてるんだよ、今から外に行くつてのに」

「怒つてる?」

「何を?」

「だから、き、昨日の……」

そのまま「」もつた、何かイジるの楽しいな、もう少しチカをイジつてから出ても時間は余るし。

「昨日の事？ 有り過ぎてどれの事だか分かんないんだけど」更に落ち込んだ顔になつて泣きそうになつて、俺はベッドに腰かけて後ろに手をつく、丁度チカを見上げる感じになる。

「みんなの前でキスした事？ それとも俺を押し倒して、服を脱いだ事？ それとも…………」

「ゴメンゴメンゴメンゴメンゴメンゴメン！」

もう無いんだけど、チカは布団を被つて丸まつて、もつ少しイジつたら終りにするか。

「チカが無理矢理キスするから皆に見られちゃつたもんな、それが一回ならまだしも何回もキスするんだもん、俺は酒飲んで無いから言い訳出来ないじゃん」

「ゴメン~~~~~」

すすり泣く声が聞こえたからこれで終了、すでに可哀想だから、半分嘘で半分本当なんだけど、これ以上時間を削ると俺が凹む。

「でもさあ、今までの話が全部嘘だつたりどつする?」

「え？」

「別にそんな恥ずかしい事はしてないよ、今までのは全部作り話、普通に酔つてただけだよ、家に帰つてからは記憶があると思つけど」

「キスは？」

「一回だけツバサとヒノリの前で、二人とも呆れてただけだけど

“ゴツ!!”

殴られた、布団を思いつくりとつて振り向き様に殴られた、せめてパーだろ、只でさえ力が強いからグーは無しでしょ。

「痛いって」

「うるさい。それで今日はアタシをからかいに来たの？」

「違うよ、夜はアオミのせいで会えないから、せめて昼くらいはチカに俺の時間をあげたいな、って」

チカの怒つた顔が徐々に笑顔になつた、チカは目に溜つてた涙を拭

いてベッドを下りて俺の前に立つ。

「許す！」

「ありがたきお言葉」

「じゃあ支度しなきや」

「そうだな」

チカは何故か俺の前に笑顔で立つたまま、意味が分からぬからと  
りあえず俺も笑顔を返しす、その瞬間頭に拳が落ちてきた。

「何だよ！？」

「女の子の着替えを堂々と見るつもり？」

「あつ」

「せめて覗け」

「大丈夫、覗きもしないよ、酒飲めば勝手に脱いでくれるんだもん」

「…………馬鹿」

チカは顔を真つ赤にして俺を部屋から押し出した、とりあえず俺は  
リビングのソファーに座つた、ツバサもソファーに座つてる。

「大丈夫だった？」

「一発ほど殴られたけど」

「変な事言つたんでしょ？」

「当然！」

俺の自身満々の回答にツバサはため息をついた、そのため息と共に  
家の扉が開く音がした。

扉の前には派手な服を来た綺麗な人がいる、大人の色気というかな  
んというか、とりあえず綺麗の一言に尽きる。

女人はバッグをリビングに投げ捨てて迷わずキッチンに行つた、  
コップを取つて冷蔵庫の水ついで一気に飲み干す、そしていきなり  
俺を見る、目が合つて離せない、女人は近寄つて来て俺の顎を掴  
んで上から睨むように見る、顔が近くて香水と酒の匂いが漂つてく  
る。

「ツバサ、この男は昨日泊まつたのか？」

「はあ！？」

「違うよママ、コレはチカチカの男のカイっち」

「チカの男か」

「ツバサ、コレ、つてなんだよ、コレ、つて」

更にツバサママの顔が近くなる、角度を変えれば同士が重なるくらいの近さ、ツバサママは確かめるように顔を撫でまわす、その手付きがなんかいやらしい。

「良い男じゃないか、フリーだったら私が食べちやいたいくらいだよ」

「ママ、チカチカの後はカイっちのお姉ちゃんが順番待ちなんだから、ママはその次」

「姉との禁断の恋なんて、若者、良い玉つけてるな。私も一時期は不倫に燃えたねえ、あのギリギリの綱渡りが更にゾクゾクするんだよ」

つてかこの一人は俺の意思そっちのけかよ、勝手に色々と人生設計されてるんだけど。

「おばさんは…………」

「ああ！？」

俺の一言でもの凄いスピードで胸ぐらを掴んで来た、しかもマイク・イソンも裸足で逃げ出す顔で。

「カイっち、ママにそれは禁句だよ。因みにチカチカは、ママさんつて呼んでる」

「ママさんはどんなお仕事をしてるのでしょ？」「

「よろしい。私は夜の世界で体を…………」

そりやそうだよな、女人が一人で子供を育てるのは辛いもんな、なんか悪い事聞いた気がする。

「なあんてな、そんな顔するな若者。私はテレビ関係の仕事だ、そんな女の落伍的な仕事するくらいなら工場でも勤めてる」この人はどんだけ俺をからかえれば気が済むんだよ、それともチカのツケが回って来たとか？

それに、「ママさん、つてやつぱり夜っぽいよな、でもこの男っぽい

喋り方でテレビ関係つて、想像できない。

「ママさんは綺麗だけどいくつなんですか？」

「若者、女に歳を聞くのはセクハラだぞ」

「セクハラは業務上でしか適応されないですよ」

「口だけは達者だな」

「そうでも無いですよ、綺麗な人が目の前にいるから緊張してるんですけど」

ママさんは俺の頭を腕で固めて頭を拳で擦りつけた、胸がかなり当たってるんですけど。

「気に入つたぞ若者！私は30、ツバサは私が15の時のガキだ。若者、名前は何ていう？」

「やだなあママつたら、カイつちだつて言つたじやん」

「それはアンタが付けた、最低最悪のあだ名だろ、本名を聞いてるんだよ」

「四色海」

「四色？」

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

俺が四色つて言つた瞬間に顔が変わつた、別にそこまでは気にならないけど。

チカはかなり長めの支度が終わつて出てきた。

「何だチカ、これからデートか？」

「ママさんいたんですか、これからデートですよ」

「じゃあママさん、俺らはこれで」

「一発やつてこいよ、じゃないと家に入れないからな」

「ななな、何言つてるんですか！？」

真っ赤になつてるチカの手を引っ張つて家を出た。

## 多色のクリスマス（前書き）

今回も主觀が変わります、今日は男だけです。

## 多色のクリスマス

チカを連れてぐがまま喫茶店に連れて行った、店には少なくて静か、軽く怪しい雰囲気が漂つて薄暗い、俺が散歩中に見つけた穴場。

散歩が爺臭いとか言う奴は可哀想だな、穴場とかも見つかるし、東京でも静かな場所はあるんだよ。

適当に食べ物頼んで来るまで待ってる、ただ一人の店員のおっさんはかなり静か、店同様に何か裏がありそうな感じだ。

「カイ、ここ大丈夫なの？」

「一回来てチェック済みだから大丈夫だと思つ」

チカはそわそわしながら周りをキヨロキヨロ見てる、俺的にはこの店の雰囲気よりチカの行動の方が怪しいんだけど、それでコンビニに入つたら拳動不信で捕まつてもおかしくないくらいだ。

「今日はホントにゴメンな、アオミの相手しなきゃいけないから時間とれなくて」

「別に大丈夫だよ、お姉さんには貸しを作らないとな」

「頼むからその、お姉さん、つてのやめてくれない、なんか怖いんだけど」

「ダメ、保険だから」

女つて怖いな、この歳から将来の保険をかけられてるなんて、チカを手放したくないのは確かだけど、その先つてのは想像できない。俺は昨日渡せなかつた物を取り出した、本当は昨日渡す予定だつたんだけど、あれだつたからな。

「コレ、とりあえずクリスマスの方」

「プレゼント？」

「落し物には見えないだろ」

「ありがとう」

チカは細長い箱を開けると笑顔になつた、この笑顔が見ると気持ち

が安らぐんだよな、チカは中からネックレスを取り出した。

「可愛い……」

「変じやない？」

「最高だよ、最高に可愛い」

チカはネックレスを付けて俺に見せてきた、子供のよいうらしあげ  
チカ、俺はキリがなさそだから誕生日の方を渡した。

「コレは？」

「誕生日、金がないから大したものには貰えなかつたけど」  
小さな袋を開けて引つくり返す、中からは髪留めが一つ。

「チカの壊れてただろ」

「知つてたの？」

「当たり前じやん、一日だけ付けてなくて次の日からはいつもと違  
う髪留め、他は気付かなくても俺は気付くちやうんだよね」

「付けて良い？」

「当然」

チカは今着けてる髪留めを外して俺のプレゼントをつけた、窓ガラ  
スを鏡がわりに見てる。

「貰つてばつかりじや悪いよね。はい、『』」

チカは袋を机の上に置いた、大きさの割には重め、中には長方形の  
箱が一つ入ってる、俺は一瞬でピンときた。

「チカコレつて？」

「大したものじやないけど」

「大した物だよ！超能力もあるの？一度欲しかつたんだよね」

中身は包丁、最近使い過ぎてて切味が悪くなつてきたところなんだ  
よね、しかも俺が欲しかつたやつ、チカのプレゼント買つて金が無  
いから諦めたのに、ココで出会えるなんて。

「何か高校生っぽくないけど」

「いやいや、最高に嬉しいよ。でもかなり高かつただろ？」

「そう、そんな高いとは思わなかつた」

「ありがとう」

確かに高校生向けではないけど、俺向けではあるな、チカ様万歳だよ、しかもこれマジで高いんだよね、俺のプレゼントの総額でもまだ足りないくらいに。

「決めた！この包丁で最初に作る料理はチカに食べさせる」「ホントに！？」

「ホントに、今年中に最高の料理を『駆走します』

「楽しみにしてるからな」

「夜眠れなくなるくらい楽しみにしてる」

二人で声を上げて笑つた、静かで薄暗い店内が明るくなるくらい大声で。

でもその前にアオミにチカの家への入室許可をとらないとな、十中八九〇%だと思つんだけどね。

朝起きると俺は床に寝てた、何でか分からぬいけどとりあえず布団に戻つた、何か暖かい、多分落ちたばかりなんだろ。

俺は寝返りをうつとそこには見慣れた顔が、銀色の瞳、真っ黒な綺麗な髪の毛、これは多分ヒノだな、…………ヒノ？

「どわつ！」

俺は再び床に戻る、そりいえば昨日ヒノが泊まつたんだよな、だから俺は床にいたのか。

俺は頭を強く打ち付けたらしく、痛い、ベッドに寄りかかって頭を押さえると耳元から声が聞こえた。

「朝這い？」

「なつ！ヒノ！？」

横にはヒノの顔がある、寝起きなのに何でこんなに笑顔なんだよ、多分俺は田を見開いてるんだろうな、何となく渴いてきた。

「違うって、すっかりヒノが泊まってるの忘れてて

「私のこと忘れてたの？」

「いや、そういう意味じゃなくて

「…………おはよ」

毎日こんなヒノの笑顔が見れるなら同棲って良いかもな、多分誘つたら不純とか言つんだろうな、しかも物凄い冷めた顔で。

「なんか同棲してるみたい」

ヒノから言つちやつたよ、やつぱりヒノもそつ思つのかな、それとも俺をからかつてるだけとか。

「それとも新婚？」

「何かテンション高くない？」

「だつて私達付き合つてるんだよ、幼馴染みならまだ可愛いけど、彼氏の家にお泊まりなんて…………」

そつか、俺ら正真正銘に付き合つてるんだよな、しかもさりげに爆弾発言連発なんだけど、こんな言葉をヒノの口から聞くなんて。

「よく我慢出来たね

「何を？」

「不純な事」

「ば、馬鹿じやねえの！？今まで何回か泊まってるじやん！？」

「幼馴染みとしてね」

「そつか、ヒノは俺の彼女か」

俺が天井を見上げて感慨に浸つてるとヒノが目の前に座つた、今気付いたけどパジャマじゃん、しかもボタン開けすぎ、胸が見える。

「顔真っ赤」

「あ、暑いからだよ」

「今ノーブラだよ」

「馬鹿！仮にも俺は男だぞ！」

「でも何も出来ないでしょ？」

「今の効いたわ」

確かに何も出来ないけど、打ち明ける事でもないだろ、そんなこと言われたら氣になるつて。

「彼氏なんだから何しても良いんだよ」

「大胆過ぎだろ」

「だつて好きなんだもん」

「…………」

何か顔が熱い、こんなにヒノが積極的だつたなんて、多分今まで色々あつたんだろうな、俺が気付かないだけで。

「世界で一番大切な人が目の前にいるんだよ、それだけで嬉しいもんでしょう？」

「そうだな」

「今日も泊まっちゃおつかなあ」

「おじさんとおばさんが不安がるだろ」

「大丈夫、『ガネの名前を出せば喜んでOKしてくれるよ』

「ああもうー好きにしろ」

積極的なヒノつて怖い、俺の一般教養が間違つてなければいくら彼氏の家でも泊まらないよな、つてか幼馴染みでも親は許さないよな、それにガキの頃から知つてるとはいえ世間の評判は知つてるだろ、おかしいつて。

昨日は悪い事したな、疲れてて寝てもうた、ツバサは怒つてないつて言つてはつたけど嬉しくは無いやろ。

そんな事ばっかり考えててもしゃあない、今日を思いつきり楽しめれええんや。

わいはツバサの家のインター ホンを押した、かなりやかましい音と共にドアが開く、怖かつたさかい一步下がつて正確やな、こないスピードで当たつたら打たれ慣れてるわいでものびるで。

出てきたのは当然ツバサ、ツバサは勢いを殺さず抱きついて来た、後ろの手すりはお世辞でも高いとは言えん、せやさかい必死こいて受け止めた、ツバサはどうやらそこまで眩しく笑えるんや、つてくらいの笑顔。

「待つてたよ！」

「悪い悪い。支度してきいや、今日は楽しませてやるで」「わい！しかもそれ、僕があげたマフラー ジヤン、着けてくれたんだ」

「当たり前やろ、コレで寒さ知らずや」

「そつか、少し時間かかるから家で待つてて」

わいは玄関に入つて気付いた、ハイヒールがある、もしかして親いるんとちやう、自然に彼氏アピール？

リビングに入るとワイヤーシャツにパンツだけの綺麗な女人がおつた。

「わわ！すんまへん！」

「今日は男よく来るな。で、そんな所で何してるんだよ？」

「ズボン履いてないやん！」

「気にするな」

無理やつて、女人のこない姿始めてやもん、直視できひん。

そんなわいの気持ちを知つてか知らずか、女人はわいに近付いて来た。

「パンツぐらいで騒ぐな、親のくらい見た事あるだろ」

「パンツぐらいやないで、それにこない綺麗な人のは見たこと無い

！」

「お世辞はよせ」

「お世辞やないからはようズボン履いてや！」

「しようがない」

履き終つたのを確認して視線を戻すと今度はワイシャツを脱いでる、この人は露出狂やろ。

「エッチな関西人だな」

「お姉さんが露出狂なんやろーそれに誰？ツバサのお姉さん？」

「関西人お世辞はよせ！嘘でも嬉しいぞ」

女の人は頭を腕で掴んできた、体に引き寄せられて胸が当たつとる、なんやねんこの人は？

「私は母親だ、関西人はツバサの男か？」

「そうやで」

「良い体してるな、何かやつてるのか？」

「空手」

「ふうん」

ツバサのお母さんはわいの体を念入りに触つてゐる、かなり手付きがエロい、上から下まで触つてその後再び上がる、その時に下腹部の辺りで止まる、そこいらへんをしつこく触つてゐる。

「何しとるん？」

「チエック」

「娘の彼氏で品定するなや」

丁度ツバサが出てきて見られてもうた、スウェットとブラのみで下腹部を念入りに触つてゐる、ツバサと目が合つてフリーズした。

「ツバサ、これはちやうんや」

「なんだいたのか」

「何してるママ！？」

「若者がダメだつたから関西人の品定」

「コテツは僕の！誰にも渡さない」

ツバサはわいの腕を掴んで引き離した、さりげに嬉しい事言つてくれるやないか。

「これから」「トートか？」

「そうだよ」

「泊まるなり電話しろよ。それと既成事実を作る時は『コムの袋を開ける前に画鋸で刺しつけ』

「ママの馬鹿！」

ツバサに無理矢理腕を引かれて家を出た、ツバサのお母さんは本当に親か、普通娘にそない事教えないやろ、シングルマザーって怖いんやな。

街は人ばかりや、いつもならツバサの自由にさせんやけど、今日は手を離したらいなくなりそつやで、あんまり繫がへんのやけどごちやごちや言つてられへんな。

「ツバサ！あんまり走るな！」

「時間は待つてくれないよ、今を楽しまなきゃ…」

「せやけど体力がもたへんや」

「だらしないぞ」

ツバサの暴走を止めるのは無理そりやな、体力を消耗するトートなんてありえん、ツバサにジッとしてる言つ方が無理やと思つけど。でも走りながら振り向いた時の笑顔で許せる、この笑顔があるから馬鹿やれる、始めて見た時から笑顔に惚れてたんやな。

予定より遅くなっちゃったな、アオミが怒ってなければ良いんだけど。

チカといる時間があつという間すぎて予定時間をオーバーしてた、俺は走つてマンションまでついた、カードキーで自動ドアを開けてエントランスを行き、エレベーターの上のボタンを押す、つてかこういう時に限つて遅いんだよな。

やつときたエレベーターに乗り目的の階を押す、階につくと走つて家の前まで行きカードキーでドアを開けて中に入った。

「アオミ、遅れて、ゴメン！」

リビングまで慌てて走つて謝る、準備は進んであとは料理を待つだけの状態になつてた。

「ゴメン、準備を手伝つて言つたのに」

「別に良いわよ、どうせチカちゃんとの会話に花が咲いてたんでしょ？」

「ゴメン。今から手伝つよ」

「大丈夫よ、もうすぐ出来上がるから。主役は座つて待つて」「悪い」

俺は言われた通りに座つて待つことにした、それにしても一人で全部やつたにしてはかなりこつてるな、アオミは作りながら笑つてるし、何か良いことでもあつたのかな？

「なんか楽ししそうじやん、何で？」

「カイとのクリスマスよ、それは張り切るわよ」

なんか色んな意味で申し訳ないな、こんな全部やらせちゃつて、それにアオミつて案外近くすタイプなんだな、プライドがなかつたら良い恋出来るのにな、邪魔してるのは俺なんだけど。

アオミは出来た料理を次々と並べてく、見た目も匂いもかなりうまそう、これを女子高生が作ったとは思えない。

「食べて、カイ」

「 いただきます」

「美味しい！めちゃめちゃ美味しいよ！」

「ホントに!?」

「ホントホント、これなら男は一発でおちるよ」

「カイはおちないの？」

「弟をおとしでどうする」

将来アオミに出来るであろう彼氏は嬉しいだろうな、俺が言うのも

なんだけどこんな綺麗な奴にこんな料理作つ

「カイとのクリスマスなんて何年ぶりだろ？」

「何年つてから始めてじゃない、ガキの頃はそんなイベントある事も知らなかつたし、大きくなつたらなつたでそんなに家にいなかつた

卷之三

んね

小さい頃は一年のうちに行事なんてものは存在しなかつた、親は家にいなし、子供だけじゃなにも出来ないし、だから世間がクリスマスで騒いでても俺には違う世界の出来事に感じた、サンタさんがプレゼントをくれるとか騒いでても俺達は好きな物を買い与えられてた、だからそんなものはいらなかつた、今思うと冷めたガキだったんだな。

「私達つて可哀想だつたのかな？」

「世間一般から見たらそこにはしゃがんでいたが、俺は今が楽しいからそこは思わないけど」

「私もかな、唯一の家族とこうやってクリスマス出来るんだもん」  
唯一の家族か、確かにそうだよな、親がいた時よりも姉弟の時の方が幸せってのは変な話だよな。

「親友と遊んでた、女だけの悲しいイヴよ」

「早く彼氏作れよ」

「カイが私の彼氏よ、カイより良い男なんて日本にはいないわよ」

「アホか」

弟の立場としたら早く恋して欲しいんだよな、邪魔とかそういう意味じゃなくて可哀想じやん、弟なんて近いようで遠い存在だから。

「みんなレベルが低いんだもん、ルックスとかじやなくて考える事が浅はかなよね」

俺と似てる、唯一違うのそういう奴らをはねのけるか受け入れるかの差だな、男なんて特に馬鹿な生き物だからな。

「馬鹿も楽しいぞ」

「飾らない馬鹿はね、背伸びしてる馬鹿は見てて可哀想」

男はみんな可愛い人を前にすると自分を良く見せたいもんな、アオミはそれが大つ嫌いなんだる、それで飾らないユキに惚れたのか。

俺らは食べ終つていつものようにソファーに座つてテレビを見た、どの局もクリスマスの特番だ、テレビまでうんざりするくらいクリスマス、さすがに嫌になるよな。

「何でクリスマスつて祝うんだろう」

「アオミからそんな言葉が出るとは思わなかつた

「何で? どうせカイもそう思つてるんでしょ?」

「そうだけど、アオミつて軽く口マンチストなところあるじやん」

「そうだけどキリストの誕生日だよ、たかが人一人の誕生日を世界中で祝わなきゃいけないの?」

「じゃあアオミは何で今日俺を誘つたの?」

「誘いたいから?」

「それだよ、打ち上げと同じで口実だろ、バレンタインとかその類だよ。一人で今日という日を過ごす、それがステイタスになるんだろ」

「そう思つと馬鹿みたい」

クリスマスを一人で祝つときながら、こんな冷めた話する姉弟もうかと思うけどね、こんな冷めた話をしてる一人でも、波に思いつきり呑まれてる、クリスマスってそんな魔力の事なんじゃないかな。

「じゃあくだらないクリスマスのプレゼント」

アオミは俺の前に袋を出してきた、大きさに比べて軽い、しかもふわふわしてる。

袋を開けて中の物を取り出した、中にはパーカーが入ってる。

「カイに似合つかな、って思つて」

「さすがアオミだな、俺の趣味ど真ん中だよ。ありがとう」  
礼を言うのと同時に俺もプレゼントを渡した、アオミのプレゼントはかなり悩んだんだよね、全然好きな物とかも分からなかつたから直感を信じて、かな。

「手袋だ。凄い、何で私が欲しいのが分かつたの？」

「いや何となく、いつも手を暖めてたし寒いからかな」

「ちゃんと私の事見ててくれたんだ」

「当たり前だろ、現時点ではアオミの事を誰よりも知つてるんだか

ら

「カイ！」

アオミが飛び付いて来た、ソファーから落ちないようにするのが精一杯で、拒否する余裕がない、アオミは俺の首に腕を回して顔は肩に乗つて、これだけ喜んでるアオミを突き放すほど酷い心を持ち合わせてないもので、背中を抱き返しちやつた。

「やっぱりカイは私の自慢の弟、誰にも渡したくない」

「チカでも？」

「今後しだいね」

「コイツは娘を手放さんとする親父かよ、ブラコンもここまで来るとペットだよな。

「でもカイがチカちゃんに惚れた理由も何となく分かるよ、彼女といふと不思議とあつたくなるのよね、不思議な娘よ」

「俺の彼女だもん、普通の女な訳ないじゃん」

「私にもやつしいう事言つて欲しいなあ」

甘えるよつな声で言つてくる、これはチカには無いテクニツクだな、  
メチャクチャ可愛い。

「アオミも良い女だよ」

「ああ～ん！カイ～！」

更に強く抱き締められた、これがスキンシップとして慣れてる自分  
が怖い、前までははねのけてたけど、今は受け入れたつてか諦めた、  
禁止したらもつと過激な事をしそうなんだもん。

「じゃあ誓いのキスを」

「何の誓いだよ！？」

「愛」

即答でしかも一文字で済ませやがつた。

「姉弟愛はあつてもそれ以上は無いし」

「キスしてえ！キスキスキスキスキスキス！？」

うわあ、ジタバタしあげた、しかもなんか今日はしつこいな、い  
つもなら引き下がるのに。

「分かつたからー！目を瞑れ！」

「ホントにー？」

「良いから早くー！」

アオミは目を瞑つた、ゴメンな、姉弟とかそういうのじゃなくて普  
通に唇には出来ないよ。

俺はアオミの前髪を上げて額にキスをした、アオミは半分怒つたよ  
うな表情で睨んで来た。

「唇は無理、今ので限界だから」

「何で？姉弟だから？」

「チカがいるからだよ、相手が誰であれキスなんて出来る訳ないだ  
ろ。今ので罪悪感感じてるんだから」

「じゃあいけない関係になつたつて事？」

「オーバーに言えばね」

「…………弟との情事」

もうつこつむのもかつたるくなつてきた、情事つて何だよ情事つて、しかも半強制的にアオミがやらしたんだる、なんかアオミと話して疲れた。

でも、安らげる少ない居場所もアオミ、俺が守らなきやいけないものがまた一つ増えた。

ビッグイベンツも終わって只今冬休み歐歌中、歐歌つて言つてもただたんに家でダラダラしてるだけだけどね、たまには家にいないと流石の高校生でも疲れるつて。

俺が家にいるとアオミも何故か家にいる、友達がいない訳じゃないと思う、何回も電話がかかつて来て断つてるから。

いつもの事だけど家にいると俺の腕にしがみついてる、最初の一週間は拒んだよ、でもアオミに拒否は無意味だからな、完璧に諦めたよ。

「なあ、夜何食う？」

「寒いから鍋やろ」

「鍋か、何鍋が良い？」

「チゲ鍋！」

「OK。なら買い出し行つてくるから鍋出しどいて」

「はい

つてか一人で鍋つて悲しい、俺の真相心理の中で鍋は大勢ワイワイのイメージがあるからな。

最近は暗くなるが早いな、買い物終わつて帰るだけで夜道になる。

今日の帰り道も辺りは真っ暗だ、寒さも体に響くし早く帰ろう。

でもそんな俺の気持ちを知つてか知らずか携帯が鳴り響く、携帯をポケットから取り出し開いてみると知らない番号だった、たまに番号とか登録しない事があるからその類の奴だと思つて普通にでた。

「もしもし」

“若者か？”

若者？俺をそんな呼び方したのは、記憶の中で一人だけだ。

「ママさん？」

“ おう、悪いな、ツバサから番号聞いた ”

「 そうですか、それでどうしたんですか？ 」

“ ちょっと話がある、今から来れるか？ ”

何かいつになく真剣な口調だな、それとも酒で酔つててあんなだつたのかな

「 今から？ 姉貴を待たせてるんですけど 」

“ ちょうどいい、若者の姉も連れて来い。話はそれからだ ”

「 何処に行けば良いんですか？ 」

“ それはメールで送る、じゃあな。 プツツ ”

切れた、かなり強引な人だな、それにアオミまで連れてこいつて、どんな話なんだろ。

その後すぐにメールが来た、俺が知る限り指定された場所はバーだ、もしかして酒飲ませるために呼んだとか？

いろいろ不安があつたけどアオミを連れて指定場所の前まで行つた、細い階段を地下に下りた所にある。

中は薄暗くてカウンターの向こうには沢山の瓶が棚の上にのつてゐる、そのカウンターの真ん中にグラスを持つたママさんがいる、俺は真っ直ぐママさんの隣に座つた。

「 話つて？ 」

「 まあその前に何か頼め 」

「 俺未成年だから適当にジュースを 」

「 私はグレープフルーツの入つた何か無いですか？ 」

「 ありますよ 」

店員らしきオッサンはシェイカーを振りながら応えた、この人俺らが未成年つて分かつて酒飲ませるの？ 何か怪しい店だろ。

「 つてかアオミ飲むの？ 」

「 お酒の一つや二つ飲めなきゃ女としてやつていけないわよ 」

「 分かつてんじゃねえかブラコン 」

あんたも親ならせめて一言くらいは制止しろよ、まあ俺らを「」で呼んだ時点で大きく間違つてるけどな、それに今…………。

「何でアオミがブラコンだつて気付いたんですか？」

「そりや入つてきた時から腕抱いて、今も腕を離さないじゃないか、誰でも分かるつて

「何かカツコイイですね、姉御つて呼んで良いですか！？」

「好きに呼べ」

「じゃあ私の事もアオミつて呼んでください」

この「一人の板挟みつて怖いかも、まあアオミが自分から話しかけた人だ、悪い人じゃないでしょ、アオミは人を見る目はありますぎるくらいだからな。

「それより「」に呼んだ理由は何ですか？わざわざアオミまでも「酒を一人で飲んでもつまんないから」

やつぱりかよ、この人は未成年に酒を率先して飲ませるつもりかよ。

「嘘よ、酒は一人でたしなむものだからな」

「姉御カツコイイです！」

アオミガツツキ過ぎだよ。

「ツバサの事なんだけだ」

「ツバサの事なら「」に話せば良いじゃないですか」

「いや、その類じゃない、ツバサの親の事だ」

「ツバサつて誰？」

「ツバサはママさんの娘で俺の親友のうちの一人、チカが間借りしててるのもママさんの家。ちなみにママさんはシングルマザーだから「アオミの田」が子供のようにキラキラ光始めた、何となくアオミが進もうとしてる路線が見えて来たかも。

「やつぱり姉御はカツコ良すぎです！」

「アオミは話が早くて楽だな、シングルマザーつて言つとみんな一步退くのに」

「女は男なしで生きていけますから」

「その話は「」で終り、話が進まない。それでツバサの親がどうか

したんですか」

アオミを止めて話を元に戻した、一人で話してると本題に入る前に酔いつぶれそうだからな。

「そりだそりだ、ツバサの親は当時ホストをやつてた奴で、私はその男に入り浸つてた。馬鹿だろ、ホストにハマるなんて」

「度合いによりますけどね」

何か場がしんみりし始めた、今考えると俺達にツバサの親の事を話すのも筋違いだと思うけど、この際どうでも良いや。

「それで私は付き合つてるとてつきり思い込んでた、それがホストの営業の一貫だとは知らずにな。まだガキだった私はその男に始めてとい始めてを全て捧げた、男のタメに体を売りかけた事もあつたな」

ママさんの話を聞いて怒りを抑えるので精一杯だった、まだガキだったママさんにそんな事をするクソホストが許せなかつた。

「そんなんある日ついに来なかつたんだよ、生理つて奴が。

言つてる事分かるよな、私は妊娠してた、まだ高校一年の15歳の私はガキなりに幸せを感じてた、これであのホストと一緒になるると本気で思つてた。

でもそこはホストだよ、妊娠の一文字を聞いた途端、札束目の前に出して無かつた事にしろだとよ、私はその時やつと氣付いたんだよ、遊ばれるだけの女だつてね。

親の金に手をつけて、学校にも行かないでひたすらバイトして、結果は子供一人と札束置いてさよなら。

でもそこで私が自暴自棄に走つたらお腹にいる子供はどうなるつて思つたんだよな、だから子供を育てる事で過去を正当化しようとしたんだ、この子のタメに私は産まられてきて、馬鹿したんだつてね」怒りの矛先が向けられない俺の感情は悲しみに変わつてた、涙は何とか堪えた、隣でアオミが泣いて俺も泣いたら話辛いだろ。

「ココからが本題だ、私はこんな昔話なんて高校生のガキに聞かせて楽になる程馬鹿じやない、そのホストの事だ。ホストの名前は、

四色真人、

しきしんと

俺の頭はオーバーヒート寸前で、悲しみが再び怒りへと変わつて力  
ウンターを思いつきり叩いてた、アオミにいたつてはショックを隠  
しきれないみたいだ。

「ママさん、俺らの親も四色真人つていうんだけど」

「四色なんて日本にはそんないだろうからな、もしかしたら若  
者達の一族だけかもしれない。率直に言う、若者とツバサは異母兄  
妹だ」

嘘だろ、俺とツバサは全く似てないし、でも俺もアオミも母親似な  
んだよな、それに四色だけで信憑性は限り無く100に近いし、否  
定の余地がない。

「偽名でたまたまとかは？」

「免許証を盗み見したときの名前だから間違いは無い」

「カイ、私一回だけ聞いた事ある、ジジイが今の仕事をする前にホ  
ストをやってたって事」

「何でだよ！？？」

俺は机を両手で叩いて顔を埋めてた、俺が産まれた頃にアイツは平  
氣で女と遊んでたのかよ、自分には子供がいるのに平氣で。

「何でアイツは家族だけじゃなくて、他人にまで迷惑をかけるんだ  
よ」

「過ぎた事だ、私は気にしてない、ツバサもホストの子供だつての  
は知ってるが、問題は血縁だな。ツバサは3月産まれだから若者  
…、カイが兄なのは確実なんだよな」

ツバサはどんな顔するのかな、親友が兄でしたなんてシャレになん  
ないつて、つてか急に兄妹なんて言われても無理だつて。

「とりあえず…………。ツバサ？今からいつものバーに来て、  
……いや、チカは無しで、今すぐだからな」

ママさんはあつという間に電話してツバサを呼んだ、ココからなら  
10分もかかるないだろ。

てこうことはママさんは母親に近い存在になるつて事？ややこしい

な。

「姉御は私のママ？」

「知らないが、位置的にはそんな感じじゃないのか、別に友達感覺でも良いけど」

「なんか俺の人生メチャクチャだよ、親に捨てられ、島で新しい家族見つけて、義兄は死んで、家出した姉はいきなり現れて、次は親友が妹ですか？家族何人だよ？」

「何かカイの人生もヤバそうだな」

俺は一応ママさんに俺の人生談を話した、四色に関わるとマシな人生歩めないな、ちょっと意味深に言つと呪われた一族、そんな力ツコトイもんじゃないけどね。

三人のしんみり？した空氣に割つて入つて来たツバサ、俺とアオミがいることにとりあえずビックリしてるらしい、ツバサは困惑氣味にママさんの隣に座つた。

「とりあえず、ツバサ、この二人はツバサのお兄ちゃんとお姉ちゃんだ」

「えつ？」

「いやママさん、何段飛ばしの説明なんですか？」

ママさんはめんどくさそうに頭を搔いてタバコに火を付けた、左手でタバコを持って右手で酒を飲んだ。

「お前の父親がホストつてのは言つたよな？」

ツバサは無言で頷いた。

「そのホストは四色真人、カイの父親だ。ココまで言えれば馬鹿の以前でも分かるだろ」

「え？と、カイっちのパパと僕のパパが同じって事は血が繋がつて、血が繋がつてることは家族、パパが一緒で家族つて事はカイっちと僕は兄妹！？僕は遅産まだからカイっちはお兄ちゃん、その隣は噂に聞くカイっちの美人お姉ちゃん、カイっちのお姉ちゃんは僕のお姉ちゃん、ってこと」

全員で頷いた、数式を解くみたいに解釈するんだな、まあ軽いパ一

ツクを起こしてゐるけど分かつたみたいで良かつた。

「はじめまして、姉のアオミよ」

「僕はツバサ、僕にこんな綺麗なお姉ちゃんがいるなんて」

「姉御とは正反対だけど可愛い妹がいたなんて」

「アオミの順心の速さにもビックリだよ、いつもこの時つて男つて弱いよな、むしろ口口にいる奴らが速すぎなんだ、俺は普通だよ、そういう信じたい。」

「何だかよく分かんないけど、ようじくね、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「ん」

「ちょっと待て、アオミはともかく俺にお兄ちゃんは馴染まないつて、今まで親友でしか無かつたんだぞ」

「でもお兄ちゃんはお兄ちゃんなんだもん、僕お兄ちゃんが欲しかったんだよね」

「歳は変わんないんじやん」

何か口笛に言いつらうんだよな、つらかみんなに言いつらう、受け入れざるおえないうけど、ブラコンの姉に続きうるさい妹かよ。でもお兄ちゃんはお兄ちゃんだよ、僕のカツコイイお兄ちゃんと綺麗なお姉ちゃん」

ツバサは俺とアオミの腕を掴んで両方を笑顔で見た、妹と思いつと違つた意味で可愛く見える。

「カイ~~、この子めちゃめちゃ可愛い！」

「お姉ちゃんもめちゃめちゃ綺麗！」

「ツバサ~~~！」

「お姉ちゃん~~~！」

感動の再開みたいに抱き合つて、始めて会つたのに口口まで馴染むとは、恐るべし血縁。

「お兄ちゃんもシラケでないで」

「だからお兄ちゃんこつて呼ぶなー」

「でもお兄ちゃんにカイつちはダメでしょ、それに僕はお兄ちゃんつて響きが気に入つてるんだけどな」

「じゃああれだ、せめて学校にいる時だけはお兄ちゃんって呼ぶな、それ以外なら良いから」「はい

「実は妹萌えとかしてるんじゃないの?」「

「しないしない、數十分前までは親友だつたんだぞ、多少は違つけどそんなマニア向けの感情はないから」

みんなにどう説明すれば良いんだよ、特にココチツには申し訳なくてしょうがない。

俺の人生なのに俺に関係なく激変する人生、これ以上の変化には耐えられないだろうな。

「もう帰つて良いぞ」

「ママさんは飲むんですか?」

「飲む。それとそのママさんも辞める、なんか他人行儀過ぎて嫌だ」「じゃあ何て呼べば良いんですか?」

ママさんは明後日の方向を見て考へてる、流石に親への昇格は順応出来ないから無理だな。

「弥生つて名前だからヤヨイで良いよ」「じゃあヤヨイさんで」

俺がバーを出ようとしたらツバサもついてきた、でもアオミは座つたまま。

「アオミは帰らないの?」

「私は姉御と語り明かす。良いでしょ?」

「私と語のには酒が要り用だよ、潰れない自信はある?」「

「バカルディーまでならいけますから」

「流石にこんな所に無いから……、ウォツカ二つ頂戴」

どんだけハードボイルドな姉なんだよ、つてかバカルディーは通じるんだろうが、どこで飲んだのかも知りたいし。

俺とツバサは一人で帰り道を歩いてる、血は争えないらしい、ツバ

サはさつきから俺の腕にしがみついてる。

「なあ、それは流石にヤバいだろ」

「何で？お兄ちゃんと腕組んで何がいけないの？チカチカにもしてるのでに」

「俺は男だぞ、それに親友の方がまだ強いし」

「堅いなあ、前は前、今は今でしょ、お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだから」

ため息しか出ないよ、何で四色の女は腕を組みたがる、呪われた一族の七不思議つてか。

「ツバサは飯食ったの？」

「あつ！ そうだ、チカチカと作る予定だつたのに」

「チカは家にいるの？」

「いるよ」

俺は携帯を取り出してアドレス帳を開いた、チカの番号にかけるとすぐに出た。

“もしもし”

「チカ、飯食つた？」

“食べてないよ”

「作つてあるの？」

“まだ、何で？”

「俺んち来いよ、鍋やるし俺も一人しかいないからさ」

“分かつた、でも家知らないんだけど”

「じゃあコンビニまで来て」

“分かつた、プツッ”

俺とツバサの家の中間にあるコンビニで待つてもらう事にした、勝手に家に入れちゃヤバいかな、でもアオミなら許してくれるよな。

俺は妹に昇格したツバサと一緒にコンビニに向かってる、あのバーからコンビニに行くのとツバサの家からコンビニに行くのだと、ツバサの家の方が近いからチカの方が先に着いてると思うんだよね。ツバサは腕にしがみついて歩きにくいし、何度も言うようだけど、ほんのちょっと前までは親友でしかなかつたんだぞ、しかもコテツの彼女っていう肩書き付きで、それが今は腕を組んでる、絶対におかしい。

しかも感じがアオミにメチャメチャ似てる、だからかは分からぬけど無理にほどけない。

コンビニにつくとチカは雑誌のコーナーで立ち読みしてる、俺は店内に入つてチカを呼んだ、チカは俺の声に反応して目があった、その瞬間読んでた雑誌が床に落ちた。

「……………カイ？」

もの凄い険しい表情をしてる、俺はよく分からずに周りを見渡す、そして左腕で視線が止まつた。

そこには満面の笑のツバサがいる、ヤバい、俺も順応速度の速さに影響されてた。

「チカ、コレには深すぎる事情が」

「最低！ そんな見せるために呼んだの！？」

「何でチカチカ怒ってるの？ ねえ、お兄ちゃん」

「……………二人ともそういう関係だったの？」

「そういう関係だけど疑似ではない、本物なんだよ」

「本物？」

何とか治まつたみたいだけど、表情は明らかにキレてる。

俺は全てをチカに話した、ヤヨイさんの過去、ツバサの親の事、俺とアオミの親の事、そして納得して、……………フリーズ。

「分かるよ、俺もテンパつたから」

「それでツバサが腕組んでるの？」

「ああ、四色はブラコン家系らしいからな」

チカは大いに納得したらしい、何で姉妹そろって誤解を生むんだよ、俺には荷が重すぎる。

「でもツバサでしょ？」

「それが問題なんだよ、アオミはともかくツバサがコレは正直しないでい」

「お兄ちゃん酷い、やつと出来た兄妹なのに、僕はずつと一人で寂しかつたんだよ」

「いや、それは分かるけど、チカが目の前にいるんだぞ」  
仮にツバサを妹として受け入れたとしよう、でも彼女を目の前にしてコレは無しだろ、いや、普通に腕を組むのは有り得ないけどそこは大目に見るか。

「じゃあチカチカは右腕を良いよ

「そういう問題じゃなくて……」

俺はツバサの頭を押して引き離した。

「とりあえず離れる」

「僕の事嫌いなの？」

「嫌いじゃない、でも俺にも優先順位つてものがある

「しようがないな」

ツバサは納得したらしい、チカでコレだけ苦労したって事は、コテツの時は一発殴られるくらいの覚悟でいかないとな、でもコテツの一発だろ、不良殴った時に一発で頬骨折つたらしいし、逃げる事だけ考えるか。

俺達は俺の家？に向かってた、当然握ってるのはチカの手、逆サイドには後ろ手に組んでるツバサがいる。

ツバサには今度兄妹の許容範囲について教えとかないと、最悪の場合添い寝が有り得る、アオミが夜這いをかけるくらいだからな。

俺はマンションにつくといつものようにオートロックをあけた。

「凄い」

「ねえねえ、コレホントにお姉ちゃんの家？」

「そうだよ」

「もしかしてお姉ちゃん、ホステスとか？」

「違うよ、それはまた後で話す」

俺はエレベーターの上のボタンを押した、最上階にあつたエレベーターは徐々に降りてくる、一旦10階で止まつたけど再びスムーズに降りる。

チンという音とともにエレベーターのドアが開く、中には一人の男の人がいた、でも何故か出てこようとしない。

「すみません、出ない…………」

「チカ？」

男内の一人がチカの名前を呼んだ、俺はビックリしてチカを見ると、チカはそれ以上にビックリしていた。

「兄貴」

「えつ！？」

「チカ嬢じやねえか！おい、紅、チカ嬢がいるぞ！」

「うるせえ、分かつてる葉夜<sup>ハヤ</sup>」

「チカ、もしかしてお兄さん？」

チカは無言で頷いた、奇跡的感動の再会？つてか世界は狭いな、ツバサの件といい、チカのお兄さんの件といい。

兄ことコウは赤に近い茶色で、メガネをかけている、一言で言つと冷めた奴、チカとは反対側の人間みたいだ。

ハヤと呼ばれた男は印象的には好青年だ、しかもどことなく雰囲気がユキに似てる、そしてハヤの一番目を引くのがドレッドの髪の毛。

「チカコイツら誰だ？」

「俺はチカの彼氏の四色海です」

「僕はチカチカの親友兼カイの妹の鷺鷹翼で～す」

そういうえばツバサって親友にしかあだ名つけないんだよな、普通の

友達は名字だし、『テツはコテツ、つて』とは俺はクラスアップしたのか？

「コウ、チカ嬢に彼氏だつてよ！良かつたなあチカ嬢。ああ、忘れてた忘れてた、俺は蘭葉夜、で、こっちがチカ嬢にお兄様の紅蘭？どこで聞いた事ある名前だな、蘭、蘭蘭、蘭真珠子…マミ姉だ、つて事は。

「もしかしてマミ姉のお兄さん？」

「おお！マミコの事知つてるの…？そう、俺はマミコのお兄様です」「そんなのは後だ、チカ、彼氏つてなんだ」

怖つ、この人ただでさえ冷めてるのに声を低くすると怖さがでる。

「アタシの彼氏だよ

「何だコイツは

「何だとは何ですか！？」

「吠えるなガキが。こんな変な頭しやがつて」

「色は白毛です、『ウさんやチカと同じよう』。髪型は言つつけ悪いですけど、ハヤさんよりはマシだと思つますよ」

「変じやない、これはファッションド

「俺と同じですね」

「ウさんは顔色一つ変えずに俺を睨み続ける、チカのお父さんでもこんな怖い顔しなかつたぞ。

「チカ、これからどこに行くんだ？」

「カイの家だけど

「男の家か？」

「そうだよ」

「おいガキ、テメエチカに手え出したらただじやおかないからな」  
「うわあ、何も言い返せない、時既に遅しだし、もうこれ以上ないくらい手を出しちゃつたよ。

この人の怖さは尋常じゃないな、もしかしたら今まで会つた人の中で一番威圧感があるかも。

「チカ、コレは俺の部屋の鍵だ、コイツに変な事されたら俺んとこ

来い」

「その条件だつたら行く事は無いかな」  
チカはこのマンションのカードキーを受け取つた、絶対にチカを行かせなによつにしなきや、俺が殺される。

「ゴメンなカイ君、口ウはシスコンだからさあ、妹が可愛くて可愛くてしようがないんだよ

「ハヤ！ そんなに殴られたいか？」「

「別に良いけど、そんなことしたら、カイ君に口ウのシスコン列伝を夜通し語つちゃうから」

口ウさんは顔を真つ赤にして舌打ちと共に歩きだした、ハヤさんも後を追つて走つて行つた。

つてか口ウさんのシスコン列伝つてのも聞いてみたいな、一晩かかるくらいのもんなんだろ。

その前に、口ウさんがいなくなる前に言わなきやいけない事が。

「口ウさんー俺、口ウさんよりチカを幸せにする自信ありますから！ 絶対に泣かせませんからー！」

口ウさんはそのままシカトして行つた、ハヤさんは親指を立てて口ウさんの後について行つた。

俺が向き直つてチカを見ると顔が真つ赤になつてゐ、ツバサも騒いでるし。

「カイの馬鹿」

「お兄ちゃんカツコイイーあんなに堂々と宣言しちゃうなんて」

「俺は嘘つかないから」

チカの手を引いてエレベーターに乗つた。

飯も食べ終わつてみんなでテレビを見てる時だつた、急に携帯が鳴りだした、ディスプレイを見るとアオミの名前が出でる。

「もしもし」

“カイ～？私今日姉御と語り明かすからツバサとチカちゃんを家に泊めちゃつて、カイが泊まりに行つても良いけどね……、 Pruitt”

「お、おい～」

一方的にきりやがつた、しかもかなり酔つてたっぽいし、しかも泊めろつて何だよ泊めろつて、ヤヨイさんからの命令とか？

「カイ、どうした？」

「アオミとヤヨイさんが語り明かすつてから、一人を家に泊めろだつて」

“それは許さねえ！”

大きな音と共に誰かが入つて來た、赤茶の髪の毛にメガネの男とレッドの男、「ウさんとハヤさんだ。

それより何でココにいるんだよ、俺は部屋番号二〇九か階も教えてないのに。

「コウ～、聴くだけつて約束だろ？」

「チカ！男の家に泊まるなんて許さないからな～！」

「その前に何でココにいるんですか！？」

「コイツチカ嬢が心配だから、ポストで部屋番号調べてずっと聞耳たててんだぞ」

スゲエ、そこまでやるとはアオミも真つ青だな、犯罪犯してまで妹を守りたいのかよ。

「ダメだ！俺の家に來い」

「「ウさんも男じゃないですか」

「兄はOKだ」

「今時兄が妹に手を出したつて例もありますからねえ」

ちょっととからかつたら顔色が変わつた、この顔は完璧ぶちギレモードだ、殺される。

「すみません、『冗談です』

「とりあえず、チカ、俺の家に來い」

「カイ、『ゴメンな』

「別に良いよ」

「ウさんとハヤさんとチカが出ていった、コレで俺とツバサの二人つきりになつちゃつたな、…………ツバサと二人つきり？」

「お兄ちゃん！」

「おい！馬鹿！」

ツバサが飛び付いてきた、最悪な予感的中だ、今のツバサはアオミ級に危ない、ブラコンモードマックスだよ、「ウさんと良い勝負だな。

「お兄ちゃんと二人つきりだ、ねえ、何する？背中流しつこい。」

「しねえよ！コテツに殺される」

「大丈夫だよ、兄妹なんだから」

「あのな、兄妹でも風呂には一緒に入らないし、抱きつきもしない、実際のところ親友よりも浅い存在なの」

「ええ、僕の見るアニメはキスもしてたのになあ」

どんなアニメを見るんだよ、しかもツバサの兄妹の基準はそこからか、アオミの言つた妹萌えが半強制的に執行されそうだな。

「じゃあさあ……」

「添い寝もダメ」

「ケチ」

「ツバサは、お兄ちゃん、つて存在どじままでしたいの？」

「ファーストキスはしたから…………」

ツバサは慌てて口を押さえたけど全部聞いちゃいました、顔を真つ赤にしてる、コイツ墓穴掘りやがった。

「キスう？お兄ちゃんによく話してみな」

「馬鹿馬鹿！お兄ちゃんの馬鹿！」

「冗談だつて、それより、キスまでするつもつだつたの？」

「そうだよ」

「イツ危ない、完璧にアオミと同族だ、アオミは更に高みにいるけど、問題はそこじゃない、こんな姉妹に囲まれてたら俺は犯罪に手を染めそうだよ。

うらやましいとか思つてゐる変態ども、ちつとも嬉しくないからな。

「でも言つてたじやん、兄でも妹に手を出さつて」

「それは間違つた例だよ」

「でも添い寝くらいなら許されるよね?」

「許されない、それにコテツがいるだろ、コテツと寝ろよ」

「男の人と寝たことないから恥ずかしくて出来ないよ」

俺は男じゃないのかよ、ツバサの中では兄つてのはまた違つた部類に入るのか?

コテツ、助けてくれよ。

「お兄ちゃんつてチカチカには積極的なのに、それ以外には硬派なんだね」

「いや、俺がノーマルなの、よりによつて何でツバサに四色の血が流れてるんだよ」

「僕が妹じや不満?」

「いや、四色のブラウンの血が不満」

「僕の事嫌いなんだ……」

なんだかしょんぼりしちやつた、鼻をすすぐだしたし、何で女の子に泣かれると何でも許しちやうんだよ、女の涙は核兵器だな。

「ツバサ泣くなよ」

「お兄ちゃんに嫌われたあ」

ガキがコイツは、でもこの場をどうせつてやつけるか。

……ゴメン、チカ、コテツ、殴るなら殴れよ、俺は目の前で泣いてる妹を平氣で放つておけるほど悪魔じやない。

俺は仕方なくツバサを抱き寄せた、罪悪感が身体中を支配してゐる、これは兄としてだ、決してツバサを女として抱き締めてる訳じやない。

「大丈夫だよ、妹を嫌う兄なんていない、兄として好きだよ

「ホントに? 嫌いじやない?」

「当たり前じやん、知らなかつたとはいえ兄妹だもん、アオミもツバサも同じくらゐ俺には大事だ」

「チカチカは？」

「ツバサとアオミが一人がかりでも勝てないくらい好きかな、でもコテツとかコガネやヒノリよりも、ツバサが大事だよ、家族だもん」

「…………お兄ちゃん」

みんなマジでゴメン、俺つて最悪の男だよな、数時間前までは親友だつた奴を抱き締めてる。

確かにツバサの事は好きだよ、でもチカの好きとは全く違つたもの、チカのタメならツバサやアオミでも投げ出せる、でもツバサとアオミのタメならコガネ達を投げ出せる。

親友ではない事は確かだ、でもまだ複雑なのも確か、それもこれも全部あのクソ親父のせいだ。

## 赤の児貴（前書き）

今回はチカ目線です。

## 赤の兄貴

兄貴に連れていかれるがまま兄貴の家に着いた、カイの家が14階で兄貴の家が10階、前来た時は違う家だったから引っ越したんだと思う。

部屋の中は兄貴そのものって感じ、銀を貴重とした家具ばかりで生活感の欠片もない、無駄に几帳面に揃えてあるし、兄貴はこんな家に住んでて疲れないのかな。

兄貴は冷蔵庫から飲み物を取り出して、コップを3つ取り出した。

「コウ、俺はいいよ、コウのシスコンの邪魔しちゃ悪いだろ」

「今の発言の方が問題ありだ」

「ハヤ君も残つて、ハヤ君に話したい事があるの」

「チカ嬢もしかして俺に惚れてたとか？」

兄貴の裏拳が飛ぶ、でもハヤ君は軽々と体を反つて避けた、懐かしい光景だな。

アタシはハヤ君と兄貴を座らして話した、話す事は沢山あるけど重大ニュースから。

「ハヤ君落ち着いて聞いて。まず、ユキが死んだ」

ハヤ君は机を叩いて立ち上がった、でも兄貴がハヤ君の腕を掴んで無理矢理座らせる。

「島に行くフェリーでマミ姉をかばって海に落ちた、それで行方不明の捜索打ち切り、事実上死んだ事になつた」

「ユキが、マミコをかばつて？」

「ユキとマミ姉は付き合つてた、でも本題は違う、マミ姉がそのシヨックで喋れなくなつちゃつたの」

ハヤ君は頭を抱えてうつ向いてる、兄貴は無表情で腕を組んで椅子に背を預けてる、端から見たら冷たい奴かもしけないけどアタシには分かる、腕を掴んでる手に力が入つて、兄貴も辛いんだ。

「時間が経てば話せるようになるらしいけど、それがいつになるか

は分からぬ。でも言葉が喋れないだけでマミ姉はマミ姉だよ。  
「マミ」「なら大丈夫だよ、絶対に話せるようになる、俺の自慢の妹  
だから」

ハヤ君はうるんだ目で笑つた、ハヤ君が大丈夫つて言つたんだから  
大丈夫だよな。

「暗い話をした後は明るい話を、風間詩織さん、アタシ達はフウち  
やんつて呼んでるけど、フウちゃんが島の中学で先生やつてゐる」

「「シオリが！」」

二人の表情が驚きに変わつた、そんなに驚く事かな、確かに少し頼  
りないけどそれなりだと思うよ。

「シオリに先生なんて出来るのか？」

「用務員の先生とかだつたりして」

「英語の先生だつたよ、アタシ達3年の担任もやつてたし」

「「担任！」」

そこまで驚くことなのかな、アタシは今のフウちゃんしか知らない  
から分かんないけど、あの天然つぶりが酷かつたとか？  
「だつてあれだろ、確かシオリは妄想が行きすぎて授業中に鼻血出  
して失神したよな」

「後はハヤに告白する時に、呼び出した所を自分が間違えてた」

「マラソンの授業で迷子にもなつたよな」

「数学の時間はXを全部<sup>エックス</sup>全部×（かける）つて読みやがつた」

「国語の時間は縦読みじやなくて横読みしたよな」

フウちゃん酷すぎるよ、いくらアタシでもフォローしきれない、あ  
れで治まつた方、つていうか劇的進化だよ。

「シオリはどうなんだ？」

「今は元生徒と付き合つてるよ、天然もそこまで酷くないし」

「残念だつたなハヤ」

「いや、付き合つてたの？俺ら」

「キスまでしたんだから付き合つてたんだろ」

ハヤ君は難しい顔をして顎に手をあてた。

「でも告白される前だし、告白する場所間違えて来なかつたもんな」

「ハヤ君は何でフウちゃんと付き合つ前にキスしたの」

「キスしたい人とか言つたから、冗談半分で手を上げたらキスされた。それが俺もシオリもファーストキスだつたんだよね」

フウちゃん恐るべし、ファーストキスを拳手であげるなんて、天然を通り越してただの馬鹿だよ。

「チカ嬢はあのイケメンの彼氏とはどこで会つたの？」

兄貴の目がピクツて動いた、冷静を装つてゐるけど内心あのガキとか思つてゐるんだろうな。

「カイは島に來たの、アタシが東京にいる兄貴に会いに行つた時に、ひつたくりにあつて泣いてるところを助けてくれたの、そのお礼に島に呼んだんだ」

「つて事はチカ嬢はカイ君に会いたくて東京の学校を受けたの？」

「いや、カイはそれからずつと島にいたよ」

二人とも頭の上にクエスチョンマークが浮かんでる、これ言つたら兄貴怒りそうな氣もするけど、大丈夫かな？

「カイは島にいる時に親に捨てられて、ユキの家に居候つていうか、ユキの義理の弟みたいな状態だね、ユキの両親の事もおとおかあつて呼んでるし」

「カイ君も辛い人生歩んでるんだな」

そういうえばハヤ君つてもの凄く涙脆弱いんだよな、確かに島出る時なんかは泣きすぎて部屋から出てこなかつたんだつけ。

「でもいざとなつたらチカを置いて逃げ出すんだろ」

「そうでもないよ、アタシがストーカーにあつた時なんて、刃物出したストーカーに立ち向かつて行つたんだから、ほつぺたの傷はその時に付いた傷。それ以外でもアタシが不良の先輩に襲われた時、カイは一人で不良の山に飛び込んで行つたんだもん、その時は3日くらい意識が戻らなかつたよ」

「コウ、負けたな」

兄貴も下を向いちゃつた、ハヤ君は頭の後ろで手を組みながら笑つ

てる。

カイはアタシの怠慢の彼氏だもん、たとえ兄貴がなんと言おうとアタシはカイを手放せない、カイより良い男なんて絶対にいないよ。

「でも酒癖は悪いだろ、そういう奴に限って豹変するんだ」

「お酒は自分でセーブするよ、むしろ悪いのはアタシの方だよ」

「酔つた彼女を思つて自分は我慢する、なかなか出来ないよ」

兄貴は頭を抱えて何か汚点を探そうとしてる、カイの悪いところなんて無いよ、カイより完璧な人がいるなら知りたいくらい。

「でも頭悪いと将来苦労するぞ」

「それも大丈夫、テストは常にトップだから。それに料理はもの凄く上手で案外家庭的なところもあるよ」

「頭が良くて料理が出来てイケメンで彼女思い、男の理想像だね」

兄貴は更に必死に考えてる、アタシとハヤ君は笑いながら兄貴が次はどんな質問をしてくるのか待つてゐる。

無理なのに、兄貴が可哀想に見えてきた。

「でも不良に負けたつて事は喧嘩弱いんだろ、運動出来ないんだ」

「そうでもないよ、相手はバット持つてたし、8人くらいいたもん。運動はサッカー部で2大エースつて言われてるよ、県の選抜に呼ばれたけど断つたらしいし」

「運動も出来るなんて、コウ、諦めろよ」

ハヤ君は兄貴の肩にポンと手を置いて慰めてる。

カイ、兄貴に勝つたよ、やっぱりカイは最高の彼氏だよ、モテすぎてたまにヤキモチやいちやうけど、それはしちゃうがなによ、カイにも色々我慢させてるんだもん。

「だからって俺は認めないからな」

「コウも意地つ張りだなあ、カイ君より良い男なんていないぞ、チカ嬢の幸せを思つたら今まがベストでしょ」

「クソツ、好きにしろ」

兄貴は部屋に入つて行つた、少し悪いことしちやつたかな、後で謝つておこつ。

それにもしてもハヤ君の髪型は凄いなあ、確か美容師なんだよね、ハヤ君もマミ姉と同じように綺麗な顔立ちなんだよ、モテるんだろうな。

「何だよチカ嬢、そんなに俺の顔ばかり見て、惚れたか?」

「違うよ! ただ、モテるんだろうな、って思つて」

「モテるよ、職業柄女人の人が多いし」

ハヤ君自分で言つちやつたよ、少しあは謙遜して欲しいけど、ハヤ君らしこつて言えればハヤ君らしいな。

「彼女はいるの?」

「いないよ、会つ暇が無いし必要ないかな、つて」

「兄貴はこのの?」

「気になる?」

アタシは無言で頷いた、やつぱり妹として気になるんだよね、妹が言つのもなんだけど兄貴つてクールな感じで、そういうのが好きな人には良いと思うんだよね。

「いないんだよね、理想が高すぎて出来ないんだよ」

「やつぱり」

「でもモテるよ、同年代じゃなくて10代のガキと30代お姉さまから」

「どういう意味?」

「同年代には取つ付きにくいつて牽制されるんだけど、ガキにはカツコイイつてモテるし、お姉さまに良くあるのは『貴方の乱れた顔が見てみたい』だつて」

兄貴も案外凄いんだな、そんな『ディープな世界にいるなんて。

その日はハヤ君も泊まつて行つた、アタシはもう一室あるからそこに布団を敷いて寝た、ハヤ君はソファード寝てる、久しぶりの兄貴も変わつて無かつたな。

でもみんなと話してた間もカイとツバサの事が気になつてた、まだアタシの中でツバサは親友、カイの妹としては考えられない、だから少し嫉妬しちゃう、早く慣れないとな。

朝は大体俺が飯を作ってる、アオミが作る事もあるけどアイツ低血圧だから起きないんだよな、酷い時は叩いても起きない、魔法の呪文というか屈辱的の一言というか、とりあえず人には言えない一言では物凄い勢いで起きるけど。

今日も布団の中でグズる俺の体を180度回した時だった、隣に見ことがある女の子が寝てる、これはアオミじやなくて妹だ、妹ってツバサだよな…………。

「ツバサ！？」

俺が叫ぶとツバサが眠い目を擦りながら起き上がった、寝起きなのにこの笑顔はなんだよ。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはようじやねえよ！何で口で寝てるんだよ！？」

「一人じや怖かったから、最初はお兄ちゃんに抱きついてたんけど、寝てる間に離しちゃつたんだね」

「抱きついたのか？」

「うん、お兄ちゃんも抱き締めてくれたよ」

頭が痛い、抱き締めたって、寝てる俺、妹になにしてるんだよ、全身全霊をかけて拒否しろよ。

「キスはしないよな？」

「おやすみにお兄ちゃんのほっぺたにしたよ」

怖い、妹が怖い、姉妹が揃つたら俺に安息はあるのか？

「チカチカと寝てて良かつたね、チカチカと寝てなかつたら罪悪感で泣きたくなつてたでしょ？」

「そうだな、ホントにチカと寝て…………」

「寝たんだ」

ハマつた、完全に誘導尋問にハマつた、ツバサのしてやつたりの笑が怖い。

「やつぱり退院したときには？」

「そうだよ。アオミには言つたなよ」

「何で？ 姉弟なのに隠し事するの？」

「アイツに言つたら確實に襲われる」

「僕なら良いの？」

「ツバサにはコテツがいるだろ、俺を大事にするのも良いけど、コテツはそれ以上に大事にしろよ」

ツバサの頭を撫でて俺はベッドから立ち上がった、3人分の朝飯作らなきやいけないし、ツバサの妹就任の記者会見もやらなきやな、殴られるだけで済めば良いんだけどな。

ツバサも部屋から出てきて、ソファーに座つてテレビを見てる、そんな中インターフォンが鳴る。

「お兄ちゃん、誰かな？」

「分かんない、ツバサでてくれる？」

「はい！」

ツバサは走つて玄関に向かつた、鍵を開ける音が聞こえてドアを開ける音も聞こえた、そして何故かツバサの叫び声も。

俺は慌てて玄関に行くと、倒れたツバサの上にアオミが倒れてた。

「大丈夫かアオミー？」

「お姉ちゃんお酒臭い」

「酒？」

「かあい、ただあいむあ」

完全に酔つてる、俺はアオミを抱いでソファーに座らした、隣ではツバサが支えてるけど、酔つてるアオミはツバサをも押し倒す勢いだ、しかもツバサは嫌がつてないし。

俺は水を一杯渡した。

「ゴメン、私寝る」

「分かつた、俺は今日出掛けるから飯は適当に食つて

「はあい」

アオミはそのままフランフランになりながら自分の部屋に入つていった。

俺は出来た料理をテーブルに並べて、アオニの分はラップをかけておいた。

「いただきま～す」

ツバサは一皿散に食べ始めた、一口口に入れるとそのまま止まつた、そしてプルプルと震え始める。

「美味しい！」

「何だ、美味しいのか」

反応がおかしいから不味いのかと思つた、俺の作る飯が不味いわけないもんな、と自惚れてみる。

「お兄ちゃん美味しいよ～！」

「そこまで騒ぐ事か？」

「騒ぐ事だよ、こんな美味しい朝御飯始めて食べた、毎日食べたいなあ」

「ヤヨイさんが帰つて来ない時なら良いよ」

「わ～い」

学校でいる時よりも無邪氣だな、少し疲れるけど可愛い妹？慣れるまでは色々苦労しそうだけど、慣れれば可愛い妹になるんだろうな、大人しくしてればの話だけど。

「お姉ちゃんはママと何話してたのかな」

「さあ、でも久しぶりに楽しそうなアオニを見た」「どういうこと？」

「アイツって友達を選ぶところがあるんだよね、ツバサと一緒にプログラコンだし。だから帰つて来ても楽しそうじゃないんだ、でも今日は俺といふ時と同じ笑顔で帰つて来た。多分女同士でしか話せない事でも話してたんじゃない」

ツバサは納得したように頭を上下させている、ホントに分かつてゐるかな、まあそのうち分かるだろ。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんはやっぱり姉弟だね、良く分かつてゐるよ。でも僕なんて……」

「そうか、ツバサの場合寂しかつたんだる、チカが同居しても親

友だ、悩みとかあっても話せる限度とかはあるし、親友に甘える事は出来ない。母親がいても男の包容力が欲しい時もあつただろ、そこでお兄ちゃんがくれば甘えなくなるのもしょうがないだろ

「お兄ちゃん凄い、そこまで分かつてたんだ」

「まあな、ツバサの甘えて来る時の目と、俺が遅く帰つて来た時のアオミの目が似てたから、寂しさをぶつける感じかな」

ツバサの目は少しうるんでた、俺とかアオミとは違つてツバサは甘えたいタイプだもんな、女同士の家族には出来ない事もある、それが溜つてたんだろ。

ツバサはチカを連れて帰つた、俺も支度しなきやな、これからコテツに殺されるかもしぬないし、気合い入れてこ。

待ち合わせをしてるレストランに行くと、既に全員集合してた、そりや重大な話があるつて言えば遅刻する奴はいないよな。

コガネとヒノリとコテツの順で椅子に座つて、奥にツバサがいてその隣にチカ、俺はチカの隣に座つた、コテツと調度対角線上になつて良いし。

「カイ、重大な話つてなんだよ？」

「そうやで、わいこれから稽古あるんや、早めにお願いしませ」

「いや、コテツに一番関係あるんだよね」

「わいに？」

「コテツは心当たりが無いか考えてる、分かつたらビックリだよ。

ああ、今になつて緊張してきた、ツバサには黙つてろつて言つたから何も言わないから良いけど、ツバサは何を口走るか分からぬもんな。

「驚くなよ」

「大丈夫やつて」

「ツバサと俺は兄妹なんだつて」

「 「 「えええええ！」 「

店内の視線全てが俺らのテーブルに注がれる、とりあえず全員でお辞儀して話を戻した、コガネもヒノリもコテツも理解出来ないらしい。

「冗談やろ？」

「ツバサの父親と俺の父親が一緒に

「でも髪の色が違うじゃん

「そいやで、カイはんのお姉さんまで青いのにツバサはノーマルやで

「髪の色は母親の遺伝子」

再びフリーーズする、ヒノリは驚いたわりには既に興味がないらしい、全員がヒノリみたいだつたら楽なのに。

「俺の親父はホストやってて、その時に手を出して妊娠させたのがツバサの母親、だから俺とツバサは異母兄妹って事」

「ツバサはどう思つてるん？」

「僕は嬉しいよ、お……、カイがお兄ちゃんで」

「血が繋がってるだけならまだマシなんだけど。みんなアオミ見た事あるよな？」

コガネとコテツは顔を見合させて考えてる、その間もヒノリは椅子に背を預けてアイスティーを飲んでる。

「カイはんにベタベタなんやろ？」

「チカちゃんよりもな」

「ツバサまでああだとしたら？」

「カイはん、もしかしてツバサと手え繋いだんか？」

「ゴメン」

コテツはテーブルを思いつきり叩いて立ち上がった、ヒノリ以外全員に緊張が走る、俺はまともにコテツの顔を見れない。

「まあ、ええか」

「えつ？」

「だって兄妹なんやろ？ それならしゃあない、カイはんはツバサの

兄貴なんやろ？」

「そりだよ、僕達はもう親友じゃないよ」

「でも良いのか？カイは昨日までは俺らと同じだったんだぞ、ツバサ君はやり辛くないのか？」

「ガネは肘をつきながら、まえのめりになつて、ツバサに聞いてる、おれもそれがずっと引っ掛かつてたんだけど、ツバサがあんなどから受け入れてるけど。

「でもカイは産まれた時からお兄ちゃんだもん、親友になるずっと前から僕達は繋がつてたんだよ、むしろ親友だったのが嘘みたいだよ」

そつかあ、そりだもんな、俺が産まれた時にアオミが姉貴だったようじ、ツバサは妹だつたんだよな、そり考えれば楽だな。

「チカちゃんは良いのか？親友と彼氏がベタベタしてて」

「最初は嫌だつたよ、でもツバサはコテツといる時は愛を受けてる女の顔をしてる、カイといる時は兄貴に頼る子供の顔をしてるんだ、それ見たらアタシと兄貴の事を思い出しちやつて、別に良いかなつて」

今はこんなに氣丈に振る舞つてるけど、寂しがりやの泣き虫のブランだつたんだよな、ツバサの気持ちは少し分かるんだろうな。

「コテツは？」

「カイはんは酷い事せえへんやろ？」

「うん、家族思いの良いお兄ちゃんだよ」

「それならええで。カイはん、妹さんを下せ！」

「何それ？プロポーズ？」

コテツは真面目な顔で体をのりだしながら行つてきた、高校生のクセに気が早いな。

「まあそんなもんやな」

「つてか早く持つてつて、アオミとツバサが揃うと疲れそりだから

「お兄ちゃん酷い！」

「ツバサ、馬鹿！」

ついに「コイツやりやがった、折角今まで上手い具合に抑えてたのに、3人の冷ややかな視線が突き刺さる、ヒノリまで興味持ちやがつて。

「……お兄ちゃんだつて」

「カイはんそんな趣味あつたん?」

「ツバサ君が言つとリアルだな」

「アタシはフォローしないよ」

「お兄ちゃん」めんなり

ツバサが泣きそうな顔で謝つてきた、ツバサにも見捨てられるし、この調子だと学校中に広まるのも時間の問題だな、コイツらの中では諦めるか。

「ツバサ、別に気にするな」

「ごめんなさい」

「カイが言わせてるの?」

ヒノリがボソッと爆弾発言した、俺にそんな趣味があると思つてのかな、だとしたら今後の在り方を考えないとな。

「ヒノリはそう思う?」

ヒノリが無言で頷いた。

「そんな訳ないじゃん、ツバサがこうとしか呼ばないから諦めただけだよ」

「コテツ、カイが一線踏み越えるのも時間の問題だぞ」

「それはアカン、そない事したらわいの拳が暴れてまうで」

「それはアタシも許さない」

それは無いと思うけど、手前までなら有り得そうで怖いんだよな、アオミは仕掛けて来てるし。

「大丈夫だよ、始めてはコテツつて決めてるから」

「…………不純」

「爆弾発言だろ」

「カイはんええんか、妹あない事言つてるで」

「好きにしろよ」

「お兄ちゃんは僕が大事じゃないの?」

全員笑つてるよ、俺は泣きたい、常に暴走してる妹を誰かに止めて  
欲しいんだよ。

「でもココまで来るとホントの兄妹みたいだな」

「何言つてるのコガネん、僕とお兄ちゃんは正真正銘兄妹だよ」

「お兄ちゃんはどうなの？」

「コガネの兄貴では無いな。親が言つてるんだから確かなんだろ」

「前々から兄妹だったみたいだな」

確かに、俺もツバサが妹つてのが自然になりつつある、学校も同じ  
だし良くなあから一緒に住む必要は無いけど、むしろ一緒に住まれ  
ると困る。

でも、こんなに可愛い妹がいるんだ、毎日がつまんない訳ないよな、  
俺が言つのもなんだけど綺麗な姉もいるし、俺つて馬鹿だよな。

今日は夏休み以来の帰省、半ば強引にアオミやらツバサやらをふりほどいて来てる。

いつもなら今頃は船内で爆睡してるんだけど、今日はチカに無理矢理甲板に連れて来られた、寝ようと思えば寝れるんだけど、元気なチカを見ると寝れなくなる、いや、寝るのがもつたいたいってのが妥当かも。

最近何故かチカが落ち着いてきて、こんだけ無邪気にはしゃいでるのは見てなかつた、だから何だか嬉しくて。

俺はチカに腕を引かれるがまま船首に行つた、風をもろに受けて気持ち良い。

「カイ！ 向こうで飛び魚が飛んでるぞ」

「ホントだ」

「また飛んだ！」

久々にこんなチカ見た、大人しくしてる時の100倍可愛い、癒されるなあ。

「カイ、顔が赤いぞ」

「チカが可愛いからだよ」

「…………馬鹿」

チカは顔を真っ赤にして、また海を眺め始めた、やっぱり可愛いな。でも何でチカは大人しくなつたんだろ、今までには人目を気にせず騒いでたのに、最近は控えてるようと思える。

「チカ、何で最近大人しいの？」

「そ、そ、う、か、な、？」

「そ、う、だ、よ、何、か、元、気、そ、う、じ、や、ない」

チカは人指し指で頬を搔いて、目線を海から空に移した。

「カイが疲れちゃうだろ？」

「はい？」

「いや、だから、最近コテツとかツバサのお守りやつてるし、コガネとヒノリのコントロールもしてる、何かカイが全部動かしてるだろ。それにアオミさんとツバサの家族の事もあるし、アタシが甘えたならカイが余計に疲れるから……………」

「それだけ？」

チカは無言で頷いた、チカも下らない事考えるんだな、まあ確かに疲れるけど、そこでチカがセーブするのは筋違いだと思うんだし。俺は柵に捕まってるチカを彼うように抱き締めた、チカは多少ビックリしたらしく、俺の顔を真ん丸の目で見てきた。

「バ～カ」

「何がだよ！？」

「俺はチカのモノなんだから、甘えたい時に甘えれば良いし、頼りたい時に頼れば良い。チカにだけは我が慢して欲しいんだから、自分で嘘付くなよ」

「でもカイが疲れるだろ」

チカは物凄い不安な顔で俺の目を見てきた、少し惚氣させてもうひとつ、この顔もメチャメチャ可愛い。

「ああ、チカに氣を使われるところちが疲れる」

チカは笑顔になつて地平線に視線を移す、その瞬間俺は柵に背を預けて座りこんだ。

「どうしたの？」

「チカに氣を使われたから疲れた」

「大丈夫か？」

「ダメだな」

「あああ、ゴメンゴメン！アタシのせいだよな！？」

あたふたしたチカも可愛いな、つてか俺さつきから惚氣てばっかりだな。

「そうだよ」

「何かアタシに出来る事はある？」

「キスして」

チカの顔がまるみるうちに真っ赤になつてく、あたふたが止んで、うるんだ目で俺の事を見てくる、そんな事されたら俺からしたくなつるだろ、でもコレはチカへの罰?だ。

「ホントにキスだけで良いのか?」

「ああ」

「分かつたよ」

チカは目を瞑つて、勢い良く触れるだけのキスをした。でも俺は戻る途中でチカの両頬を両手で挟んだ。

「ダメ」

「んん!」

そのまま無理矢理、今度は俺からキスをした、いつもよりも長く、五感が全て無くなるようなキスを。

チカを離すとそのまま床にへたれ込んだ、体に力が入つて無い、目はトロンとしてるし。

「もしも~し」

「久しぶりなんだから、…………優しくしてよ」

そつか、チカはクリスマスの記憶が無いから久しぶりなのか、まあ良いか、こんなチカも見れたんだし。

「チカ、早く立たないともっと激しいキスしちゃうよ」

「それはダメ、抑えきれなくなる」

何をだよ、何を抑えきれなくなるんだよ、試してみたい気もするけど、試すと怖そう、確実に変態路線に行きそう。

「カイ、カイのキスでアタシの心臓が壊れそうだよ。ほら」

チカは俺の手を取つて自分の胸に押し当てた、しかも確実にこれは狙つてゐる、そうと分かつても何故か鼻が熱くなる、寒いからかな、鼻水が出てきた。

「カイ鼻血!」

「えつ、嘘?」

鼻に手を当てる手が真っ赤に染まつてた。

チカにティッシュを借りて処置はしたけど、我ながら情けねえ、こ

の程度で鼻血出すなんて、コガネの事からかってられないな。

「これはアタシの勝ちだな」

「勝ち負けの問題か?」

「勝ち負けの問題だよ」

チカは俺と同じように柵に背を預けて座つた、背中から風を感じるから余計に冷える、でもチカが俺の腕を抱いてくれるから、そんなの全くもつてお構いなし。

「カイ、卒業したら結婚しよう」

「ハハ、気が早いな」

「良いだろ」

「良いよ、結婚でも何でもしてやるよ」

チカは俺の腕を抱きながら喜んでる、遅かれ早かれこの言葉が出てくるとは思つたけど、ココまで早いとはな。

「ねえねえ、アタシとカイの子供つて紫色の髪の毛してるのかな?」「単純に考えればそうだけど、遺伝子つてそんな単純な物なのか?」「良いの!カイの子供だからカツコイイんだろうな」「女の子だつたらうるさいだろうな」

「それどういう事!?」

チカは頬を膨らまして怒つてる、このまま海に入つても頬だけで浮けるんじゃねえの。

「冗談、可愛くて子離れ出来ないとと思うな」

「男の子だつたら蒼紫アオシ、女の子だつたら紫紅シシクつて可愛くない?」

「気が早い」

チカの額を指で小突いた、でも確かに可愛いかも、後何年先だか分からぬけど、現実になつたら良いな、いや、現実にするか。

ガキの戯言、でも俺らは本気だよ、絶対に一人で幸せになる。

フェリーは徐々に減速して着岸の準備に入った、俺とチカは自分達の席に戻つて荷物の準備をしてる。

島に着いたらとりあえずマミ姉に会いに行く予定だ、元気だとは思うけど、何か変化があれば儲けもんだろ、そんなに早く治るとは思つて無いけど。

乗客は次々に降りて俺らだけになつた、船内の客がいなくなつたのを見計らつて、俺らも船を降りた。

降りてビックリ、ハヤさんとマミ姉がいた、いや、ビックリしたのはそれじゃない。

「マミ姉、その髪の毛どうしたの？」

マミ姉は笑つて自分の髪の毛を触つた、以前のマミ姉なら髪の毛は指に絡む。

「俺が切つたんだ、可愛く出来るだろ」

ハヤさんはマミ姉の頭を撫でながら笑つた。

マミ姉の髪の毛、夏休みまでは綺麗なロングの黒髪だつた、でも今はベリーショート、チカよりも短くて若干はねてる、そこらへんの男よりも短い、でもそれが似合つんだから凄い。

『似合つてる？』

マミ姉は手話で話しかけてきた、夏休み俺らが島を出る前の約束、マミ姉には手話が出来るように、俺とチカは理解出来るようになること。

「凄く似合つてるよ、可愛いし」

「凄い、アタシよりも短い。でもさすがマミ姉だよ、どんな髪型にしても様になる」

『ありがと』

「なあなあ、俺を抜いて話を進めるなよ」

そつか、ハヤさんは分からぬんだよな、逐一通訳しながら話せば

良いか。

それより何でハヤさんが「」といつてゐるんだる、ついこなこだマンシヨンで会つたのに、地味にストーカーとか？

「ハヤさんは何でいるんですか？」

「チカ嬢にこの事聞いていてもたつていられずに、あの後仕事そつちのけできちやつた」

仕事をほつたらかしにして来るなんて、かなり無茶苦茶な人だな、でも、マミ姉が心なしか元気そうだし、兄貴様々だな。

「こんな所で立ち話もなんだろ、俺達の家に来なよ」

「じゃあ荷物置いたら行きます」

俺とチカはとりあえず荷物を置きに帰る事にした、マミ姉には色々話したい事があるしな。

俺はチカを迎えてからマミ姉の家に行つた、チカの家はマミ姉の家に行くときには、丁度通るからな。

家につくとハヤさんが出てきた、満面の笑で通されると、居間にはマミ姉がこれまた満面の笑で座つてゐ、笑顔の絶えない良い兄妹だな。

俺らが座るとハヤさんは飲み物をくれた、机を真ん中に置いてマミ姉の左にチカ、右にハヤさん、正面が俺だ。

「マミ姉、四色蒼海つて覚えてる？」

マミ姉はビックリした表情で頷いた、気付いてると思つんだよな。

「俺の姉貴」

『「もしかしたらと思つたけど、ホントにカイ君のお姉ちゃんなんだ』

俺は簡潔に通訳しながら聞いた、ハヤさんのために。

『「アオミちゃんつて可愛いよね』

「極度のブラコンだけどね」

マミ姉は首を傾げた。

「弟」〇〇なんだよね

『そりなんだ、始めて知った』

アオミの事だから無駄に自慢してると思つたけど、軽い罪悪感で話せなかつたのかな、俺の事を見捨てたつて思つてたらしいし。

「でもまあマミ姉、カイつたらアオミセこと学校で抱き合つてたんだよ」

「あれはアオミが無理矢理抱きついてきたんだよ。」

「学校では浮氣つて噂されてるんだぞ。」

「大丈夫だつて、俺にはチカだけだから」

「そんな事言つてもダメ！」

「フフッ」

「「「笑つた！？」」

今マミ姉が笑つた、あの声は聞き慣れたあの声だ。

マミ姉は喉を押さえてもう一回声を出そうとした、でも出でてくるのは空氣だけ、悲しい顔した後にまた満面の笑になつた。

「大丈夫だよマミ姉、良くなつてる証拠じやん」

マミ姉は笑顔で頷いた。

「良かつたなマミ！」

ハヤさんはマミ姉の頭を撫でて笑つてみせた、マミ姉のこんな子供みたいな笑顔は始めて見た、いつもは大人っぽい笑顔なのに。

「マミ口も落ち着いたし東京来るか？」

マミ姉はビックリした顔でハヤさんを見た。

「マミ口も落ち着いただろ、それに東京に行けば親友もいるし、チカ嬢やカイ君もいる、なんだつたら俺ん所でバイトも出来るし」  
マミ姉は悩んでるみたい、そりやそうだよな、話せないのに東京に行くのはキツイもんな。

「やつぱり嫌か？」

『お兄ちゃんに迷惑がかかるよ

俺はハヤさんに通訳した、マミ姉らしい理由だな、でもハヤさんな

り……。

「俺がそうしたいんだよ、マミコを口口に一人で置いておきたく無いんだ、俺と同じ所で仕事すればずっとマミコと一緒にいれるだろ『でもお兄ちゃんに迷惑だよ、友達とかもいるでしょ？』

「大丈夫！コウやチカ嬢、カイ君やアオミちゃんつていう親友もいるんだろ、じつにいるより楽しいだろ」

この人は俺らに相談無しに決めてるよ、まあ少なくとも俺は大丈夫だな、アオミも喜ぶと思つし、俺は万々歳。

「俺は大丈夫だよ」

「アタシも、兄貴も喜ぶと思つ」

「マミコは？」

マミ姉は笑顔になつて頷いた、ハヤさんは喜んでマミ姉の頭を思いつきり撫でてる、頭を撫でるのでハヤさんの癖なのかな。

「じゃあ年明けに戻る」

マミ姉はハヤさんに撫でられてるから小むく頷いた。

「じゃあマミ姉に毎日会えるのー？」

「さすがに毎日は会えないだろ」

「何で？」

「マミ姉はハヤさんの所でバイトするんだし、俺らにも学校がある、それにそんな毎日マミ姉に会われたら、俺がマミ姉にヤキモチやくし」

「わああ、今のコウが聞いたら青筋立ててキレるだろつな」

チカは顔を真つ赤にしてうつ向いてる。

こうやつて話してるとハヤさんとコキつてホントに似てるな、でもハヤさんには悪いけど、コキには敵わないんだろうな、まあハヤさんの存在が治癒に一步近付いてるのも確かだ。

東京に行って、マミ姉が少しでも言葉を取り戻せば良いんだけどな。

今は超大豪邸一戸建てミッチー宅にいる、軽くじら辺の説明が必要だと思つ。

ミッチーは中学の同級生、それと両想いでミッチー宅の使用人の娘のコノミちゃん。

他にいるのは、人形好きで子供っぽいコメちゃん、一つ下の彼氏のこれまたガキのゲン。

教師に恋したダイチ、その恋された教師でダイチの彼女、初恋の相手はハヤさんという天然のフウちゃん。

後は学級委員長兼コメちゃんのお守りだったサエ、ちなみに一回サエから告白された。

こんな懐かしの面々と同窓会モードキを開催して、大体この会場になるのはミッチーの家。

理由は「力過ぎるから、どれくらい力かって」と、俺とダイチが迷子になつたくらい。

「カイ、その髪の毛何?」

サエが呆れ気味に言つてきた、サエは思つた事ズバズバ言つし言つことキツイんだよな。

「オシャレ?」

「髪の毛伸びましたねカイ君」

ミッチーが横から入つてきた、当然コノミちゃん付きで。

「ホントだ、カイさんこんなに長くなかったですよね?」

「まあ長くもしたくなるさ」

「何で?」

「気分」

サエが呆れて頭を抱えてる、つてかさつきから結んでるところを触られてるような……、いや触られてる。

振り向くとそこにはゲンとそれを制止するコメちゃんがいる。

「スゲエカイさん！何コレ、男なのに髪の毛結んでる！」

「つるせえ、ゲンのチヨンマゲを引っ！」抜くぞ

ゲンの頂点で結んだ前髪を引っ張った。

「イタタタ！カイさん痛いよ！」

「じゃあ俺に変な事するな」

ゲンのチヨンマゲを放した、コメちゃんが片手で人形を抱きながら、ゲンの頭を撫でてる。

「ゲンちゃんが、悪い」

「カイくーん！」

この声は……、何か飛んで来たから体を反らして避けた、俺の目の前を物凄い勢いで誰かが通り過ぎる、見るとヘットスライディングしてるフウちゃんがいる、反対側にはダイチがいた。

「何で避けるんだよカイ、フウちゃんが可哀想だろ」

「フウちゃんを抱き締めて良かつたの？」

「…………カイが正しい」

「ダイチ君酷おい！」

再び俺の前を通り過ぎて、今度はダイチに抱きつくフウちゃん、口

イツはホントに教師かよ、何か一瞬にしてドツと疲れたな。

チカとサエがジユースを持って来た、それにしてもみんな変わつて無いな、少しは変化を期待したんだけど

「カイ、ジユース」

「ありがとう」

「なあカイ、サエに彼氏出来たんだって」

「マジで！？」

俺が本気でビックリすると、顔が『失礼ね』と訴えてくる、確かに失礼だな。

「やつたじゃんサエ」

「ダイチに出来たんだから、私に出来ない訳ないでしょ」

「いや、何かサエなら勉強の邪魔になるとかで、彼氏作らなそ娘娘だから」

「エスカレーターだからね、それに女の子なんだから恋くらうするわよ」

確かに、なりふり構わず俺に告白したくらいだからな、それでチカと喧嘩したらしい。

「カイとチカも仲良さそうだね」

「当たり前だろ、アタシが惚れた男だぞ、死んでもはなさないよ」嬉しい事言つてくれるねチカ、まあ例の如くサエは呆れてるけど、サエをのらせるのつてヒノリをのらせるのよりめんどくさいかも。

「チカ、そういう事は思つても口に出さない」

「でもさあサエ、カイつてアタシがいるのにモテるんだよ、酷いと思わない? サッカー部の試合とか女の子だらけなんだぞ」

別にモテるのは俺のせいじゃないんだけど、酷いも何もしようがないうじやん、俺だつていなくなるならいなくなつて欲しいもん。

「カイとチカつて光ヶ丘だつけ?」

「そうだよ」

「光ヶ丘のサッカー部は有名だよ、彼氏がサッカー部だから言つてたけど、2人メチャメチャイケメンがいて、それ目当てに他校からも女子が来るつて。彼氏も見たこと無いらしいけどね、とても男が入れるギャラリーじゃないって」

そうなんだ、他校から来るのは始めて知つたし、そこまで俺つて有名人? なんか照れるな。

「それにチカはバレー部でしょ?」

「何で知つてるの!?」

「私もバレー部だもん。光ヶ丘のバレー部3人も有名だよ、可愛くて上手だつて」

「何か俺らの学校つて有名なんだな」

「別名アイドル高校だもん」

無駄に他校の生徒の出入りが激しいのはそれが理由か、第一校風がおかしいもんな、普通高校でミスコンなんてしないだろ、それに生徒会長がイケメンつて制度もどうかと思うし。

「来年は私も試合に出るからチカとあたるかもね」

「アタシ達には勝てないよ」

サエもバレー上手いんだよな、確かにコテンパンにされたつ。サエが財布から何か探して、何かを見つけたらしく取り出した、写真一枚、もしかして彼氏田慢とか。

「はいコレ、カイと、チカ」

手渡された写真にはつい最近の俺が写ってる、チカの方には最近のチカだ。

「何コレ？」

「売つてたからネタとして買つた、チカとカイの他にハーフの男の子とか、銀色の目をした女の子とか、コスプレした女の子もいた」コガネにヒノリにツバサだ、こんな事をするのは一人しかいない、帰つたら……、穩便に話し合いで済まそう、殴るの良くない。「もしかして売つてた奴つて糸目でスパイラルの関西人？」

「何で分かつたの？」

「コテツか、カイどうする？」

俺は携帯を取り出してアドレス帳からコテツの名前を引き出した、通話ボタンを押すとコテツにかかつた。

「もしもし、何でつか？」

「コテツ、他校でも写真売つてるだろ？」

「あら、バレてもうた？」

「バレたバレた。帰つたら焼き肉屋で報告聞くから」

「焼き肉屋？」

「コテツの奢りでね」

「ちよちよ、ちよつと待つてやーそれだけは堪忍して……プツツ」

話の途中で強制終了。

「チカ、帰つたらコテツの奢りで焼き肉だつて」

「やつたあ！」

「何なのコテツって？」

「商売に目がない親友、その写真に写ってた奴らと俺らと関西人でいつもつるんでる」

「アタシを含めて女の子3人がバレー部、ハーフの不良が有名なサッカー部のもう一人、って感じかな」

「物凄い濃いメンツだね」

確かに、かなりの色物グループだつてのは分かつてるよ、でも中学の時もドツコイドツコイだろ。

超ボンボンに、メイドさんに、人形オタクに、チヨンマゲに、マリモに、天然教師に、毒舌委員長、誰が誰だかは分からなくて良いけどね。

今年も残り2時間ちょっと、なんか年寄りっぽいけど一年つて早いな、今年は色々ありすぎて楽しかった、来年はもっと楽しくなる、ハズ。

今年はマミ姉はハヤさんと一緒にだから俺とチカだけ、去年もだけど今年も俺の両親はいない、何が言いたいかつていうと、只今家には俺とチカだけ、他には誰もいないし誰も来ない。

まあ、チカに何をしようって訳じゃないんだけどね、臭いかもしけないけど、隣にいればそれで良いじゃん。

「カイ、今年もソバ作るの？」

「もう作つてあるよ、後は茹でるだけ」

「ホント！？」

チカが何故か喜んでる、無駄に嬉しそう。

「どうしたの？」

「カイのソバだぞ、あれを食べるタメに一年間過ぐしたようなもんだもん」

「大袈裟な

「大袈裟じゃない！」

隣にいたチカは俺の顔を覗きこみながら、頬を膨らまして怒ったフリをした、俺は膨らんだ頬を両手の人指し指で潰した。

「カイのソバがどんだけ美味しいか知らないのかよ！？」

「知らないも何も俺が作つてるんだけど」

「あのソバを食べたら、死にかけた人も奇跡的回復をするよ！」

普通にスルーされた、しかも奇跡的回復つて、過大評価もそこまでくると妄想だろ。

でもそんなに期待してくれてたなんて嬉しいんですけど。

「アタシだけじゃなくて、みんなにも食べさせたいくらいだよ」

「みんなって」

「ツバサとか」

「じゃあそれは来年だな」

「うん！」

チカは覗きこむのを辞めて普通……、じゃなくて俺の腕を抱いて座つた。

テレビは紅白がやつてる、この番組も飽きずによくやるよな、実際楽しくもないのに国をあげて騒いで、俺にはそれが理解出来ない。

「今年も終わっちゃうな」

「悲しい？」

「いや、楽しかった、ツバサもヒノリもコガネもコテツも、最高の親友なんだもん。それにこんな最高の彼氏がいれば、今年よりも来年の方が楽しいに決まってるよ」

「じゃあ楽しくするタメにソバ食つか！」

俺はチカの頭に手を置いて立ち上がった、俺がそのまま手をだけようとしたらチカが手を掴まれた、チカは俺の手を引っ張つて立ち上がる。

「アタシも手伝うよ

「もう茹でるだけだけど？」

「うん」

まあ良いか、別に茹でるのに上手いも下手もないもんな、それに二人で作った方が楽しいし。

キッチンに行くと冷蔵庫から麺を取り出した、ダシはもうとつてある、俺は鍋に水を溜めてダシの鍋と同時に火を付けた。

キッチンに暖房器具は無いから寒い、火を付けてもそんなすぐには暖まるもんじやないし、とりあえずありえないくらい寒いから家なのにチカと手を繋いでる。

「カイ、沸騰したから麺入れて良いよ」

チカは麺を熱湯の中に入れた、徐々に部屋も暖まってきたけどチカが手を離す気配はない。

客観的に見ると変な光景だよな、ソバ茹でながら手を繋いでるなん

て、でも他人から見て変とか馬鹿が一人にとつては幸せなんだよ。

「湯切りするからちょっと離すよ」

「それアタシがやる」

「大丈夫か?」

「当たり前だろ」

「分かった、怪我するなよ」

チカはタオルで取つ手を握つてザルにソバを流した、寒いから余計に湯気が立ち上つてチカの顔を覆つてゐる。

「ゲホツ！ゲホツ！」

湯気でむせてるよ、鍋を置いてせきじんでるチカを見てたら笑えてきた、俺が腹を抱えて笑つてると、チカは顔を真つ赤にして俺を睨んでる。

「もう笑うな

「ゴメンゴメン、湯気でむせてるのなんて始めて見たから

「涙出るまで笑わなくともいいだる」

やつと落ち着いてチカの顔を見ると泣きそうになつてゐる、俺はチカの頭に手を置いて、髪の毛をクシヤクシヤにした。

「泣くなよ、可愛い顔が台無じじやん」

「…………馬鹿

「もう出来るから用意してて」

チカはのそのそと歩いて行つた、俺はソバを取り分けてチカの後を追つた。

紅白を見ながらのソバ、定番中の定番だな。

「いただきます

「いただきます」

俺らは同時にソバを口に入れた、チカがまたむせてるけど今度は我慢、ソバをくわえて震えながらがまんした。

「落ち着けよ

「熱い」

「当たり前じやん、冷たいと思ったの?」

「違つけど。お茶取つてくる」

チカは冷蔵庫を開けて飲み物を取り出して、食器棚からコップを出して戻ってきた。

部屋に入る手前の段差でチカがつまづいた、俺は慌ててチカを支えると、チカは両手を広げた状態で止まった。

「大丈夫？」

「大丈夫だから離して」

俺はチカを抱き締めてた、離してつて言われても、何か離したくなあんだよな。

「嫌だ」

「ソバが伸びるだろ」

「だつてチカあつたかいんだもん、このまま年越す？」

「一時間近くあるよ、無理だつて」

「それもそうだな」

俺はチカを離して座つた、チカも隣に座つてコップについだ麦茶を一気に飲み干す。

そんなに暑かつたのかな、俺は暖かかったけどね。

「後一時間だよ、年越したら最初に何してると思つ？」

「ハッピーニューイヤーとか言つてるんじやない」

「あ、そつか」

「チカはむせてそつだけど」

その瞬間チカが俺の背中を思いつきり叩いた、いや、叩いたんじやない、コイツ、グーで殴りやがった。

「カイがむせてるぞ」

「そりや殴られればむせるつて」

チカは自分で話をふつておきながらシカトしやがった、最近チカの絡み方の強弱が激しいよつた気がする。

テレビがカウントダウンモードに入り、今年も残すところ数分。

年を越したところで何も変わらないけど、思い出を去年に残すのは悲しい気がする、同じに見えて違う数分後。

「カイ、カウントダウンまだかな？」

「なんなら今からする？ 4 5 5 … 4 5 4 … 4 5 3 … 4 5 2

「辞めよう、10秒前でいいよ」

俺は渋々カウントダウンを終了した、時間に終れてる感があつて良いのにな、残り450秒。

たつた10秒ないし5秒、それだけの短い間だけ日本中が同じ事をする、それって凄い事だよな、ワールドカップよりも、オリンピックよりも、政治批判よりも日本中が揃うそんなん数秒、俺はそんな流れに逆らいたいとか思うひねくれ者だつたりする。

「カイ！ 始まるよ、10 … 9 … 8 … 7 …

「 … 6 … 5 … 4 … 」

「さん、むう！」

俺は残り3秒でチカの唇を俺の唇で塞いだ、テレビの番組が年を越して騒いでる最中、俺とチカは長いキスをしてる。

俺らは息が切れるくらい長い長いキスをした、顔を離すとチカは今年一番の赤面度だつた、そりやそうだよな、今年はまだ一分くらいしか経つてないもん。

「年越しキス成功」

「するなら言つてよ」

「いや、こういうのはいきなりやるから楽しいんだよ、打ち合わせしてキスするのは日本中に呆れるほどいる、でもサプライズでやられたのはそんなに多くは無いだろ、チカはそんな幸せサプライズされた内の一人なんだぞ、もしかしたら最初で最後かもしれないじゃん、そう思うと凄くない？」

「ドキドキする」

そうだよ、キスはいつでも出来る、365日いつでも、だけど今俺がやつたのは一年の内一瞬、しかも一回したら翌年は気付かれてる可能性がある、って事はこのドキドキは一生に一度かもしれない、

俺らはそんな事をしてた。

「今のキスが去年最後のキスで、今年最初のキス、凄くね？」

「一回のキスなのに思い出は2年分か、何かカイの事もつと好きになりそう！」

チカが飛び付いて来た、俺は倒れながらチカを受け止める、チカは最高の笑顔を見せてくれた。

こんな最高の笑顔で始まつたら今年はどんなだけ楽しくなるんだろう、最高の幕開けだ。

冬休みは島で樂しんだし、宿題も全部終わつたし、今日は家で思いつきりのんびりするか。

いや、アオミがいる時点で無理だつてのは分かつて、実際チカと島にいた方が疲れないかも、それにかなりの間家空けたし、多分疲労が溜まる一方だろうな。

チカは10階で降りた、俺は14階まで昇り自分の家へ。

カードキーを滑らしてドアを開けると中からどんよりした空気が、そしてどんよりが凄まじい勢いで近付き、俺に抱きついた。

どんよりの根源はアオミ、目を真つ赤に腫らして、頬には涙がつた

つた痕が、どうしたんだよ「イツ?

「カイ~~~~! 寂しかつたあ」

それか、だからってそこまで号泣することじゃないだろ、俺の服はアオミの涙でビショビショだし、普通そこまで泣かないだろ。

「寂しかつたよお、私死ぬかと思つた

「大袈裟だろ」

「寂しくてご飯も喉を通らなかつた」

確かに多少やつれてる、俺は何も悪い事してないのに罪悪感が襲つてくる。

アオミを慰めてると肩をつつかれた、そうだ、すっかり忘れてた。

「アオミ、『レで少しあは元気になつてくれる?』

俺は玄関の外から人を呼んだ、アオミはその人を見た瞬間に一気に顔が明るくなり、涙を拭いてもう一度見直した。

「…………マリマ?」

「マリマ~~~~~! 会いたかったよお~」

「マリマ~~~~~! 会いたかったよお~」

アオミはマミ姉に飛び付いて胸に顔を埋めてる、ついやまし……、じやなくて！元気が戻つて良かつた。

「マミコ髪の毛可愛い」

『氣分転換したの、似合つ？』

「凄く似合つよ」

えつ？今マミ姉は手話を使つたのにアオミは理解した、アオミが手話を使えるなんて聞いた事ないし、もしかして親友特有のテレパシーとか？

「アオミ、何で分かつたの？」

「カイの練習見て覚えた」

すげえ、見ただけで覚えたのかよ、確かにアオミは頭が良い方だと思つよ、でも俺も2ヶ月近く必死に勉強したのに、アオミは見ただけで覚えやがつた、恐るべし。

「こんな所じやなんだから入つてよ」

マミ姉は頷いて家に入つて行つた、アオミも良い顔してたな、マミ姉も楽しそうだし、良かつた良かつた。

マミ姉とアオミはリビングで話が盛り上がつて、て言つてもアオミの声しか聞こえないけど、でも少しはマミ姉も回復に近づくでしょ。

俺は部屋で雑誌読んだり音楽聞いたりしてる、マミ姉のお陰で訪れたやつとの安息、最近はフル回転で毎日過してたからコロコロでありがたい。

でもそんな事を知つてか知らずか誰かが家に入つて來た、いや、この家に入れるのは俺とアオミともう一人だけ、つて事は消去法で人しかいない。

侵入者はリビングに行つてアオミと話して俺の部屋に近付いてる、ドタドタと大きな音をたてながら走つて來た、ドアを開けると同時に俺に飛び付いてくる。

「お兄ちゃん！」

ツバサのダイビングをキャッチするのも慣れた、って何でツバサも泣いてるの？ツバサには「コテツ」がいただる。

「ツバサは何？」

「じゅぐだあい！」

クシャクシャになりながら泣いてたからとりあえず拭いてやった、で、今のを解釈すると、宿題をやってないから見せろ、と。

「コテツとやつた方が楽しいだろ」

「コテツは稽古があるから無理だつて、コガネんもヒノノも付け入る隙が無いし。……ダメ？」

そんな上目使いで言われたら拒否出来ないだろ、コガネとヒノリは納得出来た、コテツが稽古を理由に拒否するのが意外、そこらへんは真面目にやつてるんだな。

そしていつの間にかマミ姉とアオミがドアに立つてゐ、俺らの騒ぎを聞き付けて来たのか。

マミ姉は俺とツバサの関係を知らないから焦つてゐし、関係つて言うと何か変な感じに聞こえるな。

「マミ姉、コイツは俺の異母兄妹だから、つまりアオミと俺の妹」「はじめましてですね？僕は鷺鷹翼です、いつもお兄ちゃんがお世話になつてます」

お世話つて、下らないところまじつかりしてゐんだな。

マミ姉の自己紹介を通訳するとさすがのツバサでもショックを受けた、説明したけど実際に直面すると違うもんな、でもツバサの良いところは適応が速いところだからな、既に気にしてない。

「マミ「マミをそつて呼んで良いですか？」

マミ姉は無言で頷いた、ツバサはマミ姉の手を取つて飛び跳ねながら喜んでる、何が嬉しいのか俺には理解出来ないんだけど。

「マミ「マミをそつておっぱい大きいですよね？」

「マミ「マミのおっぱいは柔らかくて気持ち良いよ、ツバサ、触つてみた

ら？」

いやいや、アオミが許可することじゃないだろ、ツバサは既に揉ん

でるし、この光景は男子高校生には刺激が強すぎる、マミ姉の苦悶？の表情を浮かべてるし、俺の理性を発破で壊そうとしてくる、耐えられるか？俺。

「ん！んう…」

「「「喋った！」」」

今喋ったよな、いや、声を出しただけだけどかなりの進歩だよ。でも何故かアオミとツバサは不適な笑を浮かべてる、確實に何か企んでいるな。

「ツバサ、もっと揉めば喋れるようになるかもしないわね？」

「お姉ちゃん！僕手伝います」

二人は一斉にマミ姉の胸を揉みだした、マミ姉は一人の攻撃に、俺は自分の理性の限界と戦ってる、既に限界に達している理性を抑えるのは、コイツらを排除するだけだ。

俺は一人の首に腕を回してマミ姉から引き離した、一人はバタバタしながらマミ姉の胸を揉もうとしてる、マミ姉に至っては壁に持たれながら床に座った、真っ赤にした顔が俺の理性にダイナマイトを投げ込んでくる。

理性の前に身体がもたずに俺の鼻から真っ赤な血が、何で僕はこんな所から流血を？

「お兄ちゃん鼻血だしてる、ヒッチャイ」

「カイも男の子なんだ、私のならいつでも揉ましてあげるからね」

俺は一人を無視して鼻にティッシュを詰めた、我ながら情けねえ。

「じゃあカイ、私はマミコとまた話すから。ツバサ、キスまでは許す、それ以上は私が先よ

「はい」

アオミはそのままドアを閉めた、その瞬間ツバサがキスを迫つてきたけど、手で押さえながら俺の宿題を机の上に出した。

ツバサは黙々と宿題を写してる、俺は隣で雑誌を讀んでると、イン

ター ホンが鳴った、俺は部屋から出て、顔を確認するとチカがいる、何となく想像できるんですけど。

俺がドアを開けると本田二度田の抱きつき、俺の周りにはハグ魔しかいないのかよ。

「カアイ～！」

「宿題だろ」

「そう、写さして」

「部屋に先客がいるから一緒に写せよ」

チカは喜びながら部屋に入つて行つた。

つてかヤバい、この家は女子人口率が80%に達した、俺の鋼の理性で今後起ころる何かに耐えられるのか、正直自信がない。

女の子が多くて身の危険を感じたのショッちゅうだけど、理性の限界を感じたのは初めてだ。

「カイ、そんな所でつたつてないでこっち来いよ

「ああ」

「お兄ちゃんココはどうするの？」

まあみんな自分の事で手一杯だから大丈夫だろ。

宿題をやつと半分写し終えたお昼時、俺はキッチンに立つてます、この状況下で率先して作るのは俺だけだしな。

本日は人数が多いので鍋です、昼から鍋はおかしいとか思つての偏見野郎、料理つてのは作る奴の独断と偏見で決まるんだよ、俺の気分が鍋だから鍋、それに有利合わせで作りやすいし。

俺はコンロをセットしてだしの入つた鍋を置いた、中に野菜やら肉やらを放り込んで、味噌やその他調味料で味付けすれば出来上がり、今日はいろいろありすぎて疲れたから楽させてもらいました。

「飯出来たぞ！」

俺の一聲で全員が集まってきた、大勢で囲むのは鍋か焼肉が通例で

しょ。

「カイ、鍋？」

「しょうがないだろ、有り合せで作るコレが一番だし、何より疲れた」

「でも美味しいよ！お兄ちゃん」

「ホントだ、鍋もカイが作るココまで変わるものね」

「マミ姉は無言で頷いてる、そちらくんの雄の鍋と一緒にそれひやあ困るよ、なんせ俺が作ったんだから、鍋も三ツ星級だね、と呟れてみたりする。

「ツバサ、野菜も食べなさいよ」

「僕野菜が苦手なんだもん、それ『マミ』『アレ』が食べてくれる」

「マミ姉は肉食べなよ、ツバサとかチカに取られるぞ」

「胸が大きくなるからあんまり食べないんだよね、マミ姉」

「マミ姉は顔を真っ赤にしながら頷いた、何で『イシ』『ア』胸の話しが出来ないんだよ、もつと話題はあるだろ。でもまあマミ姉も楽しそうだ良いか、ハヤさんの『ア』通り自然で心

を休めるのも良いけど、みんなでワイワイも一つの手段だよな。もつ一回マミ姉の声で喋れるその日まで、俺は『ア』通すか。

## 青と焼肉

俺達は盛大に焼肉パー・ティー、ではない、コテツの尋問を兼ねた焼肉、尋問内容は他校で俺らを使い金儲けした事、恐らく高校生がバイトで稼げるような額じゃないだろ。

俺らは割りと高めの焼肉屋を選んだ、6人で食つたら3万はいくだろうな、コテツは半泣きで入ってきたけどね。

とりあえずジユースで乾杯、酒を飲んで流されたら困るし、一応高校生だし。

「じゃあとりあえず、いくら儲けた?」

「……………10万や」

「「「10万!?」「」」

予想以上だ、軽く俺らって凄いなあつて自惚れてみたりする、写真だけで10万つてアイドル並だな、しかもコテツに暇なんてあつたのか?

「ツバサ君は知つてたのか?」

「知らないよ」

「コテツ、どうゆう了見だ?」

コガネが半ギレ、俺は焼肉食えるから良いんだけど、コガネは名前が売れるのを人一倍嫌うからな。

「ヒノとかも怒れよ」

「遊園地に行きたい」

「はつ?」

「私遊園地に行きたい、みんなで行こうよ、コテツの奢りで」

それ名案かも、焼肉食わしてもらつたうえに楽しめるんなら許すよ、これからやらないなら話だけどね。

「アタシも賛成!」

「僕も!」

「なら俺も」

「おいちょつと待てよ、そんなんで良いの？」

「コガネは何故か焦つてる、コテツに発言権は無いしほんどう決定なのに、何故コガネは焦る、ヒノリが喜ぶし俺がコガネの立場なら喜んで行くんだけどな。」

「コガネは行かないの？」

「いや、遊園地だろ？ 乗り物とか乗るんだろ？」

「何だよ、乗り物酔いでもするの？」

「だからさあ…………」

「怖いんでしょ？」

ヒノリの一言にチカは吹いた、机に顔を埋めて肩を震わせてる、ツバサは大爆笑、コテツは蚊帳の外、コガネは顔を真つ赤にしてうつ向いてる。

「コガネ高所恐怖症だから、観覧車も乗れないの」

「コガネも可愛いんだな」

「だから俺は嫌だ」

「でも私コガネと行きたい」

ヒノリは上目使いのダメ押し、コガネの顔が一気に真つ赤になつて考へてる、ヒノリは強いな。

「しようがねえな」

「コテツ、よろしくね」

コテツは頭を抱えて机に突つ伏した、許可をとらなかつた罰だな、ヒノリが珍しく積極的になつたお陰でビッグイベントが入つた、ヒノリ様々だな。

俺らは約一名を抜いて大騒ぎした、コテツはツバサに促されて渋々食べてたけど、自業自得だよな、8割は俺らのお陰の金なんだから、後の2割はコテツの腕、そこは俺らの寛大な心意気で食事する権利は残しといてやつたよ。

「コテツ美味しいよ」

「ありがとう、コテツ」

「コテツ美味しかったよ！」

「可愛い女の子にそない事言われたら嬉しいやないか」

女の子3人の力で多少元気が戻った、コガネはまだ気が乗らないらしいけど、そこはヒノリの力でご機嫌取り戻してるから良いだろ。

「コテツ、お前本当に商売目的だけで他校に行つてるのか？」

「カイどうじうこと？もしかしてコテツが女あさりとか？」

「ホントにコテツ！？僕に飽きちゃったの？」

「チカもツバサも早とちりするな、コテツは何かのついでに行つたんじゃないのか？」

コテツはバツが悪そうな顔をして一瞬うつ向く、そして飲み物を一気に飲み干しつつもの笑顔に戻つた、やつぱり俺の勘は当たつたな。「やつぱりカイはんには敵いまへんなあ！そやで、写真はついでと言つか囮やな。勧誘に行つてたんや、他校に行つてそこの主将と大勢の前で試合して、興味持つた奴勧誘して、ついでに写真を売つたんや」

「ちなみに俺らの事門下生とでも脚色したんだろ」

「降参でんがな、でも大丈夫やで、大半は辞めた、空手にハマつた奴とか喧嘩強うなりたい奴、そんなんばつか残つたんや、まあ結果オーライやな」

コテツも頭使つたな、下手な鉄砲数撃ちや当たるか、これはツバサには言えないうけど、中にはコテツ目当ての女の子がいるだろうな。コテツも地味にモテるんです、誰とでも気軽に話してるし優しいからな、空手にひた向きな姿がカツコイイつて奴もいたし。

「やつぱり俺ら使つたのかよ」

「だから謝るさかい、怒らんといてえな。あつ、それと忘れとつた、カイはんとコガネはんに喧嘩で負けた奴も何人かいるで」

「いやそれは破門しとけよ、俺とコガネが危ないだろ」

「大丈夫やで、うちの道場で腐つた根性は育たへん」

「そりや師範代が腐つてればおのずと門下生はピシッとするだろ」

「コガネはんは厳しいな」

多分強くなつて俺らに喧嘩売つてきても勝てる自信はあるけどね、コテツほど強くなる事はまず無いと思うし。

でもコテツは他校に殴りこみに行つたんだる、それで毎日無傷つて、怪物だな、そして潰された空手部は面目丸潰れ。

「でもどうしてもツバサの写真卖れないんや、他の四人はバンバン売れるんやけどな」

「何で？僕の不細工なの使つたの？」

「いや、わいが選んだからそないな事はない」

「どうせ『わいの彼女やで』とか言つたんだろ」

「そやで」

「空手部ボコボコにした奴の彼女にあえて手を出そうとする野郎はいないだろ」

「あいたたた、わいとした事が盲点やつた、ツバサのが売れれば2割増しやつたのに」

「もうコテツの馬鹿、僕のを売らないでどうするのー」  
いやいや、コテツは彼女を売り物にするなよ、ツバサは彼氏に良いように使われた事を怒れよ、なんかずれたカツプルだよな。

結局焼肉は予想以上に高く4万もした、俺とガネが意地になつて食つたからな、後の6万は遊園地で使いきるか。

本日はヒノリの提案によりコテツの奢りで遊園地に来てる、この遊園地は絶叫マシーンが有名な所、数々の奇抜なマシーンやギネス級のマシーン、後はデカイお化け屋敷があるので有名だ。

コガネは遊園地に入つた瞬間から手が痙攣し始めた、そこまで怖いのかよ。

前にヒノリから聞いた情報によると、コガネは絶叫マシーンで泣いたらしく、つて事は重度の高所恐怖症、今日は氣絶するまで乗らせるか。

とりあえず俺らは一番人気のから乗る事にした、これは高さが半端な高さじゃない、つい最近までは世界一だつたらしく、でもこれくらいなら登れるかも。

コガネは並んでる時からダダをこねてたけどヒノリが腕を抱いてたから逃走はできなかつた、マシーンに乗る前になつて大騒ぎしあじめたけど、俺とコテツで無理矢理乗せた。

「ちょっと待つた！本気で無理なんだよー！マジで死ぬからー！」

「コガネ、往生際が悪いよ」

俺とチカは先頭、その後ろにツバサとコテツ、更に後ろにはうるさいコガネとヒノリ。

「発車しまーす」

「おいテメエ！何スタートをせんのんだよー！」

「行つてらつしゃーい」

発車させるのにコガネのア解がいるのもどうかと思つけどな、しかも係員は営業スマイルでシカトしてたし。

このジェットコースターの感想を一言で言つと、メチャクチャ楽しかった、人が集まる理由が分かるよ。

チカは軽く腰が抜けてる、コテツとツバサは相変わらずはしゃいでる、問題はコガネだ、隣で満面の笑のヒノリをよそに氣絶してる。俺らが頬を叩いても起きない、しうがないうから俺は魔法の呪文をコテツに耳打ちした、コテツはその魔法の呪文をコガネの耳元で言うと、コガネは目を開いてコテツにフックで殴つた、コテツは軽々避けてたけど。

「カイはんわい殺す氣でつか！？」

「どうせ当たらないだろ」

「確かに」

コガネはフラフラになりながら立ち上がつた、ヒノリに支えながら何とか出たけど、かなり惨めな姿だな。

「私最近出来たクルクル回るの乗りたい」

「アタシも」

「僕は何でも良いよ」

「わいもOKやで」

「みんな、『コガネの事忘れてない？』

虚ろな目をしてベンチに腰掛けるコガネ、軽く壊れかけてる。

「次は死ぬかもよ」

「コガネ大丈夫だよね」

頷いた……、よう見えるけどあれは意識が危ないんぢゃないのか、しかもみんなYESと解釈してるし、ヒノリは「コガネを立ち上がらせると腕を強く抱いた、あえて胸が当るよう」に。

並んでる時のコガネは少し余裕だつた、高さが無いからだと思つんだけど、本当の怖さを分かつてないからだよ。  
乗る時も全く嫌がらなかつたし、もしかしてネジが一本抜けたとか。

走行中

「回る何て聞いてねえよ！じ、地面が下にある！」

案の定分かつて無かつた、しかも涙声なんですけど、泣くくらいなら氣絶した方がマシだよな。

「カイ何か回つてるう！」

チカは俺の腕を掴んだまま目を瞑つてる、それじゃあんまり意味ないよな、重力の変化を楽しむような乗り物じゃないもん。

「カイ！今度はバツクしてるとよ」

「座席回転してるからな」

「今度は目の前に空がある！」

俺の話をシカトされた。

終わると「ガネはフラフラだつた、チカは目が回つてフラフラだけど。

俺らはとりあえず「ガネのために休む事にした、テーブルを挟んで椅子に座ると、「ガネは速攻机に突つ伏した、かなりの極限状態だつたんだろうな。

「テツはトレーに飲み物を乗つけて六人分持つて来た。

「ヒノ、悪いけど俺の取つて

「アイスコーヒー？」

「そう」

「ガネは依然伏したまま、チカは俺の肩に頭を置いてジュースを飲んでる、チカもわりと絶叫系はダメとか。

「カイは大丈夫なの？」

「余裕、こういうの大好きだから」

「アタシはヤバめ、高くて速くて怖い」

俺らはコガネの懇願によりスローペースなモノに乗ってる、舟みた  
いな乗り物に乗つて室内のセットを見ながら楽しむモノ。

コレはコガネも楽しんでる、チカも楽しんでるし、でも俺には下に  
水があるのが引っかかるんだよな、普通のなら舟なんていう設定に  
しなければ水はいらないだろ、俺の予想だけどコレはコガネがダメ  
なタイプなうえに濡れるような気がする。

アトラクションも終盤に差し掛かりスピードも上がつた、やつぱり  
俺の予想は当たつたな、コガネはまだ余裕つぽいけど。

「カイ、何か明るいよ」

「落ちる準備しとけよ」

「えつ？」

とりあえずチカの片手はバーを掴ませ、片手は俺が握つた。  
明るいのは外にでるから、そして先に道はない、そのまま真下に落  
下、全員の悲鳴とコガネの奇声がこだまする。

終わるとチカは目が点、コガネはヤバそう、死んだ魚みたいな目を  
してゐる。

あんまり濡れなかつたのは幸いだな、コガネは降りようとした時に  
そのまま倒れた。

いつもは怖がられてるコガネのここまで情けない姿、他の奴らにも  
見せたいな。

とりあえず昼飯、女の子3人が弁当を作つてきたらしい、いつも作  
つてばっかりだから作られる立場つてのも良いな。

とりあえず弁当を広げた、なんか弁当つて良いよな、心なしか和む。

「カイ、このタコさんワインナー私が作つたんだぞ」

「へえ、タコ」

「何だよ？」

「可愛いじやん」

チカの不安そうな顔が一気に笑顔になつた、タコのワインナーなんて始めて見るかも、弁当なんて自分でしか作らなかつたからな、俺が作つてたら引くだろ。

「何で玉子焼きが2種類あるんだよ？」

「コガネんよくぞ気付いた！ どっちかが僕でどっちかがヒノノのだよ」

「じゃあこっちがヒノが作つた玉子焼きだな」

コガネはだし巻き玉子の方を食べた、でも何故か雰囲気がおかしい、口をもぐもぐして明後日を見てる、俺は一つとも食べてみた、片方はだし巻き、片方は甘い玉子焼き、どっちも美味いんだけどな。

「美味いんだけど、いつものヒノのと違う」

「コガネん凄い！ いつもは逆なんだけど今日は僕がだし巻き、ヒノノが甘い玉子焼きを作つてみました」

「コガネはだし巻きが好きだから、ツバサに作らしたら気付くかな、つて思つて」

「コガネ凄いな、だし巻き玉子の味なんてそう簡単に分かるもんじゃないだろ、ヒノリの事なら何でも知つてると」

「ダメや、わいには分からへん」

「ダメだなコテツ」

「いやいや、コガネが凄いんだろ」

「そうか？ 唐揚げと、昆布のおにぎりと、Hビフライ、ヒノが作つたんだろう？」

「凄い、正解」

みんな空いた口が塞がらない、長年連れ添つた夫婦でも分からいぞ、作り方とか味付けとか個人差はあると思うけど、普通分からなつて。

「コガネんカツコイイ！」

「普通じやない、親のとそれ以外くらいは判断出来るだろ？」

「別々なら分かるけど」 ちや ちや になつてたら分かんないし」

「アタシもカイのなら分かるよ」

「それはカイはんの料理がアホみたいに美味しいからや」

「何か嬉しい」

ヒノリは顔を真っ赤にしてうつ向いた、コガネはこれがどれだけ凄いのか理解出来てないらしい。

勘で当てた訳じゃないし、ヒノリが作ったの全てを当てた、コガネつて本当にヒノリしか見てないんだな。

## △色の遊園地（前書き）

今回は次のトピックで話を進めてこよう。

「」飯食べ終ったから今はみんなバラバラ、僕達は絶叫マシーン巡り、「ガネんが嫌がるから行きたい所に行けなかつたんだよね、だから一人の時くらい思いつきり絶叫させてよ。

僕とコガネは椅子に座つて塔みたいのを上下するやつ、あれ怖そうで楽しそうなんだよね、「ガネんがこんなのに乗つたら死んじゃうよ、チカチカも危なそうだけど。

「ツバサ、何か緊張するな」

「そうだね、一気に上がるんだよ」

「おっ、もう始まるで」

スタートと同時に上にビューンって上昇した、今までで一番怖いけど一番楽しい。

コテツからの色々な提案が出たけどやつぱりこの遊園地に来たんだからお化け屋敷でしょ、出でくるのに何十分もかかるんだって、怖いよコテツとか言いながら抱きついちゃつたりとかして、僕つて策士。

でもさつきからコテツの顔が真っ青なんだよね、もしかしてコテツつてお化け屋敷苦手なの？

「コテツ、怖い？」

「だ、大丈夫やで！」

「じゃあ行こうか」

「ちょっと待て！やつぱり怖い」

コテツって強いのにお化けは怖いんだ、あんなに怖いお父さんよりも怖いんだ、何だか意外。

「コテツは入ると意地で僕の前を歩いてるけど、かなりビクビクして  
るよ、チョットした音だけでビックリしてるんだもん。

「コテツ……」

「わっ！な、何や！？」

「いや、呼んだだけ」

「脅かすな」

いや、脅かしてないんだけど、でもこんなコテツも可愛いな、弱い部分つて初めてみたんだもん、頼れる人でも弱いところが無いと人形みたいだもんね。

恐る恐る進んだと目の前からお化け役の人が脅かしてきた、コテツはビックリして……、ビックリして殴つて気絶させちゃつた。

「あかん！怖い！」

「コテツ！大丈夫、……じゃないけど氣絶してるよ」

「ホンマや」

可哀想なお化け役の人、その後もコテツはビックリして5人くらい氣絶させちゃつた、その度に怒られて、謝つて、お化けの人が一番怖い思いしたよね。

恋人達の遊園地といえば観覧車でしょ、僕達も観覧車に乗った、密室に男の子と一人きり、僕みたいな弱い女の子は襲われちゃうよ、つてか襲つて。

観覧車はゆっくり回つてのどかだな、コテツもしんみりと外見てるし、隣に行つたら何かされちゃうかな？

「何や？」

「良いじやん、二人だけなんだからナニしてもバレないよ

「ナニ、やない、何、や」

「細かい事気にしない！」

「いや、かなり大きな事やろ」

何だよコテツは堅いな、僕の周りには硬派な人しかいないんだね、

お兄ちゃんも頭が堅いんだよね。

「じゃあ何かしてほしいんか？」

「そりやもつ、あんな事やこんな事……」

「……はせえへんけど、これくらいならええで」

コテツの顔が急に田の前にきたと思ったらコテツの脣が僕の脣に当たった、僕達、今観覧車の中でキスしてゐる、僕はいつの間にかコテツの首に腕を回してた、どれくらいの間したか分からぬけど、僕には全てが止まつてたよ。

「ガネを見直しちゃつた、私の作ったモノ全部当てちゃうんだもん、横顔が少し逞しく見えるのは気のせいかな？」

「ガネは一人になつた途端に私の手を掴んできた、いつも腕を抱いてるのにガネから握られるとドキドキする、ガネの手は暖かい、心までポカポカする。

「ヒノ、顔真っ赤だぞ、熱もあるのか？」

「…………大丈夫」

鈍感なんだから、女の子の心には時に痛手なんだから、でもそれが

良いときもあるんだよね。

私達はお化け屋敷に入る事にした、ココのお化け屋敷つて緊急避難通路があるくらい怖いんだって、私は「うううのは怖くないんだけど、ココは女の子らしく演技しよ。

コガネは私の前を快調に歩いて行く、私は怖いふりをしてコガネの後ろにしがみついてる。

「コガネ、大丈夫？ 何もない？」

「何がそんなに怖いんだよ？ 相手は人間だぞ」

「だけど暗いしいきなりくるから、……キヤー……！」

お化けに驚いたふりをしてコガネの背中に抱きついた、コガネは振り向いて頭を撫でてくれる、優しいんだ、コガネは少しも驚いてないし、高い所はダメなくせに怖いのは全然大丈夫なんだね、平地にいれば頼りになる。

「そんなに抱きつかれたら歩き難い」

「でも怖いんだもん、早く出たい」

「ならチャツチャと出るぞ、つまらない」

コガネは私の事を抱き上げた、これってもしかして、俗に言つて姫様抱っこ？ そうだよね、棚ぼただよ、私は驚かされる度にコガネに抱きついた、コガネの顔は暗がりでも分かるくらい真っ赤になつてる、可愛い。

私とコガネは観覧車に乗る事にした、今までなら観覧車すら乗らなかつたけど、あれだけ怖い思いしたから大丈夫になつたのかな？ 観覧車はゆっくりとジラすように回つて、でもこの密閉空間に二人でいると少し期待しちゃうんだよね、女の子もそういうモノなのよ。

「ハックション！」

「寒いのか？」

「少しね」

「これ着ろよ」

「ガネは私に上着をかけてくれた、でもこれじゃあ「ガネが寒いよね、大丈夫なのかな？」

「ガネは寒くないの？」

「ヒノが寒くなければ良いよ」

「ダメだよ、一緒に入ろう」

「どうやって？」

私とした事が盲点だった、一つの上着に一人入れるわけないよね、毛布じゃないんだから。

「なら抱き締めて」

「別にいいよ、俺は大丈夫だから」

「私の事嫌いなの？」

私は得意な演技で少し目をつるつるさせてみた、コガネはすこし焦ったような感じで立ち上がり、私の隣に座つて抱き締めてくれた、ドキドキが聞こえなければ良いんだけどな、静かだから聞こえてるよね。

「「ガネ、私の心臓の音聞こえる？」

「聞こえるわけ無いだろ」

「ほら、こんなにドキドキしてるんだよ」

コガネの手を掴んで私の胸に手を置いた、コガネは焦つてるけど、私も何でこんな事したんだろ。

「分かつた？」

「う、ゴメン、分からなかつた」

「私の胸が大きいから？」

「ち、違うから、……俺もドキドキしてるからだよ」

コガネの顔が真っ赤になつた、多分嘘じやないんだろうな、いつか

コガネも積極的になつてほしい、好きのかたまに不安になるんだよね。

やつとカイと二人きりだ、みんなでワイワイしてのも楽しいけどやつぱりカイと二人きりの方が楽しい。  
絶叫マシーンとか本当はもの凄く怖いんだよ、ってか怖いもの全般が無理、無理して乗つてたけどどれもフラフラ、だけどカイが手を握つてくれると不思議と安心するんだよね、やつぱりカイは凄いよな。

でもカイを誉めたアタシが馬鹿だつたね、カイがお化け屋敷に入りたいとか言つてる、アタシは怖いよ、でもカイが楽しみにしてるから断りきれない、大丈夫！きっとカイが守つてくれる、……きっと。お化け屋敷暗い、狭い、どんよりしてる、長い、不満しかでてこないよ。

「キヤー！」

後ろから脅かされた、アタシの心臓が弱かつたらしんでるよ、お化け屋敷は殺人マシーンだな。

アタシはもうカイから離れられなくなつた、カイの背中にずっとしがみついて顔を埋めてる、もう怖くて怖くて死にそう、カイも少しビックリしてるけど笑つてる、何が楽しいのかアタシには理解出来ない。

「キヤー！」

ああ、もう怖い、あれ？立てない、怖くて腰が抜けちゃつた。

「チカ、どうした？」

「」「腰が」

「腰が抜けたの？」

アタシは無言で頷くとカイは大爆笑はじめた、酷い、でもその前に助けて。

「ほら、乗れよ

「重くない？」

「チカくらい軽いよ、それにその体の何処に重い要素が入ってる？」

お言葉に甘えてカイの背中に乗せて貰つた、カイの背中は大きくてあつたかいな、なんなら帰るまでこのままで良いかも。

アタシはお化け屋敷はずつとカイの肩に顔を埋めてやり過ごした、全然「ゴールが見えなくて怖すぎ。

そしてメインイベントかどうかは知らないけど観覧車、こんな密室にいたらカイに襲われちゃうよ、……多分無いと思うけど、理性の塊みたいな人だからね、でも一回理性が飛ぶと何をしでかすか分からないんだよな。

ゆつくりと回る「ゴンドラ」、これ止まらないよね、止まるわけ無いか、あんまりコースで聞かないもんな。

「カイ、どうしたの？」

「いや、帰つたら「ガネに謝ろ」つ

「何で？」

「集合時間過ぎちゃつた」

「ホントだ」

「ガネは誰よりも時間にうるさいからな、5分前行動とか小学生並だよ、遅刻の常習犯は「テツ」だけどね。

「チカ、外見てみろよ」

カイが外を指すと夜景が広がつて、今は丁度頂上付近だから最高に綺麗に見える、凄いなあ。

“ガタンっ！”

「「えつ？」」

今ガタンとかいった、しかもゴンドラが動いてない、もしかしてこれって事故？

「ヤバいな、係員の人気が焦つてる」

「止まつたの？」

「みたいだな」

どうしよう、こういうのって長いんだよね、最悪だよ、でもカイと密室にいれるのは最高かも、いや、こんな時に不謹慎だよな。

「今ならチカに色んな事出来るよな」

「えつ？」

「冗談だよ、そんなに顔真っ赤にするな」

カイの嘘は見破れないんだよ、一寸の濁りの無い田で言つてくるんだもん。

寒いな、もう夜だしこんな鉄の檻に入れられてたら寒いよ。

「チカ、寒いのか？」

「少しね」

「なら、…………乗れよ」

カイは下に降りてあぐらをして乗れだつて、アタシ抱かれちゃう、今の表現はおかしいよね。

「良いの？」

「俺も寒いから、こういう時は一人で寄り添つた方が暖かいんだよ、本当は裸がベストなんだけどね」

「馬鹿！」

怒りながらもカイの膝の上に乗つた、カイは大きな体でアタシの事を包んでくれる、心まで暖まるつてこの事だね。

「チカあつたかい」

「なに子供みたいな事言つてるの？」

「俺はこのまま永遠に一人だけになつても良いよ」

カイとならアタシも大丈夫、カイはこんなに暖かくアタシを包んで

くれるんだもん。

「チカを絶対に離さない、俺チカが離れたいって言つたら離すつもりだつた、でもそれは俺に嘘をついてる、チカが離れたいなら俺は更に良い男になつてチカが離れたくない男になる、チカは俺だけのモノだ」

何だか独占欲が強いけど嬉しい、アタシから離れるなんて有り得ないけど、そこまでアタシの事を思つてるつて事だよな、アタシも同じだよ。

「やつぱりチカ寒いだろ、これも着ろよ」

「それじゃカイが寒いだろ?」

「大丈夫、風邪ひかないの有名だから」

カイはアタシに無理矢理上着を着せてきた、確かにまだ寒かつたけどカイが風邪引いちやうよ、カイが風邪ひいたらもともこもないのに。

。

どれくらい止まつたかな、1時間は経つたと思う、何かアタシもカイもグツタリしてきた、疲れたよ。

「チカ、大丈夫か?」

「アタシは大丈夫だよ、でもカイがキツそうだよ」

カイの息遣いが荒い、やつぱり風邪引いちやつたんだよ、アタシのせいだよな、アタシが上着をとらなかつたら。

「俺は大丈夫だよ」

「ホントに? ちょっとおでこ貸して」

「ちゃんと返せよ」

それだけの事言えれば大丈夫だと思つけど、アタシはカイの額にアタシの額を当てた、嘘? 凄く熱い、これ絶対に熱があるよ。

「カイ熱酷いよ!」

「大丈夫、微熱だよ微熱」

「嘘！かなり辛いでしょ？」

「怒るな、正直フラフラだね」

“ガタンっ！”

今動いた、観覧車が動きだした、これでカイを外に出してあげれる。アタシはカイの上着を返した、虚ろな目をしてて何処を見てるのか分からない。

下に降りると「ガネとコテツがカイを出してくれた、アタシは泣かないように頑張ってたけどヒノリとツバサの前で泣いちゃった、カイに泣いてるところ見せると心配しちゃうから、カイにはバレないように。

カイは「ガネの背中で寝てる、多分疲れとか風邪でダウンしたんだろうな。

「チカちゃんは大丈夫か？」

「アタシは元気」

「なら良かつた、カイは例え話で『チカが無事なら腕の一本や一本くれてやる』って言つてたんだ、カイはどんな怪我するよりチカちゃんが無事ならそれで良いんだよ」

でもそれじゃあアタシの不安が溜まる一方だよ、アタシだってカイが元気じやなきや嫌なんだから。

ああ情けねえ、『彼女とゴンドラに閉じ込められて風邪ひきました』って何してたんだ？って話だろ、まあ俺が先へ先へって感じで考へてるからそう思うのかもしねないけど、絶対誰か思つてるよ、チカ一人で学校大丈夫かな。

ダメだ、頭使うとフラフラする、大人しくしてよう。

“ピンポーン”

誰だよこんな昼間に、まあいいや、シカトシカト。

“ピンポーン”

うるせえ。

“ピンポーン”

分かっただよ、うるせえな、出るから黙つてろ、つてなんでインターホンにキレてるんだろ。

“ピンポーン”

「うるさい！」

ドアを開けるとそこにはチカが立つてた、ビックリして泣きそうになつてるし、タイミングわる奴だな。

「ゴメン、どうした？」

「アタシのせいで風邪ひかしちゃつたからお見舞い」

「うつつても知らないぞ」

「うん！」

チカは喜んで家の中に入つてきた、嬉しいんだけど僕フラフラです、もうかなりヤバい、何もする気がしないな。

「カイ、大丈夫か？」

「ヤバめかな、それより学校は？」

「カイが心配で早退してきた」

「ホントにそれだけ？」

チカはばつが悪そうな顔をしてる、予感的中な予感、つてどんだけ

アバウトなんだよ俺。

「みんな何があつたかうるさいから、『四色と潤間が観覧車でヤッタ』って噂になってる」

やつぱりな、何でそういう噂が好きかね。

俺はチカの頭に手を置いて今出来る精一杯の笑顔を作つた、そもそもないと可哀想だろ、俺らは必死にやり過ごしたのに何も知らない奴らにそんな事言わされたら。

「大丈夫だよ、明日は俺も学校に行くから」

「ありがとう、アタシカイに助けられてばっかりだな」

「チカを助けるために俺がいるんだから、それくらい当たり前だよ」

「腕の一本や一本くれてやる?」

何でチカがその事知ってるんだよ、何か前に同じような事言つたような気がするけど、チカにその事は言つて無いよな、もしかして。

「コガネかコテツに聞いた?」

「昨日ね、でもそれはアタシが許さないよ、カイと同じくらいアタシも辛いんだから」

でも抑えきれない衝動というか、俺の本能というか、とりあえずチカを守りたいんだよね、これはただの自己満足だげど。

「カイ、ご飯食べてないだろ?アタシが作つてやるよ

「良いのか?」

「せめてもの恩返し、アタシにもそれくらいさせよう

「分かった、頼んだよ」

チカはキッチンに走つて行つた、気になるけどちょっと体力がもたないんだよな、ココでジッと待つてるか。

何か俺が学校休むたびにチカに苦しい思いさせてるんだよな、コテツかコガネが同じクラスなら俺も安心出来るんだけど、まあ休まなきゃ良いだけか。

チカはお盆の上に鍋を乗せて持つて來た、なんか看病されてるつて感じだな、こんな事初めてで新鮮。

「お粥だけど良いよな？」

「ありがとう」

チカはお粥をレンゲで取つて冷ましてる、コレつてもしかして夢のワンシーン？誰もが憧れるあの……。

「カイ、口開けて」

「マジで？」

「マジマジ、はい、あ～ん」

うわあ、何かしちゃつてるよ俺ら、でそのまませちゃつてるよ俺、最高の彼女だな。

「美味しい？」

「ああ、かなり美味しい」

チカの顔がパアつと明るくなつた、そこまで喜ぶ事か？いや、喜ぶ事かも、チカの料理を遊園地の弁当以外に食つた事がないんだよな俺。

「アタシだって料理出来るんだぞ、カイの方が美味しいだけで」「そうだな、たまにはチカにも弁当作つてもらおうかな」

「それは無理！」

「何で？」

「朝は苦手なんだ、だから弁当だけは勘弁して」

そういうえばそうだな、ユキとかと住んでた時は一番起きるの遅かつたんだよな、俺が爺みたいに朝が強いつてのもあるんだけど。なんだかんだ言つて全部チカに食べさせてもらつた、言い訳をさせてもらうとチカが言うことを聞かなくて、無理矢理食わされた。少し寝ろよ、弱つてるんだから

「そうさせてもらつよ」

俺は目を瞑つて寝ようとした、でも何故かチカがいると思つて寝れない。

「カイ、目を瞑つたまま答えて」

「何で？」

「良いから」

「分かったよ」

微妙に鼻声だな、もしかして泣いてるとか。

「カイはアタシの事好き？」

「当たり前じゃん、何でそんな当たり前の事聞くんだよ？」

「時々不安になるんだ、もしかしたらカイはアタシ以外を好きになるんじゃないのかつて、ツバサはまだ我慢出来る、でもヒノリと楽しそうに話してると不安になる、ヒノリにヤキモチやいてるんだ、嫌な奴だよな」

そんな事考えてたのか、全く気付かなかつた、確かにあの中だとヒノリが一番うまがあうけど、それまでだ。

「カイもヒノリもタダの友達だつてのは分かつて、でも嫌なんだ、ヒノリと笑つてるカイが遠くにいるみたいで、アタシの知らない力イがそこにいるみたいで嫌なんだ」

チカは後半から泣き出してる、俺とヒノリはチカにはそういう風に見えてたんだ、確かに友達の中ではヒノリといつて時間は長い、でもヒノリも俺も大切な人がいる、そこに誰かが入る隙は無いと思つてる。

「じゃあどうすれば満足？ヒノリとは今後話さないようにする？」

「それじゃあダメ、居心地が悪くなる、だから分からないの」

「俺にはチカしかいないようにヒノリにはコガネしかいない、お互いに大切な人がいるから笑つて話せるんだ、そこに引け目を感じる恋心があつたら逆に話さないよ、だから笑つて話してるのは安心の裏返し、そう思つてくれないか、じゃないと俺はヒノリと喋れなくなる」

俺が話してる途中で更に強く泣きだした、俺はヒノリとチカの仲が悪くなつてほしくない、だから一人の仲が保たれるなら俺は犠牲になる。

チカは大きな声で泣き出すと、俺の上に乗ってきた、なんでチカが

弱ってるんだよ。

「ゴメンなカイ、ゴメンなヒノリ、アタシ嫌な女だよな？」

もう目を開けても良いよな、俺は目を開けてチカの頭を撫でた。

「大丈夫だよ、誰もチカをせめない、多分コガネも口には出さないだけで同じ気持ちだと思う、だから我慢しろとは言わない、でも溜め込まないでくれ、俺を信じて何でも言つてくれ、俺はチカに嘘はつかないから」

「ゴメン！ゴメンなカイ！アタシ、カイの事が好き過ぎて不安なんだ、だから嫌いにならないで」

サラッと凄い事いつてるな、俺はチカの事を信じてる、いや、信じる事しか出来ないのかも、チカを信じる事しか出来ないから疑えない、だからチカの小さな事にも気付けない、疑う事は必ずしも悪い事じやない、信じることは必ずしも良い事じやない、信じると疑うのは表裏一体なんだよな、五分五分だから丁度良いんだ。

## 赤と部活休み

今日の部活は休み、だからヒノリとツバサと女3人で遊んでる、力イとか待つても良いんだけど、たまには女だけで遊びたいよね。でもこの3人でいると目立つんだよね、ツバサはうるさいし、ヒノリは胸が大きいし、アタシは髪の毛派手だし、かなりの色物グループだと思うんだよね。

とりあえず女の子集まればプリクラでしょ、アタシ達も例外じゃない、最近は女の子だけしか入れない所とかもあってビックリ、覗く男がいるんだって。

「チカチカ、ヒノノ、コレで良いでしょ？」

「アタシは良いよ」

ヒノリは無言で頷いた、ツバサはアタシとヒノリの腕を掴んで入って行つた、ツバサは無駄にテンション高いよね。

「ホラホラ、撮るよ」

その後はウインドウショッピングというか、街を「ラブララ」というか、とりあえず街を歩いてる、特に何を買うでもなく、何をするでもなくツバサに振り回されてる、これはこれで楽しいんだけどね。3人で歩いてると男の人3人に声をかけられた、もしかしてコレってナンパ？いや、もしかしなくてもナンパだよね。

「ねえねえ、君達暇？暇だよね？」

ほらナンパだ、制服着てるから高校生だね、制服を見る限り近くの高校だ。

「ツバサ、どうする？鳥丸君とかはまだまだ時間あるよね？」

「そうだね。五百蔵君はまだまだ大丈夫だよね、ヒノノ？」

「四色君が許せば大丈夫だと思うよ」

「鳥丸？四色？五百蔵？」

「おい、ヤバいぞ、コイツら四色とかの彼女じやねえの？」

「ホントだ！ゴメンね、俺達用事思い出した、バイバイ！」

最近はナンパ対抗術も身に付けた、カイ達の名前を出せば大体が怖がつて逃げていく、色々暴れててくれるからね、持つべきモノは喧嘩が強い彼氏だね、ゴメンねカイ、番犬扱いしちゃって。

皆で騒いでたら時間がかなり経つてた、このまま帰つても良いんだけどせつかくだから夜も食べちゃおう、つて事になつて只今ファミレスにて。

女の子をファミレスに入れたら耐久レースだよ、どれだけドリンクバーで居座れるか、頑張れアタシ達。

「今頃カイとか何してるのかな？」

「コガネの家にいるんじゃない」

「コガネんの家は溜り場だからね」

一人暮らしだからカイとかは自分の部屋のようにつつて、この前アタシとツバサで入ろうとしたのに断固拒否された、何でアタシ達はダメなんだろう。

「ヒノリは何回もコガネの家に泊まつた事あるんだよね？」

「週に一回は泊まつてる」

「コガネんに変な事されてない？」

「大丈夫、キスも出来ないから」

シャイで奥手なんだね、最初の方なんてアタシが肩叩いただけで慌ててたもん、今でも普通の女の子と話すのは苦手だし。

「コガネんと一緒に寝てるの？」

「いや、いつも床で寝ちゃうから私も床で添い寝してる」

「ヒノリ大胆、ヒノリつてかなりコガネに仕掛けてるよね」

「コガネとだと待つてたら何もしてくれないんだもん、私から全部

仕掛けないとね。でもキスだけは「ガネからつて決めてるんだ」「ガネに出来るのかな、手を繋ぐのでやつとの「ガネがキスなんて、そう思うとカイつて大胆なんだよね、全部勢い任せなところもあるけど。

「ツバサのキスは「テツからだよね?」

「そうだよ、クリスマスの帰りにされちゃった

「アタシは……」

クリスマスは思い出したくない、過去最悪のクリスマスだったよ、あれ以来お酒は飲まないつて心に決めたもんね。

「ヒノノはクリスマスどうだつた?」

「2泊3日した」

「嘘!?」

2泊3日も泊まって何も無いの?逆に凄すぎる、しかも泊まる時点で凄いよ、親もよく了承したよね、男の家に泊まって何も無いことを想像出来る親がいたんだ。

「「ガネんの家で2泊3日で何したの?」

「話すくらいだね、手を繋ぎながら寄り添つて

「ロマンチックだな、カイだつたら襲われてるよ」

「お兄ちゃんチカチカは襲うの!?」

「それはねえ」

「僕の事は襲つてくれないのに」

当たり前だよ、ツバサはカイの妹だもん、そこら辺の理性は残つてもらわないとアタシが困る、それにツバサはカイに襲われる事を望んでるんだ、さすがアオミさんの妹。

「チカチカは良いよね、お兄ちゃんとキス出来て」

「ツバサ、もしかしてカイとキスするつもりだつたの?」

「当たり前じやん、ヒノノはお兄ちゃんとキスしないの?」

ヒノリも絶句、ツバサの価値観の酷さに言葉も出ないよ、カイつてとっても辛い環境にいるんだね、少し同情するよ。

「ツバサ、アタシもヒノリも兄貴はいるけど、親友以下の付き合い

だから

「おかしいよ、お姉ちゃんなんか『いつか犯す』とか言つてるよ」

「カイのお姉さんがおかしいの」

アタシのカイが奪われてく、妹萌えのオタクよりも危険な姉妹だよ、カイは多分常識を知つてゐるから大丈夫だと思つけど、いつか一線踏み越えそう。

「コテツが悲しむぞ」

「コテツは心が広いから大丈夫、……かな？」

「アタシ達に聞かれても困るよ、そもそもツバサはコテツの事好きなの？」

「好きだよ！コテツは優しいし、僕の事絶対に守ってくれるし、なにより一緒にいて楽しい、僕はコテツの事が大好きなんだよ」コテツは何でツバサの事が好きなんだろう、一目惚れとか言つてたけどあんまり聞いた事ないよな、ツバサのコテツが好きな理由も今初めて聞いたし。

「それに皆僕がコテツを好きになつた理由はコテツが僕を助けてくれた事だと思つてると思うけど違うよ。本当はその後、家で安静にしてた僕の家に来てくれたんだ、自分も身体中痛いのに汗びつしょりになりながら『怪我人を一人にせえへん、わいが面倒見たる』だつて、その時にコテツなら僕の事を本当に守ってくれると思つたんだ」少しコテツの事カツコイイつて思つちやつた、アタシもコテツの怪我見たから分かるけど、とても人に氣を使つてられるような傷じやなかつた、山の中から人一人おぶつて来ただけでも奇跡だつて言われたくらいだもん。

「コテツってカツコイイでしょ？」

「アタシ見直したよ」

「コテツの悪いところが良い感じに出たんだね」

「悪いところ？」「

「コテツって目的のタメなら手段を選ばないところがあるでしょ？」

この前の写真の件といい、私達に近寄つて来た時、でもその時ばかりは良い感じにそれがでたのかなって」確かに、どんな手を使っても物事を達成させるところがあるもんね、いつも利用されてるのはアタシ達なんだけどね。

カイもアタシがいなくなつたら助けてくれるよね、アタシ何処でも待つてるから、カイとどんな事になつてもカイの事待つてる、アタシにとってカイは最初で最後の人だから。

何で俺はヤヨイさんに呼ばれたんだろ、いきなり携帯に電話がかかってきて出たら『バーに来い』それで終りだぞ、俺に発言権と決定権は無いらしい。

俺は一人でバーに向かってる、アオミはマミ姉が来てるから着いてきて無い、俺一人つて案外重荷なんだけど、酒飲まされるんだろうな、確実に。

着くと既に飲んでるヤヨイがいる、隣に行くと何故か酒が出てきた。

「飲め」

「しょうがないから飲む事にした、飲めないわけじゃないし付き合いならしようがないだろ。

「何ですか？」

「ツバサの事だ」

「何ですか？ 実は弟もいましたとか？」

「フツ」

鼻で笑われた、ヤヨイさんならありえない事もないからな。それにツバサの事つて？もう俺に関係あるツバサの事なんて無いだろ、いや、無いでほしい。

「私はアメリカの本社に行く事になつた」

「凄いじゃないですか！」

「前々からあつた話だ、問題はそこじゃない、私がいない間ツバサを預かれ」

えーと、俺の思考回路が止まりかけた、何とか理解は出来たよ、でもまた強制かよ。

「チカはお兄さんの所に行くらしい、だからツバサを預けられるのはカイとアオミの家だけだ」

「そうですけど……」

「大丈夫だ、アイツになら何しても良い、襲つても文句は言わない」

今の発言は親的に問題があるだろ、それに俺が心配してるのはその逆なんだよな、アオミだけでも毎日がサバイバルなのに、ツバサが加わると地獄だ。

「金もある程度は仕送する、それでも不満か？」

「いつからですか？」

「明日」

「明日…? 何でもうちょっと前に言つてくれないんですか…?」

「アオミに言つた」

「アイツ、俺に通せよ俺に、アイツの家だから強く文句は言えないけど、妹とはいえツバサは女だぞ、それと暮らすのかよ。

「どれくらいで帰つてくるんですか？」

「最低で3年だ、でも確実に延びるだろ、たまには戻つて来るけどずつと向こうにいる可能性もある、ツバサは了承済みだ」いや、了承済みつておかしいだろ、一生ツバサと住めと? 俺に一線を越えさせるつもりかよ、確実に一回は襲われる。

「大丈夫だな?」

「分かりました、一緒に住みますよ、引越しあげますんでですか? 明日荷物をカイの家に送る、ツバサは明日の昼には着くから

「分かりました」

最悪だ、ツバサが嫌いな訳じゃない、怖いんだ、地獄ロードの幕開けだよ、今までさえアオミが週に2回は朝起きると布団に入つてるんだから、単純計算で一人での気持ちいい日覚めは週に3回になる。

「そういう事だ、何があるか?」

「何も無いです」

「私からも何も無い」

俺はそのまま帰つた、憂鬱です、ツバサとの生活が不安。

次の日、休日だから俺は家にいる、アオミはママと買い物行ってる、いうこう時に何でいないんだよ。

家のロックが外れる音がした、そのまま走る足音と共に部屋のドアが開き、ツバサが飛んで来た。

「お兄ちゃん！」

ナイスキヤツチ俺、ツバサは思いつきつ抱きついて離れない、コレに慣れてる俺が悲しいよ。

「お兄ちゃん、今日から一緒に住めるねー！」

「やうだな」

「毎日こうやつてお兄ちゃんといれると思つと僕嬉しい！」何で親と別れたばかりなのにこんなにテンション高いんだよ、普通なら凹んでるべきだ。

「そういえばお姉ちゃんは？」

「マリ姉と出かけてる」

「じゃあ僕とお兄ちゃん一人だけか！何する？」

「何もしないよ」

「何かお兄ちゃん冷たくない？僕の事嫌い？」

「好きだよ、でも兄妹としての好きだからツバサが望んでるような事は出来ない」

ツバサは泣きそうな顔をして俺の顔を見てる、頼むからそんな顔で見ないでくれ、ツバサに一般常識すら通じないのかよ。

「お兄ちゃんは嫌なの？僕と暮らすのが

「別に暮らす事自体は嫌じゃない、でもツバサがそれ以外の事をしよつとしたら俺は拒否する」

「じゃあ生活するだけなら良いんだねー？」

「やうだよ」

何だ言えばちゃんと聞くのか、それなら大丈夫だな、ツバサも何もしなければ可愛い妹なんだけど、その奥に潜むアオミと同じ血が怖い。

アオミは外で食べてくると電話が入った、つまり俺とツバサの一人きり、さつきから何もしてこないから何も無いと思つけど、何故か

胸騒ぎが。

「お兄ちゃん！今日の『ご飯は何？』

「オムライスとかは？」

「本当に！？僕オムライス大好きなんだ」

「それなら良かつた」

オムライスが好きとか微妙に子供っぽいとか思うのは俺だけ？まあ人の好みはそれぞれだから偏見で決めつけちゃいけないよな。

「それより、何でキッチンにいるの？」

「だつて1秒でも長くお兄ちゃんと一緒にいたいんだもん」

「これから飽きるほど会えるんだから良いだろ」

「飽きないもん！お兄ちゃんとずっと一緒に大丈夫だから」

それは俺が困る、それに『テツ』の事はそっちのけかよ、絶対におかしいって。

「ツバサ、もう出来るから椅子に座つてろ、大人しくしてないと食わせないぞ」

「ヤダ！オムライス食べる！」

「なら大人しくお座り」

「は～い！」

扱い方はガキ同然だな、扱い易くて俺的には良いんだけどね。

俺はテーブルの上にオムライスの乗った皿を置くと待てをされてる犬みたいな目で俺の事を見てくる、こういう時に妹って可愛いなとか思っちゃうんだよな。

「食べたい？」

「早くう～、僕、我慢出来ないよ」

「それじゃあさあ、俺から離れる」

ツバサは俺の腕を掴んで離そとしない、俺も右利きだしツバサも右利き、だから俺が食えないんだよね、仮に食えたとしてもうつとうしい。

「でも僕はこうじやなきやいや」

「なら、食べさせない」

「ダメダメ！離すから食べさせて…」

「分かつたよ、食べて良いよ」

「いただきまஆす！」

ツバサは一気に口に掻き込んだ、そして左手を頬に置いて震えてる。

「おいしい！お兄ちゃん凄く美味しいよ」

「当たり前だろ、ツバサのタメに作ったんだから」

「僕のタメに！？でもそれと美味しいのどどう関係があるの？」

「料理つてのはただ作るだけじゃ美味しいだけなんだ、『美味しい食べてほしい』とか『この人のタメに一生懸命作ってる』とか思つて作ると美味しいだけじゃなくて暖かいんだ、本当に美味しい料理つてのは心が籠つてる、当然このオムライスにも」

彼女とかに作つてもらつた弁当がそんな感じかな、よっぽど不味くなきや無駄に美味く感じるもんだる、だから俺は大衆的なデカイ店よりもこじんまりとした店の方が好きなんだ。

「お兄ちゃんの料理は美味しいだけじゃなくて暖かいんだ、じゃあ僕がコテツに作つた料理とかも心が籠つてればもっと美味しいくなるの？」

「そう、コテツの喜んでる顔やコテツに誉められる事、そんな事を考えながら作れば美味しいくなる」

「そつかあ、頑張ろう」

何だ、ちゃんとコテツの事も考えてるんじゃん、やつぱりツバサはブラコンの前に一人の女の子なんだな。

「お兄ちゃん」飯付いてる

「マジで？最悪」

「取つてあげる」

ツバサは俺の顔から飯粒を取ろうと体を乗り出した、でもツバサの膝が俺の股を思いつきり踏んで俺とツバサはそのまま後ろに倒れた。

「痛あーい！」

「ツバサ、いいからだけ」

「でもまだ付いてるよ」

ツバサの顔が徐々に近付いてくる、俺に逃げ場は無くツバサを突き飛ばす訳にはいかない、ツバサは顔を傾けた、そして……、俺の頬を舐めるとご飯をそのまま食べた。

「ドキドキした？」

「当たり前だろ、顔がマジだつたんだから」

「だつて途中まで本気だつたんだもん、でもお兄ちゃんがダメだつて言つたから我慢した、偉い？」

「言つた事を守つたのは偉い、でも舐めたのは偉くない」

ツバサはフグみたいになつて座り直した、マジで怖かつたし、なんかツバサと目が合つた瞬間かなしばりにあつたみたいな状態になつた。

でもツバサも俺の言つた事を少しづつだけど守つてくれる、それは兄として嬉しい。

「じゃあ来年度も元気に学校に来るよ！」解散！

終わった、高校一年も長いようであつていう間、目の前で爆睡してゐるゴガネとの出会いで始まつたんだよな、最初はツバサとゴガネは仲が悪かつたし、ヒノリはあんまり喋らなかつたな、コテツは絡み辛かつた。

でも終わつてみたら色物だけど楽しかつた、来年はみんな一緒になれる事を僅かに願つてみたりする。

ヒノリはゆつくりと立ち上がり「ゴガネを起こした、ゴガネがノソノソと起き上ると同時に騒がしいのが一人。

「まいどー皆はん終わつたでーやつとピカピカの一年生も終りやゴガネが人をかきわけて俺らの所まで来た、この声によつてゴガネは完全に起床。

「コテツー！」

「ツバサー！」

ツバサは入つて来ると同時にコテツとハグ、少しほは他人の目を気にしろよ、皆見てるぞ。

「じゃあ皆揃つたし行くか！」

俺らはこれから6人で打ち上げ、クラスの打ち上げもあるけど俺的にはコツチが無くても行かない、友達がいない訳じやなくてそこまで思い入れがあるクラスじゃないから。

とりあえずカラオケに行くことになつた、俺は全身全靈をかけて拒否したけど多數決には勝てない、別に歌わないからいいんだけど。

カラオケで意外な事実が発覚、コテツの歌がメチャメチャ上手い、プロ並の上手さ、俺にとつてのカラオケは傍聴するもの。

「カイは歌わないの？」

「歌えないの」

「何で？」

「超絶音痴だから」

チカの心配は嬉しいんだけど俺に歌わせたら可哀想なんだよな、俺も歌つて不思議なくらい下手、リズム感はあるけど音程が取れない、カラオケは聞いてるだけでも楽しいから良いんだけど。

「いやあ、歌つた歌つた」

「歌上手いんだな」

「そうでつか？上手いかどうかは分からへんけど歌うのは好きやで」俺は歌うと凹む、歌つてると楽しいんだろうけど俺には分からない、コガネが高い所の気持良さが分からぬのと同じようなもん。

「わいは皆はんと出会えて良かつたで、最初はツバサと話せればええと思つとつた」

「知つてゐよ、俺もコテツが何考へてゐるか分からなかつた、今も時々分からぬところもあるけどね」

「よく言われる、思つたままに動いてるんやけどな」

考え方が人とは違つんだろうな、いつも何かのついでに何かしてゐし、コレつて俗に言うとケチなのかな？

腹も減つたし飯、俺らみたいな打ち上げ組が街にはいっぱいいる。店に入つて乾杯、コガネが酒を頼もうとしたけど制服だから無理だつた、残念だつたなコガネ、高校生なら高校生らしくジュースだよジュース。

「クラスの発表つて登校日だつけ？」

「そうだよ、また張りだし」

「僕達一緒になれるよね？」

「わいは一人は嫌やで」

「アタシはカイと一緒にになりたい」

「楽しければそれで良いよ」

皆思い思ひだな、ヒノリは相変わらず冷めてるけど、それにヒノリの楽しいの定義って何だ? やっぱりコガネと一緒にかか。

「俺はカイと一緒にの方が良いな」

「俺にそんな趣味無いし」

「……………意味違うから!」

反応遅すぎ、しかもコガネの顔で言われたら若干まに受けの奴がいるだろ? し、チカの顔を見る限りホモだと思つたな。

「カイがいると楽なんだよ、頭が良いから教師に何か言われても言い返してくれるんだよ」

「そうなのカイ?」

「まあ教師が好きじやないからな」

「カイと先生の喧嘩観戦も楽しいよ」

ヒノリは楽しんでたんだ、口喧嘩は俺の得意技の一つだからな、内心楽しんでるし。

「カイはん先生に喧嘩売つてるん?」

「楽しみで、かな」

「悪いやつちやなあ、先生は味方にするもんやで」

コテツの場合教師にもヘラヘラしてるからな、教師の好感も良いから学校で商売出来るんだろうな、裏取引もしてるだろ? し、要領が良いというかケチというか。

「わいはツバサと一緒になれれば満足や」

「そのクラスにはなりたくないな」

「なんでやねん? カイはんは妹が嫌いか?」

「つるさいだる、常にコテツとツバサを相手にしてたら気がおかしくなる」

「酷いお兄ちゃん!」

「そうやで、お兄さん」

頭が痛い、色んな事が俺を追い詰める、誰かツバサとコテツの暴走を止めてくれよ、心配してるのはチカだけじゃん。

「私もこの一人と一緒は嫌かも」

「ヒノリはんまで」

「大丈夫だよコテツ、僕達一人でも愛だけは残る、愛があればなんでも出来るよ！」

「そりやな、わいらは一人でも大丈夫！」

「つこまないぞ、この夫婦漫才に絡んだら俺の負けだ、妹ながら可哀想になってきた。

「アタシはカイと一緒じゃなきゃ嫌」

「学校でまでカイとチカちゃんとイチャつかれたらファンが減るぞ」

「それなら率先してやるんだけどな」

「イチャつかやいよ、でもカイが一緒の方が落ち着くから  
確かに俺もだな、一緒にいれば馬鹿も近寄つてこないだろ、コテツ  
かコガネがいても来ないと思うけど。

「カイは浮気できなくなっちゃうけど良いの？」

「浮気してるの！？」

「しないしない、ヒノリもサラッと嘘付くなよ」

ヒノリが嫌な顔で笑つて、怖い、ヒノリが怖い、何を言い出すか  
分からぬし。

解散後の帰り道、ツバサとコテツはいつの間にか消えてた、だから

俺とチカの一人だけ。

チカは「ウさんの所に住んでるから会える時間が増えた、その分ウ  
さんの監視がキツくなつたのも事実だけど。

「一年楽しかったな」

「そりだな、騒いで騒ぎ通した感じかな

「カイの思い出は？」

「不良達の喧嘩……」

「あれは怖かつたよ、カイが来てくれなきゃどうなつてたか

「……の後の退院した時かな」

チカの顔が真っ赤になつた、暗くも分かるくらいだからかなり赤いんだろうな。

でも全部が全部印象的だから優越つけがたいよ。

「エッチなんだから」

「冗談だよ、色々ありすぎた一年だつたから、全部が印象的だな」「カイつて初めて会つた時より変わつたよね」  
いきなり変な事言つよな、変わつたのは確かだけどね、昔のままだつたら今頃はアオミしかいなかつたかも。

「チカのお陰だよ、今の俺の世界は全部チカが造つてくれた世界だ」

「何だか照れるな」

「チカも変わつたぞ」

「どこが?」

「女の子っぽくなつた」

チカは顔を膨らまして俺の肩をポコポコ叩いてくる、こうこう一つ一つの行動が俺を惹き付けるんだよな。

「それも認める、今まで男の子を異性として見てなかつた、兄貴やユキがいたから男の子とばつかり遊んでた、今でもダイチやミツチーは異性の部類には入らないよ。でもカイは違つた、何か全てがアタシと違つて輝いて見えた、アタシもカイがいなかつたら今頃は可愛げの無い女の子になつてた」

あの日あの路地で会つてから俺らの価値観は変わり始めたんだろうな、好きな人が出来れば世界が変わる、それは本當だと思う、今までの俺なら世界がこんな明るいなんて分からなかつた。

でも俺にはチカという太陽が俺の世界に光をくれた、だから俺はチカの世界のデッカイ海になつて、チカの全てを包み込む、それが俺のチカに対する愛。

でも、全てを燃やし尽すのも太陽、太陽に近付すぎれば燃え、地に落とされる。

つづく

## 青のその先（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

最後にあつたように続きます、予定では後2つで完結予定です、もしかしたら最後にもう一つあるかもしれません。

それと番外編やるとか言つてましたけどそれは次のでそれっぽい事します。

よければコメントやメッセージお願いします、次回作等の励みになります。

それじゃあ次回作、楽しみにしてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5479a/>

---

青と赤の白黒テレビ：金銀 +

2010年10月14日13時20分発行